八月一日發行

女學世界

第十二巻第十號



博文館

◉溫泉地に於ける心得

から暑くなつて來ては、何處かへ避暑でもせねば耐らぬ、昔々の爺婆なら、爺は山へ、婆は河と極つて居るが、草を刈つたり洗濯したりする爲めでなく、ヤレ衛生の、ソレ健康のと人々の體質から割り出さねばならぬ今の世に、山なら山、海なら海と定ても置かれまい、海へ行つても、山へ行つても、必ず爲ねばならぬ避暑の心得、往はよい／＼復は恐いといふ天神樣へ願かけに／＼と子供の遊戯にさも似たやうに、山へ出掛けて溫泉やけ海へ出かけて日にやけ汐風、後の祟が恐ろしいと、人はよくいふ口ではあるが、并も溫泉にやけもせず、汐風日にもやけないといふ妙法さへ心得て居たならば、樂しく避暑が出來る譯、さても妙法いかに

問はゞ、まづ山へ出掛けて溫泉に浴する折の心得は、溫泉燒をしないやうにするので、溫泉には種々あつて、鹽分の多いのも、鑛質のもある之に對するのには、鑛質や鹽分の爲めに受ける身體の營養のみを取つて爲めに受ける皮膚の荒廢を防ぐのに顏を洗ふときには、金盥に取つた湯水の中へレート化粧水を滴し、よく攪拌して用ひ、洗つて了つたらば、クレームレートを薄く塗つてセーム革で擦りながら拭き取つて置けば、皮膚の荒れることもなく、溫泉燒などになることはない、又溫泉場でお化粧をなさると、白粉が焦けるといふのは、鉛分が溫泉に有つて變化するからで、無鉛乳白のレート白粉なら少しもそんな心配はない、而してレート白粉には、濃化粧用に煉製があり、薄化粧用の水製があり、洋化粧に粉製があり、顏直し汗押へに打白粉があり、又、煉と水とには自然色といつて、日本人の皮膚色をそのまゝに出す新發明の白粉があつて濃化粧でも、薄化粧でも、自由自在に出來ます、是は色の蒼白い人や、夜間の燈火に青味を帶びて見えるのを防ぐのに、白色の白粉と混合して用ふか、黒い加減の色の人ならこの自然色を塗けた上へ白色を塗け、白い加減の色の人なら、白色を塗けた上へ自然色を塗け、その上をレート打白粉で顏直しをすれば宜しい、すべて化粧をするには、皮膚の上下が肝腎であるから、レート化粧水とクレームレートとで化粧下をした上でレート白粉を塗ければ溫泉やけもせねば白粉も變化することがなく、往も復も同じ美しさといふよりも、今迄は溫泉やけで困つた人でも、今年は却つて溫泉化粧で美しくなつたといふやうに、見違へる程美しい人となることは請合で、この暑さに溫泉へでも出掛けやうといふ人々は、必ず此の方法を續けて、涼しく樂しく夏の日をお暮しになることを、心からお勸めする次第である。

櫛と笄と簪

御婦人頭髪用装飾品は
最も流行せる御品を御用ゐ遊ばすをよしとす。

△御婚禮に必要なる本鼈甲花付櫛笄（八十五圓以上）あり。
△丸髷用としては蒔繪又は割貝入櫛笄（二圓以上）あり。
△ハイカラ向としては佛國製束髪用櫛（一圓以上）あり。
△土佐珊瑚（四圓以上）又は古渡珊瑚玉簪（廿五圓以上）あり。
△夏向として如何にも涼さうな翡翠の根掛（十圓以上）あり。
△御孃樣、女學生向としては巾廣のリボン（一尺廿錢以上）あり。
△三越の新案にして大評判なる飛行機簪（二十五錢）あり。

三越は最も信用を重んず
三越へ御出での上安心して御求め遊ばされたし。

東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾壹卷第拾號 八月號目次



避暑旅行に
海水浴に
皆様が
革包の中に納めてある
御料洗粉は
牛乳にも優つた
効力があつて
美容の目的に適つた
理想的洗身料です

女(いの三)



夏の旅行
海水浴に
なくてならぬ
ものは
TOILET CREAM
ラヂユム
である
本品は最新發明の高等化粧品でありまして歐米の貴婦人方が避暑だの海水浴をなさるときに必ず用ゐられてをります、そして白粉の附着の惡い方には殊に化粧下として此のラヂユムに及ぶものがないと申します
定價 (小)三十五錢 (大)五十錢
日にやけぬ美顏料
ラヂュム
パール煉香油
スミレ香水
スミレ黒香油
本舖
東京日本橋區横山町三丁目五
平尾銕也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番

水と雲



田中製版所三色版

最モ進歩セル子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不姙娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡易に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺陷なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を達するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は是非一度使用して病氣を根治し給ふべし

尚ほ梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

◎全國至る所の有名なる藥店にて販賣す

可要球定價
三球入廿錢
八球入五拾錢
拾八球入壹圓
四拾球入貳圓
特製百拾個入五圓

東京本鄉湯島天神前
發行所　藥劑師　中西荘吉
振替東京千五百番

女(ろの一)

羽仁もと子主筆

婦人之友

八月一日發行　第三號　一冊金十五錢　郵稅一錢五厘　（六冊前金九十錢　十二冊一圓七十五錢）郵稅共

◉忙しく暮す私の日々…北尾夫人

◉母乳の外に嬰兒の食物はない…加藤博士

◉規則正しき授乳のしかた…羽仁もと子

◉子供のきものは何がよきか…同

◉かうして子供に食事をさせる（女中訓）

◉中流の家庭に於る交際費…羽仁もと子

●呪はる、女子教育　文學博士　三宅雪嶺

●かくして眞の夫婦生活に入る　羽仁もと子

◉千五百圓で出來る洋風住宅

◉掃除のしかた（納戸の片づけ方）

◉恰好よき着物の仕立方…延子

◉ネクタイの編方…寺西綠子

◉私どもの子供の夏帽子（二人分で七十錢）

◉新案の寢冷知らず　懸賞當選發表

▲夫の放蕩に苦める妻へ…

▲名畫にあらはれし子供…

▲假名文字の習ひ方…星野

▲鉛筆畫の習ひ方　大下藤次郎

▲文藝その月々…河井醉茗

▲フロスの水車場・松本雲舟

▲表情術と日常生活…三枝

▲夏のお化粧…のぶ子

▲暑中の客あしらひ・たづ子

▲三杯酢とそぼろ・みどり

▲八月一杯の惣菜献立

▲家政問答…羽仁もと子

▲大洗海岸（中澤弘光筆）

▲わが巣（リヒテル筆）

▲英國王子の魚釣（寫眞）

▲三宅雪嶺博士の家庭（寫眞）

▲少女の一日（寫眞）

▲はらから（寫眞）▲早起（寫眞）

▲子供の髪かたち（寫眞）

▲誕生より入學まで（寫眞）

▲子供のあるらしき家（寫眞）

▲學校園のいろ〳〵（寫眞）

▲夏の玩具のいろ〳〵（寫眞）

▲愛犬クロ（寫眞）

初號四版　二號再版

東京小石川區雜司ヶ谷町　振替口座東京壹壹六〇〇

婦人之友社

●● 八月の卷發行 ●●

新婦人

本誌前月號は七月一日午前十時全部賣切となり折角の御愛顧に背きたるは陳謝の外なく本月號は刷出部數を倍加したれど萬一再び賣切とならんも難計につき豫め御斷り申置候……

第一年第五號　定價一冊二十八錢　郵稅二錢五厘　半年一圓七十錢郵稅共

江島詣 油繪極彩色二十六度摺……河岡清雄筆

年增盛り 情人何處にか在る佳人欄に凭つて思悠々（石版極彩色）……伊藤靜雨筆

願くは輕羅となつて細腰に著かん……（コロタイプ實寫眞）

梨本宮妃殿下 **ピアノ**に凭れる神戸絢子女史 三浦子爵令孃竹子姬 **薄命**數奇なる**津輕**子爵令孃

村井光子孃●吉村甚兵衛氏令孃ちゑ子東鄉男爵令孃德子姬 **子守姿**の本多子爵夫人 **北村初子**女史

ベール姿の尾島菊子女史堀內すま子孃 **長谷川時雨**女史令妹松下汀月女史●其他例に因つて百花繚亂百十餘圖

萬斛涼味 執筆者 奥原晴翠●尾島菊子●長谷川時雨●菅野まん●初瀬浪子●國木田治子●手塚かね子●物集かず子●本多なを●鈴木歌江●各女史の才筆

多情多恨の前半生……津輕子爵令孫 江戶家いろ松　津輕あぐり子

人生婦人の身となる莫れ……小島ふみ子

附錄 **家庭日記** 八月分 溫度表●晴雨表●献立表●來客簿竝に九星曆附

新婦人見本 郵劵卅錢五厘

賣捌所 全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本鄉區龍岡町 替東京三〇五八番 **聚精堂** 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番

女（ろの三）



千代田香油



千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々なり

價
- 特製 七十錢
- 大瓶 卅五錢
- 中瓶 廿五錢
- 小瓶 十七錢

發賣元 東京市馬喰町 山岸三之助
電話浪花三七九三番
振替東京二〇五〇〇番

純良なる家庭用浮石鹸(かていようきせっけん)

▲定價 二個續(壹本) 廿二錢

製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會



日本輸入元 小林

發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番



河崎蘭香筆


最上醤油
元祖
開業貳百六拾七年
内外國金銀名譽賞受領
米國太平洋博覽會
日英大博覽會に於て
最高名譽大賞受領
宮内省御用達
千葉縣銚子町
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

女(はの一)

だれでも出來る懸賞

面白い事無類 詳細本誌上にあり

「婦女界」は八月に入りて益々發展＝高き趣味を有する雜誌として教育ある婦人に愛讀されつゝあり

婦

八月號 要目

▲口繪「夏の朝」中川八郎「人まつ夕」竹久夢二

◎三方面より觀た婦女と宗教……平岩愃保

◎見合ひ論 花恥かしき見合の一幕を演ぜざれば結婚は出來ぬか？ 宮田脩

△海事思想と主婦の責任……海軍中將…肝付兼行

△踊は立派な藝術である……理學博士…田中正平

△再び向氏忠孝論を排す……工學士…加藤靜夫

△親に對する娘の希望……（懸賞披露其二）

◎美人論 本號呼物五十頁に亘る大論文

一冊十五錢 六冊九十錢 十二冊一圓七十錢

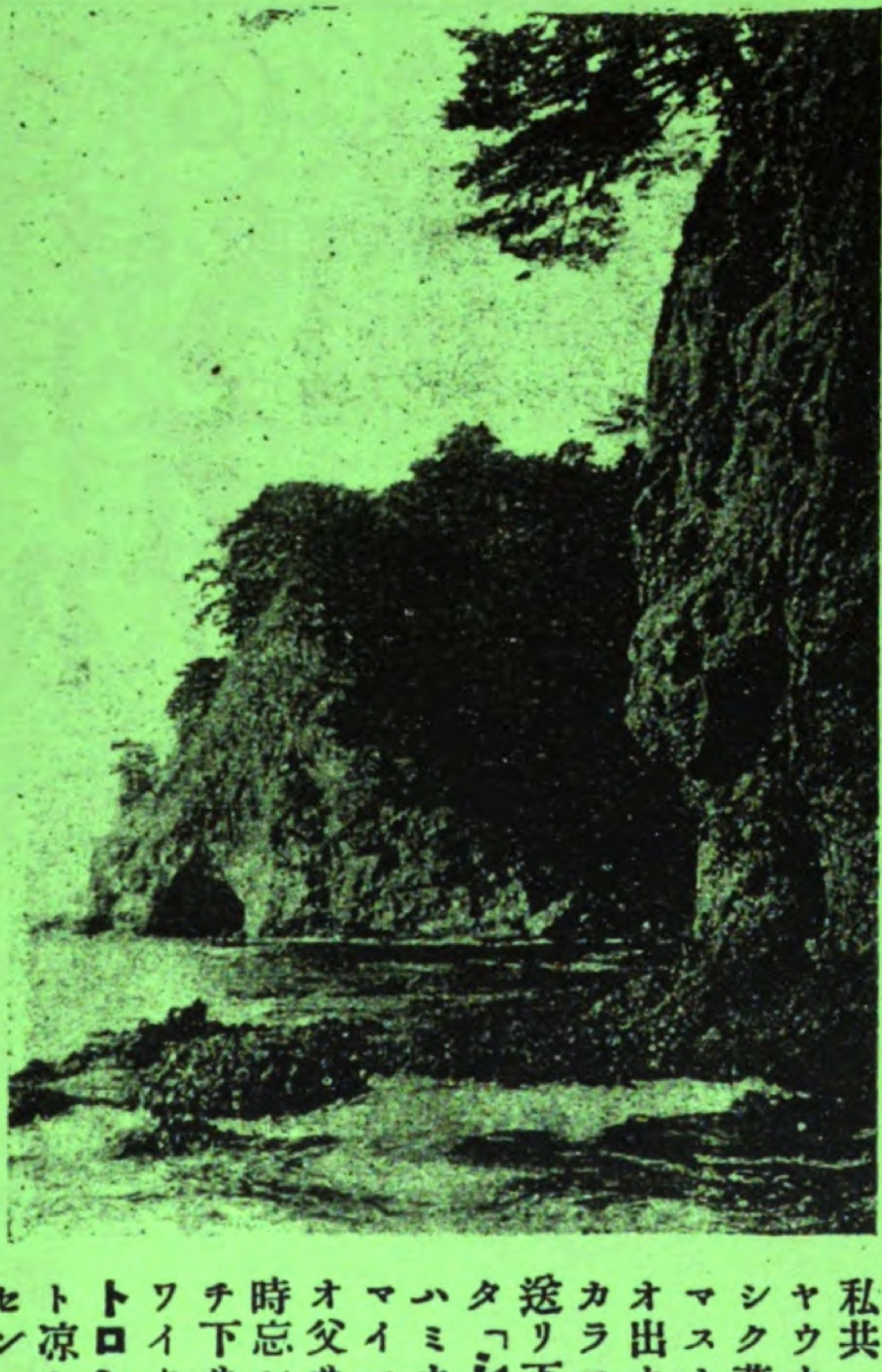
東京神田表神保町 同

女（はの二）

シトロン便

東京市
四十五番
夏野

伊豆熱海清涼軒ニテ
夏野清



女(はの四)

私共ハ此寫眞ノヤウナ處ニテ樂シク暮シテ居リマスオ父サンモオ出ナサイソレカラコノホドオ送リ下サイマシタ「**シトロン**」ハミナ飲ンデシマイマシタカラオ父サンオ出ノ時忘レズニオ持チ下サイ咽ガカワイタ時ハ「**シトロン**」デナイト涼シクナリマセン

朝風



日高島助筆

婦人の理想的師友

圓滿なる家庭と幸福なる生涯を望む婦人は本會講義に據られよ
家事に就てのあらゆる智識は最も完全に家政講義に得らるべし
良妻賢母の徑捷と處世の要訣を平易懇切に詳述せるは本講義也
講師は一流の女子教育家親切なる講述は通學聽講すると異らず

女子大學家政講義

▲會員募集

東京市小石川 日本女子大學校通信教育會

科目と講師

●修養談……諸名士教育大家
●修身講話……成瀬仁藏
●教育……麻生正藏
●實驗心理學……文學博士 松本亦太郎
●兒童研究……高島平三郎
●法制大意……法學博士 奥田義人
●經濟大意……文學士 中隈敬三
●社會衛生……醫學博士 三宅秀
●家庭理科……近藤耕藏
●家事……井上秀子
●作法……小笠原清務

●日本料理……笹木幸子
●西洋料理……手塚かね子
●裁縫手藝……櫻楓會研究部
●生花……兒島晩翠
●家庭園藝……農學士 佐々木祐太郎
●自然研究……大橋ひろ子
●文藝……文學士 武島羽衣
●國文學評釋……文學士 下村莢
其他科外として家庭衛生顧問、女子と演劇、結婚問題、婦人と慈善事業其他生理、應用美術、歴史地理講話等あり

◎會則附き內容見本進呈

▲每月二回發行二年修了▼

會費 一ヶ月五十錢、半ヶ年貳圓八拾錢全學期拾圓

東京小石川區久堅町一〇八
精美堂
電話番町九三二
振替東京二八三八

女(にの二)

婦人世界

八月 一日發行 六卷 第九號 一冊 拾五錢 郵稅一錢 郵稅共金一圓五厘 半年分前金一圓五錢 一年分同二圓五錢

◉旅行中の奇談……村井弦齋

◎各方面の名士良人評判記……一記者

◎夏向きの新らしき髪の形……關口ぶん

◉女學生と暑中休暇（各女學校生徒の欺かざる告白）

◎夏の來客の接待……嘉悦孝子 星常子 佐治實然 高橋義雄 後閑菊野

◉泥中一輪の白蓮……大木伯爵

◎隅田川を泳ぎ切った婦人……小池八重子

◉腎臓炎と消渇との妙藥……弦齋夫人

◎小間使の見た大隈伯夫人……富田千代子

◎女三人寄れば着物の噂……棚橋絢子

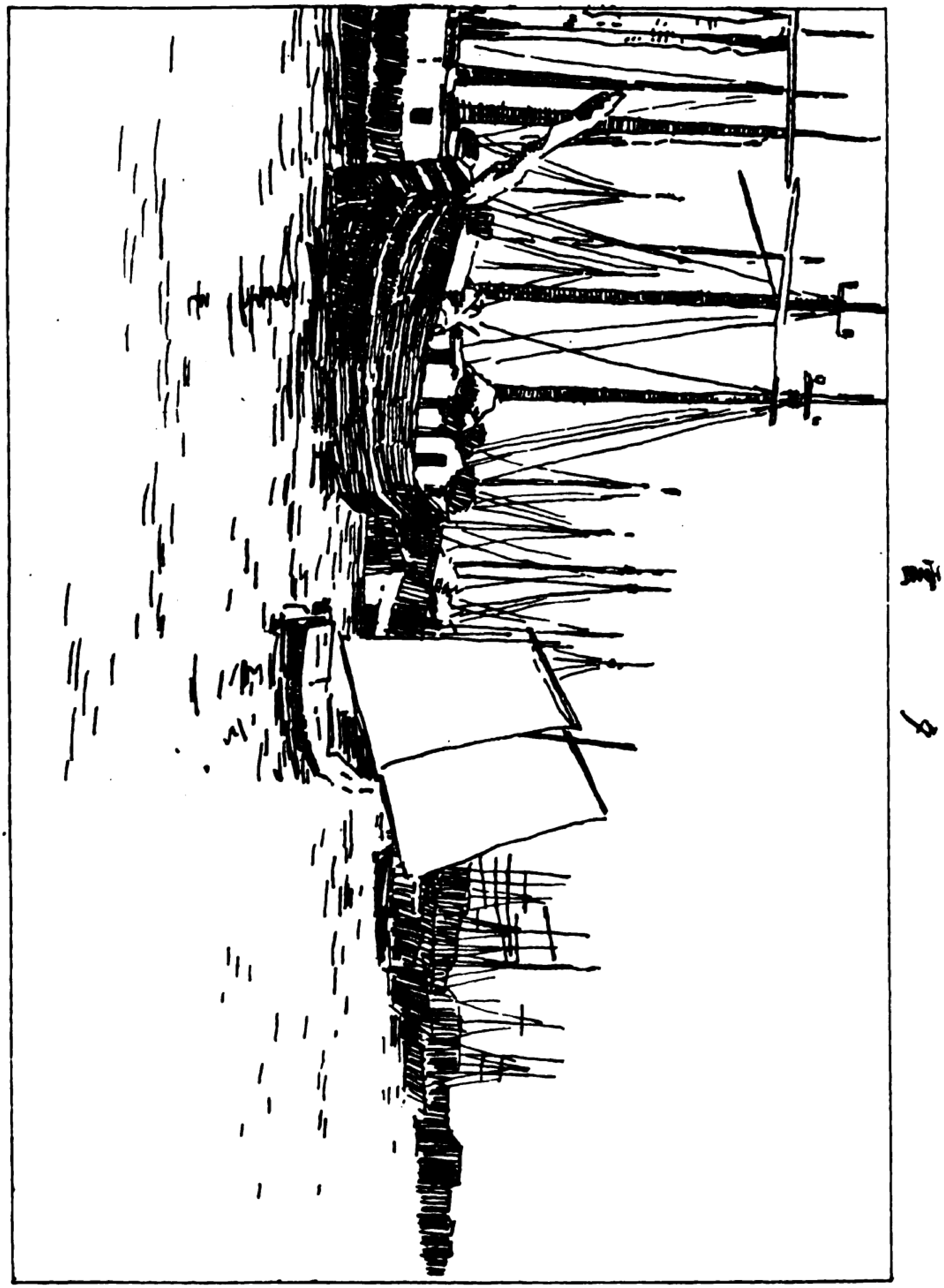
◉一日も私の忘れぬ少女……下田歌子

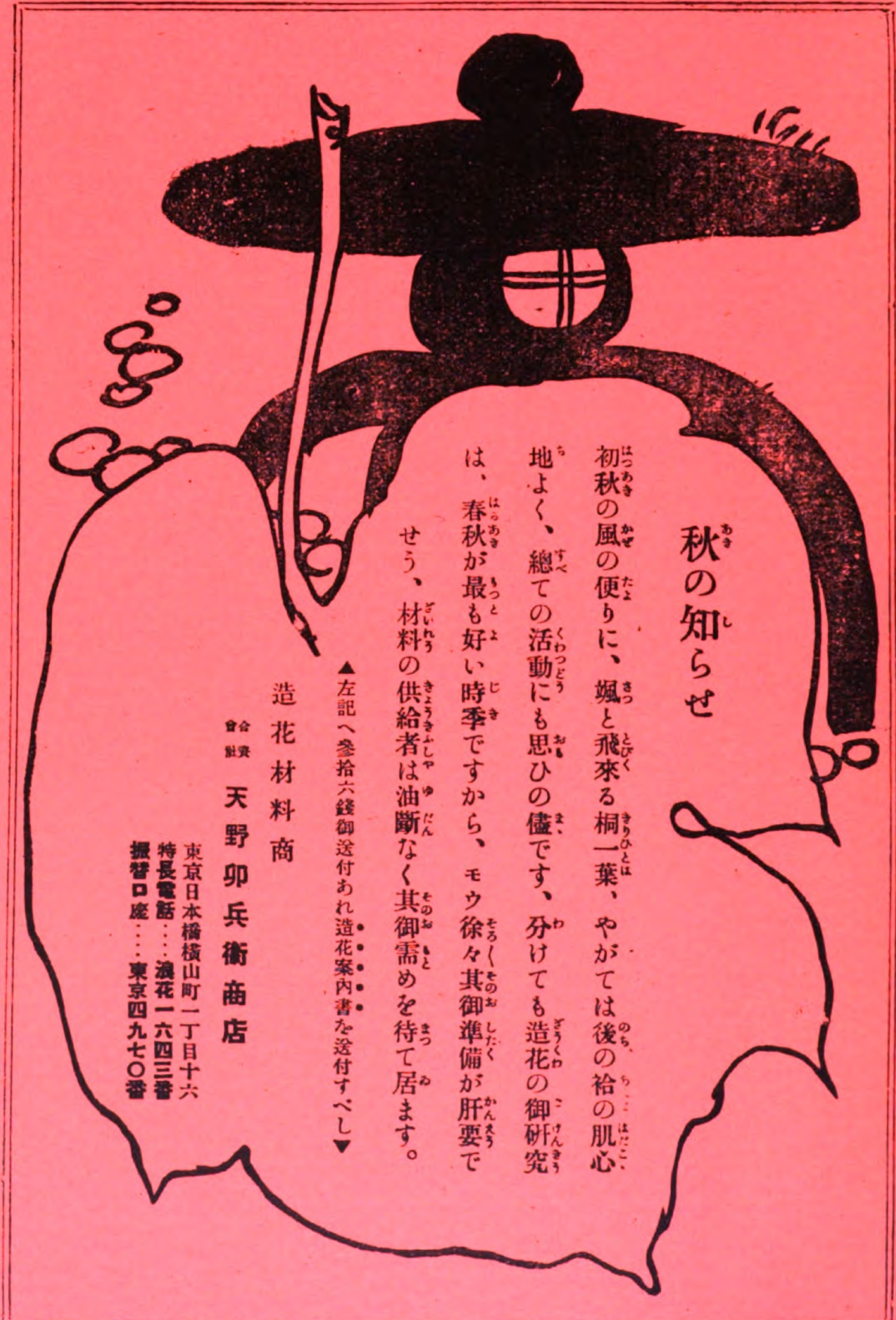
東京京橋南紺屋町（電話京八七四）實業之日本社（振替貯金口座參貳六番）賣捌全國各地書店

女（にの三）

蟬






秋の知らせ
初秋の風の便りに、颯と飛來る桐一葉、やがては後の袷の肌心地よく、總ての活動にも思ひの儘です、分けても造花の御研究は、春秋が最も好い時季ですから、モウ徐々其御準備が肝要でせう、材料の供給者は油斷なく其御需めを待て居ます。
▲左記へ参拾六錢御送付あれ造花案内書を送付すべし▼
造花材料商
合資會社 天野卯兵衛商店
東京日本橋横山町一丁目十六
特長電話…浪花一六四三番
振替口座…東京四九七〇番

女（ほの一）



不始末の藥品は諸種の病症をひき起す不合理の配劑はたゞ一邊の下し藥に過ぎず本品は最近の醫界に於て等しくみとめられたる強度の有効原料を配合せる月さらへ專門藥にして他の賣藥の如く月さらへ藥にして子宮病血の道に効ありなどと不合理の藥物に非ず其偉大なる藥力は如何に長き月やく滯りも心地よく通經す効能の俊烈なると生理的配劑は確に本品の特長にして亦誇とする所なり他藥を用ゐて効なき患者乞ふ速に本品を試用し絕大の効力を實視せられよ

藥價
六十球入 壹圓
百廿球入 壹圓八十圓
二百四拾球入 參圓
送料各八錢

▲安全正確なる 月さらへ自宅療法▼

申込所 大阪心齋橋筋周防町東二丁目 樂天堂藥院

わきが根治療法

皮膚病科專門守川誠顯閱●前東京市衛生試驗所員伊藤熊槌校●元氣堂主人著

本書は最近發見の**特殊新療法**を極く平易に記載す本書記載の方法にて治療せば如何なる難症の**ワキガ**も必ず根治す而が**方法極く手輕**く何人にも出來得るも其也希望の方は郵劵三錢封入照會あれ直ちに送本す

申込所 東京淺草山之宿町卅一番地 元氣堂

●村井弘齋は尾崎氏糠精の外實驗證明したるものなし

糠精

かつけ 腸胃 心臓 病 患者 食料

注意

近來種々なる僞物あり御求めの節は**尾崎製糠精**に御注意を乞ふ

●陸軍一等軍醫正 ドクトル 都築甚之助先生御證明

製造發賣元……東京市澁谷……尾崎兄弟飼禽場●……價大四十錢送料十錢……小十七錢送料五錢……

御便利取次所 東京本町 博文館代理部博通社 東京京橋 實業之日本社代理部 東京京橋 萬辨舍代理部 東京丸ノ內 報知新聞代理部●各地藥舖食料品店

女(ほの二)





女(ほの三)



溫泉行にも海水浴にも

必ず携ふべき

化粧界の逸品

女（ほの四）

ジョージ五世陛下の伉儷



圖は先頃戴冠式を行はせられた英國皇帝ジョージ五世陛下の御結婚當時の御寫眞で左右に仕へまつるは皆其の當時の侍女であります。

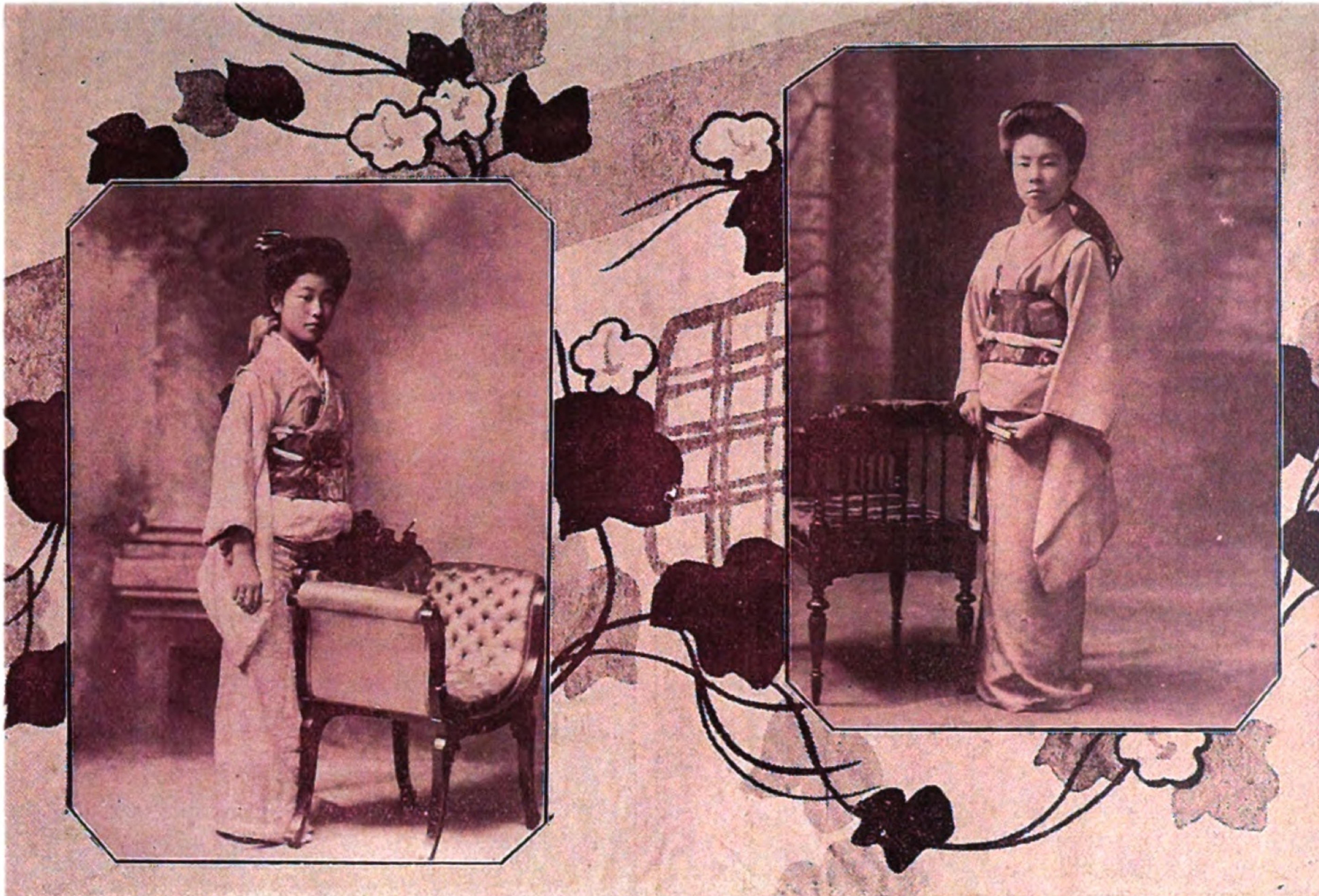
約婚



海軍少尉侯爵小松輝久氏（二十四歳）（北白川宮能久親王第四王子皇族より臣籍に下り給へる方）

島津薫子姫（公爵島津忠済氏令嬢十六歳）

令嬢かゞみ



右、第三十銀行頭取古川源太郎氏令嬢はつ子
左、海軍々醫總監戸塚環海氏令嬢あき子

海濱逍遙



京都黒川翠山撮影



綠蔭讀書

妻の病氣は一家の大難

侯爵久我元帥伊東諸公賞詞
產科婦人科專門 北畠、佐藤、兩醫學士共著

女一代の衛生

婦人病の心得（省）
自宅療法
實驗者報告添付

處女の煩悶

無月經、月經困難、月經過多等で、頰ばかり赤くなつたり、蒼白い顔してる樣な婦人はどうすれば治るか。

病婦の苦痛

子宮病、血の道で惱み、醫藥も更に効なく、迚も治らぬものと諦めてる樣な婦人はどうすればよいか。

妻女の悲嘆

夫婦共健康相で居て、結婚後何年經つても、子寶のない婦人は如何すれば望み通り愛兒を得られるか。

姙婦の心配

是迄流產、難產、つはり等の不幸を招いた人や、初めての姙娠で心配してる樣な婦人はどういふ心得が必要か。

老女の誤解

老人には子宮病はないと誤解して頭痛や帶下があつても平氣で居る樣な婦人はどういふ危險が伴ふか。

▽頒本所 東京京橋新榮町四ノ一 電話長京橋二二〇一番 振替口座五〇五〇番 笹岡省二 へ郵券二錢封入申込めば直に送本す△

女（その一）

宮内省御買上の光榮ある
天下一品

みやけ油



於内外各博覽會賞牌受領ノ最良髮油

營業品目

香なしみやけ油　すき油　除垢
みやけ香油　ビンツケ　絹縞實用洗粉
香入みやけ油　髮洗粉島の春　粉末石鹼
煉香油　冬シラズ壘拔洗粉　其他洗濯用品等
高評嘖々

東京市日本橋區蠣殼町二丁目十五番地

みやけ油製造發賣元　木村三宅堂

代理大阪賣所、有名化粧品、小間物、藥種店等にあり

電話浪花六百二十番振替口座八八七五一番

千人風呂と玉突

大弓　娯樂　遊筵

三大湯瀧

伊豆山温泉、海水浴

相摸屋

電話熱海三三

從二位勳二等伯爵　鷲尾隆聚閣下題字　池の坊小倉照月宗匠著

池の坊流

生花の手びき

本書は一般有觸れの生花指南書と異なり畏くも聖德皇太子の御授に出づる池の坊正傳として數十代の傳授に據りたるものなれば他の雜駁なる生け方と日を同うして語るべきにあらず既に卷を開けば悉く圖畫を挿入れ手を取て教ふる如く輕妙なる行文に獨特の趣味多大の價値を感ずべし生花上の心得は此書に網羅して漏さずなし眞に斯道の覇王生花獨習の虎の卷と云ふべき無比の良書なれば世の才子佳人よ是非一本を求め其妙味を知られん事を乞ふ

和綴頗美本全二册
圖畫百數個入
定價五拾錢
小包送料八錢

宮城千代子編

實用裁縫手ほどき

本書は宮城千代子が多年苦心の上苦心を重ねし婦女子に至極分り易き様圖畫二百八十有餘も加へ詳しく說明し尙脊紋紐止等は一々彩色して系の縫方迄示したれば裁縫を學ぶには最良の本です

四六判全一册口畫脊紋紐止彩色入
定價三十五錢
郵送料六錢

●發賣所　大阪市西區九條町三十九番地　岩崎浪速堂

女(との二)

▲大好評三版……婚禮上空前唯一の完全完備大寶典！

畫入美本全壹冊
正價金四拾錢
郵税四錢
郵券代用一割増

新編 日本婚禮式大全

婚禮に關する諸禮諸式一々故實に則り常世に鑑み見合結納里出里開嫁入婿入媒人心得其他大綱七章細目百數十欵―細は物の折方包方から密は床入寢所の取樣まで書中幾多の圖書を挿入して詳細綿密――殊に**附錄**として婚姻に關す古今の變遷から妻を選み夫を擇むの注意姑に對す心得尙又妙齡少女等が猥に他に問ひ雜き種々の秘密――男女生殖作用の神秘及衞生扱は姙娠中の心得まで殘る方なく敎示したれば妙齡の男女は勿論其父母亦必ず一讀すべき實に完全完備の寶書也

發行元 大阪東區南久寶寺町壹 振替貯金壹〇三壹壹番

尙文館

◉**親・姉妹**にも**云**はれぬ**病**とは

りん病　しやうかち　局部の疾病であります

斯る病を患ひたりとせんか醫師の治療を受くるにすら甚しく羞恥を感するが一般なるを以て婦人に於ては元より男子に於ても之を厭ひ其病を、秘し遂に不治又は慢性となる此等恐るべき疾病を誰にも知れぬ樣治療の出來る最新自宅療法を詳記せる●通俗●花柳●病●新編●を●無代●施●本●す●同●病●者●は●送●料貳錢切手封入◉東京市本郷區富士前町十七大垣至誠堂宛申込あれ直に送本す

營業目錄

袋物、造花、刺繡

摘ミ細工、果實、瓶細工

編物、器具並に材料

婦人技藝材料

東京市本郷區弓町二丁目

倉持商店

電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す

（〇 女學世界八月號）

女(との三)

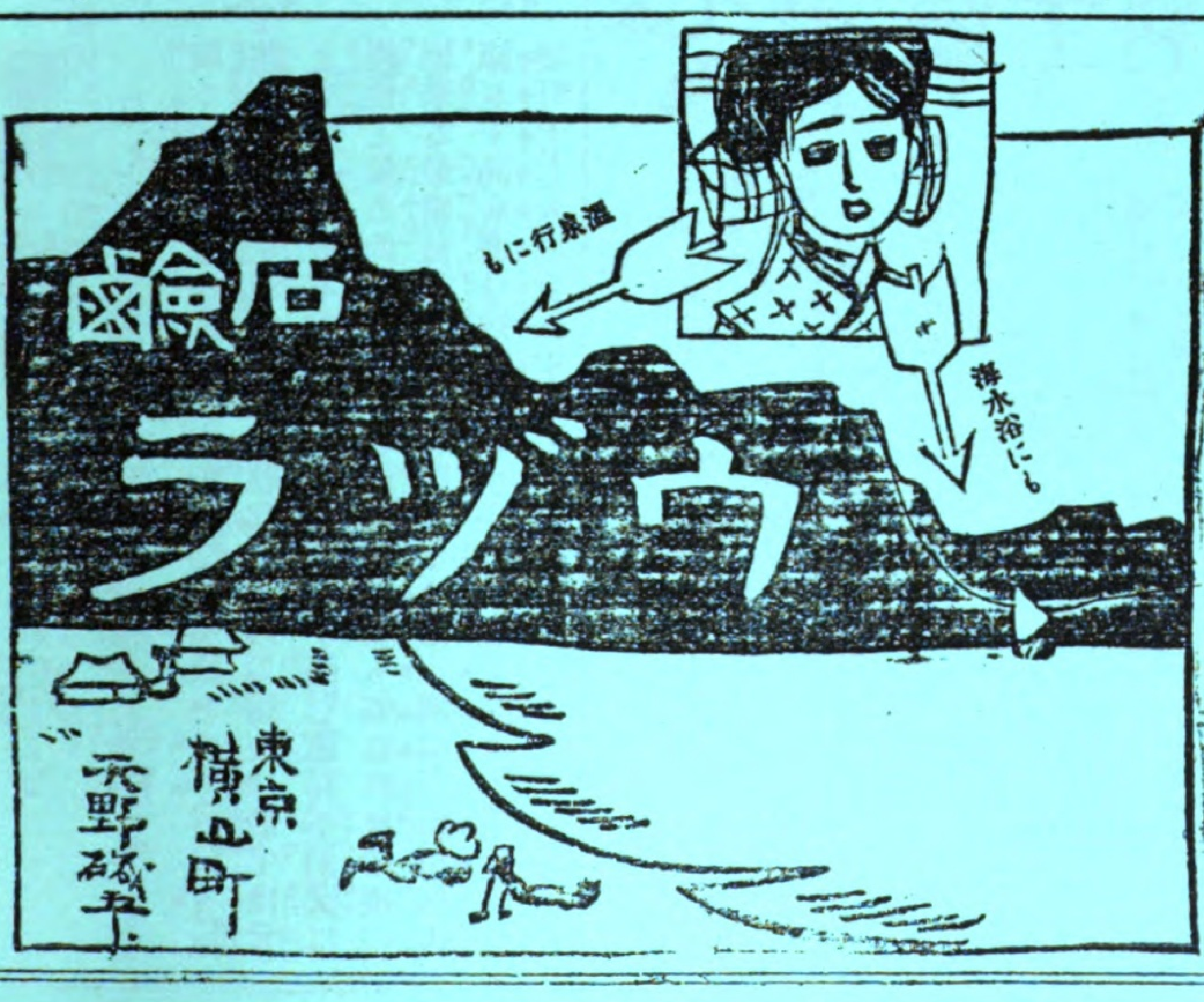
宮内省御用達

天下一品

最上醬油

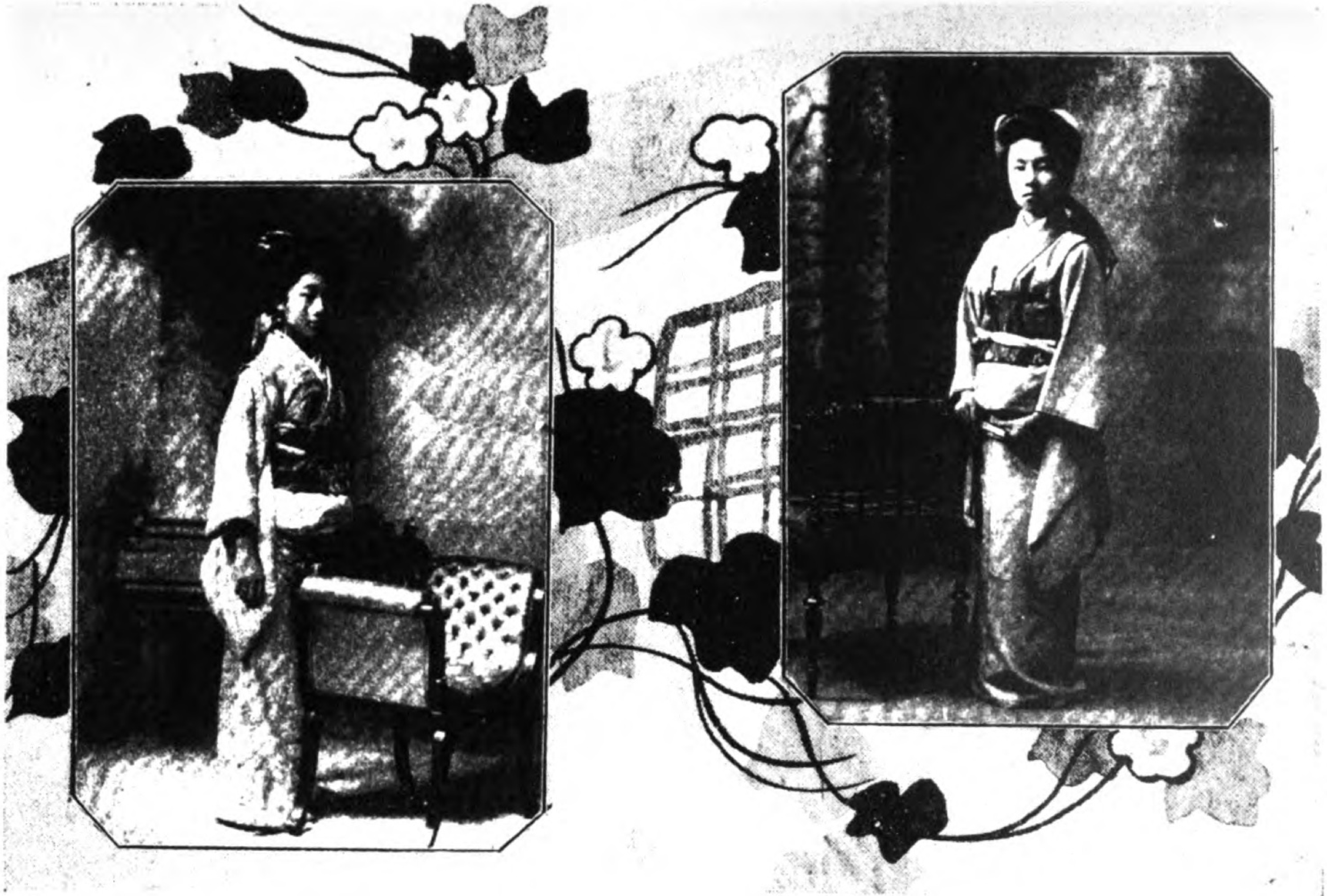
釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる浮醬油店に有之候



女(その四)

令嬢かゝみ



右、第三十銀行頭取古川源太郎氏令嬢はつ子
左、海軍々醫總監戸塚環海氏令嬢あき子

海濱逍遥



京都黒川翠山撮影



綠陰讀書



(その一)

世界無比……・…最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまずいぼは拾日目に必ず美麗に除去す

ること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

●らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼蒼と速生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲中瓶貳圓卅錢▲小瓶壹圓廿錢

●奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

●美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり ▲聲麗しくして…男子は威嚴あり ▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來甚はだ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

腦病必治 記臆增進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボロト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

美術 造花材料

三國屋 関口商店

牛製品、鏝、打拔類

東京淺草區駒形町十四番地
振替貯金……一一六四二番
電話下谷四〇五一番

（御一報次第定價表進呈）

第十二回

新學期開講

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

通信教授 產婆看護

講習生募集

產婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

規則要郵劵三錢

東京四谷區内藤町一ほノ七

東京產婆看護婦講習會

禿、脱毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液



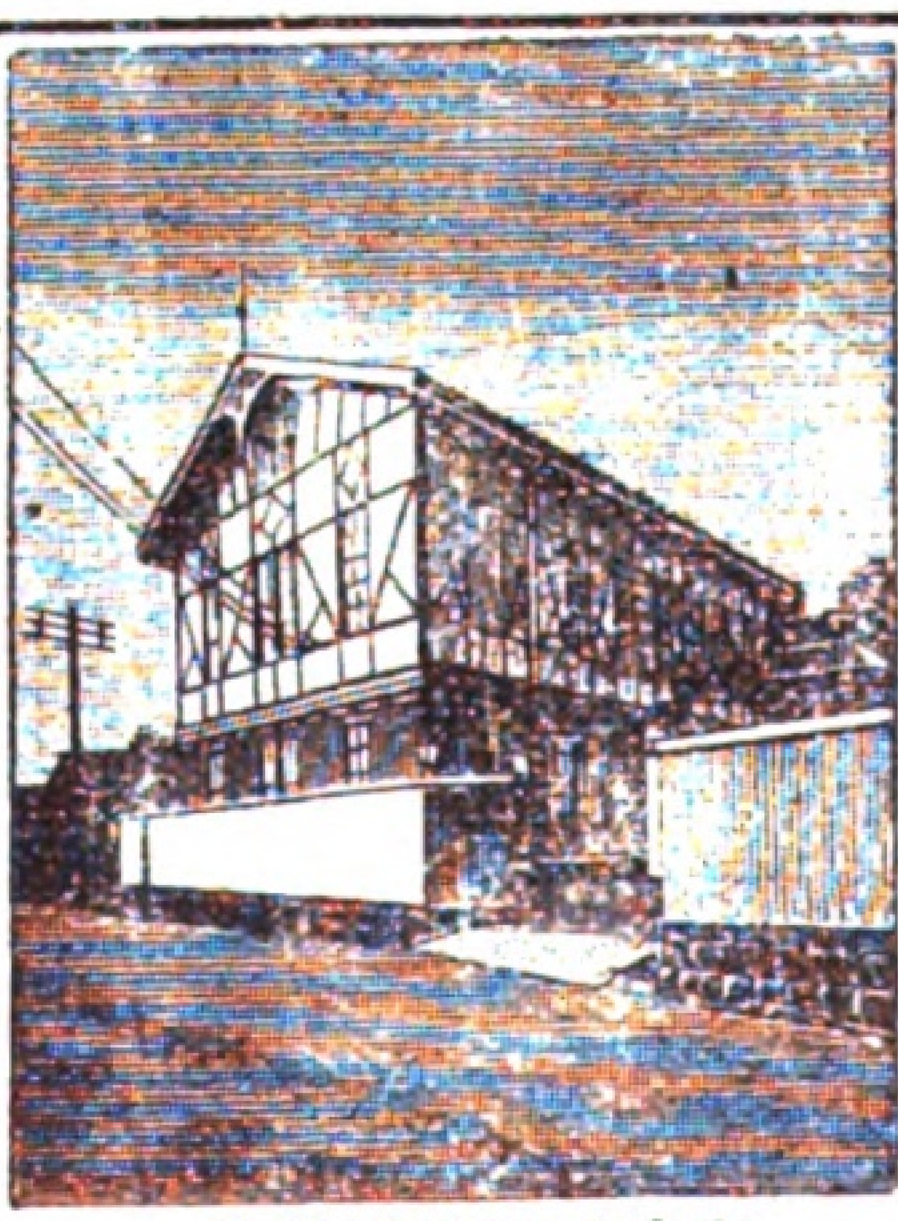
本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓◎送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

エハガキとアルバム

東京小石川 日本葉書會



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

生徒募集

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

九月五日より新學期開始

ピアノ、オルガン。唱歌。バイオリン。其他管絃樂器及理論等

入學志願者ハ本校ヘ照會アレ

化粧香水

プラチナ



八方美人の香水！

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微溫湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價 一瓶 三十錢

▼郵券代用一割増逓送無料

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 天野源七

振替口座五九三三番 浪花八六三番

ヒゲタ醤油

伊國皇室御用

宮内省御用達

千葉縣銚子港

田中玄蕃釀造

女(ちの四)

倫敦の夏の新流行



和洋音樂演奏



東京音樂學校生徒の演奏



琴曲家河岡照惠刀自とその門人


水おしろい
艶も透明
東京 大和堂
すきとうりたる
水にて付ると白くなる
流行の薄化粧料
にして
目立ぬ故
男子にも用ゐられる
定價
五拾錢
貳拾五錢
拾五錢

女(りの一)

新輸入
肉體色白新剤

本剤は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明剤にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す 世上種々雑多の色白薬を用ひて奏効なき人は速に本剤を試よ 眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新剤價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新薬

根本的色白くなる内服新剤 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血剤**にして頑強なる皮膚病、猛悪なる慢性梅毒、痳毒リウマチ等の病毒及び男女體内の**悪血毒血**悪液を體外に排泄し血液を清浄にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水剤なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ 奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候) 色白新剤と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹剤貳圓七拾錢參剤七圓五拾錢五剤拾貳圓貳拾錢也

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は**世界第一等**の眞品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず嘗だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん **皮膚を潤澤軟密**にし色を白くし、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に種々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗悪品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御註文を望む)

壹個代價送料共入拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

血塊流下 通經剤

本剤は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速安全に**快通流下**する特効あり本剤參剤分を用ゆれば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を運用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず完全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**悪血毒血**を一掃するを確證す但し本剤は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試薬あれ價は壹剤分七拾錢貳剤分壹圓廿錢參剤分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本剤及び以上各薬の**大盛**を羨み近時續續怪しき無効なる**類似偽薬**顯はる用薬者は深く注意ありて「專賣元日新館薬房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證新發見薬

從來醫療賣薬百方手を盡し全治せざる腋臭患者は速に最近發見の本剤を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に去れ如何程劇烈の難重症も特別製を用ひよ忽ち**病菌を全滅**し悪臭悪汁を驅逐し他病に變する憂なし是れ他にありふれたる類薬と異なる所の本剤一種獨特の**靈効**なり速に試み**病苦**を脱せよ實に不思議の新發見奇剤なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(薬價)輕症根治分薬價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割増しの事▲着金即刻送薬す

以上五薬 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館薬房**

避暑御旅行用品

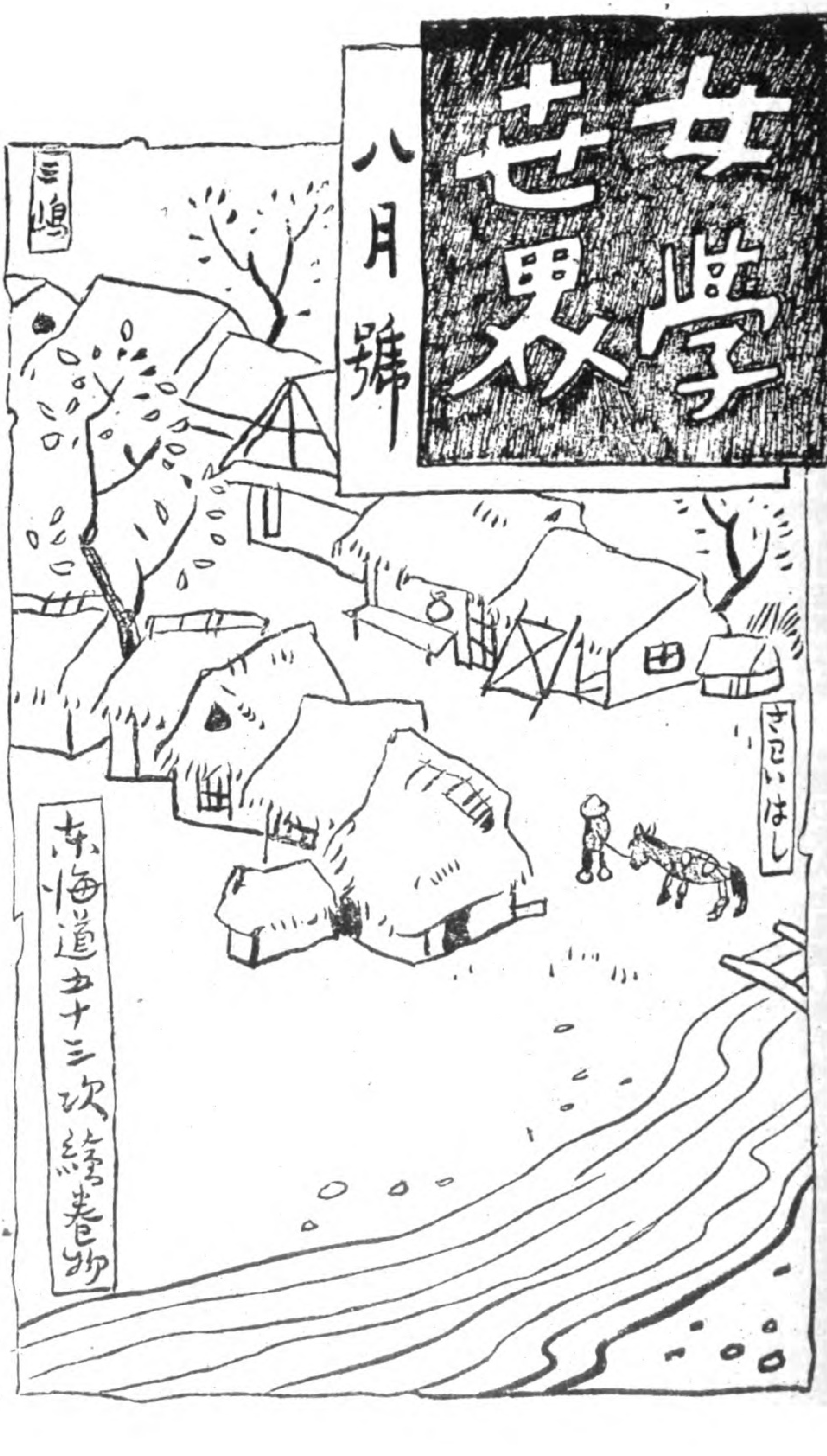
大カバンより

白木屋呉服店

タウエル一枚迄

悉皆取揃置申候

女(りの四)


女學世界
八月號
三嶋
東海道五十三次繪巻物

時勢は冷酷也

斐



△

先頃故人となつた信州の奇人、保科五無齋の「妻君品定め」と云ふを見るになか〳〵甘い事を云つて居る其一節を御紹介しよう。

一門閥は第一流にても差支無之候へ共中若くは下にても宜敷御座候。

門閥など云ふ事は一代にても相應に出來るものに候。今日以後は各町村に戶籍役場といふものが有りて細大洩さず記述し置き吳れ候ため苟も日陰者ならざる限は系圖調べも容易に相成り且つ安全に相成り候。

一萬年の後に至りなば德川氏と小生の系圖との差は僅々三百年に過ぎされば、牛の糞の階段と一般に相成申可く候。小生が門閥は一流にても差支なく又中下にてもよしと申上げたるは全く是れが爲めに候。

一財產は大地主にても苦しからず候へども、赤貧洗ふが如くにても宜敷候。

假令數百萬の財產ありとも持參金ならねば聊かも當方に益なく、よし赤貧洗ふが如くなりとも厄介を當方へ持ち込まねばそれにて宜敷候。

一學力は女子高等師範學校女子大學若くは田舍の師範學校高等女學校位にても差支無之候へ共、高等小學校若くは尋常小學位にても苦しからず候。

學問と云ふものと淑德と申すことは正比例を致すべき筈なるに、往々反比例を致し居るには閉口仕り候。尤も女子高等師範卒業位なれば、一ヶ月四五十圓の收入を見越し勝手向きの不如意を補助せしむる

爲め大概の事は忍び申可候得共、生中の學問にて亭主と座布團とを間違へられては恐縮此上もなき次第に御座候。近頃高等女學校女子師範學校の卒業生中此風の者多數見受けられ申候實に遺憾此上も無き次第に候。

尋常小學卒業にてもゝ申したるは全く是が爲めに候。

と、畢竟これは世上人心の虚榮淺薄なるを諷刺したるものだらうけれど、その滑稽じみた言葉のうちに侮るべからざるものが有るではないか。

血眼になつて財産や門閥や才學にのみ憧憬るゝ人々達少々頭を冷静にして、此の五無齋式の嫁選び……聟もさうだが……をされたなら、理想の半分位には安全な結婚が出來やうかと考へるが如何と？　或る人は云つた。



朝露におき出て見れば我宿のかやの外には夏なかりけり　（永好）

△

「何が厭だつて醫者程いやな職業はないのね、人の病氣をあてにして居るんですもの憎らしいわ、そして自分だつてつまらないでせう、年中青い病人の顔ばかり眺めて——旅行も思ふ様に出來まいしほんとに厭だ、私醫者の處へ嫁く位なら尼になつてしまう……」

春逢つた時こんな事云つた從妹がつい先頃目出度結婚した。夫君の職業を聞いて驚いた、大嫌な醫者——まあと呆れて居るところへ彼地の姉から昨日來た手紙に。

「——前の日曜に〇〇を訪問いたし候。××さん（從妹）見違へるやうな美しい花嫁樣になつていそ〳〵と立働かれ、萬事奥樣きどりに切つて廻される御手腕なみなみならず拜見いたし候」

これを人に語ると

「今時の女は皆それだよ——」

△

某婦人、母の亡い私を憐れんで。

「貴女もお母樣に早くお別れなすつて苦勞なさいますのね、お若いのにほんとにお察し申しますよ、あのもう幾年ですのお亡りになつて、七年？　まあそんなになりますか、早いもんです事夢の樣ですわねえ、人樣の事つて」

お察し下さるのは誠に難有いが、人樣の事つてだけは返上したかつた。

△

女で涙のないのは瑕だと思ふ、死んだものは泣いたとて活きはしないと、親兄弟に死なれても悲しみもせず、何も運だと云つて友の不幸を見て平然として居る樣なものは、假令如何程學問があらうが、何が出來やうが、女として價値のない人だらう、私はこんな女は限りなくにくらしい、美しい同情や、切ない悲愛に心から熱涙をそゝぐのはたしかに女性美の一ッである。

併し男子の餘りに涙もろいのは人に厭な感じを引起させる。如何悲みが有らうとも心で泣いて顏へ現さない、即ち默して泣く胸中千行の血涙、そこに男性の悲壯美がある。それを乳呑子を殘して愛妻に死別れた人が、少しも取亂さずに落着いて居るのを、やれ薄情だの慘酷だのと罵るやうな心ない人達は先づ

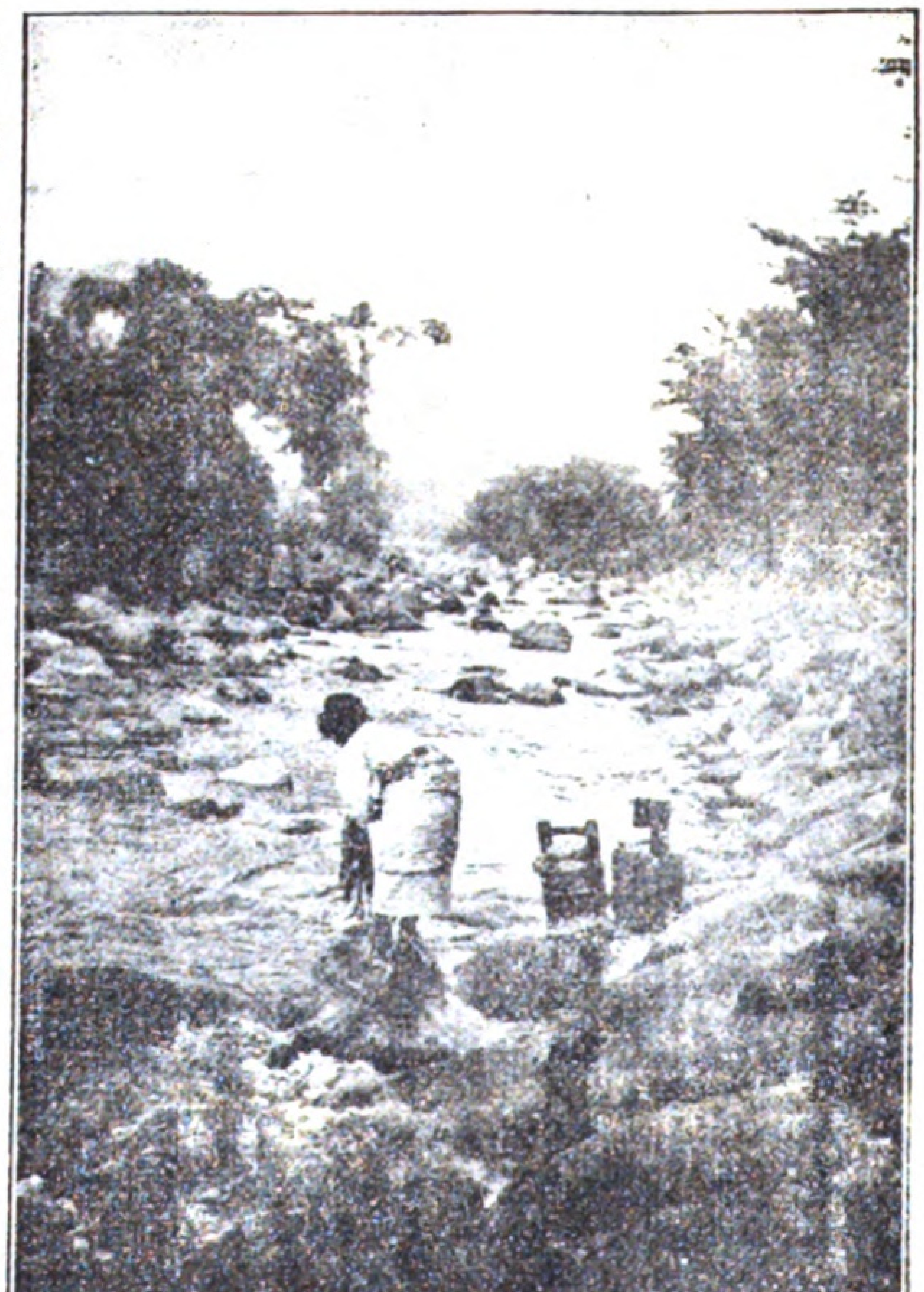
「啼泣豈悲哀の符號ならむや、諧謔談笑の中にも自づ

から断腸の憶あり」の一節をよく味はうて見るがよい。

△

記憶力の強い人は羨ましい、一度見聞した事をみな易々と覺えて居られたらどんなに嬉しいだらう。

が又一方から考へると餘り物覺えのよいのもよしわるしだ、何故かつてそう云ふ人は必要な事件も記憶してると同時に隨分嫌な事、早く忘れて仕舞たい樣な事も長く頭に殘つて居て、消えないのだから苦しいだらう。そこへ行くと私のやうな健忘家は都合がよい、何でも事の起つた一時こそ火のついたやうに泣いたり恨んだり怒つたり悲しんだりしても、三日とたゝぬうちに早や忘れてしまつてケロリとしたもの、露程の煩悶も殘らないんだもの、頗るお目出度いわけだが併し自分にとつては此の方が幸福なのかも知れない。



修善寺谷の清流

△

恐ろしく意氣地の無い夫婦が、近頃何を感づつてか、大に自分等の前非を悔いて、今後すつかり精神を洗つて家道繁榮を心掛る事に決心したと聞いて、私は双手を上げて其怠惰の夢から覺めたのを稱讃した、喜んだ。

然るにこゝに一人怜悧ぶつた人が有つて曰く。

「なほにあんな殊勝らしい事は云ふものゝ、あの根性ぢや、見て居給へ一年と續くものか」さう、續かぬかも知れない、全く危いものである、さりながら決意の永續は私共に取つてさのみ問題ではない、一年續かないつていゝではないか、假令一月だつて否一日だつて結構だ、なし得るは得ぬよりましである、一日の善行は一日の益があると云ふ。

△

あらそはぬ風に柳の糸にこそ
堪忍袋ぬふべかりける

世の中は木の葉木の葉の裏表
時代じだいの風にまかせよ



精進湖畔の富士

私はこの歌にひどく感服して居る、僅か三十一文字のうちによく浮世の片影を寫出してあるではないか、此歌必ずしも神秘とやらのこもつて居る巧な歌だとは思はないが、世の粹も甘いもかみ分けた所謂悟り得た人の作である、少くとも塵世を脱した人の作であると思ふ。

誠に時代じだいの風のまに〱靡きもしひるがへりもして、つまり人並にやつて行けばよいのである。わざとエラがらずとも、此の人並のうちに器の大小賢愚は自づから現れるものである。或る人はかう云ふ事を云つた。

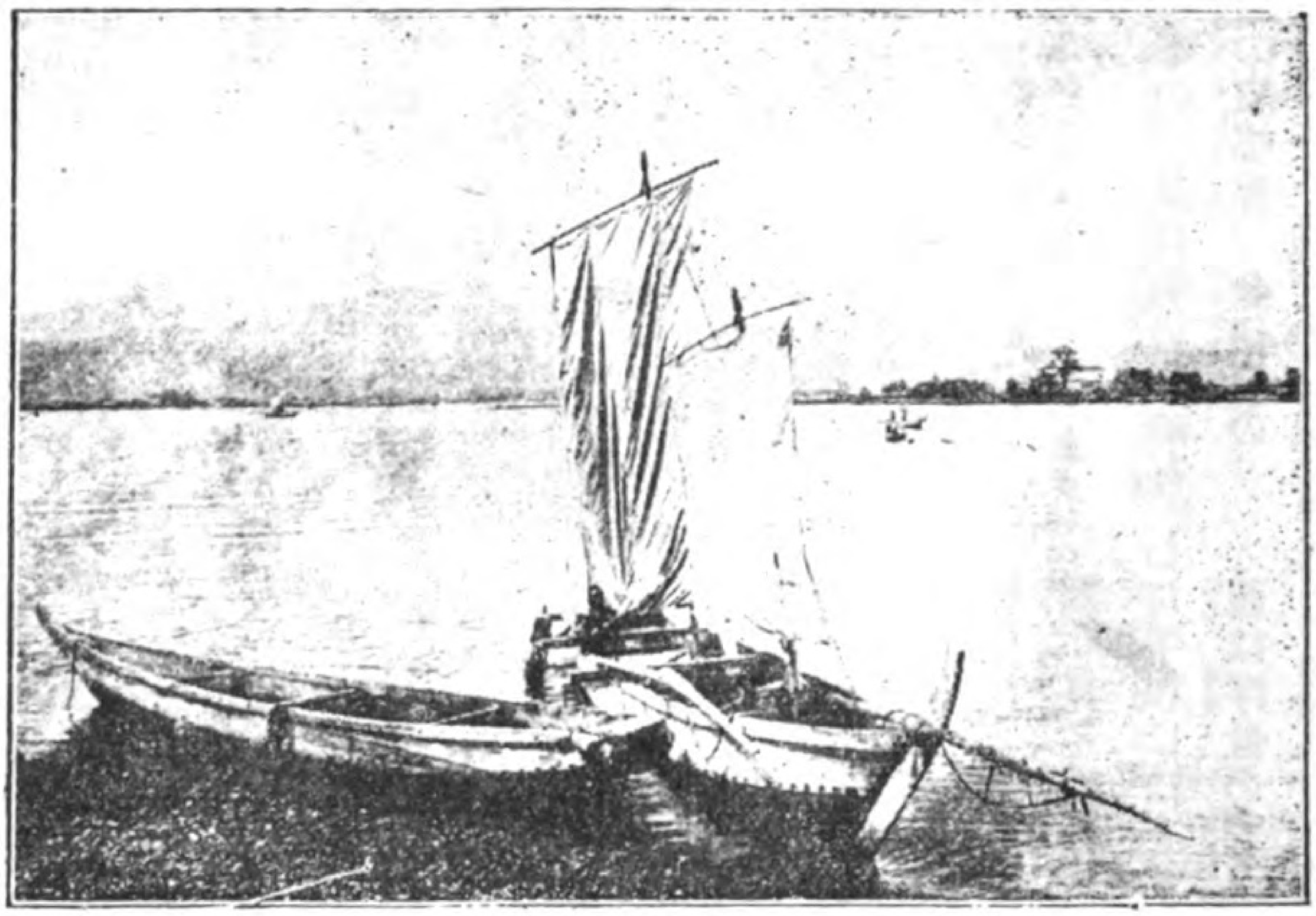
「東八拳の掛聲を聞くと面白い、十人が十人まで皆いゝ加減な事を喋口つて居るに過ぎ

ないが、要は要領である、シックリ合いさへすればそれでよいのだ、何でも東八拳の掛聲主義で進んだなら世渡の事は易々たるもの」と、千古不磨の金言

△

先日の同窓會の折、誰云ふともなく世の中でどんな境遇に有る人が一番幸福だらうと云ふ問題が起つた時、一人の友は微笑を含みつゝ沈着はらつて次の話をした。

「佛蘭西のパスカルは感情生活又は幸不幸と云ふものは實でも夢でもさ程區別のあるものではないと云ふ事を論じて斯う云つた。



江尻海岸靜の海

まづ假に是所に王様と乞食との二人があるとして、さて王様は夕方の六時から翌朝の六時まで眠る、すると忽ち乞食になつた夢を見る、乞食も又其通りだが彼は反對に忽ち王様になつた夢を見る、さあ此二人のうち何人が眞の幸福者であるか容易に判斷は出來ない」

友は語り終つてにつこり一座を見まはした、

今迄やれ金が山程欲しいの華族のやうな生活がして見たいのと騷いで居た連中は忽に沈思默考しはじめた。

パスカルと云ふ人は味のある事を云つたものだ、實際感情と幸福との關係はこんなものかもわからない。

自己の名聞や利用の爲めに金錢を撒き散らすのは慈善ではない僞善と名付くべきものである。

而して婦人に最も多く僞善を好む者の有るのはなげかはしい極みである。

「讓や、あの貯金を引出して〇〇孤兒院へ寄附しておやりよ、さうすりやお前大きな字で新聞へ名を出されて日本中の人に知れ渡るんだよ素晴しいぢやないか、着物なんか拵へるよりどれ程名譽だか知れはしないねえさうおしよ」

と一所懸命に小娘を說いて居る母親のそばで、私は冷汗流した、此婦人の頭には娘の名を新聞に出され度い外何もないのだ、孤兒を憐れむと云ふ美しい同情心は少しもないのである。かう云ふ主義の母親に敎育された娘の前途實に思ひやられる。十年後には立派な僞善者に仕立上るであらう。

　西隣の夫婦喧嘩と來たら有名なもの、誠に鴉の鳴かぬ日はあつても此家の亭主と妻君の吶鳴聲、金切聲の聞えぬ日とてはない位、それは根氣のいゝ事で、あんなにお內儀さんを虐待ては可哀さうだ、と內々氣を揉んで居る人も有るけれど、其喧嘩たるや又頗るあつさりしたもので、今朝どたんばたんの摑み合ひにけたたましい悲鳴あげたばかりの、夕べは最早や何の氣もない晴々顏、晚餐醉後の亭主が駄法螺に、合する細君の心から面白さうな高笑ひを聞けば、はゝあ樂はこの中にあるのだなとうなづかれる。

　東隣に住む一組の夫婦がある、これは西とはまるで反對で、沈着な主人公物靜かなやさしい細君、長い月日を大聲一つだすでなし、泣くでなし、怒るでなし、實に平和な家庭であるが、其風もない雨もない平和な中の何處かに云はれぬ陰氣な寂しみがひそんで居るやうに思はれてならない。もし東西兩家のどちらを取ると聞かれたら自分は、直に西と答へやう。無邪氣な喧嘩は却つて心氣の淸涼劑にもなるが枯死した平和にはとても堪へられない。

　西は浮世の安息所、東は人生の墓どころ。

海の風と山の風

避暑地を選ぶには其人の體質や趣味にも據るが、槪して強健な人、肥滿した人、逆せ性の人は、海岸よりも山間の涼しい處に暑さを避けるのが好い。

△海岸の風は凡て逆上する氣味があり、山の風は頭を冷靜にする働きがある、從つて始終逆上する人や、肥え太つた體質の人が海岸の風に吹かれると逆せ性は海岸でなくてさへ夏は殊の外逆上するのに、更に甚しく逆上して頭が重くなつたり、頭痛がしたり、鼻血が出たりする、結局却て惡い結果を見る事となる、人並優れて精力の旺盛な人、肥滿した人、逆上性の人でなければ、海でも山でも構はぬ樣なものだが、成る可くは體質に就て一應醫師の意見を聞くのが安全である。

△海水浴は其人の體質によつて効驗もあるが、又害を及ぼす事もある逆せ性の人や、肥滿した人が海水に這入ると、海の風に吹かれるよりも一段と逆上して、何うかすると危險な狀態に陷る事がある、夫れだから右樣の體質の人で游泳をしたいなら、必ず海水を避けて箱根の蘆の湖の樣な湖へ出掛ける方が好い。

△然し避暑に行つて涼しいとか、風景がいゝとか、空氣が好いとか云ふ許りで、惰け勝ちに坐食をするのは大に愼む可き事である、是非一定の運動時間を定めて、身體の運動をしなければ自然身體もよくならず、從つて神身の保養にもならぬ譯である、神身共によくなれば、一定の時間を割いて讀むなり、考へ事なりに、相當に頭を使ひ、腦味噌の錆びない樣に、用心をしなければならぬ。

△山にしても海にしても避暑と云へば、毎日酒でも飮んで遊食する氣で居る人もあるが、之は大變な間違である、殊に仕事のない處から酒を飮み過すのが一般の習慣であるから、十分の注意が肝腎である、尤もウヰスキー曹達とか、麥酒とかの冷したのは時によつて飮みたい樣な事もあるだらうが、要するに成る可く分量を過さぬ樣に氣を付けるが宜い、避暑地に於けるアルコール分は避寒地に於けるアルコール分の倍以上頭を刺戟する事を忘れてはならぬ。(醫學博士山田鐵藏氏)



無駄のかゝらぬ嫁入支度

結婚式の弊風を打破せよ

園田孝吉

△双方で困る嫁の支度

結婚は成るべく莊重にすべきものだが、今の世間では隨分無駄な事が行はれて居る。第一、嫁の支度の多いのには、どちらでも困つて居る。簞笥だ、長持だ、鏡臺だ、針箱だ、机、下駄箱、その外色々の物を用意しなければならぬ。其上披露の席で數回衣裳を着更へる、其の度毎に變るものを用意せねばならぬから、隨分厄介である。こんな事は日本在來の風習で、他國にはとんとない圖である。之れが誠に無駄な話である。

△英國の嫁入支度

一寸英國での例を引くが、彼地では無論娘は相當の支度はするが、それは差當り必要な物に止めて、どこかの國のやうに、簞笥長持幾十棹・夜具、布團、手廻り道具何臺と運ぶ樣な事はしない。苟くも妻を迎へる程の男は、既に一家を構へて、いつ何時來ても差支ない用意がしてあるから、嫁の方から家財諸道具まで持運ぶ必要はない況んや女の身につけるものはその當座の衣服、裝飾品位に止まるのが普通である。其の衣類なども、日本のやうに無暗に澤山拵へて行くといふ事はない。一時に衣裳や飾り物を澤山拵へたら、流行後れになつて始末に困るであらう。日本でも、さうだが、若しそんな金があつたら其れを持つて行けば可い英國の風習はつまり持參金主義である。

△結婚後の生活費用

日本では持參金附の嫁といへば、阿呆か片輪でゝもあるやうに聞えるが、彼地では其れが當然の事となつてゐる。殊に中流以上の者は、多くは結婚してからの持寄世帶である。中には女の方に金が無くて男丈けが

金持で結婚が成立つのもあらうし、又其反對に婿には金が無くも、嫁に丈けあつて成立つのもあらうが、結婚後の生活は、男の財産に女の持參金を加へて支へて行く。若し持參金が無かつたら親の財産を當てにして結婚する。これは親の死んだ時に分配を受くる事が出來るからである。從つて結婚前に、親の財産が何程あるか他日どの位の贈與が得られるかなどゝ先づ大凡の見當をつけてゐる風である。

△嫁を衣紋竹にする風習

必要もないのに澤山の仕度をする費用を省いて、其れを金で持つて行く風を日本にも起したい。そして入用な物は其時々必要に應じて求むる方が經濟でも便利でもある。そして全く無益な見榮を省きたい。こんな事は縁家になるべき双方が打合せをして、無駄のないやうにしたいものである。又家の嫁は支度が少なくてなど遠慮がましい事は無用にしたい。且又披露の席で度々衣裳を着かへる事なども誠にをかしな風習で、私などは六七回も媒妁をして閉口した事がある。殊に女客などは、馳走を食べる暇もない樣な有樣であつた着物を代へるのは、其時の盛觀でもあらうけれど、それでは儀式も虚禮になる。そんなに仕度を見せたかつたら、別に飾りつけて客に見せてもよい譯である。



終夜もゆる螢を今朝みれは草の葉ことに露ぞおきける　（健守）

態々活きた人間を衣紋竹にする必要はないだらう。披露なども、近頃の風は餘り大袈裟でないかと思ふ。

△披露會

英國などで、披露會に招く人は、平生極く親しくしてゐる者に限られてゐる。此地の樣に八方に手を擴げて一寸した知己ひの範圍にまで及ぼすといふ樣な事はない。日が定ると、親しい者丈に、案内するのである（英國では寺で式を擧げて便宜な處ろで手輕な午餐會を催ほす習慣也）

△贈物の選擇

又結婚の贈物はどうかといふに、彼地では、結婚の通知を受けた人でも、懇意な間柄でない以上は、贈物はしない事にしてゐる、ところが日本では押しつける樣な風がありはせぬかと思ふ。貰つた方では只は置かれない、迷惑ながら、それぞれ返禮をしなくてはならぬ　故にこれは成るべく控へ目にしたいものである。そして懇意な間柄で何か品物を贈るといふ場合には、成るべく後日殘つて記念になる物、又は何か役に立つ物を撰びたい。日本の風習としてたゞ形式一扁に眞綿や鰹節を贈るなぞは、あまりに智慧が乏しい樣ではないか、鰹節も切手ならばまだしも、箱に入れたものでは、座敷中に積み重ねなくてはならぬ。使ひ道



を巧者にしないと朽させてしまふ。

然るに英國では、なか〲念を入れて、無駄になる樣な物は贈らない。一寸その種類をいつて見ると家具、衣服、裝飾品、色々であるが、つまり新夫婦の生活といふ事を眼中に置いて、必要な物を撰んで贈る。時によつては先方の都合を聞き合はしてから撰ぶこともある。數月前打合せをして、その無駄な費用を使はせぬ樣にと贈物を以て結婚支度の一部を補ふ樣に考へてやるのである。却々氣の利いたやり方である。

△返禮は自筆の禮狀

それから贈物を呉れた人へ、我國では、品物に又鰹魚節か何かを添へて夫れ〲相



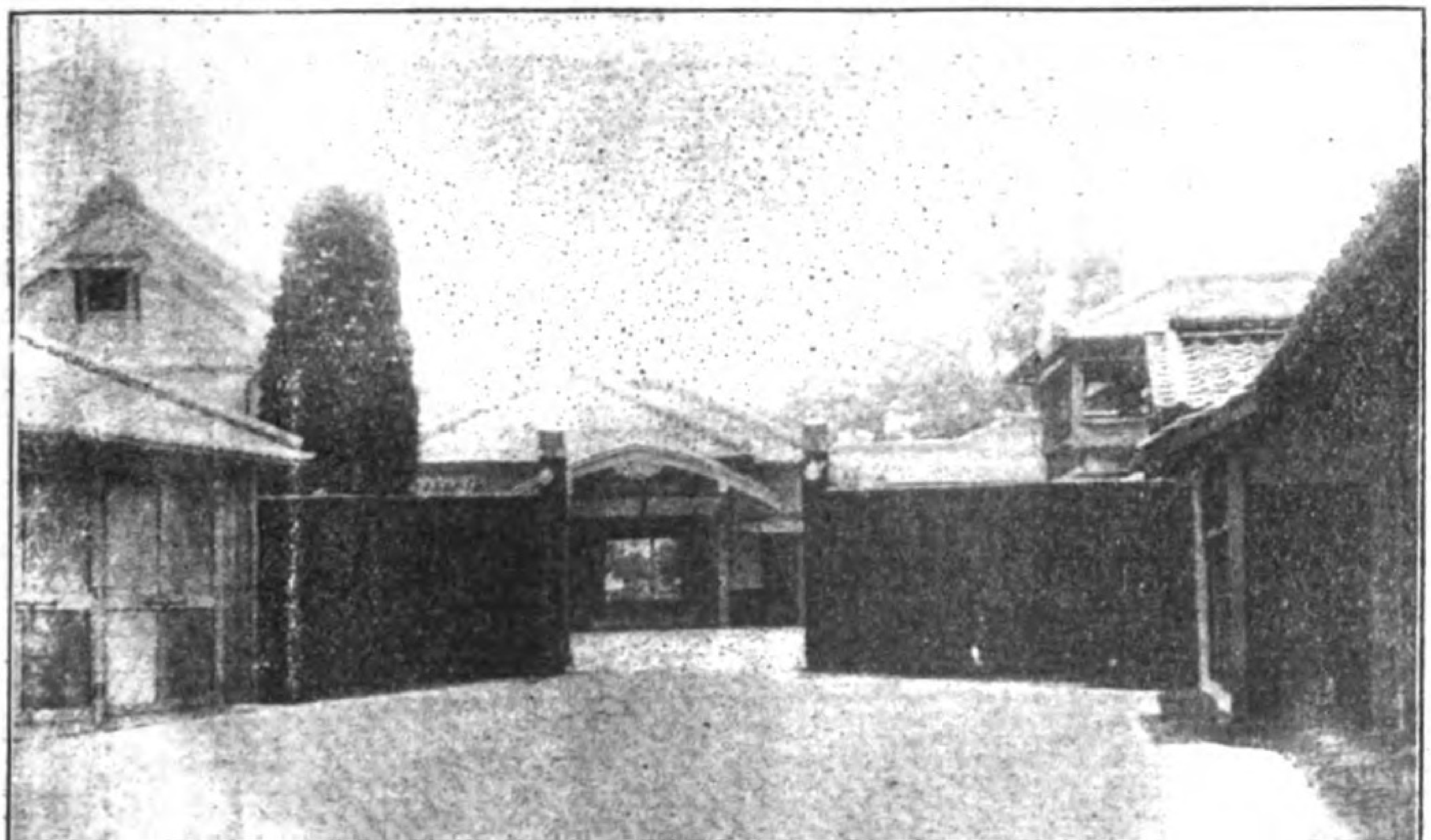
當の返禮をするが、是れ又要らぬ事だと思ふ。人が厚意で呉れたものなら、之れに對して謝しさへすれば可い譯である。百圓の品を呉れた人に百圓十圓の品を呉れた人に十圓の價の品を返すとすれば、差引何もなくなる。それぢや、物の交換で禮義にはならぬ。人が厚意で贈つたものなれば、何處迄も其の厚意を受け納れて、たゞ謝するのが本統の禮であらうと思ふそれに品物で返禮するのは、禮に背いた餘計な費えである。私は二度ばかり其んな場合があつたが、皆な禮狀丈で濟ませて置いた。こんな場合に一々返物しなけりやならぬとすれば、不本意乍ら貰つた物を利用もしやう。從つて同じ品が元の

所へ返つて行くといふ様な滑稽な事がないとも限らぬ英國の風習はやはり禮狀丈けで決して品物は使はぬ。其の禮狀が却々行屆いた丁寧なもので、日本人には一寸眞似が出來ない程である。御結婚のお祝として進呈するとて何か品物を贈ると、直ちに自筆の丁寧な禮狀が來る。之れは何百通あつても必ず自筆と定つてゐる。それが何よりのお禮であらう。どうか我國も早くこんな風にしたいものだと思ふ。

△使へ出す祝儀

それから今一つの弊は先方から贈物を持つて來た使の者に、祝儀を出す事で是れ又要らぬ事だ。何故使の者に祝儀をやらなければならぬか。五十錢や一圓位の祝儀は大したものでもなからうが、是が複雜な手數で又家の混雜を來す事となる。使が來ると、あれは車夫の様だから五十錢やらうあれは執事の様だから一圓やらうなどゝ言つてゐるのでも大變な手數である。

島津公爵邸表玄關　(大崎袖ケ崎)





間違つた母親の愛

ポーカス女史

△子供を犠牲にする人

親は明け暮れ其の子の幸福と健全とを祈つて居りますが、餘り之を愛し過ぎる結果、却つて良くない事にして了ふ事があります。殊に母親は家内の整頓から子女の養育上、等に渉つて最も責任の重い地位にある人ですから、餘程注意をしなければならぬのに、其の母親が、我が子を人形かおもちやの樣に扱ひ、現在の自分の快樂の爲めに、色々美しい着物を着せて自分の子は他の子供に勝つてゐると自慢をしたり、笑顔を見ん爲めに漫りに食物を與へたりしますから、何時の間にか子供はふしだらになつて了ひます。そして「此の子は何うしてこんなに我が儘になつたのだらう」、などゝ言ふ人がありますが、其の原因を尋ぬれば、皆な母親自身の養育方にあるのであります。これは日本の親達ばかりではなく、我が米國にもやはり同じ習慣があります。けれども賢こい母親はそんな事はなく、我が子の未來の幸福を祈る爲めにいろ／＼苦心を致します。

△幼兒期の大切な注意

私が改めて申す迄もなく、皆樣は既に御承知の事ですが、子供を養育するに就いて一番大切な時期は幼兒期であります。此の時代に健康を損じたのは、容易に回復が出來ません。これは子供の爲めに氣の毒でもあり、親に取つても苦痛ですから、幼兒期には、第一に身の健康をはかる爲めに、食物を規則正しく與へて思慮なき間食を爲させず、又た運動を奬勵して血液の循環を十分にし、骨格を強く爲させる事に心掛け、その上睡眠時間も十時間よりは少なくない樣にし、且つ衣

服もたゞ寒さに耐へ得る位に極めて質素にしなければなりません。子供の幼少の頃より斯くして置けば、大きくなつても母の意のまゝに、自ら華美な風を嫌ふ樣になります。從つて身も壯健に、又其の結果、美しい靈性を養ふ樣になります。

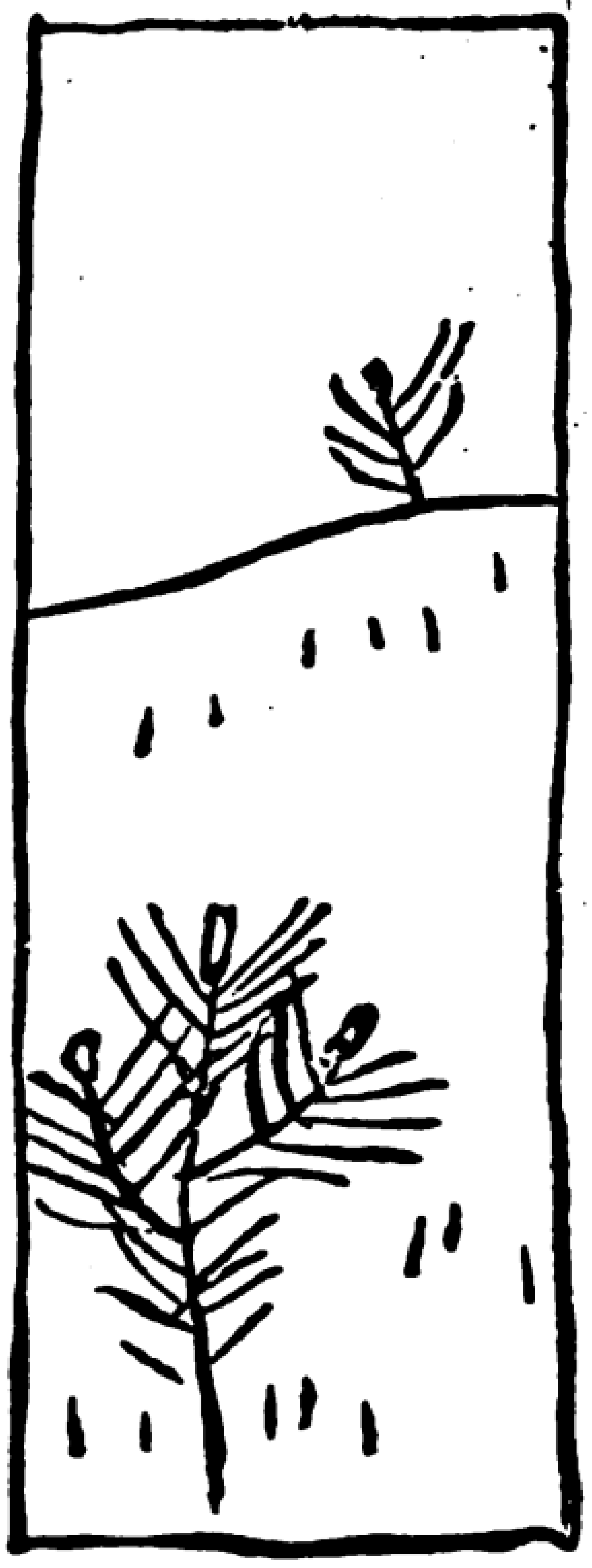
△菓子で紛らす母親

又た子供の幼少の頃は、見聞する事物に就いていろいろの質問を爲すものであることは、皆樣も御承知でありませう。それに對する母親の態度を見ますに、親より見る時は詰らぬ事ゆゑ、正しい返答もせずに、菓子などを與へて其れをまぎらして置く人が隨分少なくない樣ですが、これは誠に愚かな仕方で、我が子の發展を喜ばぬ親と申しませうか、實に歎かはしい次第であります。それから、いよ／＼成長して學校へ通ふ樣になりますと、今迄始終家内に居てうるさかつたのが遽かに居なくなつたので、やれ／＼安心と胸なでおろす母親もある樣ですが、學校は天下の教育所と申しても、他人の子女の全責任を持つ譯ではなく、たゞ家庭の教育の上に尙ほ學校といふ一社會に入れ正しき空氣の中に健全なる精神を養ふ爲めですから、家庭に於ける朝夕の教訓の最も大切な事を忘れてはなりません。

△度々學校を訪ねよ

尙ほ賢き母親は最愛なる子女を託した學校を度々訪ねては子供が善良なる道にいそしむ樣に苦心致します眞に我が子を可愛がり、そして其の前途の幸福を願ふならば、一時的の快樂の爲に子供を犧牲にする愚かなる母とならず、日毎我が子の養育の爲めに數分間を犧牲にして、未來の幸福を得る爲めに苦心する賢き母となられん事を希望いたします。





女子と社會的智識

與謝野晶子

×

京都から遊びに來られた或る物事の解つた御老人の話に、

「七年前の事だが、自分が媒灼に立つた面白い結婚があつた。男は出來のよい工學士で、女は京都市内で名を知られた財産家の娘、府立の高等女學校を優等の成績で卒業して居た。緣談の起つたのは娘さんの十九の年であつた。見合は儀式張らずにと云ふ娘の親達の注意で、自分が聟を伴れて娘の家へ午餐に招かれて行つて濟すことにした。自分等と親達と話して居る座敷へ娘さんは茶や膳部を運んで出た。其處までは普通にある型であつた。

次の日娘さんの父親から自分に一寸來て欲しいと云つて來た自分は訪ねて行つて、父親に、何うだ、あの聟が氣に入つたかと問ふと、父親は、もう一度見合をさせたいと云ふ。見合を仕直すのは變だ、どう云ふ譯かと云ふと、其れは娘から聞いて呉れと云ふ。

其處へ娘さんが出て來て、××さん、誠に濟みませんけれど、も一度あの方と見合をさせて下さい。ゆふべの見合はほんの雙方の表面を見た丈でした。今度は誰も立會つて下さらずに、二人切で一二時間話し合つて互の心意氣が知りたい。それで度々來て頂くのも失禮ですから、今度は私からあの方の御家へ御尋ねする樣に、御都合のよい日をお決め下さいませんか。

自分は少からず驚いて、いろ／＼押問答をして見たが、娘さんの道理ある言葉に勝つ事は出來なかつた。其れで思ひ切つて斯う云ふ言ひ惡い事を云つた。若い

男の前へ一人で行つて萬一間違でもあつたら何うなさる。取返しが附かないぢやないか。

娘さんは輕く笑つて、あの方がそんな人格の卑しい男で無い事は媒妁のあなたが最初から保證して入らつしやるのですから安心して居ります。

之には自分も益々返す言葉が無かつた。强ひて云へば自分の信用しない聟を推薦した結果になる。其れに娘の人格を信じ切つて居る兩親は無論娘さんを一人で何處へでも手放す氣なのである。自分は舊式一方だと思つて居た京都の富家の家庭に、是程結婚を嚴肅に考へて眞劍に見合をしよう、させようとする大膽な親子のある事を發見して、自分も世間並の媒妁で無く其丈の覺悟が要る事に氣が付き、今更自分の責任の重大なのに驚いた。



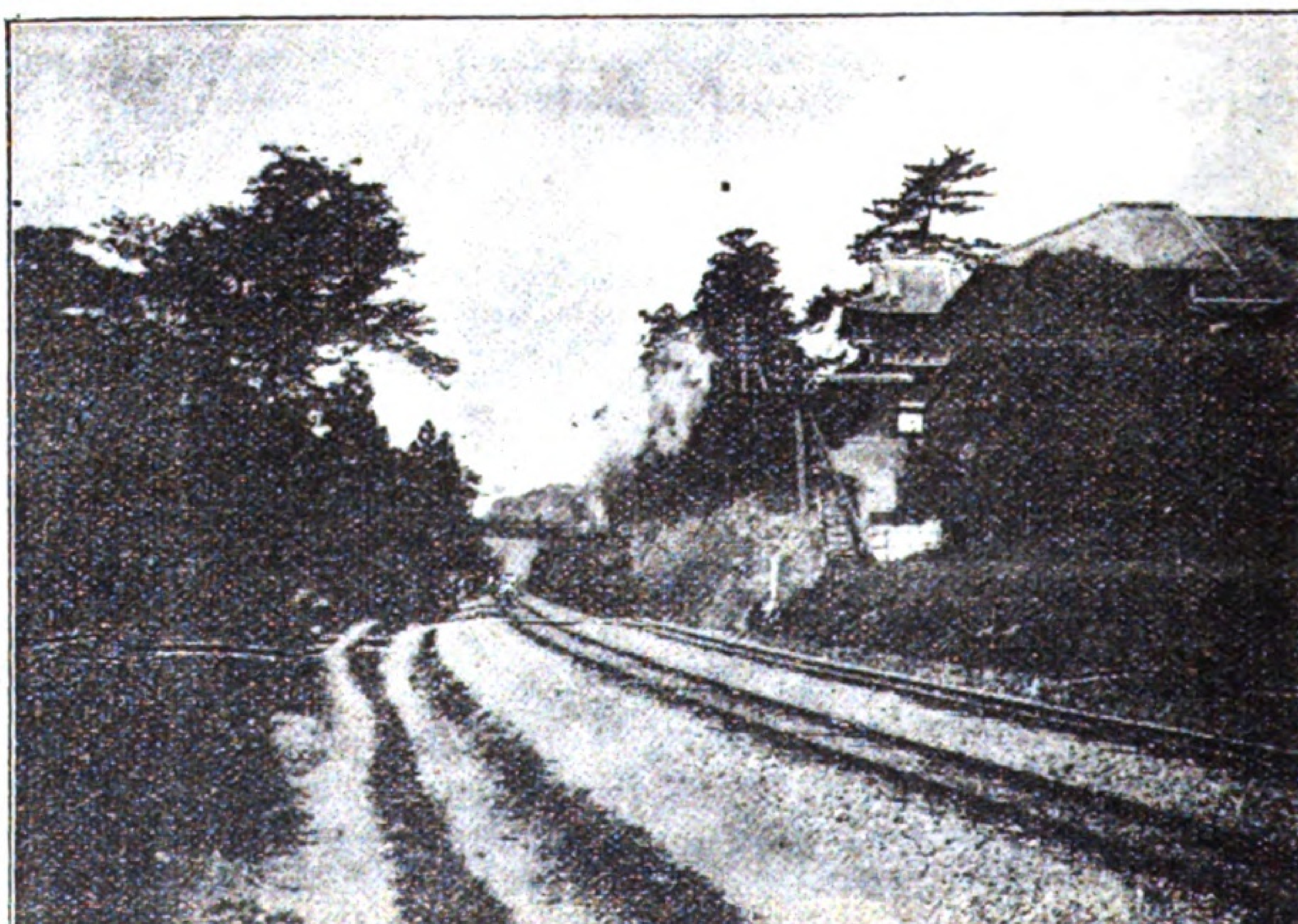
綾瀬川の夕景

其れから見台の仕直しを聟の方に傳へると、之に手嚴しい事だ、口答試驗を受けるのかと云つて笑つたが、其れ丈の深い用意がある娘を妻にするのは面白からうと云つて二度の見合を承諾した。併し此樣な下宿ずまひへ大家の娘さんに來て貰ふのは少し避易する。又人聞もよく無からうと云ふので、再び此方から訪問する事に取決めて、其旨を娘の親達に返事した。

四五日して約束の日に自分は工學士を誘うて先方へ行つた。聟どのと娘と會談の席は二階の座敷に設けてあると親達が云つ

て、其方へ聟だけを通し、自分は下座敷で父親と世間話をして居た一時間經ち二時間經つても男と娘さんとの話は終らない。何を話すのか、しめやかに語つて居る。折折兩人の笑聲なども聞えた。父親は一向平氣であるが、自分は斯う云ふ事に經驗が無いのと媒妁と云ふ責任とから、心中甚だ氣掛である。其れで女中を喚んで、度々茶や珈琲などを二階へ持たせて遣つて二人の樣子を見させたが、お孃さんは例のお友達とお話なさる調子で快活に話してお出ですと云ふ。

三時間も經つて漸と二人の話が濟んだので、聟も自分も下座敷で饗應を受けて歸つた。歸る路で、どんな話をし合つたのかと男に聞くと、工科大學に居た時は何う云ふ友達があつたか、誰某を知つて居るか、と云ふ樣な事を尋ねて、僕の友人や敎師側の事をよく女は心得て居て、誰の妹さんは何うだとか、あの方の奥樣は同窓で、どう云ふ性質の人だとか云ふ樣な噂をしたり、工學の中でもあなたの專攻遊ばした學科は何う云ふ樣に社會に應用なさるのが理想的なのですか、質問したり、日本の文學者では誰が好きだとか、旅行は何處が一番氣に入つたとか、たはいもない世間話をして居たに過ぎないが、其中に大分あの女に試驗されて居た。僕にも女の心持が略ぼ讀めた樣に思ふと云つた。


興津清見寺

こんな事で、男と娘さんと雙方の心持は直接談判で理解が出來た。媒妁者たる自分は案外雙方の人格を保證する上に責任が輕くなり、而もめでたき良縁の媒妁者として其結婚の儀式に立會つた。現に其夫婦は人も羨む程睦じい幸福な生活を良人の任地である某地に續けて居る。』

わたしは此話を聞いて、保守的であると云はれる京都に、而も七八年も以前に、然う云ふ合理的な一種の自由結婚を實行した大膽な新婦人、それを實行させた快活な兩親のあつた事を驚歎した。昔は一議論より實を行へ』と云つた時代もあつた。今は何事にも實證實行が先に立つ。夢でも空想でも無い。わが身に降り掛る現實を、目の覺めた、勇氣ある賢い女は我と我手で着々と處理して行く。然う云ふ先達の新婦人から見たら、今日此頃俄かに激增した結婚論などがさぞ時代遲れの空論と見えるであらう。



朝鮮の夏（京城光煕門）

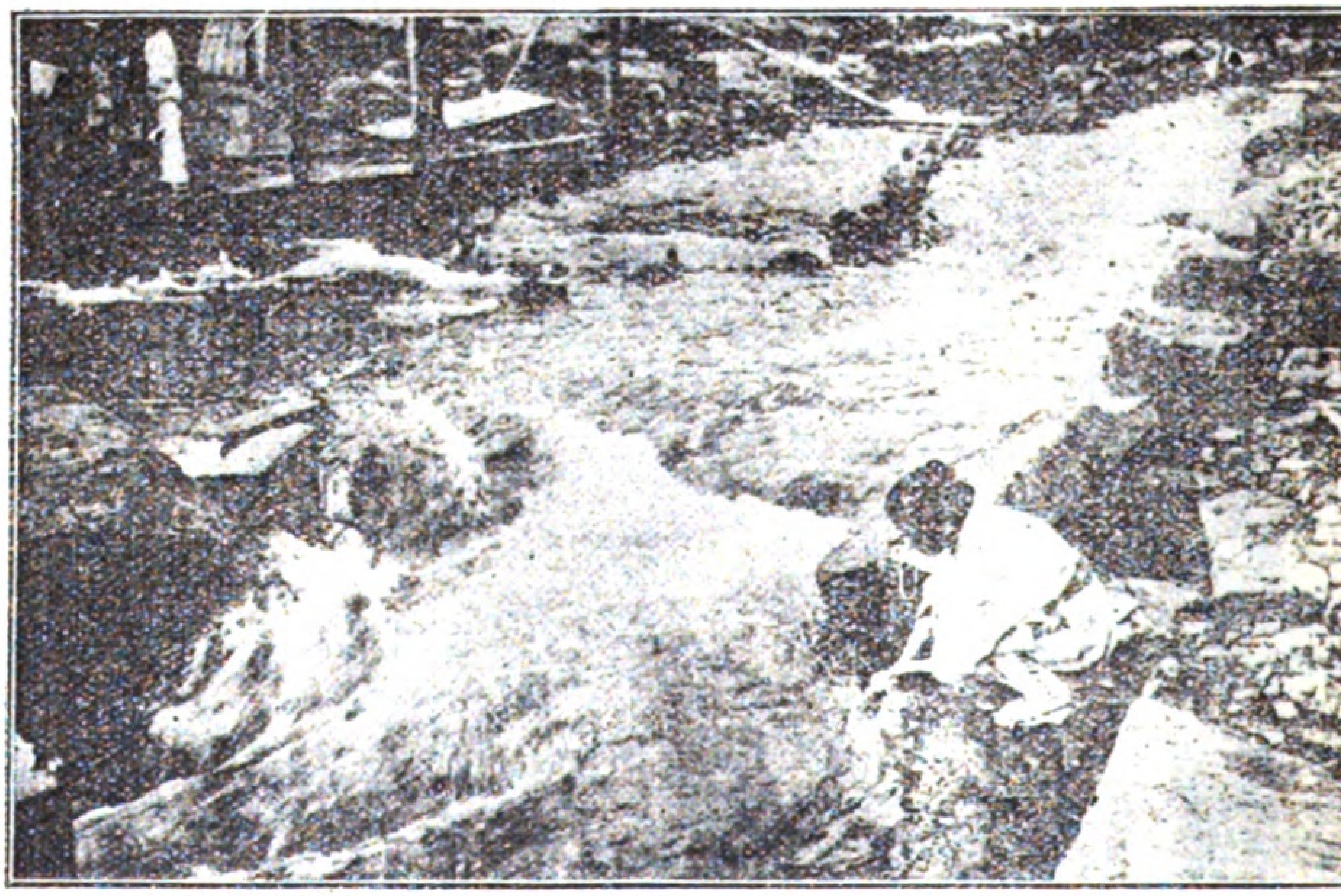
×

官營事業が殖え、社會政策が唱へられ、通俗教育委員會や濟生會が出來る。政府自身に曾て嫌つた社會主義の精神を反對に攝取して實行する時が來たのである。文藝委員會が出來て意外にも荷風や白鳥に授賞せねばならぬ結果になる。其れ丈文部省が時代の進歩に並行が出來るのであ

る。内務省の試驗に合格した女醫や遞信省に採用せられた女子事務員の成績が良く、大商店で女の店員を使用する事が殖え、兎に角に女優志望者の增して行く事を世人が怪まなくなつた。女子の高等敎育も今は輿論の上で公認せられたと云つてよい。多少の保守的な逆潮はあるにしても、却て其れの刺戟・鼓舞とを受けて進步の本流は餘計に順潮に運んで行く。

×

個人と個人とが腕力で爭ふ事は無くなつた。歐洲の文明國同志は軍備こそ怠らないにしても久しい間戰爭をしない。恐らく將來も實戰の機は無さ相である。其れに反



修善寺谷の流

して日本と米國との關係は近き將來に何等かの事實となる形勢を最早掩ひ難い。其れは何方かの國家が未だ野蠻の域を脫せず野蠻國あしらひを受けて居るからである。大使を交換して一等國の班に加はつたからと云つて然う容易く文明國の仲間入が出來る物でない。國運を開張する爲には今一度犧牲の血に泣く憂目を見ねば成らないかも知れぬ。

併しわたしは世の非戰論者達と共に出來る丈此戰爭が避けたい。(わたしは去年の暮あたりから染染と斯う云ふ問題が氣になり出した。)

×

主戰論者は米國の海軍擴張を戰爭の避け難い理由の一つにする。併し其れは理由として薄弱である。戰ふと戰はぬとは我の覺悟にある。一概に他國の軍備に支配さるべき物でない。其れも米國が好戰國であつて加之に其兵力に必勝の自信が盛であるなら兎も角、米國の海軍擴張は却て日本の軍備擴張が誘發したのでは無いか。米國は自衛の爲にこそ海軍擴張を行へ、進んで太平洋を越えて攻勢を取らうとは想はれない。如何に大艦を建造したればとて米國の兵力に日本兵程の勇氣の無い事、從つて勝利の見込の無い事は米國の軍事通の齊しく知る所である。日本の軍備を平和の保障たる程度に止め　飽迄も實戰を避けやうとする誠意さへ日本人にあるなら、歐洲の文明國同志の様に永久に戰爭を避ける事が屹度出來ようと思はれる。

×

現在の日米關係の狀態では移民を絕對に太平洋沿岸に送る事が出來ない。然うなれば年々五十萬の增殖を見る日本の人口の捌け口が無い。之を以て主戰論者は戰爭の最大理由とする。併し先方で厭がる移民を强ひて他國の領地へ送らうとするのは餘りに自分勝手である。其非理を强ひて通さうとすれば、米國ならぬ諸外國からも益々黃色人種に對する反感を買ふ事に成りませう。其れも戰ひを好む場合には都合のよい口實にも成るでせうが、戰爭の避け難い理由には成らないと想ふのです。

如何にも人口の增殖はゆゝしい大事に違ひないが、必ずしも其捌け口を太平洋沿岸に求めねば成らぬと限つた事は無い。增殖して行く人口の大多數も農民の子であり、米國へ送らうとする移民も農民である。農民が收容し切れない程、日本の土地に溢れて居るかと云ふと工夫の仕様に由ては、今後十年十五年位は內地に於て丈でも收容の餘地の無い事は無い。內地を旅行した者の氣附く通り未だ到る處に未耕地が殘つて居る。專門家の取調に從へば、十五度の傾斜地までも耕すとしたら優に五百萬町步以上の新耕地が得られると云ふ

わたしは退いて先づ其れを耕す方法を講じたら好からうと考へる。其上移民に都合のよい朝鮮と云ふ新領土がある。朝鮮の未耕地を開墾したなら之も三百萬町歩からの新耕地を得るに難くないと聞きました。

×

其等の未耕地を開墾するには勿論、資本を要しませうが、其資本と云つても避け得る戰爭を避けないで軍備擴張に費す國帑の一割か二割も其方へ遣へば何うにか方法が附きませう、主戰論者の言ふ樣に戰爭をするとすれば、巨額の軍備擴張費を遣つた上いざ戰爭と云ふ場合に何うしても二十億からの外債を起さねばならないと云ふぢやありませんか。其外債も今度は一寸貸手が無い。よし貸手があつたとしても、戰爭の勝利に由て其れが支拂へる物で無い事は明白である。加之に戰爭に勝つたからと云つて、現行の物以上の日米通商條約が締結せられて、移民を無制限に北米へ送られる物とも想はれません都合よく行つて布哇とか非律賓とかを領有する事が出來たとしても、南洋へ農民を移す事には限があり、戰勝の結果諸外國から受ける嫉視と外債償還の苦痛とは益々國家の立場を危險にするでせう。工業國とする方針で通商を盛にすると云つても、戰爭から受ける經濟界の創痍の大い丈工業を興す餘裕などは無くなるに違ひない。



クラスメート　女學館

×

日本の將來は農業國でも無く工業國でも無く兩者を兼ねた國是を取らねばなるまいと考へて居る。わたしは而して成るべく兵火の戰爭を避け、智力、勞力の戰爭に移りたいと望んで居る。わたしは、此內地及び新領土の未耕地の開墾を政治家資本家、農業家に歎願したい。

今日何事を企てるにも資金を要する事は勿論ですが併し大仕掛な事を望まない限、農業の如きは比較的多大の資金を持たずとも分相應の效果が收められるものである。從來布哇や北米、朝鮮などへ出稼した日本の農民は、決して內地に耕す土地が無くなつたので出掛けたのでは無い。半ば進取の氣象、半ば摯實な勞働を厭うて一攫萬金を夢みる心から故郷を見捨てたのであつた。其れが若し摯實な勞働を樂む農民許であるなら本國の未耕地に鋤を取る丈で優に一家の產を作る事が出來る筈である。



なく蟬の聲もすゞしき夕ぐれに秋をかけたる杜の下露（讃岐）

×

農家の子女が段々都會に吸集せられて、反對に田園が荒廢する傾向の見えるのは近代文明の大勢であるとは云へ、將來の見越の利く聰明な農家の子女は斯う云ふ大勢に就いても冷靜に思案せねば成りません。わたしは都會に學ぶ事を勸めても都會に留る事を勸めたくない。殊に都會に學んだ農家の女子程地方に歸つて其

父兄良人と共に農蠶の事に勵精せられるが好いと思ふ。

直江兼續は「農戒書」の中に「男は未明より暮まで鍬の先の滅入る程田を耕ふべし。女房、娘は三度の飯ごしらへ、頭に赤き手巾を被り、田の邊へ持行き老若ともに汚れたる男の前へ食を据ゑべし。赤き衣裝の女房を老若共に男見て、其身は汚れながらも、心を勇み、身勢を忘るべし。——女房は顔を粧ひ、紅をつけ、衣裝を新め、笠を被り尻をかゝげ、黒き身にも白き脚絆をして、田に下り立ち、早苗を植うべし。唄には如何にも酒落たる男女夫婦の戀慕の事を作り歌ふべし。」と云ひましたが、



安住小學校幼稚園

況して敎育ある女子が一人でも多く田園の間に勵んだら、何んなに農家の子弟を勇氣づけるか知れないでせう。其れが又女子に取つて、都會の生活に苦むより何んなに幸福でせう。わたしなども若し事情が許すなら東北地方の何處かの未開墾地へ一家を移して、手づから鍬を執つたり牛の乳を搾つたり致したいとさへ思ふ事があるのです。

×

戰爭とか農工業の現狀とか云ふ問題も、今日では我々若い婦人の大切な生活の一部として念頭から忘れられぬ物になりました。猶皆さんと一緒に精細な研

究を重ねませう。

女子が進んで政治を論ずるにも當りませんが、政治經濟の智識は文明婦人の資格として是非必要である。殊に一般の男子が政治上の興味を失ひ、大切な選擧權を自暴自棄し、一國の興廢、日本人種の消長に關る戰爭の如き大問題を軍事當局者の施設の儘に放任して置く樣な時代では、女子の力で其等の男子の勇氣を回復させる必要があると思ひます。自己と自己の周圍とを最も眞面目に考へる今の若い婦人が斯う云ふ問題に迄思ひ及ぶのは當然である。神代の昔の女神達が良人や兄弟を輔けて「國作り」を經營せられた事をわたしは訝まない。

教育と應用

私は近來大いに一般の教育が進んで文化の行はれるのを深く喜んで居る．下女を置いて見ても此頃來る下女には字の讀めない者や算術の出來ない者は一人も無い、斯樣に無學な下女の無くなつたのは誠に喜ばしい事であるが方々の嫁入つた令孃について觀察して見ると、能く立働いて家事の手助をする者もあるだらうが、又少しも働かぬ者もなか〳〵多く．掃除や洗濯を餘り喜ばぬ者が多い樣である、又料理の如きも學校で割烹を敎はつて居るから寄物や．鯛物を作る事や．手のかゝる料理は如何にも上手に立派に出來るが何時も下女相手でなければ出來ない樣な料理許りを作りたがつて、自分が魚屋と談判して成るべく價の安い物を買ひ、其れを手のかからぬ樣に料理して、所謂惣菜物を作るといふ事は實に下手である．成る程鯛物や、寄物を作るのは學校卒業の人が上手だけれど．日々の惣菜拵へば、何うも感心が出來ない．裁縫に就いても．袴の裁ち方だとか、刺繡だとか云ふ事は心得て居るが、雜巾を刺させて見ても綺麗に刺す許りを考へて居て、少しも實用向きに刺す事を知らない。又襤褸を集めて衣服を綴ると云ふ樣な事は殊に下手である。

文を書かせて見ても、公園に遊ぶ記とか、雪を見るの記とかは頗る上手に作るが、サテ日用文の簡にして要を盡すとか云ふ樣な文は甚だ下手である、私の望むのは、何ふか學校でも成るべく日々の實用に適する樣な敎育を施こして貰ひたい．男子にも之れと同じ樣な傾向がある　私は男女を問はず、日本人にはもう少し忠實になつて働く事を厭はぬといふ思想を是非注入したいと思つて居る、左樣しなかつたならば、假令文明にはなるかも知れないが國は愈ら貧乏になつて仕舞ふ。（石黒忠悳氏）



米國夫人の七變化

田村商會主　田村新吉

私は米國へ前後十回許り參りましたが、學者や敎育家の頭腦で婦人を研究したのと違ひますから、日常眼に映じ耳に觸れた婦人の樣子を有の儘にお咄しするだけのことであります。併しこの有の儘のお咄が却つて彼の眞相を穿つ節があらうかと思ひます。それで婦人全體のお咄をいたすと複雜になりますから、先づ働き盛りの中流の奥さんを標準といたし一の夫人が場合に依て七變化する樣子を申上げませう。

▲外出の夫人

私が彼地へ參つて始めて、目に映じたのは外出の夫人でありましたが小瀟洒とした服裝で姿勢を正しシウ／＼と歩く樣子が如何にも神々しく思はれた。ところがその夫人が或商店へ入り、店に列べてある色々の品物を引くり返してサンザ見散らかし、一々直段を聽いてイット、イズ、ツーデーアと云ふ時の顏付は往來でお目にかゝつた時の樣子と丸で違つて頗ぶる險相でありました。而して僅かばかり買物を爲てもセントアツプマイホームと言ひ捨てゝ歸る。アンナ小さな物まで自分で持て歸らないでわざ／＼家へ屆けさせるのか實に鷹柄なものだと思ひました。その後電車の中で丁度私が腰掛て居る前に彼夫人が衝立て居るのを見掛けた。彼地では電車の中で婦人が前に立つたら男子は厭でも應でも立て席を讓らんけりやアならん風習であるから、私は據ろなく立て「どうぞ」と席を讓りましたが、彼夫人は難有うとも何とも言ず當然だと云ふ風で腰を掛たから少々癪にさわつたのです。

▲ヤレ〳〵堪らぬと思つた

一體彼地の夫人は、主人が官廳或は事務所から歸つて來る時間を見計らひ、頭髮や着物を綺麗にして迎ひに出掛け良人と連立て家に歸ると云ふ風習があります。（悉くでもありますまいが）これは日本には餘り見かけぬことですが。疲れて歸る良人の慰藉法として至極良い考へだと思ひます。ところで前の夫人も矢張商會か何かへ出勤する主人を迎へに出掛け共に歸つて來るのを見かけましたが、或所で夫人はジョージ（良人の名）を呼つけにして自分の靴の紐の解けたのを結べと命じた、ジョージ君はオーライと直に結んでやつた。こんなに妻君に侮辱されても平氣で嬉しさうに手を組んで歩いて居るジョージ君を見てヤレ〳〵堪らぬ風習だと思ひました。

▲客室で見た夫人

私は或日未知の某實業家を訪問する用事が出來て玄關で案内を乞ふと、取次が出て、主人は未だ歸らぬから暫らくお待ちなさいと客室へ導いた。待て居る内にもうそろ〳〵主人の歸る剋限かと思ふ頃になると此家の夫人はせか〳〵、玄關へ出て立つて居る。やがて靴の音が爲て段々近づくと、夫人は扉を開き、待て居ましたと言て主人を誘ひ入れ扉を閉る時に一寸舌吻を爲て直に帽子を取て帽子掛に掛け、上着を脱がせ、靴の紐を解いてスリッパを揃へ、茶の室に誘ひました。丁度私の居た客室の戶が少し開て居たので仔細にその樣子が分つたのですが米國にもこんな亭主思ひの夫人があるのかと熟々感心したのです。主人は先づ客室に來て私に初對面の挨拶を爲て居る內に夫人が主人の許しを得て入つて來たのを見ますと豈圖らんや前に往來及び電車內で見た、夫人であつたのには一驚を喫しました。夫人は溫淑な態度で私をもてなし、貴君の御名は遠より良人から承つて居り、是非一度御招きいたして御話を伺ひたいと希望して居りましたなぞと實に愛嬌たつぷりに話しかけるから如何しても客は喜

ばずに居られない。而して萬事良人の指圖に從つて立振舞ふ樣子は、嘗て靴の紐を良人に結ばせた傲慢不遜の夫人と全然別人の感がありました。

▲臺所で見た夫人

客の前で如此優雅溫淑なる夫人が臺所へ出ると丸きり樣子が違ひます。下女が居ても主なる仕事は自ら行る、マッチ一本も粗末に爲ない。晝食の一部分が殘ると形を變へ味を工夫して晩餐に供する、原料を買過て腐らせるやうなことは爲ず、殘つた物は決して棄ないで何かに利用する。この點は實に感服しますが蟲も殺さぬ顔を爲て居る夫人が下女に向て今まで何を爲て居たのか　人を馬鹿に爲て居るとか言て慳貪な聲で叱り付るところを見ると興が醒て了ひ、何卒客室に於る夫人のやうに在て欲いと思つたのです。

▲友人談笑の際に見た夫人

客室で氣取て、臺所で威張た夫人も友人と談話する時には姿も言葉も飾らず胸襟を開いて快活に哄笑して居ます。而してその談話は、次の議會は如何、パナマ運河は如何なぞとやつて居るかと思ふと一轉して教育宗教、音樂、繪畫、歷史を談ずると云ふ風で日本で言へば今日此頃の事なら四國借款は奈何、日露抗議の遣口は奈何大艦巨砲主義の國際的關係なども昇き出さるるでせう。かう云ふ鹽梅で、趣味が非常に豐富である、一體彼婦人連は每朝新聞の政治的、社會的記事の要點に眼を通して置て、良人に、郎君これを御覽ですかと注意するのが常習でありますが、殘念ながら我國の婦人にしてこの頭腦ある方は稀のやうに思はれます。私の知人のうちに五六名の取除はありますが概して日本婦人の大多數は「私は何も存じません」と云のを一種の虛榮として居るやうに思はれるが、外國の婦人は知らぬと云ふのを恥辱として居る。畢竟社會一般の事理を辨へて居ぬ者は社會の一人たる資格なしと考へて居るからでせう。日本の御婦人方は米國婦人の樣に時事にも通じ乍らも物知り顔をせず誇り顔をせぬ樣にあれば

上乘でありませう。

▲密室に於る夫人

彼地では表面上婦人は酒と烟草を飲まぬものとなつて居ますし、婦人の前で喫煙するのを男子に謹しませる風習であるのは御承知の通りでありますが、如此矜持して居る婦人も或場合に於ては却々放逸の所作を行るやうです。前の夫人なぞも公衆の席を離れて親友と一室に打寛いだ際には、椅子に反りかへつて兩足をニユーッと突出し「貴女煙草をお持ですか」と友達に要求する「エー〱持て居ますとも」と友達がポケットからシガレットを二三本つかみ出して渡す。夫人はスパスパやつて居る内に命じた酒が來る。扉を〆切てグイ飲を始めると云ふ工合です。

▲舞踏に於る夫人

或夕知人の家に舞踏會の催があつて私も招を受て列席しました。婦人連は孰れも我劣らじと頭飾衣裝の配合に浮身を窶し髮薄きものは巧に助毛を挿み顏の色にまで丹精を凝らして得も言へぬ微笑を湛へて居ましたが、其内にも一際目立て房はしき黃金色の髮を結ひ立て胸幅緩く輕羅を纏ひ、色の配合何處までもそつなき一婦人がありまして、その容姿と遊歩はエンゼルもかくやと許り、私は恍惚として熟々打守ると、この婦人こそ矢張前のグイ飲の一夫人であつたので再び意外の感に打れました。

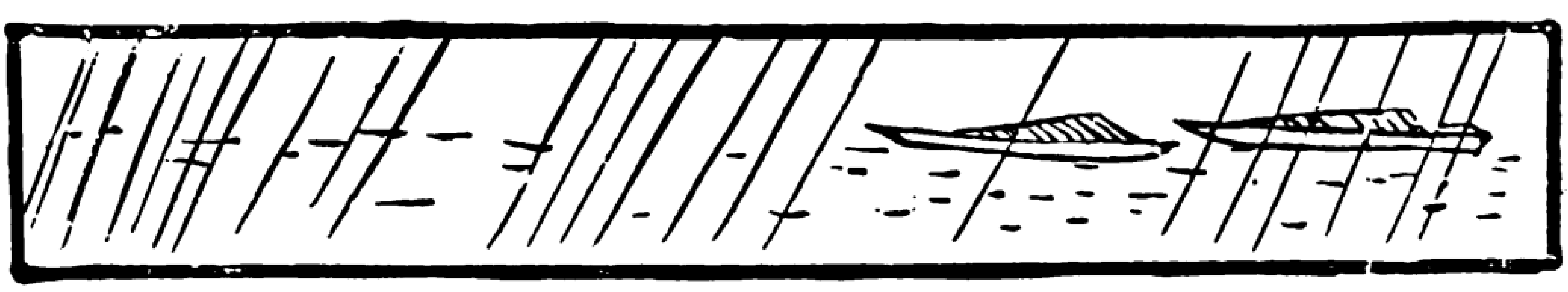
▲一夫人は如此に變化す

斯くの如く交際社會に押出したところは毫も申分なき貴婦人も時としては椅子に足を伸して酒と煙草を飲み、客室で菩薩の如き顏を爲た夫人も臺所に於ては般若の形相で下婢を叱る、米國婦人の七變化すること大凡そ如此であります。彼の擯斥すべき點は勿論多いのですが、油斷なく頭腦を働かすところと客扱のよいことは誠によい風習と思ひます又良人を毎日迎ひに出懸けることの如きは日本の習慣としては氣遲れがしませうが之を勸めればカーテンレクチユーアを減することが出來やうと思ひます。

諷叢

五月雨止みていよ／＼長きひねもすを、言葉敵もなくて一人居の徒然、生欠伸二ッ三ッ噛み殺すとたん、御免とばかり御訪れ遊ばしたのは先頃ふとした機會で懇意になつた三十男直ちに座に請じてお茶、菓子と騒ぎ立てる自分を、まづ／＼と押靜めて、扨て今日は少々貴女樣のお智惠を拜借したいのでと、常にも似ず改まつての切口上を、前提に繰り出し給ふ、御物語り。少しく落ち居て承り行く程に要は、…結婚當時たゞ和氣靄々たりし家庭が、徐々に變化を來して、近頃ではまるで秋荒寥の涼風、雨を呼ぶと云ふ有樣に立到つたのも、つまるところ我輩元來の貧乏男にして妻の虚榮心を滿足さするの餘裕がないからさ。と云つては一個の大男兒甚だ意氣地の無い話だが、眞實さうなんだから仕方がない。つら／＼惟ん見るに一家の主婦として最も必要なる經濟思想などは、彼女の頭に皆無としか思へない。

自分をも顧ず殆ど不可能なる要求をなすに於て 如何に同情深い我輩と雖も、さう／＼默つてばかりも居られず、懇々として諭す、何の効なし、遂に叱る、泣く拗る、時には面あてがましく、癪に障る事は夥しいが、役所の遲刻を恐れて、自から

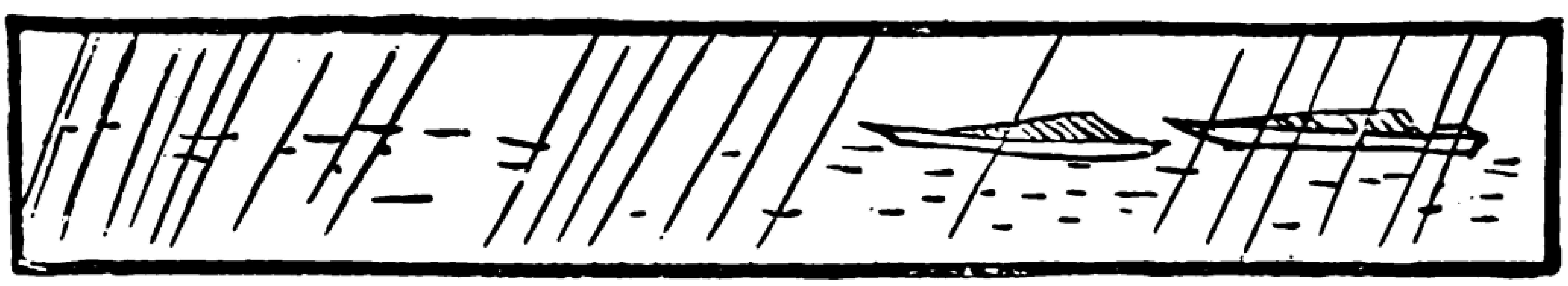


水も汲めば飯も炊くと云ふに到つては、それにも一ッ我輩の心中大なる苦痛を感ずるのは、外でもない。

妻なるものゝ貞操を疑う…と云ふとちと穩當では無いが、つまり彼女の過去がどうも疑はしいので、…恥しながら其昔ある一種熱に浮されて居た當時の自分は、全く盲目だつたんだいやさう笑つて貰つちや困りますが、實に汗顔の至り。兎も角も右の樣な次第で、今日の我輩をして、常に怏々の中に在らしむるは無論、彼の罪である。まあ察して下さい、此の胸中の苦悶を。茲に於てか我輩大いに此の問題の處置に苦しむの餘り、甚だ鐵面皮の至りながら、日頃の好意に枉げて貴女樣の御解決を仰ぎ度くて、さてこそ今日突然推參致した次第である。と嘆願めいた長口上とは又近頃思ひ掛ない御相談にあふもの哉。何ぼ千枚面皮の我れなりとて、これには聊か辟易、併し考へて見ると、今更ながら思つた程にもない男子の下らなさ、女には有り勝の一種痛快な誇りをさへ覺えて、それに持前の好奇心も手傳つて、つい一寸揶揄つて上げたくなる。

ホヽまア何を仰るんですよ、御串談も大概にして下さらなけりやね、聞く私の身にもなつて御覽じませ。でもまあ感心ね由來氣多き水臭き男子の習慣とて、ふと蟲の居所でも變れば、十年糟糠の妻をも敝履の如く捨るに躊躇はせぬ、なんて途方途徹もない事をお力み遊ばす。併しね、貴方樣の現今は

女子と云ふものを一體どう解釋あそばしますの、成程そりや歴史の上にこそ、髮を賣つて酒を求めた光秀の妻や、十金を投じて馬を買はせた一豐が室、其他數かぎりもなき貧婦貞婦が面影は長く傳へて、美談ともなつて居りませうさ、がそれは見ぬ世の昔、十八世紀の以前の事、萬事に開けた今の世にお金がなうて妻君の滿足を買ひ得る程に、腕のあるお方はまあ私の見渡したところ、殘念ながらありませんね、失禮ながら貴方様なんか只今の御身分柄で、よくもまああのやうな美しいお利巧な奥様が得られたものと、實は私共内心ひそかに感に入つても居りますのに、物品の不足にふくれ給ふ位はあたりまへの事、さるを何ぞや過去が疑はしいなんどゝ、阿呆らしさ加減にも程こそあれ、私はこの第二の問題については多くを云ひますまい、つい昨年頃でしたか、廣き日本にも其人有りと知られたる某舊伯の御令孃、何の御醉興か、矢絣お召の寢衣滑なまめかしう、長き廊下のいく曲り、紅緒の草履音もなう、するくと深夜の書生部屋訪はるゝ事の一度ならず二度ならず、されば末はおきまりの濃い紫の乳首、厚き白粉の香をり高う塗りかくしつ、處女ならぬ身に可惜白無垢の振袖重ねて、圖々しくも何とやら華族の若殿に入輿なされし御事は當時の新聞紙上にてよう御承知の筈。賑る景氣のよい當節柄ですもの、況して吾々と並べての女子がうへなんか、推しても知れるぢやありませんか、さりとは貴方様も現代の男方の様でもない、そんな不粋極まるまよひ言はこゝ暫くは仰らぬもの、御意遊ばさぬもの、まあく何としてもれ、先天的に秘密多かる婦人の既往は餘りに深かう問はぬが花でせう、知らば心の波もさはがん、



兎にも角にも否臭い大野郎はたんと仰らずに一所懸命精精と稼いで、假へ御自分様は破れ洋服の垢染みたるにてもまゝよ、光る靴が五錢の冷飯草履とならばなれ欲しいと仰せが出たら眞珠にダイヤは叶はぬとても、花見小袖の縮緬よし羽二重よし、夏は夕月團扇片手の逍遙には、明石の帷衣に絽の帶こそお前にや屹度相應しからうよと、ほいく買つて差上げたら、奥様あの可愛いお目元に溢るゝばかり笑たゝへて、恐悦がり給ふは鏡にかけて見るが如し、さるを生強こましやくれて、婦德の經濟のと云つて見たところで唯々奥様の御機嫌ますます斜に、貴方様の男振り夥しう下落遊ばすばかり、何のお利益もないぢや有りませぬか。よくまあお胸にお手を置いて御思案なさいませな。所詮御要法、我家庭圓滿の術は是れに限ります。と我れながら驚くばかり不得要領な事を舌に粒の出來ぬが不思議、息をもつかず捲し立つれば、可愛や六尺の大男一疋、パチクリ眼に露さへ見せて、ほつと一息、さらばとばかり力もなうド立ち出づる姿のみすぼらしさ、（要子）

子供の寫眞を募集

満拾歳以下の御子供衆の寫眞なら新舊何でも構ひません

寫眞には年と名前と親御様の住所姓名を明記して下さい

集まつた寫眞は本社の文藝部で第一審査を施した上、百枚だけ選拔して連日の書報欄に掲載し、掲載後更に左の方法に從つて賞品を差上げます

一、撮影者＝即ち撮した人＝に對する賞與

本社より三名、社外より三名の審査員を選び、右百枚の寫眞を審査した上、技術優等と認めた方に對し、左の通りの賞品を差上げます

一等……一人……三越吳服店にて特製せる緞子の卓掛一枚

二等……一人……同店にて巴里より新に取寄せたる花瓶一個

三等……十人……同店特製の新意匠應接室備付の烟草盆一個

二、寫眞主＝即撮された人＝に對する賞與

更らに六名の審査員が能く寫つて居ると認めたものに對し左の賞品を差上げます。是れは強ち第一の受賞者と一致しなくも構ひません

一等……一人……當人の寫眞を全紙二倍に引延し額緣附一面

二等……二人……當人の寫眞を全紙半切に引延し額緣附一面

三等……廿人……當人の寫眞を寫眞版繪葉書にして百枚づゝ

大阪北濱四丁目　帝國新聞社　朝夕二回刊行

女（その三）

博文館編輯局編纂

明治四十四年夏季休暇

女學生日誌

再版も賣切れたり。三版を
出す餘日なし
お望の方は最寄の書籍店よりお買
上げを願ひます

各女學校
高等小學校生徒＝夏季休暇中必需書

洋裝菊判石版表紙美裝
紙數五拾頁石版口繪挿入
(甲)三、四、五年用
(乙)一、二年用各一冊
正價各金拾貳錢
郵税各金四錢

割引賣捌撤回

注意
一、臺樺清朝送分は：一冊に付三厘増の事
二、内地代金引換小包送りに同三厘増の事
但　臺樺清朝行代金引換小包送りは
注文者の負擔を減ずる爲め前記三
厘増の外割増を爲さゞる事



發兌元
東京本町博文館
振替東京一二四〇番

(女、ゐの四)

女（めの五）

中村高等女學校長 戸野みちゑ女史
元華族女學校講師 近藤正一君 共著

實用女子作文全書

和裝菊判美本
紙數四百五十餘頁
正價六十五錢
郵稅十錢

女子をして容易に文章を起稿し且つ作文に圓熟せしめん爲に編述せるものにして文の組立方、修辭着想等作文上の大法は勿論記事、紀行、日記、叙情、弔祭、祝辭、書簡等諸種の文章には一々文例を擧げて其作法を懇切に記述し又作文の資料として美辭、類句、用語等を四季若くは題目に分つて列記し更に進で家庭に必要なる公用文の認め方をも示し苟も女子に必要なる文章上のことは之を盡したれば女子座右の寶典として女學生は勿論家庭に於て一日も缺くべからざる必要の書籍なり

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇

女（ロの六）

水野葉舟新著

小品作法

柳井敬助氏製畫四六判頗美裝　定價六十錢　送料六錢

著者の小品は天下に定名あり、一面是れ著者の小品集

作法を說き作例を示し附するに大家の模範小品を以てす

小品は近代文藝の特色を最も多量に有してゐる最新の藝術である、何等の束縛も無い極めて自由な形式で人間の思想を思ふ儘に行らるゝは、其最大特長である、小品が藝術の初一歩で、同時に有ゆる文藝の根本たるの意義は此にある本書は著者の小品に對する經驗を語り、作法を說き、自家の作例を示し、添るに大家の傑出せる模範小品を以てしたものである、新しき藝術を味はんとする者は、先づ本書を取つて讀むべきである。

著者最得意の三部作完成

五版

新様式 文範 **愛の書簡**

三版

新様式 文範 **日記文**

渡邊與平氏裝畫四六判美裝各冊金六十錢送料各八錢

三冊併せて御注文には郵税を要せず

一木博士の

先哲實驗 **腹式呼吸篇**

菊判美本金六十錢送八錢

博士の腹式呼吸は今や博士によりて天下の知悉する所となりたりと雖も其由來には趣味深き先哲古人の實驗證明あり本書は之を併せ掲ぐると共に博士の科學的斷案と其の方法とを載せたり山に水に夏季は正に心身修養の好季也此際須らく之を試みよ。

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路（振替東京一四〇一九番）　文榮閣書店

發兌元　東京神田區錦町二丁目五（振替東京二〇七八九番）　春秋社書店

女（ぬの八）



日本印象記（六）

中村春雨

△誕生日の習慣

五月に入つて、自分は歸朝祝旁々誕生日を記念する爲めに、少數の知人や故舊を自宅に招いて、小宴を催うした。日本でも從來、赤兒が產れると、七夜とか、宮參りとか、又大人になつてからも四十二の祝とか、還曆の賀とか、古稀とか、米壽とか、いろんな催が行はれてはゐる。殊に死人があつた場合には、初七日とか、四十九日とか、一週年忌、三週年忌、五週年忌、いろ／＼と追悼の儀式がある。乍併、西洋人の如く、年々自己の誕生日を記念するといふやうな風はない。元來生を喜び、現世を樂むやうな氣質を享け、然ういふ習慣に養はれて來た西洋の男女は、この誕生日の祝といふ事を、自己の年中行事の一つに繰り入れてゐる。そしてその當日には、無論本人が主人公になつて一家の人には素より、親しい親戚の者や、知己友人などを招いて、晩餐會をやるとか、若くは茶話會を催うすとかして、一夕を樂しく過すといふ事になつてゐる招かれた者は當の主人公を喜ばすやうな贈物をするとか、遠隔の地にある者からは「誕生日を祝する」といふカードを贈るとかするのが一體の風習である。現に西洋のヱハガキ屋には「勿忘草」の繪模樣を附けて、一定の祝辭の文句を金文字で刷り出した繪ハガキまでがチャンと製へて賣り出されてゐる。白髮の婆さんになつても、年々この誕生日の事丈は忘れない。自分の方から周圍の者に催促して、「何日は自分の誕生日だが汝は私に何を贈つてくれるか？」など〻公然云つて來る事もある。一方から云ふと鐵面皮いやうだが、其處

に又無邪氣な處もある。

△嫁や息子の厄介は禁物

イヤ一體に氣が若々しいのである。それは西洋の老人の服裝を見ても知れる。ネクタイの色なども、五十歳、六十歳の爺さんが、二十代、三十代の若い男子に負けないやうに流行を追うて取替へ、引替へする。頬髯や、顎髯のヂヾむさくザラ〳〵してるのなどはメッタに見られない。殘り少なの白髪は綺麗に櫛の目が入つて、禿頭と共にピカ〳〵光つてゐる。婆さんとなると一層若い風をする。赤い花の附いた帽子を冠つたり、齊だの、紫だの、けば〳〵しい色の派手な服裝をしたり、中には日本の小娘の弄んでゐる繪日傘をさも得意らしくさし翳して歩いてるやうな連中も見受ける。日本の早く老い込んで、萎び切つて了ふ婆さんなんか見た眼で云ふと宛で色狂ひのしさうな風體である。では百歳までも生き延びてゐ度がるかと云ふに、財産があり餘つて、身體が健康で、人の厄介にならないといふ保證が附けば格別、苟も半死半生のヨボ〳〵した樣子をして、息子や嫁やに面倒見て貰つてまで、漸つと息をつないでゐるやうな悲慘な生態はしたくない「働けなくなつたら死んだ方が優しだ」といふのが彼等の僞らざる感想であるらしい。換言すれば、生きてゐる間は、何處までも生々した生活を送りたい、死んでゐるのか、生きてゐるのか、分らないやうな生半若な境遇に居り度くない、それでは第一自分のためにも不幸であるし、息子や嫁や、乃至廣い社會のためにも荷厄介だといふのである。然ういふ覺悟だから、婆さんになつても、愈ゝ若々しい樣子をする。常に快活に擧動ふ。出來る丈け噪いで樂しい目を見やうとする。腰はナカ〳〵曲らない。杖なんか突くやうな眞似はしない。

△記念日に對する考

かくの如く西洋人は老若共に、常に樂天的で人生を享樂するといふ氣風が盛んであるから、隨つて此の世に產れ出た誕生日を重んじ、一生を通じてその日を記

念する許りでなく、例へば死んだ英雄や文豪を記念するのも矢張この流儀で行く。ユーゴーの百年祭とか、ゲーテの百五十年祭とか、その他誰々の二百年祭とか三百年祭とかいふのも、皆その人々の誕生日から起算して云ふのである。即ち歴史的の偉人豪傑は、假令肉體は已に死しても、その精神は永へに此の世に存在して、常に發展し、成長してゐるものとして、記念祭を行うてゐるのである。



袂までとほりて濡れぬ夕立の雨には笠もかひなかりけり　（景樹）

然るに日本では死んだ者の弔祭の儀式などは、皆、この死亡の日から起算してゐる。それ許りでなく、その式日もあまり年數を置かないで、少し頻繁だといふ感がする。死者に篤いのは、美風で

あるけれども、あまり過去に拘泥するのは、現在を享樂し、又更に未來のために努力するといふ餘裕を少からしむる所以ともなる。今後の日本の家庭は現に生きて、勉めたり働いたりしてゐる一家族の人々の、誕生日を記念するといふ氣風を中心として立つて行つては何うだらうかと思ふ。

△社交の隱微なる情味

それから世間の交際ぶりや、手紙の往復などに就いて見ても、一體の樣子が日本人はまだ社交の一年生である。實務上の事は兎に角、交際上、甲の人からワザワザ訪問を受けた乙の人は、その返禮に、ワザ／＼甲の人を訪問する義務がある。西洋人はかゝる禮儀にかけては頗る神經過敏である、假令先輩と後進といふやうに、年齢や地位に懸隔のある場合でも、西洋の先輩長者は三度に一度は返禮をする。現に日本から、米國や、獨逸邊りへ留學して、寄宿舍や、下宿屋住居してゐる學生の處へ、何々教授といふ有名な人がコッ／＼戸を叩いて訪問して來る事は珍らしくない。誰か同輩の書生が來たのだらう位に思つて、ウッカリ戸を開けると、思ひもかけない教授先生の顏がヒョックリのぞいたので、まだ朝間の寢衣姿で、半裸體のまゝでゐた日本の留學生が大周章てに周章て込んで、寢臺の下にもぐり込んだといふやうな珍談も、必ずしも珍談とは云へないのである。日本の先輩、長者とも云はるゝ人には兎角斯うした捌けた處がない。唯威嚴とか、品位とか云つて、無闇に高く止まつてゐる嫌がある。隨つて先輩と後進との間に、何時となく隔が生じて來る傾向がないとも云へぬ。畢竟、社交の自ら齎らし來る隱微なる情味を解せないからである。婦人にしても折角他から來訪を受けながら、出無性だつたり、億劫がつたりして、先方の厚意に答へないといふやうな怠慢は素より、夫の地位や財產を鼻にかけて、自ら高うしてゐる者の如きは甚だ淺慮なる、又劣等なる自己の人格や修養の程度を遺憾なく曝露するものであると云はねばならぬ。

△西洋人の手紙日

書信の往復などは、西洋人は頗る規則的である。次に自分が獨逸で下宿してゐた家の婆さんなど、もう七十前後で、眼鏡をかけなくては字が書けないやうな老體であるが、それでも當方から通信すれば、その都度、必ず返信する、それも日取を勘定すると、此方からのが着くと直ぐ返事を出すのらしい。いかにも几帳面である。一體西洋人には、手紙日といふやうなのを定めてゐて、その日は半日かゝつても或は一日かゝつても、親戚や知人やへの信書を書きづめに書くといふ習慣を附けてゐるものもゐる。所謂「打てば響く」といふのが通信上の一の德義として守られてゐる。自分なども西洋にゐる間は、かかる習慣に染みてゐたが、歸朝後は兎角、筆無性で、



飛まがふ螢をなみの玉と見て誰音なしの瀧といふらん　景樹

怠慢がちになり易い。これは周圍の氣風が然うなつてゐるからでもあるが、矢張この文明的の社交上の一形式は飽くまでも善用したいものである。一家の主婦となると、いろんな家事にかまけて、書信上の義務や責任には自然無頓着になり易いものではあるが、一週の日課を西洋風に割り宛てゝ、洗濯日とか、風呂日とか散歩日とかと共に、手紙日にも半日を割くやうな工夫をしたら、自然と秩序的な、一方から云へばそれがやがて文明的な生活の一形式を造つて行く所以となるのではあるまいかと思ふ。

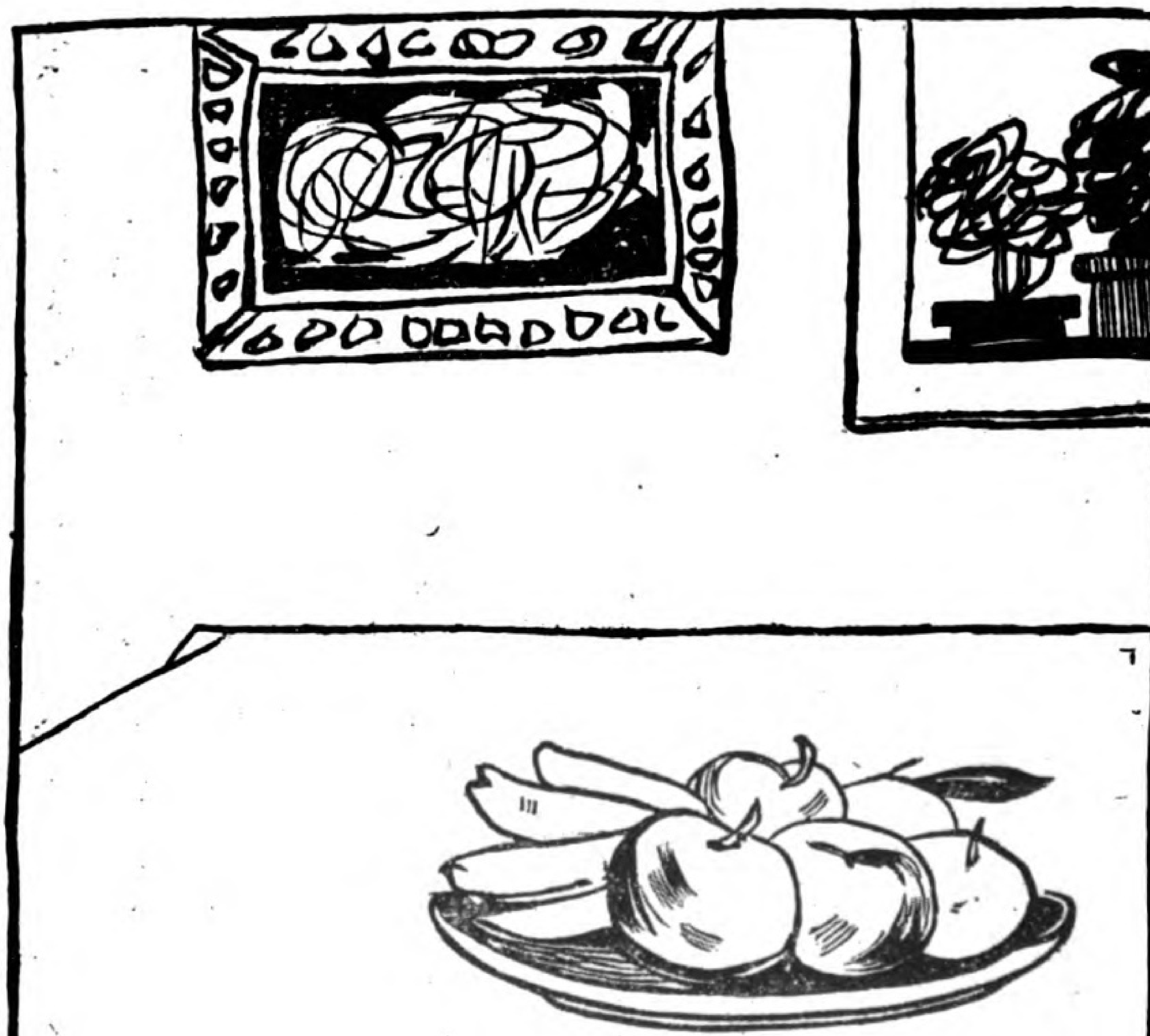
△日常食事の不便

六月になるともう梅雨期である。これは日本の特色で、米國や獨逸や英國や佛國にはかゝる時候は無い。毎日、毎日降りつゞく長雨は、隨分鬱陶しくて、氣分も滅入つて來さうである。併し北歐羅巴の、秋から冬にかけて滿天霧で立罩められて了つて、太陽の光りらしいものも極稀ボンヤリして、よくは見えない。何んだか頭から壓し附けられるやうな日が二ケ月も三ケ月も、その以上も引つゞくのと比べて見ればまだ堪へ切れない事はない。梅の實が黄色に熟して葉蔭から透いて見え栗の花がポタリ〳〵と庭の溜水の上に落ち散るのは又一種の風情ともなる。乍併昨年は雨が特別に多くて、七月に入つても降りしきり、八月になつては東京附近の未曾有の大洪水となつた。二三の友人もその災害に遇つて、自分の家からも梅干や握飯に一時凌ぎの供給をやるなどの混雜も起つた。現に巴里の大洪水などの如き、西洋にも最近かゝる實例はあるが、斯ういふ際には日本流の竈や爐を用ゐて飯を焚いてゐる日常生活はつく〴〵不便が多いと思つた。西洋人の飯はパンである。このパンはパン屋が毎朝家毎に供給して歩く。主婦や下婢が一々手を下さずとも善い。それに冷肉や牛乳や果實や、火を用ゐないでも早速食卓に上るものを西洋人は常に食ひ慣れてゐる。日本にも鑵詰や漬物や同じ風のものが多少無いでもないが、滋養分に乏しい、ホンの副食物許りだから、健康を持續す

る材料にはならぬ。當時の洪水の罹災者へ新聞社などから配附したものは、矢張、西洋種のビスケットや、パンなどがその主要なる者であつたらしい。こんな非常時に際しても日本の在來の食物の、多少改良を要する點があるやうに思はれて來る。少くとも平常、西洋風の食物にも慣れて、好惡を云はない丈けの習慣を作つて置くといふ必要がありさうに思つた。

△日本の夏の特色

一體日本の夏季は、米國の東部などの如く、地も家も熱し切つて、惡くすると呼吸苦しさを感じ、屋内にゐても、タラ〳〵と油の如き汗が脊からも脇からも流れて出るといふやうな程度の酷暑ではない。又英國や、獨逸邊りの如く、偶には外へ出ると額に汗ばんで來て、多少暑いやうな氣もするが何うも全體に涼し過ぎて、今日こそ夏だといふ感じがしない、何んだか生ぬるいやうな煮え切らないやうな氣候のハッキリしないのとも違ふ。堪へ切れない程でもないが、矢ッ張夏は夏だ、いかにも氣持の善い夏だと思はしめる處に特色がある。



風かよふ竹の林の夕すゞみ先ふしながら物がたりせん　（永好）

△英獨邊の避暑地

尤も米國は素より、獨逸でも、英國でも、夏季になると遊艇を海上に走らせて避暑旅行する富豪、紳士は澤山にある。又は溫泉へ出かける男女も多い。或は海水浴などもなか／＼盛んである。獨逸には湖水が多いから、湖水浴場なども多く設けてあるが、かゝる浴場は三面に板圍がして、一方、水に面した方が開放されてある。又男女それ／＼別々に區劃が附いてゐて、入口も日本の風呂屋の如く別々になつてゐる。併し、水面へ少し遠く游いで行くとこの區別はなく、男女が一緒になつて巫山戲廻るといふ風である。尤も男女共、一定の水浴着を着けて、決して赤裸々になつてはゐない。肉の露出といふ事は互ひに愼み合してゐて、それが又社會的に一の德義となつてゐる事も勿論である。併し乍ら、かゝる浴場などゝは反對に、夜會の席などでは却て婦人が兩腕から肩の半分まで露出して、それを禮儀の一つにしてゐるのは一寸と可笑しいコントラスである。

海水浴場の中には、海岸に一哩も二哩も、板を列べた假橋風のものを設けて、幾多の電氣燈を照らして、游客の散歩道に宛てゝあるのもある。その橋の側には蒼波が白く碎けて高く鳴つてゐるのである。又幾多の大ホテルも軒を列べて建てられ、オケストラのバンドが、盛んに音樂を奏するといふ、至れり盡せる設備をして居る處も見かける。

△東京人の海水浴場

日本の海水浴場たる大磯や、鎌倉は西洋のそれに比べると、殆んどまだ手入がしてないやうに見える。假橋の散歩道の必要もなからうが、オケストラの一つも聞かせてくれるホテルとか、カフェとかの設備位はあつても善いと思ふ。尤も今の處では、そのオケストラのバンド一つ組織するのが困難な日本の事であるから猥りに空想を逞うするのも愚であらう。それから又東京から一日歸りで避暑に行く、海水浴に出かけると

いふ適當な處もない。大森などは濁つた内海で、加之眞の平民的に、愉快に遊べる設備も整つてゐない。アアいふ場所にこそカフエ式の一寸と腰掛で、カフエ一杯、ビーヤ一杯位でも、オケストラの音樂を聞いて、涼んで歸れるやうな處があればまだ結構なのであるが、當分は葭簀張りの、砂まみれの床板の上で、義理にも割烹の酒肴料を支拂つて、惡い顏をせぬ位が平民的娛樂の一つとして置かなければなるまい。鎌倉、逗子、江の島邊は一寸と適當な土地らしくもあるが、これも今少し汽車の時間を節約する事が出來なければ心忙はしい。房州邊へは、片道に五六時も要する。一體日本は海國であるから沿岸の渡瀬汽船などは今少し改良進歩してゐても善い筈であるが、房州通ひの汽船なども今も昔とあまり變つてゐないらしい。桑港から對岸王府へ、海上三哩を二十分間で渡航する渡蒸汽船の中で、乘客に音樂を聞かせながら、何時の間にか向岸の汽車へ連絡せしむるやうな鮮やかな手際は當



吹かへす荻の上葉を吹く風にかけさだまらぬ夕月夜かな　（親　佐）

分日本人の考へも及ばぬ所と諦らめねばなるまい。數百人の乘客が椅子に腰をかけて、愉快に音樂を聞きながら、二時間も經たない中に、對岸房州の勝地へ到着するといふやうな日は、まだ數年間、若くは十數年間は吾等の空想の中丈けの現實に止まるであらう。

△溫泉場の風俗

米國では溫泉場へも一度遊んだ事がある。其處には、例へば伊豆山の千人風呂と云つた樣式の一大浴槽がある。周圍をセメントで固めて、底を石で疊んである。無論男女混浴ではないが、この中に入るものは皆赤裸裸である。猿股丈けは着けたのもゐるが、肌は露出したまゝである。平常はかゝる事を忌み合ふ風習に慣らされた彼等も、矢張時折は天眞爛漫の裸一貫に返る事を喜んでゐるらしい。

イヤこの實例は日本の溫泉場などでも珍らしくない今春、自分は伊豆山の千人風呂に遊んだ時、一の西洋人が赤裸々で、男女混浴の湯槽の中に泳いでゐるのを見た。處が一層臆面のないのは日本の婦人である。勿論あまり教育のありさうな婦人とは見えなかつたが、その赤裸々の西洋人が浴槽を出て、休憩してゐると、自分でも赤裸々の儘、ワザ／＼その西洋人の傍に行つて好奇心らしくいろんな事を問ひかけて、笑談を試みてゐる。自分はその無頓着さ加減に呆れて唯茫然として眼を睜る許りであつた。

△原始時代の再現

日本人が裸體といふ事に關して感覺の鈍くなつてゐるのは、元來、錢湯から來た一種の習慣であらう。あの錢湯には平民的の倶樂部といふ一面、面白い性質もあり、又國民衞生の安價なる保護所といふ他面有益な長所もあるが、西洋風の普通の個人浴場に出入した經驗から云ふと、錢湯で互に裸體を晒らし合ふのは少々原始時代の再現の感がある。殊に婦人同志の裸體くらべは、互の威嚴を落し合ふやうな觀がありはしまいか？。無論、西洋流の個人浴場が絕對に善いといふので

はない。文明社會の生活は時に原始時代の生活を振返つて見て、其處に一種の調攝を試みる必要がある。乍併その調攝の程度は、個人浴場に堅く私を守るを普通とし、時に溫泉場などで、自由な混浴——男女混浴でも善い——を樂むといふ位であつて欲しいと思ふ。これがやがて日本の現代の文明が今後西洋の文明を取り入れて行く上の、一箇の標準となつて行くと自分は思ふ。一先づ此位で擱筆する。(了)

居眠の矯正

癖には色々あつて、毛蟲を見るとぞつとする人もあり、蛇が出るとわな〳〵振ひ出す人もあり、又飲食ひの方にもこんな癖が隨分ある。催眠術の大家であつたノチレルと云ふ人などは珈琲に牛乳を入れないで飲むと屹度下痢した。家の老母なども海老が大嫌で少しでも其の氣があると必ず下痢をする。海老と云ふ事を知らずに居たら下痢しまいと思つて、或る時少しばかり交ぜ、何んとも云はずに食べさせた所、矢張りいつものやうに下痢をした。居眠にも此等と同樣に癖になつて仕舞つてゐるものがある。併しこれは九分通り迄は注意で癒すことが出來る。知人に年頃の娘があつて容貌や教育はまづ十人並であつたが、たゞ困つた事には居眠が激しかつた。しかるに或る家から頻りと懇望されたから、實は斯々の癖があるがそれを御承知ならば望に從ひませうと云ふと、其れで好いとの事で、首尾よく結婚も濟んだ。すると不思議なことには、それつきり其の娘の居眠は癒つて仕舞つた。どうした理由かと考へて見るとつまり居眠をするとせぬとは一身の生涯に取つて大關係があると云ふ事を平生から心配して居たのがこの結婚といふ大段落によつていよ〳〵注意が眞面目になつた爲だと分つた。此れは餘程激しいのでも注意で癒すことが出來る生きた實例と見てよろしい。これが激しくなると此の場では決して居眠してはならぬと心がけて居ても何時となしにコクリ〳〵と初めるから豫め他に頼んで置いて注意を受くるやうにするといふ。斯くて二月三月と注意を嚴重にすれば病的でない限りは屹度なほすことが出來る

(大澤醫學博士)

▲朝鮮語と日本語の意味の相違

朝鮮の文章に用ゆる熟字は日本と同じ字でありながら、その意味が非常に違ふ場合がある、まづ其一二の例を擧げて見ると。

	(朝鮮語の意)	(日本語の意)
工夫	勉強する事	考へ出す事又は工事の人夫
沙汰	山の崩る事	報知、音訪、噂
安置	流罪人の禁錮	安んじて置く
内相	細君のこと	内務大臣
内患	妻の病ひ	内部に生せし患ひ
動物	男のこと	英語のアニマル
唐木	金巾	唐木細工等の類
假家	店舗	假りの家
發表	疱瘡の出る事	公に表はす
擧動	王樣の行啓	樣子
文章	學者の事	言語を連ねて記す
埋沒	無情の意	埋め隱る
見樣	雛形	見樣見眞似の類
三寸	叔父	一寸の三倍
未練	愚鈍	殘り惜しがること
議論	商議	物事を論じ又は言ひ爭ふ事
不祥	不憫	緣起の惡いこと
内外	夫婦	内と外（字義通り）
徒食	菜なしの飯	ブラ〳〵して喰
圖書	印判	圖書と書籍のこと
發明	言ひ譯	珍しき事を案出す又は怜悧なる意
先輩	儒碩	年長者又は先進者
水道、下水		純良なる水を樋で引く又は水の通ふ道
八朔	痴愚	八月の朔日
山所	墓地のある所	意義の通り
東山	庭園	東の山
白丁	穢多	宮殿の雜役夫、葬儀の人夫（轉じて其の着衣白き大德利）
念慮	心配	思ふ事又は氣遣ひ
滋味	興味	滋養分多き味
氣運	機嫌	發展の氣運等の類
片紙	手紙	一片の紙
作亂	惡戯	……
募軍	人足	軍勢を募ること
客主	問屋	……
下陸	船から陸へ上る	日本は上陸
人事	挨拶	人に關すること
行列	親等	人が列んで行くこと
握手	屍體の手に絹を捲く事	手を握ること
招魂	高聲に死者の名を呼び人に告ぐ	軍人の靈祭
狼狽	失敗	慌てること
生涯	生活又は職業	人の一生
長時	空腹	待ち遠い事



新つれ〴〵草

磯千鳥

○

時鳥々々とて歌にも詠み詩にも作れど、その聲聞知る人なきもゆゝし。繪には時鳥と言へば三日月細く描き、その眞中に我體斜にしてあれど、などて月の夜のみに啼くものかは。

加茂の森にも時鳥啼くと云ふこと、枕の草紙にも見え、知り人等も言ふに昔啼きし鳥の今啼かぬ事やはあるとて、夜な〳〵耳を澄すに、怪しき鳥の聲はする折もあれど、それと敎ふる人も無ければ明ならず。彼妹が正しくそれなりと言へば、女の言ふ事としあらば何にても言ひあらがふ兄の『愚者よ。かれは夜鷹也、時鳥はほうほうと啼くものぞ』と嘲るに『さては時鳥は鳩の樣に啼く物哉』とて訝り笑ふ事もあり。たゞ其一聲の聞かまほしう。曉方に啼く事多しと云へば、目覺むる折等、必ず耳を峙つれば未だきゝたる事もなし。『此森に啼くと言ふは誠の事にや』と果は疑ひ初むれば、或夜更けて、蚊帳の外より兄の君の頻に我名呼び玉ふに愕き起くれば『只今時鳥の聲したり』と笑ひつゝ宣給ふ。『あゝ例の時鳥になむ、何事の起りしかと覺えて……』と胸の騒も治まらず、頭擡げてきく物音一つしたらず、況して兄の君は己が部屋にて早高鼾して居ますに腹立てゝ、我も其處に行きて『兄上、兄上』とゆすり起し眞面目顏に『今時鳥が啼きたり』と空言言へば、我を忘れて『誠に啼きたるや。如何なる聲なりしぞ』と問ひ給ふに、さては空言と知られて互に打笑ふ。かゝれば眼も冴ひて寢つき難く遠くの方に雞の聲きく頃、夏の曉方の體けだるくうと〳〵とする事もあ

松島蓬萊島



りしか。

○

心つきなきもの、新聞等讀むに面白げなる事書きたれば何とも心附かで讀みもて行くに、終に近づく程に、洗粉石鹸などの廣告なりしこそ悲しけれ。さればこの頃は篤とそれと見定めて物讀む癖つきぬ。力士も、女優も、大隈伯も皆廣告の具となる世こそ凄じけれ。

○

友と交るに何にまれ私事打開け、亦友の事聞かずば情薄し等云ひ怨むる人あり。されど敬ひ敬はれてする交は弱けれども永く、互に弱味捉へ合ひたる同志の交は一時の情強けれども案外平凡に終ること多し。何人も友にも明さぬ恥の一つ二つの無き人やはある。されば己が恥はこれ恥とし友の秘する事は強て問はず心の内互に隱す處ありてこそ、亦なき友と崇め合ふなれ。

友としては才氣餘りに鋭きも何となく心苦しく、亦話し合ふ折人事をあからさまに論評ふ人もわろし、他し處にて我事をも斯く宣ふかと覺えて……。對談にて人の事惡樣に言ふ時は、時の遷るをも忘るれど後にて我身をも其人をも淺ましく思ふ。なべて人を賞むる言葉は床しく聞ゆ。世には人の事賞むるは我の劣れるを示す樣覺ゆる人あれど然らず、道など歩く折、身分高き人の彼方より先に禮したりとてさげすむ心にやはなる。

惡しと思ひたる人事は秘すべし。賞め稱ふべき事のみ語るべし。逢ふ人には先此方より禮せよ。處世の秘訣かゝる機微の間に表るゝ事多し。

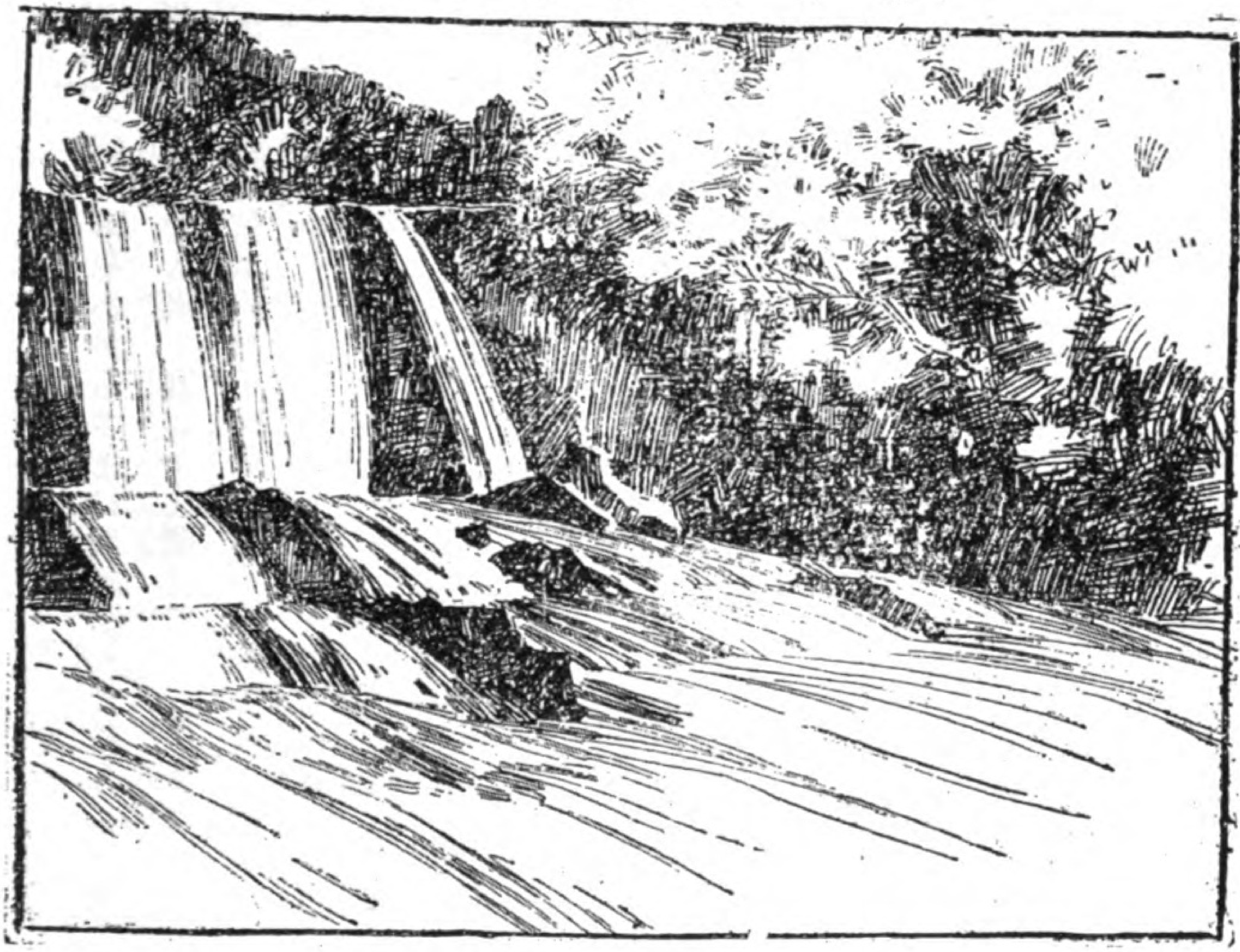
人を賞むるに事缺く物かは。意氣地なきは內氣なりと言ふべし。差出がましきは今樣と評すべし。顏赤く姿醜く肥えたるは、それにても御體は健にて等云ふ。鼻低き人に向ひては鼻高き人に愛嬌ある人無し等慰むべし。

されば齒並突出でたる人を譬へて山櫻とも言ふべき



上野不忍の池

耶馬溪龍門の瀧



にや、はなよりはの先に出たれば・・・

○

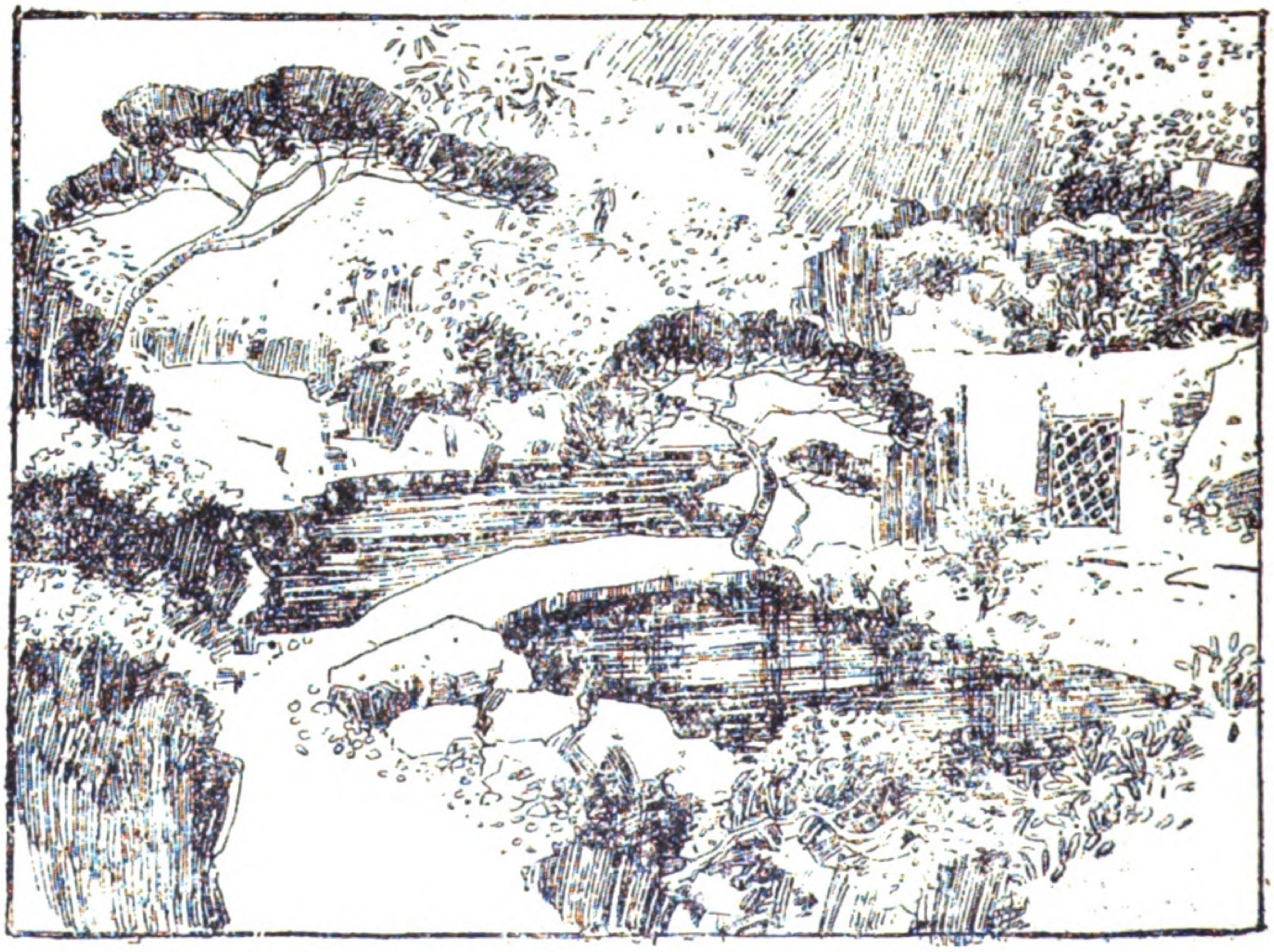
五つ六つ許なる女の子の人形々々とて打喜び布團など丸くして脊に負ひ子守の眞似するを見る毎に何となく哀なる心地すなり、世に子持ちて老けたる母の、若かりし頃を戀しく思はぬはなきを・・・

世に女の運命は儚なきが多し。幼き頃なりき。兄等の無理言ひて苛責する折なんぞ、腹立てあらがへば、母の出で來たまひて『女といふ事忘れしか、女は何にても忍ぶべきぞ』と嗜め給ひしが常なりき。女なりとて理ならぬ事忍ぶ法やはあると、物心つく頃より思ひたりしが、さりとて嗜め給ふ母の一生を思ひば無下に悲しうなりぬ。

我母は十六にして嫁ぎたりと宣ふは十六と言へば今ならば下げ髮にしたる頃也。されば世の事少し明るくなり給ひし折は早二人の子の親となり、一生の内青春、の樂も誇もあらず、花咲かぬ間に實多くなりたる無果

花の樣なりしこそいたましけれ。加ふるに父なる人は妻に笑顔見するを男の恥の樣思ひ做したる人なりければ若き内とて一度も優しき言葉かけ給ひたる事もなく只下婢の樣使ひ給のみと聞く。かくとり立てゝ言へば世には口惜しき事、怪しき事、痛ましき事數限りなし。若くして慾を抑へ樂を去り爪に火點す樣して只管財蓄へたる人の、苦は樂の種なりしと些か安堵する頃には頭に白髮出で來たる、田舍等に見るに一軒の家、一戸の藏、一匹の馬を我物とするに一生を費して怪しまざる等いと哀深く感ずる事あり。

　さればこそ若き夫婦の明日の事も思はで、夢の樣に暮したる。子供の出で來ぬれば年每に暮向の切りつめらるゝも慘まし。賴るべき故里も無き人々の子供數多抱へたる、人目には若し働手の床に就く事しもあらば一家の者如何にして糊口をすらむと思はるゝに、男も女も禍災と言ふ物、知らぬ顏に其日々々を笑ひ暮したる一家もあるよ。



庭の眺め

○

男なんどの頑固なる。己ならぬ者の言ひ出でし事は皆非とするがあり、人の言ふ事用ふるは見識なしと思ひたるにや、女童の言葉は耳をも藉さず。かゝる人は表こそいと御し難けれ心様は必ず淺墓なれば、此事如何にし侍らむと何事にまれ、先その思惑尋ね「さりとはいといみじく考へ給へる哉。我身は其處迄に考へ及ばざりし」と賞めたゝへ、後徐に此方の思ふ事述べむに、意透ずと言ふ事なし。

○

衆口金を溶すとはいみじくも言ひたる諺哉。他人の噂、言の葉等聞きてあるに何時しか己が考の變れる事あり。幼き頃、大臣など言へば此世の人ならず貴くやむごとなく覺えしが此頃はさ思はすなりぬ。その理はぼんちと言ふ物出來、あるは頭をどろ〳〵しく才槌の様に描き、あるは眼細くつり上げ、頭ひたぶるに三角にしたる。額に皺よせ眼鏡かけ、何時にても物に怖えたる風し玉へるは文相の君等と皆ぼんちにて覺えたり。されば眞の御姿拜する事ありとも御姿に似たらず覺ゆるぞげにうたてき事の限なる。

○

世には我と我身を拙き者、愚者と思ひ込みたる人あり。又己を持する事高く我力を信ずる事强き人あり、所謂盲人蛇を怖れずの類。この何れも利害あるべけれど事を成すは後者に多し。己の愚を人に喞つ事屢々なれば人亦己の愚を信せむ。また愚ならぬ人も、愚なりと傍より言ふ事屢々なれば遂に己の愚を信ずるに至るべし。愼しむべき事にこそ。

されど身賤しくして思ひあがりたるはわろし。年老たる小學の師の君等の、世にありとある事悟り澄し給へる面持は何となく片腹いたし。如何ばかり厚き書、劃多き文字見るも驚き給はず。偶 傍の一人の「此雨には困り果つるよ」と喞てば、仔細らしく首うち振

り、「されど梅雨に雨降らずば農作に惡しかるべし」等言ひ給ふよ。

○

他人の爲す事は皆容易く見ゆ。永き年月經、漸う工夫し案じ出でたる物など見れば、我にても爲し得べかりしぞと思ふが常也。閣龍の玉子と言ふ事あり、閣龍の亞米利加見出でゝ歸りし頃さるやんごとなき邊より招かれて、饗應の席にありしが、席なる一人の豫て彼の功を妬めるがありき「亞米利加見出づるがさして難き業にやある、」など嘲み笑ふに、閣龍片腹いたくや思ひけむ、側の皿より玉子一つとりて「これ縱樣に立て見玉へ」と微笑して渡す。嘲笑ひたる男、こは何事ぞと色々と思ひ廻らせどせん術なきに、果はから〳〵と打笑ひ「世に丸き卵の縱に立つ理やはある。さ言ひし人こそ立つべけれ」といふに、閣龍そをとりて尖りし先少し打挫ぎて板の上に立てぬ。「あな、先挫ぎて立つるは何人も爲し得べきぞ」と言ふに、閣龍容を正して「されば也他人の爲さぬ内は爲すべくもあらず思はるゝ事も爲せし後はいと並々の事となり終るが常なり」と嗜めしかば、その男深く己が非を恥ぢたりとなん。

○

子は親に盡す事固よりの事ながら、親は子に養はるるを恥づる心掛にてありたけれ。堅くるしき男親などの我子と言へば己が生みし物故、己が物と心得、事に觸れて「生の恩」等喧しく言ひたるは怜し

姑は姑の主張を棄てよ。嫁は嫁の主張を棄てよ。兄は兄の權利を忘れよ、妹は只兄に縋るなるべし。人の家の治ると治らぬは皆此機微の間にあり。

陰德あれば陽報ある事誠なるらむも、されど陽報を得む爲に陰德を施すことは此上なく賤しき心なり。世の人にはかゝるが多し。

雲の峯





日本の最近四十餘年

淺野馮虛

△維新以來四十餘年間の日本の狀態を回顧して見ると非常に元氣のよい時もあれば、又非常に惡るい時もある。勤勉の時代もあれば、怠惰放逸の時代もある。眞面目な時、生意氣な時、無鐵砲な時、狐疑逡巡の時、得意の時、阻喪落膽の時、數へ來れば殆んど際限がない、又此兩三年來の狀態は如何にと見れば、凡ての方面に於て、どうも意氣が昂がつて居ない。新聞を見ても、不景氣、不活潑、不振、沈滯等の文字が餘計眼につくやうである。と言つて、格別重症に罹つて居る樣子も見えない。脈搏は確かである。たゞ何となく氣分がすぐれず、うつとり、ぼうッとして、仕事が手につかず、途方に暮れて思案投首といふ爲態である。五六年前の面影に比べて見ると、急に十年も二十年も老け込んで了つた。イヤに燻り返つて、眉宇の間に覇氣が無くなつた。慈愛の眼を以て對する人には、一寸心配な徵候で無いでもない。火のなき所に煙は立たぬ、社會の現象に偶然といふことは無い。此際少しく後に立ち戻りて、我國狀の推移變遷の徑路を討ねて見るも無用ではあるまい。便宜の爲めに、自分は、一個人のそれぞれの時期に起る所の現象を以て、我明治の日本のそれ〴〵の時期に起つた所の現象に比較して見やうと思ふ。

△一體一個人の生涯を大別して見ると、之を前期、後期の二大時期に分割し得ると思ふ。前期は即ち修業時代で、人によつて多少の差異はあるが、先づ物心ついた七八歳から丁年前後、遲くも三十歳迄位で終る。後期は大成時代で、前期に修得した力を以て、社會に一

本立ちとなり、出來る限り活動し發展すべき收穫の時代である。此二個の時代は、根本に於て全然其性質を異にして居る。前期は親の脛噛り、師匠の受賣り、主として受動的、他力的、吸入的である。後期は之に反して、杖とも柱とも賴むはたゞ自分の腕一本、主として能動的、自修的、工夫的である。而して此二大時期を區劃するものは何であるといふに、それは卒業の峠である。

△卒業と言つた所が、何にも學校の卒業に限つたことはない。實地見習ならば其見習の終つた時、年季奉公ならば其年季が濟んだ時である。兎に角修業時代の青年は誰しも此峠を目標として無二無三に突進して行く。其峠を越すことが出來さへすれば、我事成れりと言はんばかりの面持ちをして居るのである。この峠の登路は爪先上りの一筋坂、上る丈で降ることがなく、進む丈で外れることがない。所々に試驗の難關、落第の丸木橋などがあることはあつても、立派な先達がついて案内して呉れる。又途中に憩ふべき茶店もあれば、宿るべき旅宿もある。餘程の足弱でない限りは、多少の前後はあるにしても、峠の頂上に辿りつけぬ者は極めて尠ない。

△が、兎に角低からぬ峠である。又生れてからの初旅である。故に此坂路を首尾克登りつめた時

良妻賢母主義

自分は娘を數人有つたばかりか、一家の子供等に多くの娘を結婚さした。夫れと是れを合じて一般の世間の有樣を見ると、今日の女子は、多く高等の教育を受け、學校に通つて和漢洋の歷史又たは物理化學などを寢る間も忘れず勉强して居るものゝ、卒ざ結婚をして了ふとなると、夫れを應用する場合は極めて稀れで、今まで頭腦を費して覺えた苦心は、殆んと水泡に歸して了ふ憾みがある。又た高位高官並に富豪の娘が、其の生家に在る時は、父兄が內外人と交際するので、娘も自然と上流の交際社會に出入し、交際の趣味を深く會得するが、若し其の娘の結婚後、良人の家の財産や、位置が生家ほどで無い時は、俄かに不釣合或は不遇の感じを起して、遂にいろいろに煩悶したり、自暴自棄になつたりして、揚句の果には大切な貞操すらも失ふものがあるに至る此等の點が娘を有つ親の頗る苦心する所である。其處で千秋の娘の躾け方に於ける意見は、我娘を教育するには先づ紡績裁縫其の他の家政上必要な事を學ばせ、結婚した後では直ぐに家を治め子女を育て行くに差支へのないやうに致したいものと思ふ。女

の愉快たら、一生涯に滅多に二度とは味はれぬ愉快である。峠の頂上に立つて晴んとした天界の涼しい風に汗を入れ乍ら、今迄辿り來し下界を見降す時の氣持と來ては實に何とも言はれない。確かに小山の大將俺一人の概がある。

△然し乍ら、峠の頂上には宿屋もなければ茶店もない。要するに卒業の峠は越すべき性質の峠であつて、永く留まるべき場所ではない。しばらく氣息を入れてからは、再び出發の用意をせねばならぬ。で、盡きぬ名殘を惜み乍ら、やをら立ち上つて、自己の行く手を見渡すのであるが、誰しも今まで經來つた一本路とは異なつて、今度は路が無數に分岐して居るのに驚くに相違ない。六道の辻どころか、十條、二十條、又百條、薄暗い谷底に向つて降りるのもあれば、見上ぐる許りの峻峯に向つて上るのもある。平坦、崎嶇、大小、曲直、皆一條として同一なのがない。最後に達すべき目的地は、何の道を取つても同一であるが、それは遠い／＼千里の彼方、途中は飽迄も分離して居るのみならず、これから先きには先達はない。自分で行くべき路を選擇して、自分で適應の注意を拂はねばならぬ、爰に至りて大概の人は、今迄の元氣と得意は何所へやら、急に自己の責任の徒らに重くして、自己の力量の頗る覺束な

子大學を初めとして其他諸種の女學校の設備は追々完全に進み、勿論好成績を得るやう專門家が腕に撚をかけて居るから、其の方面に於て遺憾の無いことは信ずるが、動もすれば虛榮心に走つて實社會に疎くなる弊害がありはしないかと思ふ。

私の母は女乍らも學問もあり、殊に私と弟國武と妹逸子の教育を養ふのに實に嚴肅なものであつた。其外凡てに模範とすべき婦人であつた、私共の今日あるは皆此母の賜物である。私の妻が亦た働く事が好きで、孫が十二人あれど、私の通常服などは千春の妻に手傳はして自分で織り自分で縫うて着せないと得心せぬ。又た私宅には料理人を置かず、妻と千春の妻とで臺所の端を行つて居る。千春の妻は大山元帥の娘であるが、私の母の遺訓を能く守つて働いて居る。世間の貴婦人方から交際社會に出ろやう勸められるが、田舍者ゆゑ晴れの場所に出る資格が無いとて決して出ず、唯だ家事を治めて樂んで居る。私の娘は三人あるが、母と妻とが右の樣な女であるので、矢張り皆な其の方針で育つた。今は皆な嫁して居るが、先づ女たり妻たるの道や勸めに背くやうな心得の者は一人も無いと思ふ。皆な十分に圓滿な家庭を營んで居る（伯爵渡邊千秋氏）

さを感ずるに相違ない。成らうことなら、しばらく爰に足を駐めたくも思ふであらう。がそれは出來ない。乃で滿身の勇氣を鼓して、思ひ〳〵に前路に向つて出發するのであるが、從來の一隊一團となりて、樂しく賑はしく、同一行路を登りしに引きかへて、今度は散散亂々の一人旅、一時は寂びしく心細く、誰しも追懷の涙に咽ぶであらう。

△自分は今人生の前後の二期を劃すべき卒業の峠に就きて述べたがこれは主として男子及び少數の男性的女子（獨立自活の女子）に就きての觀察である。一般の女子に取りては、學校の卒業は、單に途中の一階段たるに過ぎぬ。毫しもそれが前後の二期を劃する所の目標にはならぬ。女子には、男子の卒業に相當する性質のものが儼として別に存在する。他でもない、それは其嫁入りである。

△女子は人に嫁して初めて一本立の後期の生涯に入る學校の卒業式などは、あれは意味ある卒業式でも何でもない。三々九度の杯が、あれが眞に女子の卒業の祝ひの酒である。それは兎に角、卒業に伴ふ所の愉快と苦勞とが男子にあると同じく、女子にも亦結婚に伴ふ愉快と苦勞とがあることは覺悟せねばならぬ。新らしきホームは天上に建てられては居ない。菫の花は惣菜にはならぬ。良人の頭は六角で、自分の頭は三角かも知れぬ。頭に理想を宿らせるは差支ないが、腹には是非子寳を宿らせたい。これは洒落でも何でもない。女子の發揮し得る最純最高の道德は、其愛兒に對する獻身無我の愛情であると、自分に固く信ずるものである。いか

日本人の飲食癖（一）

帝國座の食堂の光景に驚いた序に、日本人の飲食癖にふと氣がついた。それから劇場内を隅々廻つて見るといよ〳〵余の感じが確かまるのだ。それは劇場内に各種の飲食店が割據してる丈で彼地の劇場に始終出入りして、それに馴れて來たものゝ眼から見ると、實に妙な感に充されるのだ。彼地の劇場にはどこへ行つても、第一食堂といふものがない。只一箇所酒店の如ぎものがあるだけだ。卓子や椅子は置いてあるけれども、大抵の人は立つたまゝで酒なり水（菓實汁、レモナードの類）なりを呑む。從つて僅かな場所をふさげて居るだけで、如何にも仕末がよく見物の邪

に婦人として又妻君として卓越せる女子でも、出產の洗禮を受けざるものは、自分は睛を點せざる畫龍であると思ふ。

△自分の筆は少し岐路に滑り込んだやうである。自分は今婦人問題に就きて說法をして居る暇はない爰にはたゞ、一個人の生涯に、修業時代と大成時代との二大時期があつて、それが卒業又は嫁入りを目標として區劃されるが如く、國家にも亦それがあることを言ひたいのである。

△つら／＼考ふるに、我邦の舊文明は、神儒佛の調和融合を以て出發點として、それが、德川時代に至つて究極の發達を遂げた。それに引續いて生れ出でたのが明治の文明で、これは主として西洋文明との接觸に基因する。軍事、法制、醫事、經濟、商業、工業但しは文藝等に至るまで一として此結婚の產物ならざるはなしである。西洋文明の最大長所は其科學の發達で、これが又我舊文明の最大短所であつたので、これが奇妙に長短相補ふの作用をなした。我邦人は驚喜と熱心とを以て西洋の文明の吸收に從事した。

> 覺にならぬ。そこで散步場を廣く取つて幕合には各等の人がそろ／＼とそこを練步く。處が帝國座を見ると西洋料理の食堂がある。日本料理の食堂がある。三四等客の食堂もある。その上にそこゝにバーがある。鰻飯屋がある。壽司屋の店がある。蕎麥屋迄あると云つたやうな風に各種の飮食店が到るところに陣取つて居るので、肝腎の散步場などといふものは殆んど無い。劇場を思ひ切つてハイカラにしたからはも少し飮食店を制限して立派な散步場を拵へたら善かつたらう。聞けばこれでも食堂が足りなくつて弱つて居るのださうな。誠に呆れる次第だ。（菊池幽芳氏）

△試みに今明治に入つてからの日本國民の發達の順序を調べて見ると、大體に於て三期に區別される明治十年前後迄が、その小學時代である。何にかも鵜呑みにするに急で、未だ翫味咀嚼の域に達して居ない。日本國民は模倣國民であるなどゝの評言は、恐らく此邊から出て居る。これは決して國民性でも何でもない。小學生徒に獨創の見識を期待するのは、期待する方が無理である。此小學時代の大試驗ともいふべきは、即ちかの西

南戰爭である。新興國民として、明治の日本は腕力で進んだ。從つて戰爭が發達の目標となるのである。

△それから日本は中學時代に進んだ。一個人に取りても此時代は最も危險なる青春期で、血氣餘りありて思慮分別の力甚だ乏しく、善にも惡にも忽ち染り易い。一歩を誤るものは、壯士となり、愚連隊となり、堂摺連となる。かの明治二十年前後、鹿鳴館の舞蹈騷ぎなどを今日から回顧すると、實に冷汗の流るゝ次第である。が、甚だしき誘惑にも罹らなかつたのは偉傑と言はねばならぬ。殊に西隣の清國に適當の競爭者を見出すに及んで、大變奮勵し出した。それでかの二十七八年の日清戰爭の大勝を獲て、首尾克中學の大試驗にも及第した。それから日本は大學に入つた。

△日本の大學時代は大奮勵の時代であつた。これは非常な强敵が、日清戰爭後突如として現出したからで、此大敵を見事負かしてくれやうと、腕に縒をかけた。嗚呼かの臥薪嘗膽の十星霜！思へば苦しくも亦愉快な時代ではなかつたか。四千萬人たゞ一心步調を揃へて猛烈として突進したそして首尾克卒業の峠の絶頂に到達した。かの日露の大戰役は、日本が學生として最後に受けた卒業試驗であつて、そして此戰役の終ると同時に日本の修業時代は爰に終結を告げたのである。

△試みに卒業の成績は如何かと調べて見ると、軍事學科は樞要學科であつた丈に最も成績がよい。九

・日本人の飲食癖（二）

帝國座を見た時の感じはそれであつたが、それからまた市中を見廻ると、飲食店の多い事が頻りに目につき出す。蕎麥屋だ、汁粉屋だ、天麩羅屋だ、壽司屋だ、鰻飯屋だ、鶏肉屋だ、牛屋だ、料理屋だ、飲食店の多種多樣なる事實に驚ろくべきものがある。西洋にはこんなに毛色の違つた飲食店の種類といふものはない。鶏屋と牛屋の分業があつたり、壽司屋と汁粉屋が區別されたり何かして居ない。巴里の例を云へば料理屋と珈琲店、この二ッを除いたら他に殆んど飲食店はない。而もこの二者は往々相兼て居る。如何にも簡單明瞭だ。飲食店の複雜なのは日本人の飲食趣味が特殊の發達して居るためかも知れぬ。が要するに日本人の食倒れを表明して居るのだ。どうも日本人ほど間食する人間はな

十パーセントは確かである。之に比較すると外交などは遙かに點數が低い。落第點でもないが、餘り善くない。其他の方面の學科も、採點者次第で多少の相違は免れまいが、先づ六十點から八十點位の所らしい。然らば文學科は如何かと見ると其成績は、さして惡くはない。小學時代に經國美談、佳人の奇遇等を出した日本は、中學時代に硯友社連の諸作を出した。今日から見ると、あの時代の諸作は隨分甘くて、ニキビ臭くて、妙にキザで、淺膚である。併しあれも發達の順序として、一度は通過せねばならぬ徑路であらう。それから大學時代に入つてからは、却々種々の作物を出したが、自分は自然派の諸作を以て、日本文學の卒業論文と見做すものである。自分は是等の諸氏に隨喜することは出來ないが、しかし卒業論文としては可なりの出來榮と思ふ。そのお蔭を以て、少くとも日本の文章は、傳襲的の臭味から脫却して、物の用に立つべきものとなつた。確かに七十五點乃至八十點がものはある。

△何にしろ、日本の修業時代は隨分樂ではなかつた。僅々四十年間で、四世紀も五世紀もかゝつて、やつと蓄積した西洋の文明を殘らず詰め込まうとしたのであるから骨が折れた。多少の消化不良は大目に見ねばならぬ。主義と名のつく物ばかりも幾個食つたか知れぬ。尤も一口食つて其味が大凡そ分れば、次ぎの皿に箸をつけた。最後には到頭あの無政府主義といふ毒饅頭ま

い。子供の時から間食で固め上る。今度田舍へも行つて見たが小さな宿場などでは子供を相手の駄菓子屋といふものが五步に一軒十步に一軒といふ風にある。それが皆生活を立てゝ居る、それでも分るが、大人でも暇と機會があると茶を呑む何か食ふ。飲食の上に何等の規律節制もない。客でも來ると時間構はず菓子を出す、壽司を出す、蕎麥を振舞ふ。自分もお相手をする。お蔭で壽司屋と蕎麥屋が繁昌するといふ譯だ。

彼地では子供の時から四時なら四時に一度何かやればそれ切りだ。大人もその通り、四時なら四時の喫茶時間以外なら如何なる客が來ても飲食物を出すといふ事はない。で日本人が西洋に行くと一二ヶ月の中に胃がすつかり善くなる。日本人はたしかに飲食癖の悪い人種だと余は斷言する。（菊池幽芳氏）

で手を出したが、あれは例の見本を外國から取り寄せた迄で、自家製造の品ではないから、さして騒ぐには當るまい。

△兎も角も日本は比較的良好の成績を以て卒業の峠に達した。從つて其時の得意、安心、抱負、増長の度は非常なものであつた。一躍して自分は宇内の一等國の伍伴に入つたものと思つた。そして此卒業の峠が、實は最終の目的地ではなく、眞の目的地は、別に遠い/\千里の彼方に存在する事に氣がつかなかつた。イヤ氣がついた人はあつても、痛切に之を感ずるには餘りに悅び過ぎ、餘りに得意過ぎた。そして矢鱈に峠の上で萬歲を唱へて祝杯を擧げた。かの戰後陸續として現出せし泡沫會社などは其時擧げし祝杯中の麥酒の泡の產物に相違ない。

△が、何時まで峠の上で太平樂を唱へて居られやう。醉が醒めると同時に、そろ/\出發の身仕度に取掛つた。今迄の先達附きの一本道に慣れて居るのでナーニたゞ一と息といふ氣が十分腹の内にあつた。所がいよ/\足を擧げて見ると、進むべき道が千筋に岐れて居て、そして目的地は馬鹿に遠い。修學時代に眼前に望んで居た目標とは比較にならない程遠い。一夜漬けの勉强では到底達せられさうにも見えない。自分の準備も大變不足して居る。それに驚いて、狐疑逡巡して居るといふのが、我國の萎微、不振、沈滯、不景氣、不活潑の現況ではあるまいか。

英國家庭の美點

槪して云へば英國の家では大抵家庭敎師を傭入て、此に或る程度迄の敎育を任して居る日本でも今は大分此風が傳はつて來たが、果して完全な方法や良敎師が得られるか、之が問題である。我國では家庭敎師其ものが却つて醜聞の材料になつたり或は家名を傷ける樣な忌まはしい事をしたのをよく耳にするが、此點は英國の婦人は感心で、品格も高いし、素行も正しいし、確かに日本の女子は勝つてゐる。此は主として宗敎心の堅固な事、社會の制裁の嚴重な事などが土臺を作つてゐるのである。殊に其社會制裁などは實に嚴しくて、女子は固より男子も一度忌はしい噂を立つたら、全然社會から葬られて、二度と再び頭の上る期がない。此の美風は單に宗敎や制裁と云ふ他動的のもの許りでなく、又家

△何う見ても、自分は目下の日本の狀態は、まだ卒業の嶺に躊躇して居る所だと思ふ。前期の準備時代は終つたが、まだ眞面目に後期の大成時代には入り兼ねて居ると思ふ。從來大西鄕、大久保、伊藤などゝいふ先達に引張られて來た所の習慣が脫けないで、ゾロ〳〵大衆で、後から隨いて行くことばかり誰も考へて居る。政治上の所謂妥協などゝいふことは、ツマリ此依賴的、他力的の習慣の發現ではあるまいか。これでは前進といふことは望まれない。この狀態は一時も早く打破せねばならぬ。打破といふのは、別に革命でもなく破壞でもない。たゞ各人各自の進むべき道程に上り、最終の目的地を指して勇往邁進するの謂である。これは我國の前期の成績に照らして十分望を囑し得ることゝ思ふ。かくて、各自道を異にして前進する者が、再び目的地に會合するの日がそれが、明治の文明の大成の日である。

（終）

庭に於ける女子教育が基因を爲して居るに違ひない。

英國の娘子は十六七にもなれば、最う全く自分の意思に任せて外出もし交際もする。夜遲くまでも夜會の舞踏のと騷ぐ家を外にして、而して盛んに男子とも交際して居る。夫れで間違つた事や忌はしい噂さは曾て起つた事がない。此の堅實な意思と行ひとは何んと云つても小さい時からの家庭の教育に基いてゐやうと思ふ。此れ等の家庭には父兄自身が既に生きた手本を示して居る。早い話しが一家の主人が妾を置くとか他の婦人とどうしたとか云ふ事は一切聞かない。其他讀物等にしても談話にしても、家庭は常に神聖に高潔に忘れても子女の心裏に惡い心の起る樣な餘地を作らせない。此點は飽くまで日本の家庭でも學ぶべきものだと思ふ。（園田幸吉氏）

◎バナヽの氷菓子

牛乳五合、玉子の黃身七個、バナヽの中位のもの三四個、砂糖大匕五杯を用意し、先づ玉子の黃身に砂糖を入れてよく〳〵掻きまはし、文火にかけ牛乳を少しづゝ鍋に入れてかきまはし牛熱加減にして火より下し、冷えたる時、バナヽの皮をむき裏漉したるものを入れ、アイスクリームの器械に入れて氷らすのです。若し器械のなき時はブリキノ茶筒等に入れ、これを深い桶に入れこのまはりに、ブッカキ氷と鹽とを置き、手にてぐる〳〵と茶筒をまはし二三十分間置きます。

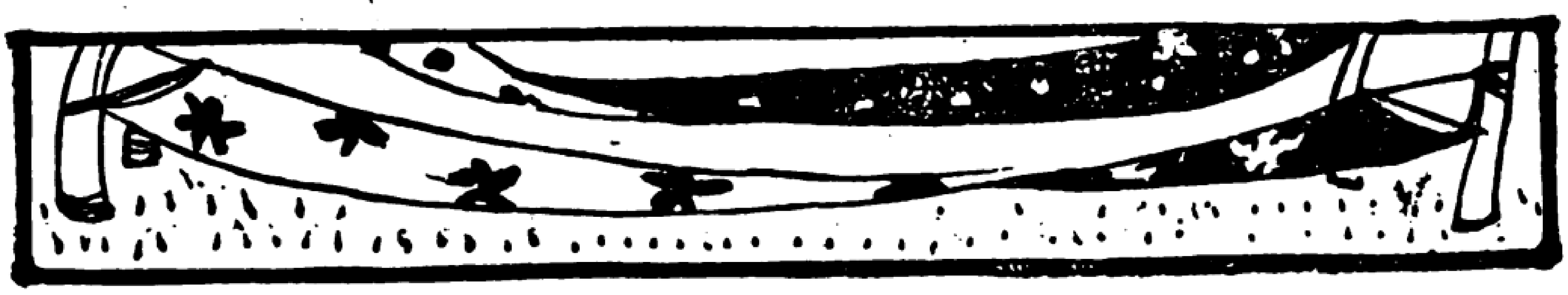
家庭科學

蠅の病毒傳播

朝鮮や滿洲へ行つた方は御存じであらうがあの蠅がまるで波をうつやうに飛んでゐる。三分間ほど食物を外へ出して置くと、器物の上は黑胡麻を撒いたやうに集つて來る、內地でも夏季になれば、牛馬を飼ふ田舍家では、蠅の發生が實に凄まじい、逐つても逐ひ切れない。拂へば拂ふほど集つて來る、そしてこの蠅は、いふまでもなく、病毒傳染の媒介者で、其の害毒の恐るべきことは、衞生學者ならずとも、歐米諸國では、一般に猛獸、毒蛇の害よりも恐るべきものとしてゐるのである。

△十四時間に百二十の卵

米國のある州立農事館で試驗したる所によると一つの雌蠅が十四時間に百二十の卵を生むことが確定した。卵が蠅になるには十日、乃至十二日を要するから春、夏、秋の三季をかけて先づ十一二代の子孫が出來る譯である、即ち春に生れた一疋の雌蠅はうまく行くと秋の中ばに於て實に195,312,500,000疋の蠅の御先祖となり得るのである。餘り數が多いので解りにくいが試に百萬疋の蠅を約二斗として枡目に直すと、



驚くべし大略390,000,000石となるのである。然も之が悉く親類縁者ばかりであるとは更に驚くべしである。

幸な事には此數全部が生存し得ない、それは食物の欠乏、時候の變化、一種の病氣等が彼等の多くを殺し、又他の動物に食はれるものゝ數も少くない、併し蠅軍撲滅法を講ずるにあらざれば、人間は安心して生活する事は出來ない。

扨蠅の如何に恐るべきかは吾人の頭には餘り強く響いて居らぬ樣であるが、米西戰爭の時に米軍の間に腸チブスが流行したが初めは其原因が更に解らなかつた。食物と水とに非常な注意を拂つたにも拘らず、依然としてチブスの流行が止まない、一同不思議と思つて居たが最後に軍醫總監スターンベルヒ氏が蠅に氣がついて、よく研究して見たら、蠅が掃溜と會食テントの間を往來するのが此の流行大原因であつた。此戰爭に於て西軍の彈丸が一人の米兵を殺す毎に、蠅は實に四人の米兵を殺した割合となつて居る。

△病毒傳播の專門家

蠅の大さは病毒傳播には實に理想的である。近來蚊も大分評判が惡いが、併し迚も蠅と比較にはならない、それに蚊の專門は例のマラリアであるが、蠅に至つては然らず、コレラでもチブスでも、赤痢でも、結核でも眼病でも、天然痘でも、殆ど何でも御座れと云ふ有樣である。科學が進歩したら是以上

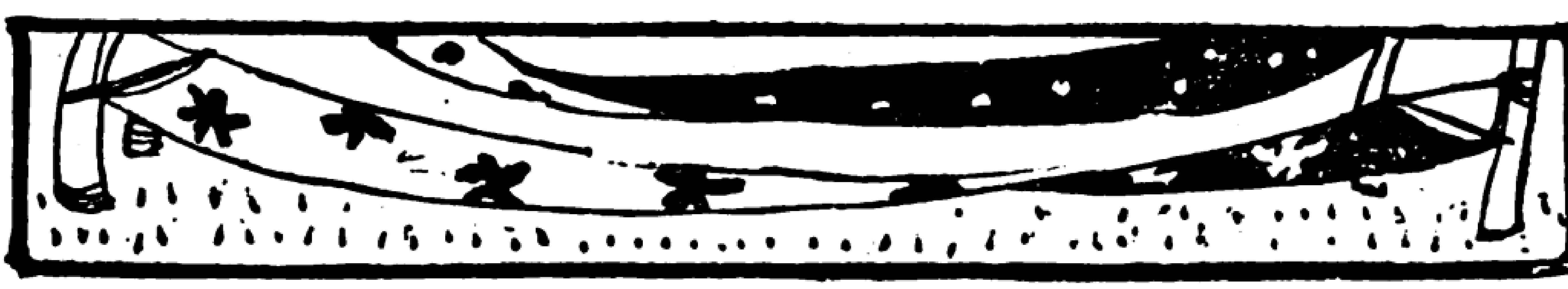
に蠅の罪科が發見されるかも知れぬが、現在だけで難分擇山な罪科である。

譬へて見るなら、蠅はバクテリーヤの小包郵便と云つた樣なものである。黴菌の千位附着してゐるのは蠅の内では清潔の方であると聞いては驚かざるを得ない。近頃前記の農事館で四百十四疋の蠅を檢査して見た、所が其内の第一流は實に6,600,000細菌を有し、第四百番ですら尙ほ1,250,000からの細菌を有して居たとの事である。蠅が吾人の健康に對する一大犯罪者たるには最早疑なき事實となつたのである。

米國ワシントン州の死亡率ではチブスが九パーセントで結核を除いては實は第一位である。そこで同州の衞生局では去千九百三年から八年迄五ヶ年間其流行狀態を取調べて見ると、雨や雪溶で水の最も移動する時に同病は極めて少い即ち今まで水にのみ罪を嫁して居た謬が知られたのである。今ではワシントン全州に蠅に對する一大戰爭を試みて居る。何しろ之れには公衆の注意を喚起するのが最大急務なので、或は衞生展覽會を開き、或は幻燈講演を催よすなど、抑々よく行屆いて居る。現に三名の講演者は單に此事のみの爲に絕えず州内を巡回して居る。

△蠅の活動寫眞

全體蠅はどの位の飛行力を持つて居るかと云ふに、無風の



時でも百三十間は飛ぶから、風に乘つたなら更に大なる距離に達する事である。ヘッヂと云ふ米人が、物好きにも電車と汽車の中で取調べた所に依ると、短いのが五哩、長いのは二百哩近くも旅行したとの事である。近頃米國では、蠅の一生を活動寫眞で見せる事が流行して居る。先づ親蠅が卵を生むと、これが見て居る内に孵化する、羽が生たる、一人前になる迄十二分である、次の幕になると前の一人前になつた蠅共がそこらを飛び廻つて、最初は腐つた魚にとまり、それから砂糖壺それから痰壺、それから子供の牛乳瓶の吸口と云ふ風に飛びまはる。そして其吸口を子供が吸ふ所まで寫すので、觀客に多大なる敎訓を與へる由である。

△蠅の御化粧

蠅と云ふ奴は妙にお化粧の好きな奴である。併し蠅の化粧は、云ひ易へれば黴菌の散布であつて、人間にとつては實に迷惑至極の事である。曾て或人が一疋の蠅を捕へて、之を消毒水の中に入れ、よく振回してから其水を調べたら、約五百萬の細菌が居たと云ふ話である。こんな有樣であるから、流石の蠅も時々はお化粧せざるを得ないのである。

こんな蠅に勝手に飛び廻られて到所に化粧をされた日には其危險は實に測るべからざるものである、で家人の健康に責任を有する主婦は、どうしても蠅征伐に大に心を用ゐなければな

らぬ、實際雜巾がけの一回位はぬきにしても、是非蠅の大征伐は實行しなくてはならない。

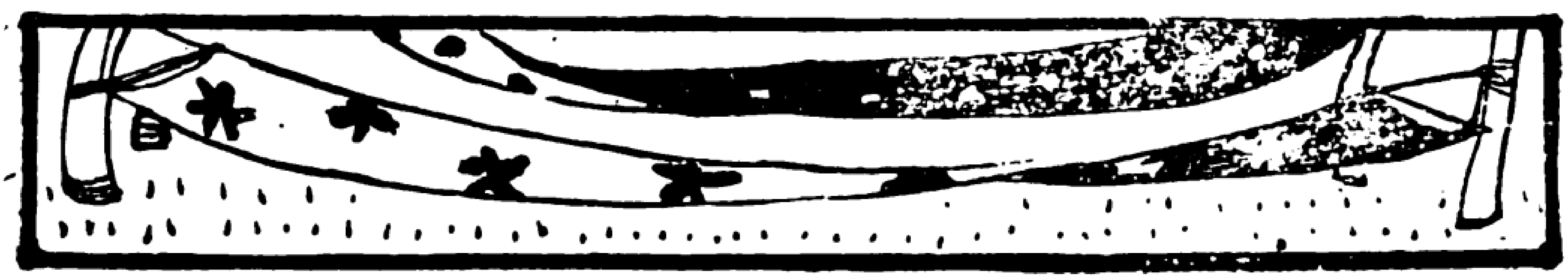
△蠅の驅除法

除蟲菊の粉は蚊のみならず蠅にも効がある、閉ぢ込めた室で、之を焚けば彼等を全滅せしむる事が出來る。併し朝一度室内に之を焚けば、殆ど一日中其室には蠅が集らなイ。熱した鐵に石炭酸二十滴程たらすと、一種の瓦斯を生ずるが此瓦斯はハへを殺す力を持つて居る、簡單な有効な方法である、人命に危險の無い安い毒と云ふと先づ重クルム酸加里である。約一匁程を砂糖水二オンスに溶かして淺い皿に入れて置けば大に効力がある併し何れにも増して最も好いのはフォルマリンであるフォルマリン一匙を約一合の水に入れて晒して置けば室内の蠅全部を殺す事が出來る。

兎に角猛獸にも毒蛇にも増して恐るべき此大敵に對しては我我は常に警戒を怠らぬ樣にせねばならぬ。

食後の果物

◎夏蜜柑＝夏蜜柑の頃合なものを横に二つに切て匙で中の果肉をくり取り、これを別に器に入れて砂糖をかけ、セリ酒を少々ばかり加へて暫く置き、さて皮の内側を成るたけ綺麗に掃除して尻の方を平らにして皿に乗せ、それに前の果肉を盛つて



匙を添へて出すと、味もよし、器も面白くて、夏向には最も適して居る。

◎果物羊羹＝寒天二本を水に浸して、小さくちぎつてこれを五合の水で煮とかし、よく溶けた後に水嚢で漉し、そこへ煮た桃か李かの皮をむいて、よい程に切込み、砂糖五十匁を加へて弱火で徐々に煮つめて、よいほどになつた頃で、適宜な器に入れ、冷水に入れて固まるまで冷却し、これを皿にとつて匙を添へて出すか、又は小さな茶碗に入れて固め、これを取出して皿に盛るのも一寸氣が利て居る。

◎無花果＝よく熟した無花果を洗ふて、へたと皮をむき瀬戸びき鍋に入れ、適當に浸すくらゐに水を入れて強くない火で十分ばかり煮、それに砂糖を加へて同じく弱火で形くづれぬほどに煮て、皿に盛つて出す。

◎桃の寄せもの＝セラチン四枚、大きな天津桃四つ水一合、砂糖大匙三杯を用意し、まづセラチンを水につけ、次に桃の皮をむき、用意したる水と砂糖を加へて煮、どろ〳〵になつた時裏ごしして冷し、水につけてあるセラチンを引あげ、搾りてむしり、裏漉した桃の中に入れ、再び火にかけ、十分に溶けた時、もう一度こして、水で一旦中をしめしてある重箱の切溜に流しこみ冷して程よく切る。



慰安を與ふる寢室

人は安全に身體を休めて、中樞神經に慰安を與ふるの必要がある。この目的を達するには、寢室を堅固にしなければならぬ。其方法は幾らもあるが、私は寢室に錠前を卸ろす事にした。假りに泥棒が闖入するとなれば、先づ雨戸を外して、第一の關門を明け、更に第二の關門に掛り扨愈々第三の關門になると、錠前が卸ろしてあるから、コト〳〵と遣つてる内には、此方でも眼が醒める。是は只泥棒の入つた時の用心ですが、泥棒が入らないまでも、身心に慰安を與へるから、心持好く寢入る事が出來る。更に寢室の建築に一歩を進めて、火災にも震災にも堪へ得る樣にしたならば、一層安心して睡眠する事が出來やうと思ふ。

寶物を容れる土藏を造る費用があらば、其費用で寢室を完全にせよ、と云ふのが私の年來の持論で、其實行に就ては目下考案中である。古器物を秘藏する人に取つては、如何樣寶藏も必要であらうけれども、夫れ以上に大切なものは身體であつて、此身體に休養を與へる寢室が寶藏よりも大事である事は云ふ迄もない。斯う云ふ點から寶藏よりは寢室を完全にせよと申すのである。

如何に寢室を完全にしたと云つても、寢具が不潔だつたり、中身の綿が堅くなつて所謂石蒲團の樣なものであつては宜しくない。石蒲團の樣では寢た時に胸部を壓迫されて惡夢に襲はるる事がある。仍で私は日常の衣服は第二として好い寢具を造れといふ提案を出さうと思ふ。好い寢具と云つても、何も絹蒲團を造れと云ふの、ではない、たゞ綿が良くて不潔でなければよろしい。

私は自分の寢具は總て側は木綿のキャラコで中身に通常の綿を入れ、處々に鳥の毛を入れたものを作つて、用ゐてゐる。鳥の毛は綿よりは多少高價で、百目二圓から三圓位であるから、三百目入れるとして上等で九圓、敷蒲團は少く惡い毛を用ゐるとしても矢張り三百目で六圓位かゝる。此毛蒲團の下に一枚の綿蒲團を用ゐ、此外に毛布の一枚も用ゐる積ならば、如何なる酷寒の時にも堪る事が出來て、綿蒲團などの比ではなく、スプリング附の寢臺も之には及ぶまいと思ふ。

毛蒲團などと云へば高價で贅澤の樣であるが十年でも二十年でも固まる樣な事はないから、洗濯とか打直しをする必要もなく、耐久力が永いから、之を差引いたら却て安價であらうと思ふ。毛蒲團を造る事が出來なければ綿蒲團でも宜しいから、時々洗濯もし日光にも曝らして、

成るべく綿を柔かくして、十分心身を休める樣に心掛ければならぬ(醫學博士山田鐵藏氏)

生覺えの假名文字

今の孃達は順序を立てゝ楷書から入るやうな迴りくどい習字よりも、最初から草書を習つて早く上手に書きたがるので、却つて上手になれない。元來習字は理窟よりも練習によつて上達するのに、今の孃の多數は練習に重きを置かず理窟を聞いて早く上手になりたがるから、好い結果が得られぬ。家庭に於ける父兄の考も矢張り孃と同じく兎角理窟ばかりを覺えるやうに促して居るが、僅かな時間の稽古としては比較的上手に書けるやうなものゝ、書道の上から餘り譽めた事でない。而して折角習ひ始めた者も嫁入其他の事情のために大抵は中途で廢して仕舞ふから、益ゝ物にならぬ。男に比ぶれば永くは續く方だが、少し分つて來かゝると立消になるのは殘念で成らない。

年齡には關係がないやうだが、矢張り十五六にならないと本氣になつて稽古しない。十五六になると自分も必要を感じて來るから習字にも身が入る。其時分から二十歲前後まで熱心に勉強すれば、或程度迄非常の速力で進歩する。本氣で二三年勉強すれば、日常の用事を辨じて行くには十分である。

以前は家庭に育つた孃は、修むべき學科も少なく時間も十分にあつたから、思ふやうに練習も出來たので、廣く文字を知ることは今の孃に及ばないが、正確に上手に字を書くことは今の孃よりも勝れて居た。短册などを認めるには伊呂波假名ばかりでは體裁が宜くないから、變體假名も習はなければ成らないが、往々奇を好むものがあつて、伊呂波假名で足りるところを、殊更に變體假名で書く。それも生覺えの內が盛んに書いて見たいので、ツイ間違つた字を書くから、一寸手紙を書いても肝腎の用事が先方に通じないこともある。(小野鵞堂氏)

文明と子供の自殺

子供の性情は元來極めて快活である可き者で、久しく繼續して絕えず悲觀して居る樣になれば、既に病的に陷つて居るのである。此時期に於て十分の保護と矯正とを行はなければ遂に自殺を企つるやうになる。其の原因を調べて見ると、文明が進むに從つて無邪氣なる少年に迄極めて複雜な影響を來して居るもので、嘗て米國マッサチユーセッツのメンドンに於て、十二歲の少年が工場の勞働に堪へざるとを悲觀して遂に池に投じて溺死を遂げたと云ふ話がある。近來日本にも大分此種の壓迫の爲めに少年の自殺者が出來る樣になつて居る。去る三十九年度に於ける十六歲未滿の少年の自殺は、總計百四十八名の多きに及んで居るが、其の原因の重なるものを擧げると大略次の如くである。

	男	女
精神錯亂	三七	二八
病苦の爲	一三	二
活計困難又は薄命	八	六
痴情又は嫉妬	一	一
後悔又は慚愧	一	五
其他の原因	一二	九
原因不詳	一二	一三
總計	八四	六四

又ドイチ氏の少年自殺の原因に就いて調査した

結果に依ると、

罰を恐れ	五八	罰を受け	二五
良心に責められ	二八	戀愛の爲	一一
虐待を受け	一八	故郷を慕ひ	一
疾病に惱み	一二	仕事不滿足	五
書物に感動し	一二	原因不詳	二五
悲哀に打たれ	五		

と云ふ様な原因になつて居る。日本と外國とは其原因に大分相違があるが、女子よりも男子の方が多い事は同一で、ドイチ氏は男百四十七に對する女五十三人の割合であると云つて居る。

何故男の子が多いかと云ふに、男子は女子よりも一層多く社會に觸れ、其心身を刺戟する場合が多いからで、是を小學生に就て云つて見ると、特殊の原因を除くの他は、大概學年の初期よりも其終期に多い。是は試驗及落の懸念や、虚榮心、恐怖心の最も發動する時機であるからである。

斯く春の海の様な樂しい少年時代に、自ら生を害ふ様な少年は、其擧動、體質、性情に於て普通の兒童に比して非常に相違して居る。統計による自殺の三分の二迄は、平素から絶えず物事に懊惱する習慣があつて、其の多くは憂鬱的精神病か甚だしい神經衰弱、又はヒポコンデリー症、過勞等に原因する事が多い様である。斯う云ふ兒童は一方は非常に悲觀して居るかと思へば、又馬鹿に噪ぐ事あり、又極めて物事に熱心であるかと思へば、又或る時は殆ど氣拔のした様に呆然として居る事もあり、絶えず落ち着きがなく、神經が興奮して、平素は極めて引込み思案の癖に、時々思ひ切つた事がある。是等は既に一種の病的に陷つて居るのである。

之を矯正するのは非常に困難な事で、專門の醫師に診斷を乞ふ事は無論第一の必要だが、其他成る可く其兒童の名譽心を毀損せぬやう心懸け、又小說、冐險譚、演劇等、兒童を感動せしむる讀物を避け、餘り懲罰を施さず、漸次に其兒童の勇を付ける様にして行くが良い。

東京の花嫁風俗

昔は花嫁と云へば皆服裝もきまつて居れば、様子も雛人形の様に上品に可愛らしくして控へて居るものであつたが、近年は此風が段々崩れて來て、極めて雜駁な物になつて居る。先づ服裝に就いて見るも、正式の服裝と云へば無論白無垢に白の裲襠姿に限られるが、此正式の服裝は百人の中に五人有るか無かで、最も多いのは色物の振袖に立矢の字の帶といふ扮裝である。中には又黒に白襟の詰め袖を着て居る人もある。又髮もいろ〳〵で、最も多いのは高島田であるが、近來は束髮も可なりある。中には丸髷を結うて來る人もある。角隱しなどをして居るのは極めて稀れである。それから花嫁の様子もまちまちで、含羞んで眞赤になつて下を向いて居るばかりで、碌々人の顔さへ正面に見得ない者、手が顫へて固めの杯さへ持つては居られないやうな可憐らしいのもあるかと思ふと、又隨分思ひ切つたのもある。ツカ〳〵と入つて來て、ジロジロと人の顔を見渡し、花婿と握手して『オホヽ』と笑ふやうな開けた花嫁もある。年頃は先づ十九二十が一番多い。職業別は實業家が一番多い。式の等級は松の二十圓が多くて百中の

七十まではこれである。次ぎが竹の十五圓である。或は全然日本古來の神式に依るのであるが中には自分勝手にハイカラ風を加味して、指環の交換をしたり、握手をしたりする向きもある。（日比谷大神宮結婚掛）

簡便なる消毒法

皮膚の消毒といへば必ず消毒藥で皮膚を洗ふ事になつて居た。けれども皮膚の黴菌を悉くなくしてしまふには、此方法で二十分間かゝつてもまだ十分ではない。そこで四十一年の冬に獨乎利の外科醫グロッスッヒ氏が沃度丁幾で皮膚を消毒する方法を發明した此法はたゞ皮膚に沃度丁幾を塗るだけであるから、毒も暇がかゝらぬ上に、各國の學者の試驗によれば、確實に皮膚を消毒する事が出來るといふ。既に此消毒法を用ゐて開腹術を行つた實驗が數百ある。其外にも種々の手術を行ふに際して、此法を用ゐた報告がある。で素人の知つて置いてよい事は、皮膚に淺い切疵や擦剝の出來た場合には、昇汞水や石炭酸水で洗はずに、筆をもつてしたゝかに局所に沃度丁幾を塗る事である。但し決して皮膚を洗つてはならぬ。素人考へで先づ消毒藥で洗つた後に、沃度丁幾を塗つたならば、一層確實であると思ふかは知らぬが消毒藥で皮膚を洗ふと、皮膚が柔軟になつて且つ膨れる。其柔軟になつて膨れた皮膚に沃度丁幾を塗つたとて十分なる消毒の効は無い。必ず乾燥して居る皮膚の上に塗られねばならぬ。若し肉眼で見て別に汚ないものが附着して居なかつたら、直ちに沃度丁幾を塗るが良く、之に反して若し肉眼で汚ないものが附着して居るならば、先づ綿に揮發油を浸して其汚物を拭ひ取り、其揮發した後に沃度丁幾を塗るがよい。かうして凡そ一分も經てば沃度丁幾は乾いてしまつて、肌衣を汚す事は殆どないが、若し肌衣が汚れたら、其肌衣の汚點は曹達をもつて洗へば能く取れる。（醫學博士井上通泰氏）

倫敦の女髮結

英國でも交際社會の婦人になると髮は總てコーヒユアと申して本職の髮結ひに取上げさせ手東れには致しません。尤も一時は皆自分で結ふたもので、此點は日本に似て居る。日本でも昔は女の髮は總て内出來であつたものです。其證據には女髮結と云ふ語は昔の本には見受けません。然るに德川氏の中葉に至り、俳優の假髮を結ふ男が、或日戯れに自分の情婦の髮を投島田に結ふたソレが好似合ひて大に持囃された所から女髮結が日本に始まつたと物の本に見える。英國も之と同じ所ろではない僅に十四五年前までは本職の髮結と云ふ者は皆目なかつたもので、奥樣附の女中が後から手傳ひてお櫛を上げるのが一般の風習であつた。只今でも普通の婦人は總て自分で髮を整へる。日本婦人の方が此點には贅澤です。勿論日本の髮の樣に手が籠まぬからでせう。ところが交際社會では段々と奢侈に陥り、頭は本職の者に托する樣になつた。其又髮結ひが自分で種々新奇なスメイルを考へ出し、殆ど毎週の如く新流行風を吹して大變好い金儲けを致します。其收入は一日四磅四志に達する者さへあつて、大抵の醫者や辯護士は跣です。先般米國某富豪の夫人は、倫敦の

有名なる藥劑の發明した新型ならば、自分一人で買占め、三千圓を支拂つたと云ふ話がある。只今では新型の獨占は相場が大變高くなり、五六千圓でなければ買へないさうです。斯の如く髮結は大層な收入を得る代りに、營業費も亦なかなか澤山要り、最初交際社會の貴婦人連を捕へる迄には、先づ有名なる女俳優の髮を當方より高い金を出して揃へ、それから次第に賣出すと云ふ順序で、中にはウエストエンドに宏大なる事務所を構へ、夥多の助手を使ひ、其應接室も仕事場も善美を盡し、一週間の經費三千圓に達する者もあるさうです。

子供の齲齒の豫防法

學習院の生徒に齲齒が多く、下流の子女を集め居る特殊學校の生徒に齲齒の少いのは全くの事實であるが、之れ一つには上流社會の子女は美食を爲す割合に齒牙の衞生不行屆な爲めである。肉食をしたり時々菓子を食べたりして口腔を其の儘にして置くと、脂肪や砂糖分の爲めに酸を發したのが齒牙にも影響して終に齲齒となるのである。其れ故子女の齒牙を強健に保たうとするには、幼少の時代から是非齒牙の衞生を守らなければならぬ。小學校に通學する七八歲に至れば、自分で以てがら〳〵が出來るから、每食後若くは少し多量に菓子などを食べた後ちには、必ず含嗽をさせるがよろしい、其の用液は、本式にすると普通一合入の洋杯一杯の水なら微溫湯なりの中に、錫の小匙一つの重曹を溶したものが好いが、番茶を冷ましたのも齒牙の收斂劑となつてなか〳〵効能がある。又た必ずしも重曹液番茶にあらずとも、煮沸した水なり普通の微溫湯でも結構である。其れから未だ自分でがら〳〵の出來ない二歲から四五歲の兒童に對しては、母親なり傭母なりが、消毒した清潔な絹の布片を指先に卷きつけて幼兒の齒牙の表裏と齒齦と舌とを丁寧に拭き取つて遣るがよろしい。

次に俗に云ふ味噌齒と云ふのは、彼れは多く哺乳兒時代に出來るものである、哺乳兒が乳を飲むに當り、先づ乳嘴を舌の上に乗せて其れから吸ひ初めるのであるが、斯くて最初に出て來た乳汁が乳哺兒の前齒の表面に附着し、其の附着したる乳汁が發酵して味噌齒となり、其れが追々と激くなつて、終に齲齒となるのであるから乳を與へた後ちに前同樣の方法を以て屹度拭き取つて遣るがよろしい。(大學齒科醫高橋直太郎氏)

罐詰の中毒

罐詰は獸、鳥、魚肉、果物など總べて煮た上に殺菌して、外部はハンダで塗り、空氣の入るのを防いであるが、やゝもすると空氣が入つて變敗する事がある。プトマインといふ毒素の生きるのは斯かる場合で、これに中毒すると非常に危險である。先年牛込で此の中毒の爲めに悶死したものがあつた。牛肉の罐詰などは動もするとプトマインが出き易いから罐詰を買ふ時には罐を叩いて空氣が入つてゐるか否かを試驗するが好い。試驗方法は實物を手にして音を比較すれば判る

掬水

玉 [illegible]

日は暮れぬ。
殘る光はオレンヂに
雲のとばりをさと染めて……
折しもひゞく蹄の音
ひねもすを狩り暮らし。
さらばとて山路降り行る
うら若き貴て人二人。
遠乘の渴きおぼゆと。
求むる彼方賤が伏屋。
柴の戸ぼそ竹の垣。
何人の住家かしらね。
と寄りて「水を給へ」
音もなく立ち出でし。
少女の姿こは神か？
人の世の汚れも染まで。
美しうさても氣高う、





破れ器恥らひの。
花の顏伏目にぞ。
參らする眞清水!!!。
家路をたどる二人の胸。
夢か現に物思ふ。
貴て人を誰と云ふ。
時の帝の御愛息。
幼き時に定められし。
麗くし姫も御座するに
刹那の迷ひぞ怪しけれ。
連れなりし若人は。
政を執れる人の息。
狩の夕の忘られで。
心も空に彼の山へ。
再び訪ひし賤が家。
少女に心明せども。

二八の春の初胸に。
深くゑりにしおもかげは
雲井に近き君なりと
知らでや思ひ染めにける

此儘に……など此儘に……。
よしさらば我君にと。
告げ参らせし胸のなやみ。
願はくは我君よ。
此思ひかなはずば。
何惜しからむ命とまで
臣と云へど竹馬の友。
幼な馴染の彼なれば。
いかで、かなへて得させむと。
御胸の悶へ押秘し。
乙女にすゝめ給ひけり。
やがて君帝となりて





姫君はきさひの宮
睦まじう語らひつ。
天が下統べましぬ。
若人も伏屋のあたり。
いと廣き莊園の主。
戀も富も我物と
憂き事知らぬ朝夕も。
我君がたまものと。
喜び送る二年。
朝露しめる菫の床に。
眠る蝴蝶の夢もだに。
春風吹きて破るとか。
美し人はちりの世に。
長く止むるを惜しとてか
神は御空へ召しにけり。
女の兒をば殘しつゝ。
夫の君に先だちて……。
夫は我兒を育みて。

淋しき春秋幾星霜
いつしか過ぎて愛し子は
二八の春となりにけり

さても汝母其儘のおもかげよ
都の君に見せまつらむ。

帝來まさば亡き母が。
昔まとひし衣着て。
伏屋より水參らせよ。
當時を忍ぶよすがぞ。
待つ程に帝來ませり。
えりし昔を其儘に。
駒のひづめの音高う。
「打絶つるが」と笑給ふ。
此方へと先づみちびきし。







柴の戸ぼそ竹の垣
音もなく立出し。
乙女の姿こは夢か、…。
あなやと君の見給へば。
あら懷しや戀人と。
我子にうつる亡き魂の。
つと寄りてあはれ接吻!!!。
と見れば君は馬の脊に。
打伏し給ひ。
あゝ永遠に……
さめぬ眠りにつき給ひぬ
（ダンテガブリエルロセッティー）





學齡兒に對する家庭の注意

土川五郎

△優劣を生ずる子供の原因

子供は、其の面の異なる如く、千差萬別で、好く出來る子供もあれば、極めて惡い成績の子供もある。今惡い方の子供に就て見るに、是の子は及第させやうか落第させやうかの境界で、私共は毎度相談を受けるのですが、どうも決定に苦むことがあります。普通以下に成績の好くない子供を、低能兒と申しますが、此の低能の原因は、何處にありませうか、家庭では、學校の教育法の不親切を疑ひ、學校では、家庭の不注意を咎めも致しますが、私共の考へでは、其の原因には、凡そ四種ある事とおもひます。第一は其の子の資性により第二は其の子の家庭により、第三は學校教育の不注意より來ることあり、第四は身體の故障より來るといふ、まづ此四つの原因に歸するのであります。

△資性より來りし低能兒の實例

こゝに一ツ實例を申しますと、某小學校の尋常三年の子供ですが、學問操行共成績頗る惡しく、平素は默つて居つて不意に大聲を出したり、教員室に入つて、不意に教員の肩を打つたり、談話中の賓客の肩を突いて驚したりするので、其の譯を問ふと、飛んでもなき返辭をして、時には、先生羽織の紐を打つて上げませうなどゝいふことがあります。是れは絲屋の息子ですから、こんなことをいふのですが、教員室に入るのは全く他の子供に馬鹿にさるゝ爲に、據所なく入つて來るといふ有樣です。其の心を察すれば、同情の至りですが、時々は困ることがあるのみならず、一より十迄

の數も、言ふことが出來ない。一二四五八九とか數へるといふ具合で、餘程精神狀態が變ですから、一日其の子の父を招き、生來の病氣其の他の事情を聞糺しました。すると、その父は、全く無事息災で何事もないことを繰返すから、そこで、私は、貴下は酒をお飲みになるか、母さんは如何近親の方はどうですかと質したる所、誰れも飲みませんといふので、私は暫らく不審におもつてゐますと其人は礑と膝を打つて、はい思出しました

私の父即ち彼の子の祖父は、非常なる大酒家で、近所近邊を騷したものでありますといつたので、初めて其の子の低能兒たる原因が判りました。こんな風で、先天的遺傳に低能兒たる資格を受けてゐるので、教育作用で、容易に改まらないものであることが分りました。

汗疹の豫防と手當

暑くなると小兒の最も困難するのは汗疹であります。小兒は概して汗の分泌が盛だから此の爲めに惱まされる事は非常です。汗疹の豫防としては先づ小兒に汗をかゝせぬ樣涼しくして暑さを凌ぎ易い樣にしてやられぱならぬ。と云つて風通しの良い處へハンモックや乳母車を置いて寢かせると直ぐに感冒を引くから程よく注意してやられぱなりません。又汗染みた衣類や、汚れた肌着を着せて置くと夫れが原因で屢々汗疹が出來るから、衣類は粗末な品でも、古びた物でも、度々洗濯して清潔にしてやり、同時に皮膚をも清潔にしてやる事を心懸け、若し汗が出たならば成るべく、直に拭ひ取つてやるのです。其汗を拭ふにも、硬い手拭や不清潔な布を避けて地質の柔かな繃帶木綿とか、西洋手拭などを用ゐれ

△家庭の不注意より來りし低能兒の實例

家庭の不注意より來る低能兒は其の數頗る多いでせうが、其の實例は、態々擧ぐる程のこともありません。要するに、父母殊に母たる人が、子供を大人のやうに思つて居る爲に、過失が生じ易いのであります。是れは私の子供にも實驗がございました。乳呑子が、泣いてしやうがないので、何か病氣であらうと言ふたけれども、妻は肯かずして、其の儘にして置きましたが、程經て醫師の診察を乞ひました、果して病氣に罹つて居る

ことが分りました。世間では是は蟲のせいであらう位で、少し位な病氣は、打遣つて置く爲に、大きくなつて、回復の出來ないやうになることが、澤山あります、又訓練の上の缺點としては、例へば子供を匡正するのに、母親の辛抱が續かず、却て肝癪を起すなどいふことは、能くある例ですが子供の記憶が惡いとか、成績が惡いとかいふ時にも、母さんは、お前は駄目であるの一點張で、叱り飛ばすばかりであるから、却て折角發達せんとする萌芽を切り斷つてしまふ樣な結果になることがあります子供をして、自分は出來るといふ自信を持たすことは何よりも大切であります。

ばなりません。そして一日に數回は餘り熱くない湯で手拭を絞つて拭てやる事が肝要です又甚だしく暑い日には一日に三四回位行水を使せるのです。
既に汗疹が出來たのは成る丈け殖えぬ樣又腫物にならぬ樣に注意しないと、濕疹や皮膚病を起す事があります。其の治療法は少し位の汗疹ならば有合せの天瓜粉、あせしらず、おしろい等を湯上り等に撒布してやれば、大抵治りますが、段々殖えて來ると、迚もそんな事では癒らぬから、亞鉛花澱粉を用ゐますそれでも癒らなくて汗疹に水を含んで、粟り樣に成つたり、又夏瘡と云ふ腫物になつたりしたら、硼酸軟膏か亞鉛花軟膏などゝ云ふ刺戟の少ない穩かな藥を附けるのです。然し腫物になつて、段々殖えて來ると腫物は色々性質が變化するから、速く專門醫の治療を乞ふのが安全です。

〈學校の不注意より來りし低能兒の實例

學校の不注意。是れは主として子供の個人性を知らぬ所から生じます。例へば普通の子供と劣等の子供と、左程の注意も拂はずに、敎へて行く所から、優等の子供に十題の算術が出來る間に、劣等の子供は二題ほか出來ない。其れを構はずに進むから、尙々劣等の子供は出來なくなるばかりである。といつて、劣等の子供ばかりに注意して居ると、優等の子供は、餘裕があり過ぎて、徒戲事迄覺えるといふ有樣です。此の邊がなかなかむづかしいのですが、畢り敎授法又は訓練の不注意不行屆より起るのが多くあります。

△身體の故障より來りし低能兒の實例

私は或子供が、本を讀めといつても讀まない。而も其の理由が分らないので、餘程横着の子だと思つて居りました。然るに程經て身體檢査をした所、喉頭が塞がつて、聲が續かない子供であることを發見し、非常に前非を悔いたことがあります、注意すると、こんな例は、澤山あらうと思ひます。能く視力の薄い子供や又は近視眼の子がありまして、本人も知らず、家庭も氣づかず、學校でも初めの内は分らなかつたが、身體檢査の際、偶々氣がつくことがあります。此等の子供を前の方に出さずに、後の方に席をとつて置きますと、黒板の字が確り見えない爲に、教つた事が不明に了り、嵩じ嵩じて、全く低能の人のやうになることがあります是れと同じく耳の惡い子供は、先生の言ふ事が、分明に分らない爲に、眼の惡い子供と同じやうな結果を呈することがあります。能く身體檢査の際、小石のやうな耳糞のある子供を發見することがありますが、此等は家庭で注意すべきことでありま す。忙しいお家などでは、耳垢を取ることを煩しく思ふ人もありませうが、穩にしてやれば、譯もなく取らせるものです。此の如く身體上の故障より、自ら低能となる子供も多々ありますから、子供の身體には、十分注意して遣らねばなりません。

> **子供は寫眞の種板**
>
> 大人は子供に對して大きな顔して、お前達を育てたのは私等であると云ふ。成程育てたには相違ないが、然し惡い事を教へたのも大人である。幼少の時に何時とは無しに惡く仕込んだのが段々大人になつて出て來る。夫を今更の如く叱つたり罰したりするけれども、一歩進んで考へれば、皆大人がさうさせたのである。惡い手本を大人が出すので左なくも模倣性に富む子供は直ぐ之を見習ふ元來子供の心は其にある。鏡といふよりは寫眞の種板である。其に一寸映つた以上何處迄も消えない。何時迄も印象が殘つて行く馬鹿を見度ければ親を見ろと云ふ諺の通り、大人が與へた

△子供の惡い實例

子供の成績の好くない原因は、凡そ前の四種に分けらるゝのです

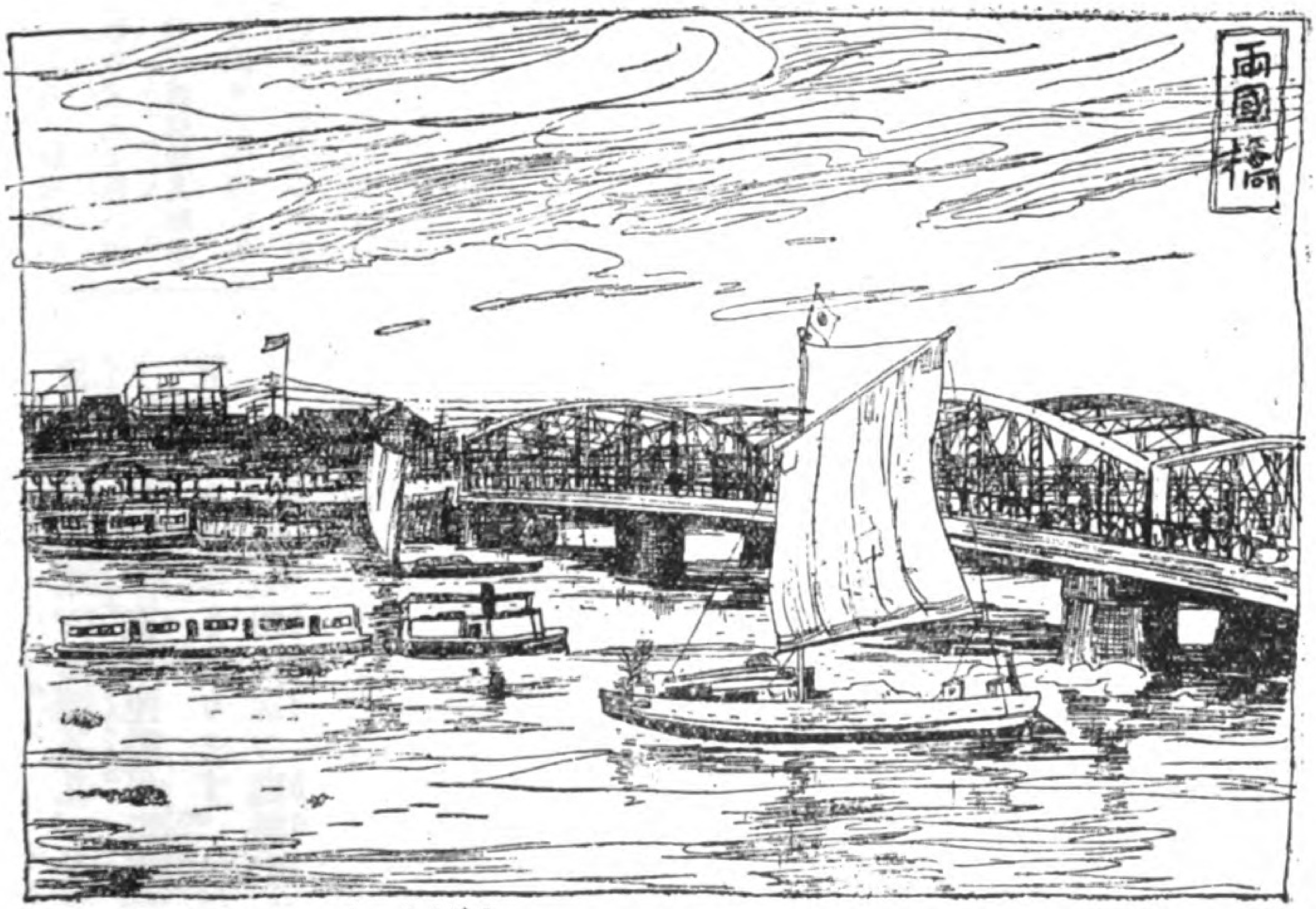
が、單に學校や家庭を咎める譯には參らぬことがあります。其れは子供自身も善くないことがありますから、何でも子供の言ふことを聽いてはいけません。學校などで便所に行くことは、運動時間に定めて居るのですが、已むを得ずして、一人を許すと、大勢が次々に手を擧げて、之に倣ふことがあります、其れを色々にして實驗すると人が行くから自分も行くといふのがあるやうです。又腹が痛いといふ子供があると、私も私もと幾人も出て來る。其の眞僞の正確なことは、容易に分らないが、大凡は顏色を見て分りますから、是れは全く人眞似であると思ふ時には、其れは虚僞だらうといへば、顏赤らめて思ひ止る子供もあれば、言ひ出したら、聞かない子供もあります。其等に向つて、湯の如きものを飮ませて遣ると、先生直りましたで、直に運動場に出て、飛び廻る子供もあります。故に何でも子供を信ぜずに、時に應じて加減せねばなりません。

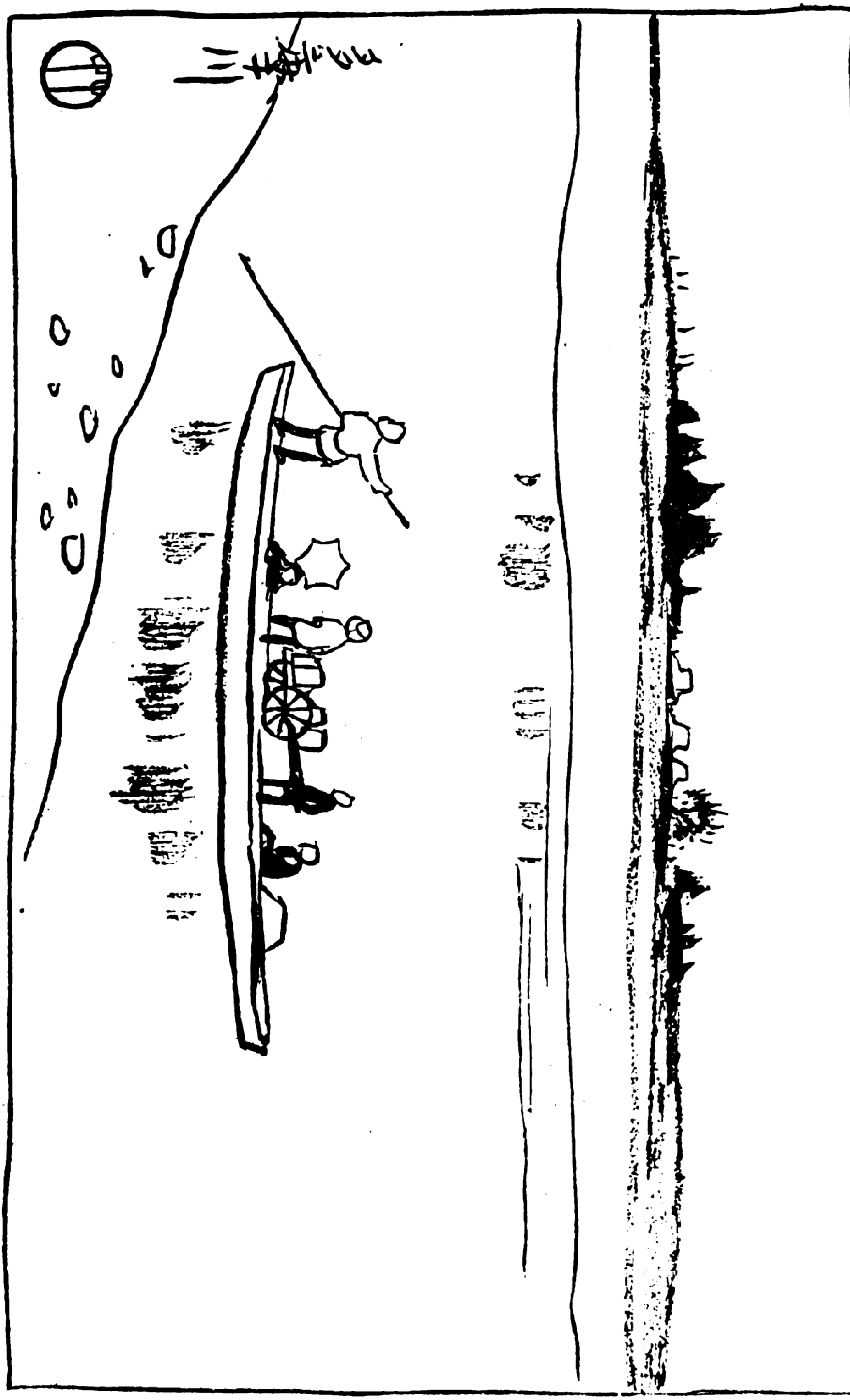
色々な影響は子供には深刻に殘る。餘程氣を締めて懸かることが肝要である。
親たるものが我儘勝手をし、或は他人を卑下したりすることは、知らず識らずの間に第二の性質を作くる。子供に込入つた企のある嘘など云ものは元來有り得べからざるものであるに、往々子供が之を遣るのは決して子供自身の發明ではなく、皆な大人に倣ふのである。馬琴の話に始めは親が子を欺し、終には子に親が欺まされるといふがある。泣く兒を宥める時などは殊に嘘言が多い。斯う欺まし付けられて居るから、終には親を馬鹿にして欺ますことなどは平氣になつて了うのである。
（倉橋惣三氏）

△子供の成績を好くした實例

例へば子供を伴れて道を歩く時默つて歩けば、少しの路も大儀がるが、彼れは何々の山、此れは何々の川、是れは何といふやうに、樂ませて歩かせると、一里の路や二里の路は譯もなく歩きます。是れと同じく、子供の教育法も、只だ叱つたりするばかりでは、決して進むものではありません。假へ如何に成績の惡い子供でも、何處か取りえのあるものですから、其の好い所を褒めて、惡い所を言はぬやうにするのです。

之が實例として、私の居つた學校に、極習字の下手な子供がありましたが、能く家庭の母さんと打合せて、一切けなすことを廢めて、比較的好い字を指して、是れは却々巧いといつて、褒美でも遣ることにして居りましたので、一時落膽して、殆ど自棄に陷つた。子供も大分勇氣を出して、習字に勉めましたが、一日大分能く出來ましたので、敎師は、紙一杯に二重丸を施しましたら、子供は喜悅に堪へず、其の儘早退をしやうとした氣色が見えましたが、考へ直して一時間ほど居り、とう／＼早退を致しました。母さんは、之を見て大に褒めましたけれども、早退は爲に好くないと思ひましたから直ぐ行つて來たら好いでせうといつたので子供は直に引返したといふことがあります。何でも好い所を見つけて、自己を信じさせつゝ勉強させるのが何よりです。さうでないと成績の惡い子供には、利に利がついて、首も廻らぬ不成績の子供となるものです學校でも家庭でも、注意に注意を加へねばなりません







まねび物語

筑摩子

むかし山里に賤の女一人住まひけり。書よむ事をいたく好みてけり。その頃、野菊と申すゆかしき君の在して、いにしへ人にならひ、似非物語りと云ふをつゞり給ひにしを、ふと見出て興ふかうおぼえければ。

　われとても大和をみなのかずなれば
　えせものがたりまねび得でやは

とて、次のやうなる事どもを、危うげなる筆にておろおろと書いつけゝる。

×

天保時代と呼ばるゝ男ありけり。東の都見ばやとて古郷を立ち出で、はじめて汽車と云ふものに乘けり。さる程に、走る力のあまりに早くして、うるはしきあたりの景色どもを眼にとめんすべもなきを、うきことに思ひて。

　恐ろしき世なり車はせきたてゝ
　けしきも無錢で見せぬ了簡

となん、呆れかこちつゝゆきゆく程に、やがて京にいたりぬ。都大路のあちこちを、いと誇らかに肩そびやかしてありきまはる若き男達の角帽と申すを頂き居りけるを、天保男、こは彌生の雛節句に用ゆる菱餅の臺なんめりと思ひあやまりて、よめる。

　都人はいやしきものよ餅器
　つむりにのせてうつり香をかぐ

と、うめき出でにけりとぞ。

×

昔男ありけり。麗はしき妻をめとりてむつみくらしけりその妻、いつも姿うつくしうとゝのへて、はした

なきふりを見せにし事絶えてなかりけり。ひと朝眠りすぐして臥床のうちにありけるを、聟がね心なく襖引あけんとしければ、妻ねくたれ髪みられんことの羞かしさに、あわてまどひつゝ。

このふすま今はなあけそますかがみ
君にむかはんすがた有らねば

とて、なげきにけり。
夫なる男いとゞいとほしき思ひにて。

ますかゞみむかふあやうき襖川
わたりはすまじこゝろ安かれ

とかへして、立去りにけるもやさしや。

立話し図



×

むかし女、親しき友をたづねて、深志の里と云へるにいきけり。そこの女、いとう喜びむかへてけり。くさぐさの物語りしてともにいねけり。夜もふかきに主の女、甚じう音高くもの鳴らし放ちにけり。客の女をかしうて。

思ひきや深しの里にかりねして

玉の緒琴のねをきかんとは

となん詠めりける。主の女とりあへず。

よもすがら君とかたらう嬉しさを
ほぎてや琴は高なりのして

さりとは心にくしとて客の女再び

ゆめ路ゆくわが足さへも止まりけり
あまりに高きことのしらべに

なんど、ざれみかはしつゝ、一夜を明したりけり。

×

ハイカラ式部と云が有りけり、おどろ〳〵しうつき出したる廂前髪の下に、金縁の眼鏡をかけたり。學びのわざよりも、自然主義といふ事をいたく尊びにけり。ある日此式部、電車と云ふものに胡蝶のまふ如く舞踏的に、ひらりと飛乗らんとしてまろび落ちてけり。夥だしうけがしてけり。病院に入るとて、かねてより懇にいひ契れる男のもとへ、かくなん。

きずつける我が身あはれと思しなば
おしみ給ひそめぐむ黄金を

なしのつぶてなりしか、男の方よりは何のたよりもあらざりけらし、式部こゝろもとなうて、重ねていとはかなき事のかず〳〵を書いつゞりやりけるに、やうやう一片の文の來りけり。いとうれしうて開けば、こはそも。

君がため送る黄金のありもせば
いとし吾妹が衣もとめなん

とのみぞよまれにける。式部、こゝに初めて男ごゝろのまことあらぬを悟り、たえ入るばかり泣きくやみけりとぞ。

×

むかし女ありけり。世の常の若き女のやうに、なまめいたる風情はつゆばかりもなくて、たゞ〳〵食物になんあこがれてのみぞいたりける、心ゆくばかりむさぼり食ひたしと願ふもののうちに、南瓜も有りける焼芋となん呼ぶものも有りにけり。

同じ里に若き男住みけり。此の女の人ざまをいと淺間しう思ひにけらし。

三寸の咽喉過ぐる間の味なるに
などかれこれとあさり食ふらむ

と、詠みおこせける。女、ほくそ笑みつゝわざとそれには答へで。

美女と云ひ醜婦とよぶも皮一重
えらびたりとてなにゝかはせん

いかばかりうるはしき女とても、皮一重はがば血もあるべし見にくき骨もあるべし、など書き添へて返しにけり。これなん、若き男の、容貌すぐれたる女をのみ、えらみありくをきゝ知りて、あざけりやりつる心ばへになんありける。若き男堪じう恥かしうて、冷汗と云ふものを流したるやいかに。



×

いつの頃にか、新體詩人と呼ぶ男ありけり。奇しく妙なる筆づかひにてなまめかしきものをつゞりてけり。煩悶となん神秘となん云ふ事をこよなき寳のやうに思ひていつも生氣とてはなき青ざめたる顔して居たりけり。此詩人あまりに心かしこくや有らざりけん。深く契りにし、ゆかりゆかしき紫の、み袴らうたきあてなる姫上に秋の扇とばかりうち

捨てられにけり。詩人限りなく悲しみ恨みて、物狂はしう天地の神々をまで罵りさわぎたりけるが、もはやかくては片時も世に有りながらへん望なければ、死出の旅路と云ふにむかはゞやとて、友なる男の許へ。

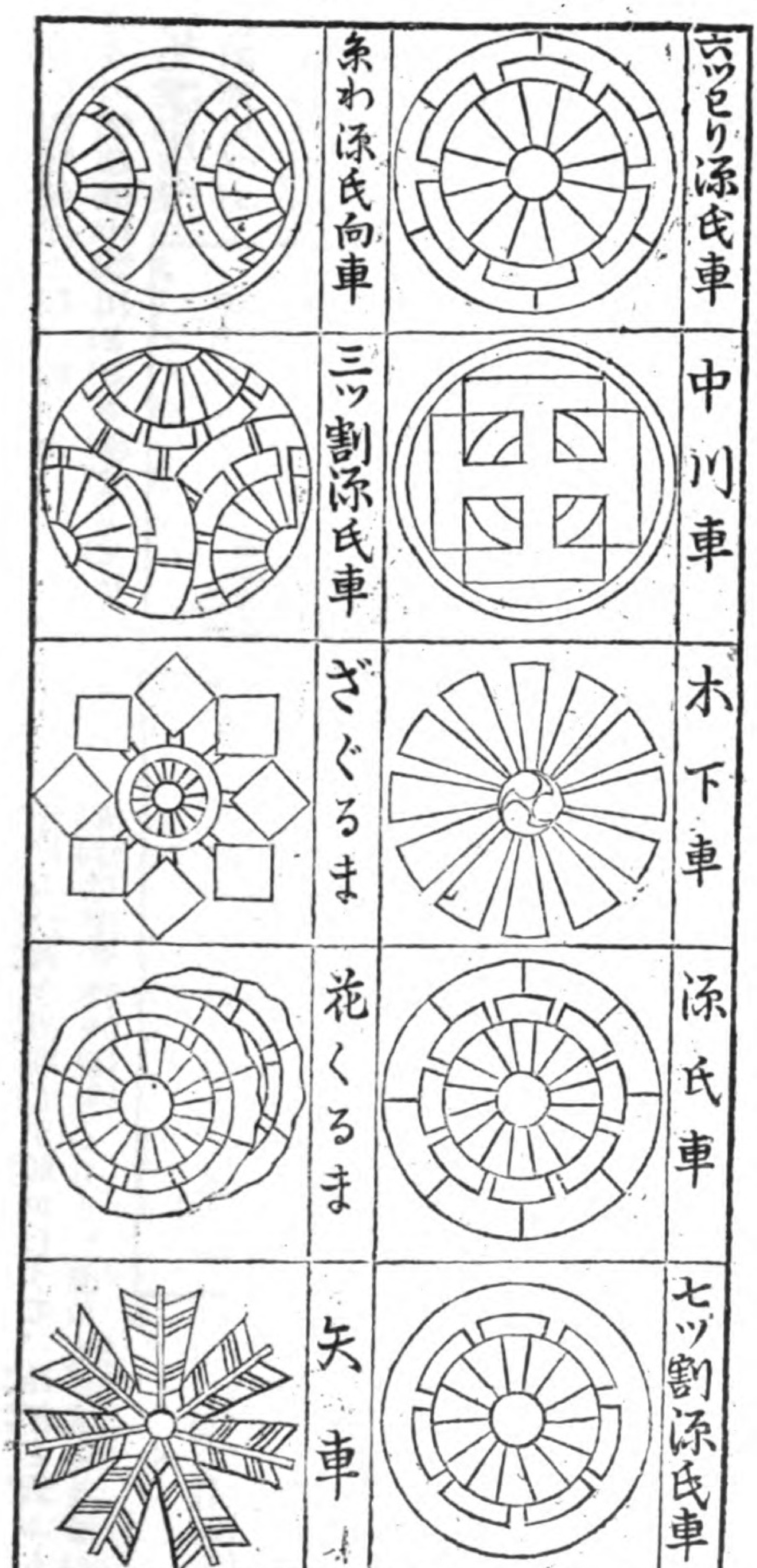
たのみなくなりし戀ゆゑ命ゆゑ
華嚴の瀧にすてんとぞ思ふ

となん、詠み送りける。友なる男は、樂天家とよばるる人なりけり。かへし。

瀧水をさかのぼるこそ鯉（戀）なれや
落ち下りにしためしやはある。

あはれ、いたはしき失戀詩人の君、さてもいかゞなり給ひつらん、後のことはたえて知らず。

車の意匠



汽車旅行者の公德心



鐵道院營業課長　木下淑夫

汽車旅行は、客車內に於ける乘客の共同生活であるから、乘客は互に讓り合ひ、聊かの不便は忍んで、互に樂しく旅行をすべきであるが、乘客相互の間に調和を缺くと、それが甚だ不愉快なものになつて了ふから、乘客は互に公德を重んじて各自の快感を損じない樣にしなければなりません、特に日一日と外人の來遊客の多くなる際、鐵道の如き公共機關に於ける國民の作法の如何は、卽ち其の國民の文明の程度及び品性の如何を識評せらるゝ標準となるから、之れは餘程大切な事柄です。

△停車場の大混雜

先達て田舍の驛路を視察したが、某驛其他乘客の多い場合にも、尙停車場の出札口等に於て、乘客は秩序正しく列を爲して切符を買ふ順序を待つて居るのを見て、後ろに英國などの公の場所の秩序あるのに比しても遜らない事を思ふて心强く感じたが、翻つて我が帝都の咽喉として常に外人などの眼にも入り、又我が國情の一斑を示す樞要なる新橋や上野の有樣は何うかと見れば、國民として實に慚愧に堪へぬ事がある出札口などを見ると、右より手を出す者があるかと思へば、前客のまだ買ひ終らないのに左より金を投出す者があり、又他の客は其の後より窓口を叩くといふ有樣で、物馴れた出札掛も狼狽して却つて時間を遲らして居る。それから改札口を見ると、右左より押合ふて關に入らうとする爲に、非常な混雜を極めて居る。此等は彼の園遊會等の立食場に於て、往々紳士淑女が我れ一にと先を爭うてナイフや皿を提げ、餓虎の肉を爭ふ如き醜狀を現はすのと共に誠にお恥かしい限りであります。汽車の停車場の如きは、人の上下を問はず、男女老幼の別なく、頻繁に人の出入する所で、互に時間の大切な人々なれば、出札改札等の場合には、堅く前後の秩序を重んじて、常に後の雁が前の雁を追越す樣な不作法を爲さゞると共に、無用の混雜を起して我れも人も迷惑する樣なことは避けたいと思ひます。列車發着の際の如きも、客車の狹き出入口に於て內より出でんとする者と、外より入らんとする者とが、互に行手に立塞がつて、乘ることも降りることも出來なくなるなどは、老人や子供連れの人などには實に迷惑な事なれば、かゝる際には降りる者を先にし、乘る者は後になる事を國民一般の作

法として守る様にしたいものです。

△自ら品位を落す人

又乘客の各自の座席は、それぞれ一定の廣さがあり、又其の持込むべき手荷物も、網棚の上に載せ得るか、腰掛の下に入れ得べき制限があるのに乘客中には、乘車の際爭うて敷物を長く伸ばして直に橫臥し、自分ばかり廣い席を占めやうとつとめ、或は制限外の手廻品を澤山持込んで他の座席を塞ぐなど勝手な事をする人も隨分見受けるが、此等は他の迷惑となるのみならず、乘客自身に於ても公衆の面前に自分の公德心に乏しい事を廣告して、自ら品位を落す譯だから、此等も互に注意して頂きたいものです。殊に老幼婦女をいたはつて座席を讓る樣な事は、近頃は西洋では廢りつゝあるなどゝそれが如何にもハイカラの樣に言ふ者もあるけれども、弱者をいたはつて之を助くるは我國傳來の武士道の本意で、假令他國の風が如何に變化しやうが、斯かる美風は此後益々奬勵したいものと思ひます。又數人同行の客が一時に客車內に入つて來た時に、纏つた座席のない爲に、相並んで居る事が出來ず、思ふ樣に話も爲し得ないで失望してゐる人がある。殊に新婚の夫婦連れ、若くは睦しい兄弟姉妹の間に挾まつて、泰然と雙方の間に牆壁を作るなどは誠にお察しのない譯ですから、斯かる場合には、其の中間に挾まれた人は、差支なき限り快く自分の席を讓ると

日本の食物は世界の高價

今より十五六年前、私が倫敦から或る技師を雇つた事がある、その時手當の事を交渉すると、日本は倫敦に較べて生活費が餘程廉いその點が貴下に取つて生活上極めて樂であらうと言つてやつた。所がその技師が愈々日本に來て第一に物價殊に食料品の高いのに驚ろき、急ぎ私に向つて「貴下は日本は生活費が廉いと言つてよこして居られたけれども、少しも廉くない、倫敦よりも餘程高い、私は當が外づれました」と言つてこぼした。善く事情を聞いて見ると、實際日本に來てから、倫敦に居るよりも高い生活費を拂つてゐることが解つたから更に手當を增してやつたことがあつた。

十五六年前で已でにこうであつたが、今日は其の時に較ぶると一段と物價が上つてゐる、殊に食料品が年々に騰貴することは實に甚だしい、現に今日倫敦でパン一斤五錢といふ値段は何んなことがあつても動かない、

いふ美風を發達させたいものです。

△公共の場所の細帯姿

外國に於ては汽車中とか旅館内とかは、謂ゆる公共の場所として、各自が他に恥ぢない服装を爲し、又相當の作法を守るべき事となつてゐるが、我國では旅館は締切主義であるから是れは別として、汽車中は等しく公共の場合となつてゐるから、乘客の服装は、素より華美を競ふには及ばぬけれども、自分相當の清潔なもので、前後上下の對照の見苦しからぬものを用ゐたいものです。餘り垢附いた不潔なものとか、婦人が細帯のだらしない風をしたり、又婦人には無いことであるが、褞袍を着るとか、羽織袴を着て足袋を穿かぬと

> 牛肉は一斤三十錢、英國は昔しから食料品の値段を決して上げないといふ事を政策上最も重要な事としてゐるが、それにしても餘り廉いのは一寸不思議のやうである。尤もこれは自由貿易の結果でもあらうが、物價が年々騰貴するのは自然の趨勢で、識者の深慮すべき問題である。
>
> 倫敦から少し田舎のケンスボローといふ小さい町に、獨逸の職工組合がある。その生活狀態を調べて見ると獨逸の職工が工場で食ふ晝飯の代が普通二十錢、何ういふ食事をするかといふに、ソップ、パン、肉一皿、野菜一皿、それにコーヒーとビールが附く。それ丈で二十錢と記入してある。私はこれを見てその廉いことに驚いた。日本で晝飯に一寸西洋料理を取ると、極く粗末な料理で二皿か三皿も持つて來れば五十錢より廉いことはない。我々は世界で一番割の高い食事を爲しつゝあるのである。(簡易生活談の一節荘田平五郎氏)

か、着物の裾をまくつて毛脛を現はすとか、洋服を着ながら靴を脱ぎ、甚だしきは靴下まで取つて素足の儘草履を穿いたりするのは、誠に見苦しいものです。勿論旅路の事だから、少しは寛ぎたくもあらうから、輕快な旅装をするのは勿論差支ないが、公の場所である事を考へて多少の苦痛を忍び、餘りに不釣合な事のない様に心懸けねばなりません。

△潔癖の裏面

又車室は、公の場所であると共に、一時の住宅であるから、勿論清潔にしなければなりません。元來日本人は潔癖で、常に清潔を重んずる歐米人すら、塵一本ない日本家屋の室内を見て非常に感服し、又我々も誇りとしてゐるのですが、一たび車内に

於ける有樣を見れば、甚だ赤面に堪へません。列車が始發驛を出る時には、床面は雜巾で拭つてあるのに、一二時間も經るか經ない內に、室內は履物の泥、煙草の吸殼、辨當の食殼、或は果物の皮等の塵芥で滿されて、恰も掃溜のやうな有樣になり、之れが爲めに、樂しかるべき旅路を最も不快なものにして了ふのは誠に遺憾な事である。此の不快のない樣にと思ふて、列車の乘務員は斷えず掃除をするが、掃除をすれば塵埃が立つから一部の人には氣の毒であると言つて其れをしなければ、目前に掃溜を見る樣で一層不快を感ずるといふ始末ですから、此等は乘客各自の公德心と其の本來の潔癖とを發揮して、汽車に乘る場合には、靴は勿論、普通の履物でも成るべく泥を落して入る樣に注意し、又煙草の吸殼は備附の唾壺の外へは散亂せぬことゝなし、果物の皮などは、讀み了つた新聞紙にでも包んで置いて、辨當の食殼と共に列車の給仕に始末をさせるとか、給仕の居ない場合には停車中に驛夫を呼んで取捨てさせるとかするやうにされたいものです。

△列車給仕への心附

これは私の立場として聊か言ひ兼ぬる事ですけれども、近頃列車給仕が、心附の有無や其の多少に依つて客の扱ひを甲乙にするなど云ふ小言を聞くことがあるが、これは給仕に對する訓練の足らざる所として、誠に慚愧の至りです。元來給仕に對する心附は、旅行を終りたる後、乘客より其の勤振の殊勝なることを認めて謝意を表せん爲に與へらるゝものだから、其の志を無にするのは却つて不敬に當らないかと思つて、之を受ける事を默認して居る次第で、或る乘客が他の乘客より區別して特別の取扱を受けたが爲に豫約的に與ふるもの、即ち旅行の始め又は途中で與ふべきものではありません。若し乘客中に始に與ふる樣な人があるとせば、宿泊者が宵に茶代を與へて其の取扱ひ

東京の家賃は世界無類の高價

最近英國の事を聞くに、每朝汽車で、倫敦に通勤する郊外生活、そこの家賃が一年五十磅が普通である、それで夫婦に子供の三四人も居る相當の紳士の住居として少つとも恥かしからぬ家であるといふ、東京の市外で月に二十圓の家賃では紳士の住居として體面を保つことが出來ぬ、若し子供が二三人と兩親でもあれば二十圓位の家では體面を保つ所

の善からん事を期すると同樣で、其の人格の下劣な事を示すものです。で心附を與へらるゝならば必ず旅行を終つた時、即ち降車の時に之を與ふる事とせば、取扱を甲乙にする樣な弊も起らず、隨て其の扱ひに對する不平も自然に止むことゝ思ひます。

△車室の開閉に就ての判例

車室内の窓の開閉に就ては往々乘客間の爭論の種となることがあるが、兎に角公共の場所ですから、互に讓り合ふて餘り他の迷惑とならぬ樣に注意しなければなりません。殊に老幼婦女等の相客ある場合には、多少の苦痛と不快とを忍んでも、此等の相客の爲に便利になるやうに計るのが同情に富んだ處置であります。英國では窓に近く座席を占むる者に開閉の權利ありといふ判決例があるが、これから慣習を作るのにはよい參考です。それから車内に於て乘客が相互に注意すべきは、濡れた雨衣を被りたる儘座席に就いて隣客の衣服を濡すとか、或は泥靴の儘足を腰掛の上に投出して腰掛を汚すとか、或は煙草の火で同乘客の衣服等を焦すとかするのは、別段惡意はないのでせうが、大に注意すべき事柄です。

の沙汰ではなく、狹くて住むことか出來ない、普通の借家住居をしてゐる人の事情を聞くに月々の經費は衣食の代よりも交際費よりも何よりも借家賃が一番多額を占めてゐるといふのである、借家賃に月收の大部分を取らるるのは實につまらない、つまらないけれども東京に住つてゐれば仕方がない、倫敦では大工場の附近に草原を見ることが多いが、東京では探してもない、これから考ふれば東京の家賃の高いのは主として地代の高いことが原因となる、東京に接近してゐる郡部の家賃等もこれが爲めに益〻高くなる。

又婦人にはあまり無い事であるが、高聲で讀書して同乘客に不快を懷かしめたり、夜間睡眠中に高鼾を爲して安眠を妨害する等の處置は深く愼むべきである。尙ほ些細な事ではあるが、同乘客殊に婦人などが寢臺等に於て人目を避けて更衣を爲さんとする時は、他の方に顏を向けて見ない樣にするなども、乘客として注意すべきことであります。

△旅は道連れ世は情

又鐵道旅行に於ては、車中の無聊に倦み、同乘客と談話する事を欲するも話の緒口なきに苦しむ時と、又之れと反對に、餘り氣の進まぬ時に同乘客ようるさく話しかけられて迷惑を感ずる時とある事は屢〻經驗する所ですから、車中に於ける談話は最も注意すべきであります。私の考では、自ら同乘客に談話を試みて徒然を慰めん希望のある場合には、最初丁寧に時刻を尋ねるとか、驛名を聞くとか、極く簡單な問を出

して先づ其の答を聽き、其後自分よりは別に次の話題を出さずに居て、先方が更に彼れより話を進むるに於ては、之を以て彼れに對話の意志あるものとし、我れよりも進んで談話を續けても差支なきものと思ふてよろしく、之れに反して、相手が單に自分の問に答へしのみにて、彼れより話を續くる事をしなければ、先方に於て話相手となるを欲せざるものと心得ふべきであらうと思ふ。又隣客より何か話しかけられた際に、自分が其の客と談話を續くる意志なき場合には、先方の問に對して單に其の答を爲すのみに止め、我れよりは何等新しき話題を出さなければよろしい。それが絶縁の宣告の意味とならうと思ふ。要するに初對面の人に對しては、我れよりうるさく話を仕掛くる權利もなければ、又彼れよりの話に對して單に返答を爲すの外、我が意に反いて話相手をなすの義務もありません。即ち談話は双方が對話に興味を持つ時にのみ之を行ひ得るものと心得て可いのです。まして初對面の人に飲食物を頒ち與へて却つて先方に迷惑を感ぜしむるなども大に注意すべきであります。けれども旅は道連れ世は情けと云ふこともあるから、受身の場合に隣客の厚意を餘り素氣なくしてもなりません。

不經濟な世帯の持ち方

高い家賃に住み、高い食料品を食する外に東京人は更に割の惡い生活法をしてゐる。八百屋物にしても、味噌醤油にしても、薪炭肴を買ふにしても、此方は坐つて居て小僧が御用聞きに來る、其日〳〵の相場の廉いか高いかは小僧の言ひ分次第で、唯晦日の附出しを丸呑みに拂うばかりである、此晦日の附出しといふものには、實際の價の外に金利と手數料とが加はつて居る、これが實に無駄な仕拂である。

歐米の都市では中流以上でも妻君が毎朝自分で市場に買出しに行く、東京の中流以上の妻君は大抵臺所は下女任せで、何が幾らか知らずに食べてゐる。中流の妻君で八百屋物や肴を自分で買に行くのは恥と心得てゐるな

△人道の原則による客扱ひ

言ふ迄もなく鐵道の乘客は貴賤男女を問はず公平平等に取扱ふべきは鐵道員の義務で、之れに甲乙の別を立てられぬことは勿論ですが、時に依つて差別を附くる必要ある場合には、人道の原則により老幼婦女即ち

弱者を先にすべきことを係員に命じてあります。之れと同じ理由によつて、外國人等も親切に取扱ふ事にして居ります。同胞に薄く外人に厚いのはよくないと言ふ人もあるが、これは鐵道の趣旨を理解しないのです。私共は勿論乘客は何れも同樣に偏頗なく扱ふ精神であるが、外國人の如きは、言葉も通せず、土地の事情にも暗くて、内地を旅行するには老幼婦女と同樣、時によつては寧ろ其れ以上に不便の地位に立つ謂ゆる弱者であるから、特に意を用ゐて居るのです。此の考は乘客相互の關係にも及ぼしたいと思ふ。即ち内地の旅行に慣れず言語不通の漫遊外人などに對しては、同乘客は特に意を用ゐて彼等の便利を圖るべきだと思ふのです。之れは遠來の客を遇する人情の美點ともいふべく、一方には弱者を助くる我國の武士道にも適して居ります。

どは、經濟の上からいつて大變な相違である。銀座などの西洋食料品を賣つてゐる店の話を聞くに西洋人は大抵夫婦づれで馬車に乘つて買ひに來る、バタなどは妻君が必らず手に取つて吟味して買つて行く、けれども日本人で夫人が自分で買ひに來る例はない、中流以上の家庭で日に一度西洋料理を膳に上せない所はない位で、隨分西洋料理品の需要はあるが店に買ひに來るお客樣はお三どんか、でなければ、電話で注文する、すべて東京ではお内儀さんが坐つて居て酒屋や八百屋の小僧に御用を言ひつくるのを何よりの誇りと心得てゐる、例へば去年までは一々自分で現金で買ひに出たけれども、此頃は最早何でも晦日勘定で取つてゐるといつて、それを工面の善くなつた自慢ばなしにしてゐる、簡易生活を研究するにはまづかういふ不經濟を改めて行かねばならぬ。(同上簡易生活談)

△食堂内の無作法

尙ほ乘客として注意すべきは、食堂内等に於て、食事の終つた後、食堂を使用せんとする數多の乘客が側に待つて居るのをも顧みずに雜談に時を遷し、悠々と其の座席を占領して居る事であります。斯かる場合には係員に注意せしむる事としてあるが、滿座の中でそんな注意を受けるのもあまり體裁のよいものでもないから、乘客各自の注意を望みます。又住宅の一室より他室に行交ふ場合に、戸障子を開放して置くのは、何人も不作法な事と心得て居るが、客車の戸扉を開放して顧みない人の多いのは遺憾です。殊に直接外部へ通ずる車扉を開放すれば、風が吹入り雨が吹き込むのみならず時として乘客に危害を與へます。其他車窓から危險の物品を棄てゝはならぬ事は運輸規程にも規定してあることであるが、乘客は別に深い考もなくビール瓶や土瓶などを投げ棄てる事がある。それが線路に仕事をして居た工夫などの面部其他の要所に當つて非常な大怪我をした例もあるから、乘客は此等の事も十分注意をして頂きたいものであります。

汽車旅行者の公德心



古事來歷

△御用金の事

御用金と唱ふるは、むかし江戸時代、國用の不足を補はんが爲に農商の輩へ課したものなり、寶暦年中、大坂町奉行より地の富商泉屋吉左衛門以下三十餘人へ申渡したるを始めとす、其余高總計十五萬兩なり、凡そ用金を上納する商人は其褒賞として金五千兩につき銀廿枚、二千兩につき十五枚千兩につき十枚を賜はるを例とす、又差出のみにて下渡を願はざるものは三千兩上納して苗字を免許せられしとなり、元來御用金には二朱の利を加へて、下戻さるべき定めなりしといへど、形の如くは行はれざりしよし。

△纏頭の事

歌舞、遊宴、もしくは佛法の諸儀式等の後、當座の報酬として與ふる財貨物品等をいふ、被物の義、元は衣服を肩に被けて與へたるに斯く名づく、後には金錢にも通じて用ふ、又釋日本紀に纏を「カヅケモノ」と訓めり天德歌合せに上よりつとめてかつけものたまふと見えたり、纏頭の字義は、古へ支那の俗にて、俳優等の褒美として錦帛の物を與へば、これを頭に纏ふて謝意を表したる故にいふ、今これを花ともいひ、一般歌舞者の間に通用するを祝儀といふ。



△鐵漿の事

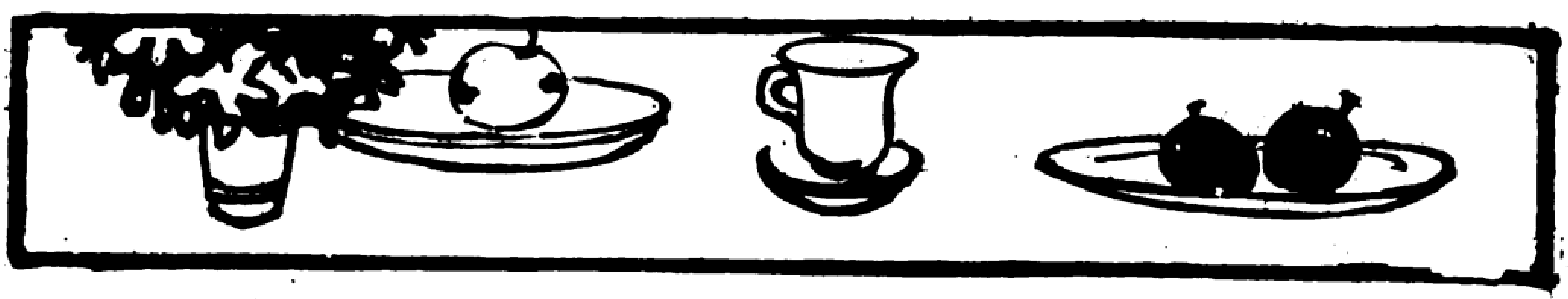
俗にオハグロといふは齒に鐵漿を施して黑く染むるをいふ古くは儀式にこれを用ゐ、童女鐵漿初めをなす時、親族もしくは其の家の重臣にて夫婦揃ひて子孫繁昌せる婦人を選び、鐵漿親となしてこれを行ひたり、まづ婦は童女を吉方へ向はせ筆をわたし、童女これを受取り水にひたして齒を染むるまねをするなり、式終りて童女より鐵漿母に盃、引出物を賜はるを例とす、而してこは何時頃より始まりしか詳かならず女子は古くよりこれをつけたるなるべしといふ、源平時代に至り京家の武士亦齒を染めたり、貞丈雜記に「古の侍は齒を染めて黑くし、下のは白齒也、是上下のわかち也、今も公家にはかれを付けらるゝなり」と見ゆ、室町時代に至り鐵漿始は一の禮式となり、男女共八九歳にてこれを行ひしが、江戸時代に至り女子十三歳の時、式ばかり行ひ婚嫁後、眉毛を剃り落し、齒を染め、男子は朝廷に仕ふる公卿のみこれを行ひしなり。

△紙衣の事

紙衣は紙もて作りたる衣服なり、厚き白紙をつなぎて、柿澁を塗り、日に乾かすこと數度、然る後一夜露ほしとなし、足に踏み兩手にて揉みやはらげ、衣服に製す寒氣を防ぐに最も適せり、この物古へよりあり、源平盛衰記に「老尼の紙衣の上に濃き墨染の衣を着たりける」云々と見えたり、中古以來京都清水坂の人これを袷に製し、清水紙衣といふ、又紀伊根來近在にては柿澁を塗らずしてこれを製す、白紙衣といふこれ澁を塗らざるのみならずすべて女の手を借らずしてなすものなればなり、律宗の僧徒多くこれを着すといふ、下つて元祿年中に至つて大に流行し、遊女などの着たるよし、この時代にはその製り方も精巧になり、サラサ形を押し華麗にして頗る佳致あるものなりしといふ。

△木賃宿の事

木賃宿は一の旅店にて、旅人薪炭の代のみを出し自から炊ぎて宿泊する所なり、慶長十九年の令に曰く、旅人驛家に投じて、驛家の薪炭を用ふれば、其木賃錢三文を出し、若しそれを用ゐざれば出すことなかれと、元和三年の五月東海道路次、領主代官に令して、木錢は京錢四文、馬一匹八文とし、其旅舍の薪柴を用ゐざるものは其半錢を減ぜしむ、云云以て古昔生活の質素、道中宿泊の簡易にして荒寥なりし樣を想見すべきなり。



△座敷の事

古代の殿舍は總て板敷にして主客の坐すべきところ〳〵にのみ、疊圓座などの敷物を設けて坐せしめたり、これよりして後世客を請ずる室を座敷とはいふなり、古書に、主客相對したところのみ疊ありてその餘は板敷などの圖あるは即ちこれなり、鎌倉年中行事に、御評定所は十五間中は油磨紫緣の御疊廻り敷きにて、衆中の坐は、一重外に中疊あり、御座を紫緣の御疊の上にかされて敷かるとあり、又或る書に、公卿座は四疊なり、清華御所の座は六疊なりなどあるも、主客の座幾疊を敷くべき廣さといふことにて、敷詰にしたる疊の數にはあらず、しかるに上下押なべてしきつめにすることゝなれるは應仁の大亂以來、漸々におしうつりし風俗なり、されど貴人高位を請待するには、かの敷つめの上へまた別に坐を敷きまうくる故、後世にはこれを上疊ともいふことなり。

△お坊主の事

武家にて城内又は邸内に於て茶の湯又は給仕等の雜役を勤仕したるものを坊主といひしが、これは剃髮にて法體なりしゆゑ斯く云ひしなり、今江戸幕府時代の制度を見れば奥坊主

表坊主あり、いづれも同朋頭に屬し、專ら茶室を管し、將軍は勿論毎日登城する大名、諸役人に茶を進むることを職とす人數百人以上ありて其中別に、小道具役坊主、用部屋坊主、肝煎坊主、時計役坊主等の分職あり表坊主は殿中に於て大名及び諸役人に給仕することを職とす、諸大名よりの報酬甚だ多く、家計豐かなるを以て奢侈僭越に流れしかば屢々同朋頭に令して戒諭せしめたり、表坊主組頭は四十俵高二人扶持、四季施代四兩坊主は二十俵高二人扶持なりと古事類苑に見えたり。

△局の事

殿舍の中に一區劃をなしたる所をいひ、轉じて局を有する女房の稱呼に用ふることゝなれり、貞丈雜記に局の字はカギルとよむ、家内をしきりて限りを立つるを云ふ、又王朝時代の風俗に座敷を屏風凡帳など立てしきり、つぼれたるをつぼれと云ひしとなり、即ちひらくとつぼむと相對する詞なり、後世宮づかへする女の居所を、つぼれといふも壁にて一人一人にしきりて住する故にいふなり、江戸時代に至りて、營中に仕ふる女房を長局と稱したるは、長く連續したる建物を營中に建て、一棟を十數部屋に分ち、一部屋に一人若しくは數人の女中住居したればなり。



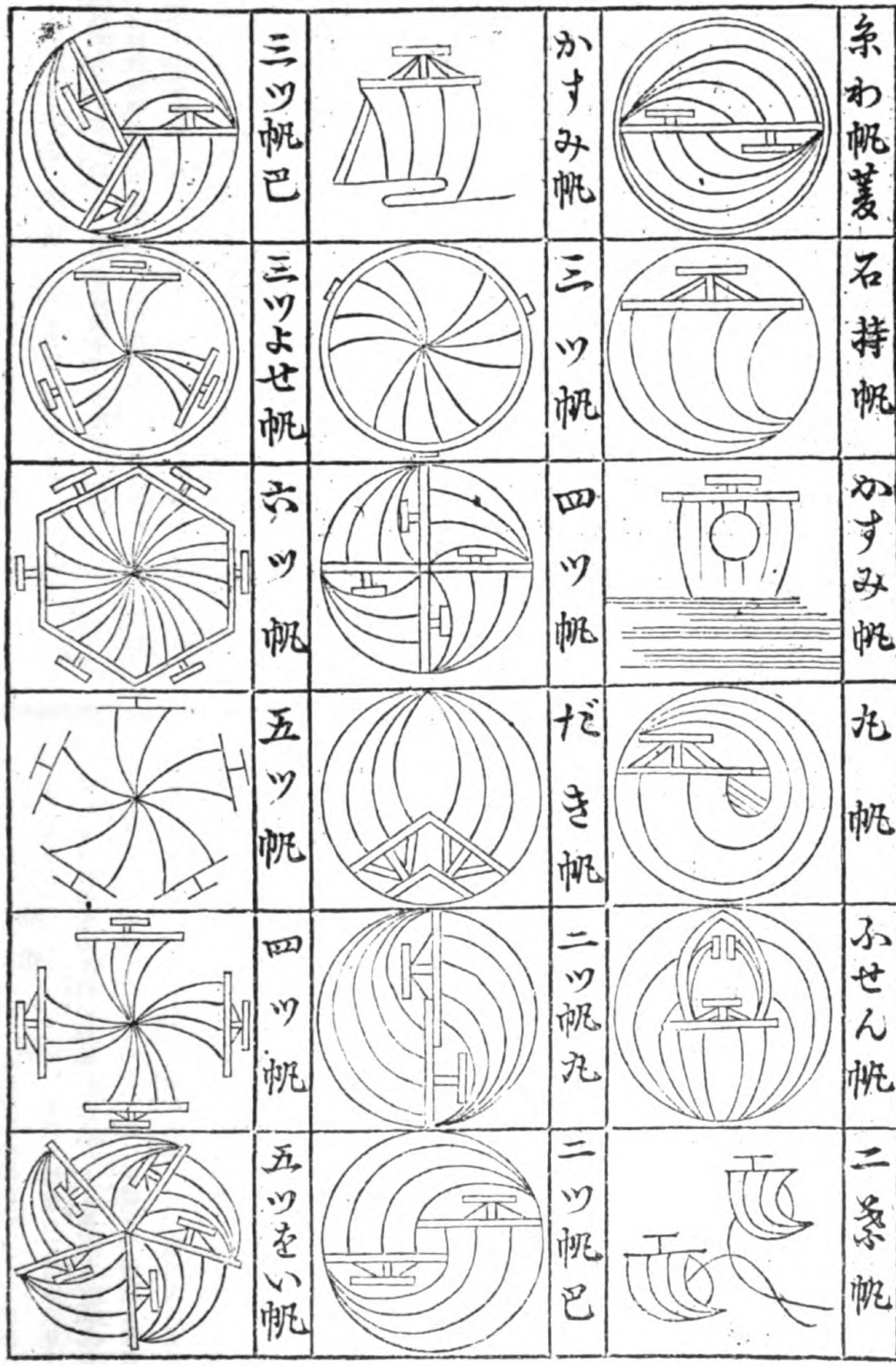
△裲襠の事

うちかけは中古の小袿の餘風にして、もと身なりの惡しき所を掩さんとて着用したるものが、遂に婚禮等の禮服となるに至りしものなり、其の初めは足利時代にて、德川氏に至りて大成し、今日も尚ほ其の遺風あり、昔は綸子、繻珍にて作りしが、今は多く綸子を用ゐ、次は縮緬にて、稀に繻珍を用ふ、又繻子、紗などを用ゆることもありて、これには縫取をなし、或は白紗ならば彩色にて風景花鳥などを描き、金箔を置くなどす、綸子、縮緬などは單に模樣を金絲又は色絲にて縫取りにするか、又は友禪に模樣のあらましを染めて之を金絲又は色絲にてあしらふ、又模樣の附け方には總模樣、中模樣、高裾模樣などあり、袖も振袖、留袖何れも用ふ、其他定紋を附くるもあり、附けざるもありて樣々あり。

△狂言の事

能の間に行ふ諧謔の演技にて、其の起原は遠く神代に在りて、天宇受賣命より始まる、奈良平安朝の頃猿樂と稱せしものが眞の狂言なれども、其の今の風となりて發達せしは足利時代に在り、故に其の全體は全く足利の世の風俗を模し、啻に其の當時の樣を知る便あるのみならず、又文學上の價値も少なからず。

帆の意匠


糸わ帆菱
かすみ帆
三ツ帆巴
石持帆
三ツ帆
三ツよせ帆
かすみ帆
四ツ帆
六ツ帆
丸帆
だき帆
五ツ帆
ふせん帆
二ツ帆丸
四ツ帆
二条帆
二ツ帆巴
五ツをい帆



追懐記

未央柳

夕陽はもうすつかり沈んで西の空の美しい色彩も名殘なく消えた。水の樣な大空にぬか星が一つ二つ、光淡く瞬きしてゐる。涼しい風は時々縞蘆の葉をサヤサヤと鳴らして、鬢の後毛を弄ぶ。泉水に蛙の聲が絶えつ續きつ。

こんな靜な夕、私、獨離座敷の緣に立つて暮れ行く空を眺めてゐると、妙に友戀しくなつて過ぎ來し方の事共がマザ〱と胸に浮んで來る。

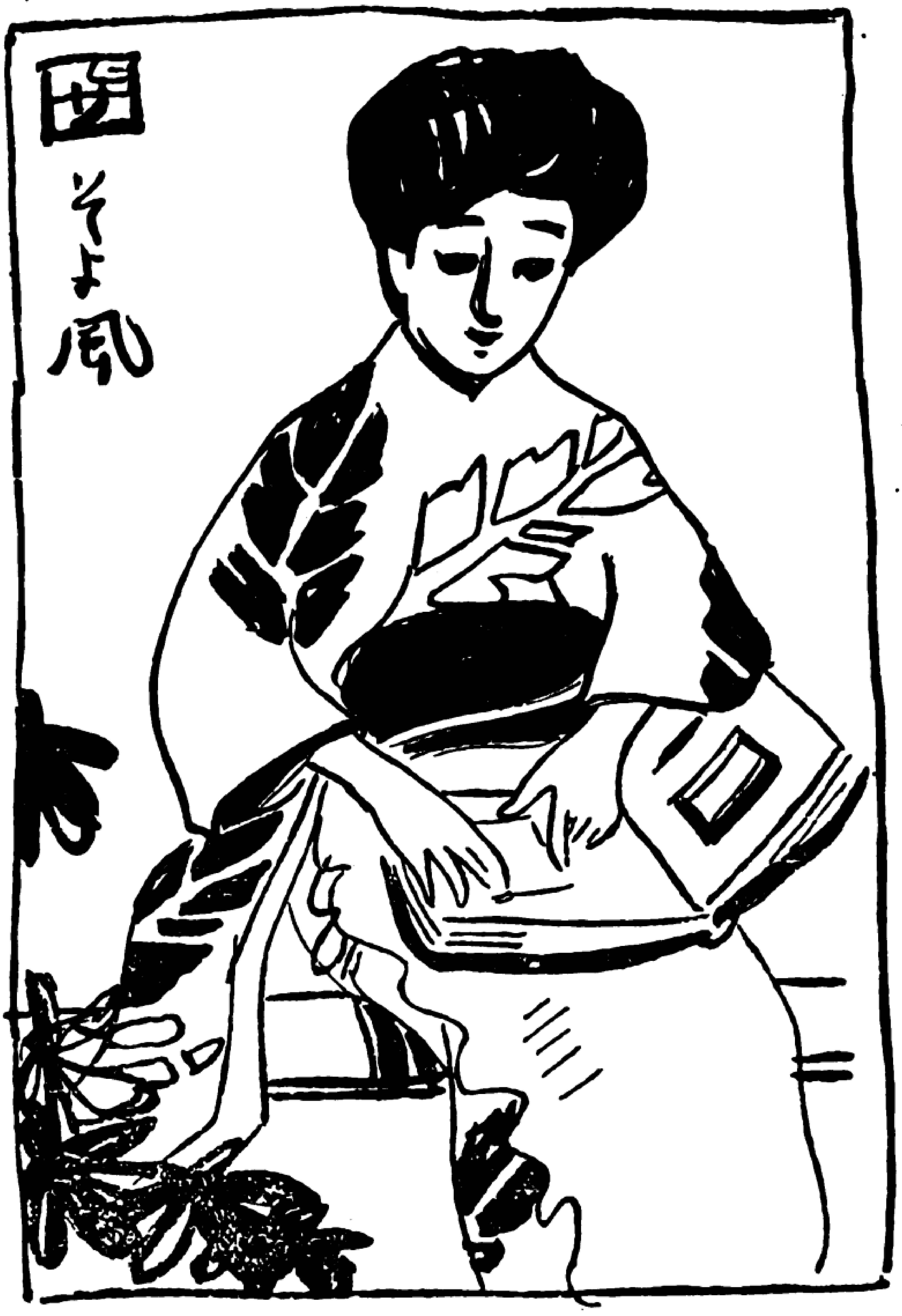
母校を卒業てからもう五年、同じ寄宿に一つお釜の御飯喫べて、泣いたり笑つたりした大勢の友達は、どうしてしまつたらう。同じ級の人達さへ、初二三年は囘文も廻して、轉任した事の、辭職した事の、お嫁にいつたの、赤ん坊が產れたのつて、互に知らせ合ひもしたれ、此頃ではそれも絶えて、極々親しい二三人の外住所さへわからずなつてしまつた。同期卒業三十人の中今でも小國民を相手に勤務で在つしやる方もあるだらう。其人々も今頃は夏期休暇になつて、各がしい行李整へて故鄕にかへられ、父母の慈愛に浴して、命の洗濯してるだらう。斯うして遠く嫁いで來て、嫁と名のつく境遇に立つてゐる私は、世間並の氣嫌氣苦勞をなめて、日に增糠味噌臭くなる許、季は夏休に入つても昔の樂を味ふ事はもう出來ぬ。外出の折々大きな行李と同車して、上野や新橋に急ぎ行く學生を見ると、かつては自分もかうした樂みを味つた事もあつたにと嬉しさうな車上の人を羨しく思ふのである。あゝあの無邪氣な處女時代、共に笑ひ共に學んだクヲスメートの君達も、今はや何處にどうしてゐらつしやる事か、それ

にしても想起す五年前、思出多き彼の年の夏休よ！丁度學校を出た年でした、思はぬ處に赴任させられた私達も、思つたより育英事業の任の重さに堪へかねて初めての夏休をどんなに待つたでせう、一學期の修業式が濟むかすまぬに、早くも任地に背見せて、父母の懐に走りました、走つた連中は其なつかしい故郷に根が生えたかと思つたら、それでも休暇前の約束を忘れず、留ること十餘日、離れがたき父母の膝下を去つて、大なる抱負持つて母校の地に出て來ました、そして環さんと君さんとが自炊してゐる家へ押し寄せました、押し寄せたは私を先登に鈴さん、美津さん、由香さんの四大低氣壓それに環さん、君さんを合せて都合六人の氣儘者が集つて、一家族作り、この一夏を過さうといふこゝに、滑稽劇の幕を開いたのです此六人は級の中でも仲好、皆自分免許の向上心の強い人達、來年の春は是非とも上京して、お茶の水の最高學府に螢雪の功を積む身とならねばならぬと、鼻息荒く、未來は天晴れ天下に鳴らす女子教育家をもて自任する野心家の面々、畢竟かうして短い夏休をさいて出て來たのも、其受驗準備に母校の先生について勉强せんの目的だつたのです、目的は大そう結構でしたが、眞目面に勉强する人はまづありませんでした、何しろ若い人達が六人もよつたのですもの、眞目面にいきやう筈がありませんわ、一體環さん達のこの家は、母校のK先生の裏座敷で、可なり廣くはありましたが、六人の雲岳女史を容るゝにはちと容積が小でした、すぐ前に精米所があつて飛んでくる油煙で足の裏の眞黒になる家でした。

母屋の主人のK先生は、女の樣に氣廻しをしたり、眞綿で首締める的の言許仰る方、それは〳〵氣むらな方だつたので、いつか時が環さんへの手紙に「油煙飛び込む天氣やの裏座敷にて環さま」と書いてやつたら、もう皆さんがお天氣やと綽名附けてしまつたんですもの。

兎に角今迄環さんと、君樣と、靜かに住みなし給ふた家へ、四人も押しよせたんだから、其混雜つたら、

御飯の時になると、いつも誰かが笑せて、可笑がりの私など、半分喫べてやめたるも二度や三度ぢやありませんでした、お茶碗が足りなくて、茶呑茶碗を持ち出して、飯事見た樣な眞似をしたり、御飯を山に盛つて人を困らせたりしました、三人づゝ交代で賄番、隨分珍妙な副食物が出來ましたよ私と鈴さんの當番の時、けふは美味いサツマ汁して上げますなんて吹聽しといて、おつけのお鍋を焜爐



に架けた儘、浴湯に行き、臺處の事なぞとんと忘れてうで蛸の樣になつて歸つて來たら、サア大變、家中がプン〳〵こげ臭い、驚いて臺處へ行つて見ると焜爐の火は灰になつておみお汁はすつかり蒸發して、實が焦げついてゐるぢやありませんか、お汁のお焦げ！なんて前代未聞ですわねえ、君さんの時にはよく舌根振動以上のライスカレーを御馳走になりました、周章やの美津さん椎茸を毛蟲と間違へて折角私が拵へた鯛のお吸物

を、皆捨てゝしまつたり、毎日こんな事ばかり、晝間は私と鈴さんオルガンとヴワヰオリンで越後獅子を合せるのだとてプー〳〵鳴らす傍から、君さんがませ返す其賑さつたらお話にならない位。

寢てからが又一さわぎ、あちらの八疊とこちらの八疊とに二つ蚊帳を釣つて三人づゝ寢む「一寸もうそちらお寢になつて？私の方蚊が入つて寢られないの、困つちまふわ、そつちへ避蚊に行つてもよくて？」。

「あらさうお氣の毒樣、こつちは蚊なんぞ一匹もゐませんのよ、今靜に御寢なる處なのこつちへなぞ入らしやると大變よ保護汁くつゝけますよ」「え保護汁？」「ええ今度私發明したの私の身體は皆さんが傍へ寄り附かぬ樣に保護色ぢやなくて保護汁つてもの分泌するのよ」「へえどんなもの？」「ホヽヽ君さんだまされちやいけませんよ鈴樣のそれ汗の事よ」「アハヽヽ振つてるわ保護汁だなんて理科の方はちがつてね」たわいのない事云つて眞に眠るのはいつも十二時過ぎ。

夜中に向の蚊帳で蠟燭ともして蚊軍の燒打が初る、その中に蚊帳をはづして逆にして振ふといふさわぎ。

環さんと鈴さんと髮を洗つた晩でした草木も眠る丑三つ時、突然「アレ・・・」と美津さんのけたゝましい叫び聲、ビックリして目を覺すと寢衣姿の美津さん緣側に手洗の柄杓投げ出してあたり一面水だらけの中に震へて立つてゐる「何うしたの？」と云つても返事もしないそこへ丈なす黑髮を白衣の肩に垂れた鈴樣が、「何？」としらばくれて暗の庭から上つて來た、よくよく詮議したら先刻鈴さんが便處へ起きた時庭に螢が飛んでたので取りに下りた處へ丁度美津さんがまた便處へ起きたので洗髮に白地浴衣を利用して一寸美津さんをおどかして見たんだつて果ては大笑ひ。

敎壇に立つて兒童に對する時は、一廉鹿爪らしく先生樣振る連中も、斯うなつてはまるでもう子供、彌次喜多以上の滑稽は毎日演ぜられました。

こんな風で誰に遠慮もなく、放逸な日を重ぬること二週間、或日鈴さん口角泡を飛ばして、幾何の證明をしてゐた時、鈴さんのお家から御父上が御重病だとの

知らせが來たので、鈴さんは俄に面を曇らせ一、早速歸郷されました。門の前で由香樣は車上の鈴さんのお手を把つて、「ねえまた冬休に必といらつしやい、御一緒に勉強しませうからねきつとよ！」と仰つたら「え難有うだが私もう目的も捨てなきやならないかもしれないわ父の病氣が再發しちやもうとても……」後は消えて涼しいお眼には露が一ぱい……車の見えなくなる迄見送つて内に入つた皆は齊しく無言で坐は白けた。



白雲の嶺もくつれて秋風にたなびく空となりにけるかな　（直好）

あゝ鈴さん鈴さんは冬休にもう此所へいらつしやる事出來ないかもしれぬ鈴樣の母樣は繼母高師の志望なれど母樣大反對で早くお嫁にやつてしまつた方がいゝと仰つたのを無理に父樣に御願して今度も出ていらしつたのだからもし父樣の御身の上に萬一の事もあれば、鈴さんはほんとに氣の毒

だとその時私は思つた。

滑稽劇の花形役者、馬鹿騒ぎの張本人たる鈴さんが去つて何だか淋しくなりました其中夏休も終に近づいたので私達は冬の休をかたく期して各々任地にかへりました。

あゝかうして一夏を笑つて暮した人々の其後はどうなつたでせう。高師入學試驗も迫つた冬休、世はおめで度いお正月だと遊んでゐる人々を他處に見て私は再び環さんを訪ひました、靜な裏座敷に机にかじり附いて今は笑談も云はず勉學に餘念ないのは、環さんと美津さんきりでした、鈴さんはとう／＼父樣が歿つて御志望を捨て涙ながらに、戀しい母樣の御機嫌取つてゐらつしやるとの事、鈴さんの手を把つて「冬休に必とよ」と仰つた由香さんさへ母樣の永のお病の看護者が他にない處から殘念だが年來の望を捨てたと云つて來た、一番よく笑つた君さん迄が病院に痛む胸を抱いて呻吟してゐらつしやろうとは……。

それもこれも五年昔の夢と消えて、又しも青葉の蔭なつかしい、水の邊戀しい夏休の季はめぐつて來ました、東都幾萬の學生は一學期の成績表を土產にして嬉しい故鄕に歸つたでせう。

あの時の六人の中で、初めからの素志を貫徹したのは環さん許、私は入學試驗の關門を前に控へて、足の病氣を病み、見事躓きました、其後は只世の處女の通るべき路を平凡に歩いてゐましたが、今は母校の地を遠く離れて、人に侍く身、重い丸髷傾けて男物の衣服に針を運ぶ此頃、表面はまづ平坦な人生行路を辿つてゐます。環さんは此四月多年お茶の水校風で磨き上げた御身の双肩に新に得給ふた〇〇高等女學校敎諭兼舍監長といふ嚴しい名と責任とを負ふて、東都を御去りになりました。今頃はどんな態度で御得意の腕を揮つて御在でせうどうぞ斯道の爲め折角御盡瘁なさいますやうに。

御氣の毒だつたは君さん、あの星の御眼、月の御眉美しかつた俤を只寫眞に留めて、二十三を一期に今年の正月再發した胸の病にあへなくも仇し野の露と消え

給ふたのです、あゝあの御歌
里川に笛の調を流しつゝこき行く舟のぬしやそも誰
が
歌會の席に宗匠の君のめで給ひしあの御歌はこの小
枝が終生の偲び草となりました。
あれつきり御目にかゝらないのは鈴さんと由香さん
多年の志望をすてゝ思はぬ人に嫁ぐ位なら、死んだ方
がいゝとまで仰つた鈴さんも、其後良縁に結ばれて今
は岡山とやらにスウキトホームの女王、可愛ゆい方さ
へ擧げ給ひて、樂しい月日を送り迎へてゐらつしやる
とか。
父も母もない私なぞあの時、高師へ入つて今頃何處
かの學校にオールドミスで教鞭を採らうより、かうし
て頼むべき人に頼つて、世話女房で暮す方がむしろ幸
福だつたでせうと、此間の手紙にかいてあつた。私と
一番仲よしだつた由香樣からは、去年の秋こんな手紙
が來た。
「――不幸の子は何處まで不幸なんでせう、あの年母
に別れた私は、まだ其涙のかわかぬ中に、父に肝臓癌
を病み附かれ、入院もさせたりいろ／＼手を盡しまし
たが、終々去八月の十五夜の晩、私共子供五人を殘し
此世を見捨てゝ永き眠につきました、弟は一昨年七月
母に別かれ本年六月工場の失火災に遇ひ八月父に死
なれ、四年引續いての商業は失敗し、兩親が數年間の
各處病院あたりの比較的莫大の醫藥費と火災の損害と
に傾いた家運の挽回策に、可惜若き盛を日々に瘠せ細
つて行きます、して私は主婦の役目で及ばずながら弟
の片腕となつて居ります、家道の整理も少し出來、弟
に嫁でも迎へましたら其後の私はどうなりますか……
其昔やれ高師の、上京のとさわいだ私は、今また拜金
主義（語弊があるかもしれません）になりました、年
來の志望をもやりとげえなかつた私は、今花の都の學
舍に、虚榮の夢貪らうより可憐な弟妹等と貧に苦し
み得らるゝの幸福をよろこんでゐます、今年小學を卒
業した妹も、父の死に高女入學も沙汰止みとなつて、
十四と申す子供上りにやはり家計の苦勞を共にしてゐ

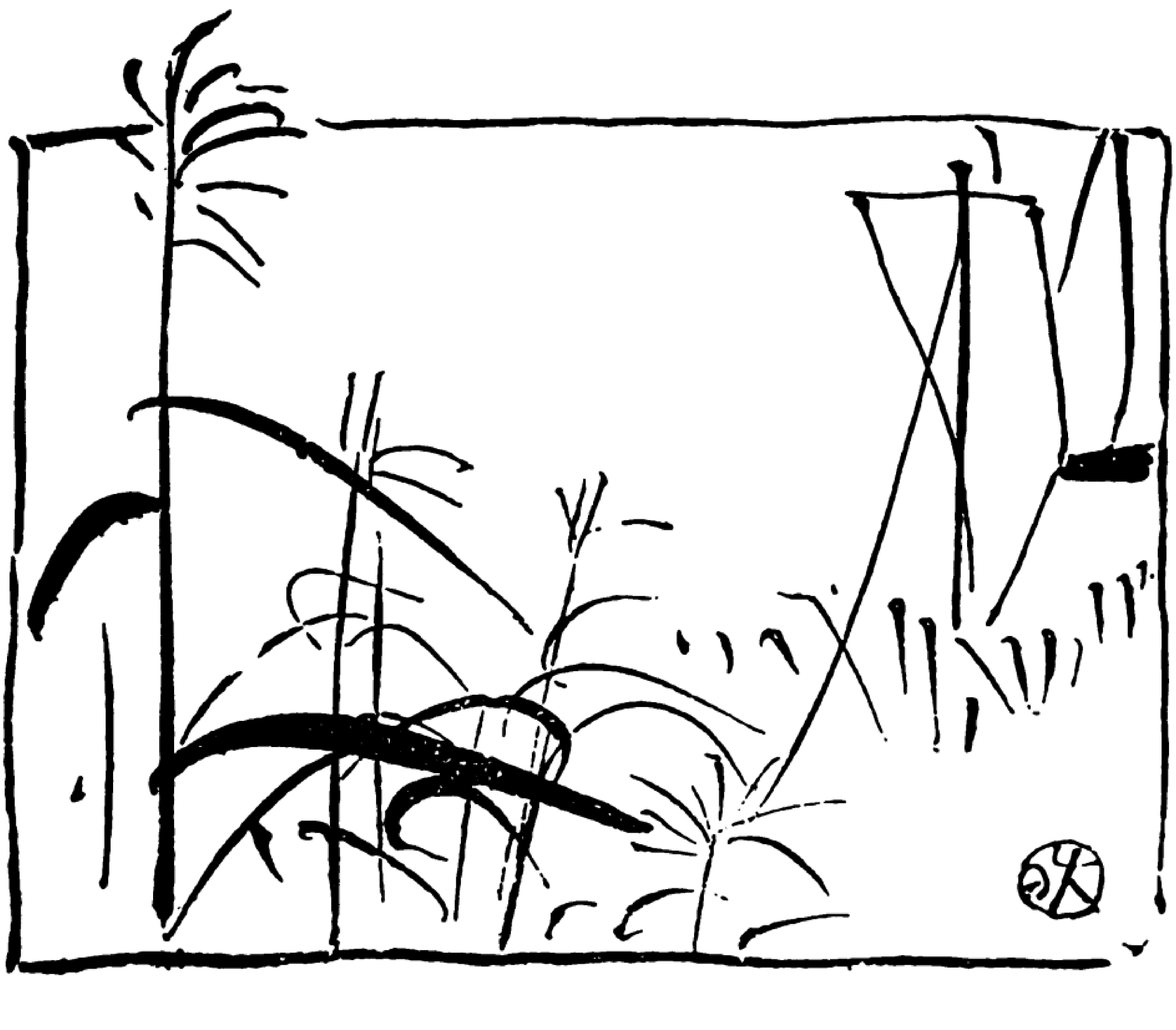
ます。

　こんな事は考へると悲しくなります、深く〳〵考へると悲んでゐる場合でない事がわかります相應に奮勉してゐます、御心配下さいますなやれる處までやるつもりですから？……

　今年は栗がなりました、妹は毎朝拾ひに參ります、私も今日は氣晴しに一日山をかけずり廻つて隨分疲れましたがそれでも獲物が七升といふのですから、私共にしては大成功です、小さい妹や弟は明朝も行くのだつてもう寢んでじまひました夢はもう山に分け入つてませう、父母を失ふた貧苦の家の中にも山里は又かういふ慰藉法もあります、姑息ではあれど……」と、

噫、可愛さうに由香様は棟傾いた一家を一身に脊負つて立つて未だ二十三どいふ若い身空を犧牲として風荒るゝ世界の激浪中に奮闘していらつしやる、あのふくふくとよく肥つたお顔はどんなに面窶れ遊したらう、

　運命の神はかうして私共を弄びつゝあるのです、此先十年もたつたならどう變化して行く世の中やら・





夏の超然生活

撫子

よく寢入てゐる坊やの夢さまさじと靜かに〳〵雨戸を繰る。流れ入る朝風にゆらめく蚊帳、曙の光は淡く天使の樣な寢顏を照す。

バケツを下げて水くみに行く。朝靄ふかく立ちこめて素足にハラ〳〵露が散る。濃い綠の無果花の葉のおほひ被さつた井戸の水、さながら玉と澄んでは見えるが、これはホンの雜用に使ふばかりで、大森では飮料水は多摩川の水源から船でもつてくるのを買つてゐるのです、桁に四杯二つのバケツにくみ入れると、流石に息が切れる、然し朝のほどの淸らかな空氣を、自然にする深呼吸は、いかにこの身體を健康にしつゝあるか……

御飯がふき出すと夫もお目覺め、すつかりお掃除して掛花活には瑠璃色深き桔梗の一輪、夫は金魚の水をかへていらつしやる。ソロ〳〵むづかり出した坊やにお乳をやつて居ると、魚屋がきた「お早う御座いッ、鰺にわかなご大刀魚めばち、まぐろにきわだまぐろ、鯔に石首魚、鰶に鮑背んなピン〳〵してまさあ」いせいのよいこと、同じ商人でもあの八百屋の樣に猫撫聲で「今日は新芋に茄子にエー胡瓜にエー茗荷の子に牛蒡と……とエーあとは白瓜にコンニヤク、そんなもんで御座いますね」なんてよどみ勝ちに言つてたんぢやあ、何だかお魚が腐つてゞもゐるやうに思はれるからね。鰺に鮑をとつておく。

朝食後坊やの寢てゐる間に、久し振りで束髮にする前髮ゆらぐルイサ卷、銀の横挿あつさりと。かういふ髮を結ふとまだどうしてもミスとより見えないつて、お世辭とは思ても賞められて見れば、滿更惡い氣持

もしないから、お襁褓の洗濯一山かゝへて、裏口から出ると、早くも近所の内儀連が池のまはりにしやがみ込んでジヤブ〱やりながら、甲高いおしやべりをして居る、去年の洪水のくづれのあとを埋めるので、土を取つたあとの水たまり、直徑九間餘の半開扇形、いつも水がなみ〱とたゝへて居るので、これ屈强の洗濯場と、この近所ぢや皆んなこゝまで御出張なんでせう、ですからもうお天氣のよい日はさしもにひろき池の端が、丸髷、櫛卷、エボジリ卷、ウキンナ、ローマなんてハイカラなのはまさかに見えはしませんけど、そりや隨分にぎあいますよ。え、その新レコードをつくつたのは誰ですつて、聞くだけが野暮ですわ、ホゝホ、うちぢやアねお襁褓が池と呼んでゐますよ、命名者は良人。

ところがこゝに一つ滑稽なのは、うちの西の窓からまつ直に見える荒物屋の二階に居る人で、このおむつが池に釣竿垂るゝ今太公望がおはしますのよ、この暑いのに一日かゝりで鮒の一尾もとれたら大漁の方でせうに……

朝から晩までの立ちつゞけ、他人事ながら御苦勞樣で、もう歸つたかしらと、窓を明けて見ると、白絣に黑の兵兒帶チヨキンと結んだ肥り肉の、後姿がヒタと池畔に吸ひついた樣に――おまけに妻君が子供を負つて、始終その近所をウロ〱して居るんでせう、この夫にしてこの妻ありとます〱敬服してしまひますわ。良人は『ア、始終妻君に監視されちやアたまらんな』と仰る、『私なら監視どころか、引ぱつて家へつれて來ますわ』といつて笑つた。

洗ひ上げて竿へかけると、もうお午飯。午後緣側の寢椅子に横たはつていらしつた、夫はいつかスヤ〱ふき込んだ廣緣に、軒端の梧桐の若葉がうつつて、サツト吹きこむ靑嵐お好きな麥湯の冷ましたの、冷水の中へつけて置く。

あらまたお向家の謠曲が始まつた、これにはさすがの私も閉口してゐますのよ、だつても坊やがおびえて泣くのですもの、月もなき宵、植込の奥深く、乾とし

て起る素謡の聲なんていふと、いかにもいゝけれど、垣根もろくにない、小ぽけな家で、下手なところへ濁々たる東北音でこの日盛りに蠻聲張あげられちやかなはない、アヽ〱子供があんなに泣いてるのに、『我アれこそは、平の知盛幽靈なり』もないもんぢやありませんか。

添乳して居ると空が何時の間にか曇つて、サツと冷やかな風と思ふ間に、沛然たる驟雨、降るわ降るわ、ゴロ〱〱

なか〱に暑き松の下凉み轟き清水を結びくらして（永　好）



ピカ〱〱大急で干もの取込む、雨戸を閉める、臺所の引窓しめにゆくと水口からころがり込んだ怪物、ピツタリ飛びのいてよくみると、ヤア森さんが頭から妙なものをかぶつて「あゝ驚いた驚いた」「アラさう武者ぶるひすると皆んな雫が散りますよ、さあ手拭を上るから頭をおふきなさいよ、汗と雫と涙を一緒にふいて、まだ息を切つていらつしやる。例の通り網打に行つて降られたんだと、この方いつの頃からか網打に凝り出して、毎日お役所が退けるとドンック布子の漁師浪七とでも言ひさうないでたちで、鯨でもとるやうな息込で出てゆくけれど、いつもいつもの精進日和、まだ蒲鉾や目ざしのお土産無いのが目つけもの、おむつが池の釣人と好一對なのです。とりあへず良人の單衣をかして上げて、手製のオ

レンヂゼリー氷で冷して上ると「咽喉がかわいてるので非常に結構です」とまたゝくうちに玻璃鉢をからつぽにしてしまふ。やがて青空が見え初めて、カラリと霽つた爽快さ、森さん籠の鳥でも放された樣にさうさうに歸てしまはれる。ほんとにあの人は家にゐるのがきらひね、だからあの顏色つたら……

「蛇が居る／＼青大將が」ギヨッとしたが恐いもの見たさでつひ緣側へ出て見る。すぐむかふに、この間から轉地してる二十七八の髮を長く分けた肺の字さんらしいのが、棒切れでおさへてまわりを子供が取まいてワイ／＼いつて居る。お針のお師匠さんとこから、二三人物好きな娘連が出てきて逃腰しながら見てゐる。

夕食後美しい月に浮れて、庭に出るとバッタリ肩にトグロを卷いた蛇が落ちる……キャッと緣にとび上ると、坊やに犬を見せていらしつた夫が驚いて、振向かれる。浪打つ胸をおさへて見かへれば、アラ何のこと絲瓜がすべつて落ちたのでした。

誰が植ゑしともなく自然に生え出でし月見草に、吻長き蛾の繁く飛び來て、軒の掛簾まき上ぐれば、乳色の笠かけし卓上ランプの燈が、サッとながれて楢の葉末の水玉がほろゝこぼるゝ。

花壇の白百合露ながら採つて、佛壇へ供へたり、床へも挿す、髮結が來た。島屋形の大一番、淡紅色地へ波に千鳥を白く絞つた手柄、涼しげに綠したゝる翡翠の簪、合せ鏡の衿元がそげた樣に見える。ザーッとおとなりへ水屋が來たなと思つて居ると、お向家の水口が明いて「水屋さん家へも一杯。」裏の家から女中が駈け出して「水屋さん家へも入れて下さいな」わきのうちからも池の向ふの家からも「水屋さん暫く來なかつたのね隨分こまつてよ」「水瓶がカラ／＼よ」怨言交々、丁度女護の島へでも行つた樣に、水屋さんのもてる、ことおびたゞしい。ネヂリ鉢卷の大男。水桶をのせた車と方々の臺所の往來に、忙殺されてゐる、御多分にもれずうちでも昨日から飲料水缺乏を告げてゐたところなのでたのんで入れて貰ふ。

木陰に降る樣な蟬時雨今日もまた照りつけられるの

であらう。冷じいうちに浴衣二枚洗濯する。

午後夫は海水浴に。坊やはよく寝てゐる。子供をもつては却々書を繙む間も、筆もついとまもない寝てゐるうちだけが自分のからだ、いざやねなまし詩想をと、冷風通ふ縁先へ文机持出すと、戸外はガヤ〳〵と大變なさわぎ、出て見ると田辺さんの坊ちゃんがお父さんに手をひかれて泣顔してゐるそばには里の童が二三人「坊ちゃんどこいらだネ」「坊ちゃんほんとにぶつゝけたのかへ」と口口にわめいてる、聞いて見ると坊ちゃん風船買ひに家を出ると、青蛙がトビ出したので、手に持つてたお鏝を打つけたら、どぶの中へ落こつて見えなくなつたんだつて、さがして見つけたものには上るといふ小父さんの言葉に、さてこそかくは各々馳せ參じたわけ、とんだ青砥藤綱滑川の一場、おかげて坊やを起されてしまつた、夫もお歸り。今日のおやつは葡萄糖すつかり用をしまつてお湯へゆく。

派手なモスリンをするりと脱いで透き通る様な湯に身をしづめる鏡の前へ陣取て、百面相をやつて洗つてるのは米父さんのお妻さん、あの吝嗇坊のガリ亡と綽名のついた又



なつも早稲の蝉の聲にちるゆふ露すゞし杉のした道　（千座）

兵衞さんを、ころりとさせた腕前、美貌、髮の毛の一筋は大象をもつなぐとかや、したゝるやうな根下りの丸髷思切つて大きな雲絞の浴衣に、博多の帶の空解を氣にしながら、歸つて行く、入違ひに來たのは戀中村の濱路續いてくるのもくるのも衿元白いあだものばかり、大森ぢや今時分お湯にくるのは皆んなかういふ連中ばかり、だから夜の込み樣つたら素敵なもんだ、まるで汗の湯へはひる樣なもの、それがいやだから私はいつも早く來る。

坊やを先に洗つてやつて、さていう〳〵とお磨きにかゝる、他人は子供をもつとひどく老込んでしまふけれど、私はかへつておしやれをする、…マアあの方がお子持」「とてもさうは見えないわネ」なんていふのが耳にはひると、何となく愉快で……襟白粉をこく、ポーツと上氣した頰の色クツキリときわだつ生え際我ながら美しいと思ふ。湯氣にむされた軀がいつそよくふくらむ、よくあたゝまつて繪に畫いた桃太郎の樣になつた坊やを抱いて湯屋を出る。晩餐後端居して野面を渡つて聞ゆる草笛の音に、聞とれながら見上る空に蝙蝠がつひ〳〵と飛ぶ。

地主さんの裏庭に竹の枝が立つて、五色の紙がガサガサと夕風にそよぐ。おゝ今夜は七夕ね「ふりさけ見ればうつし世の定めは神のいましめぞ。破りて合ひし牽牛の銀河はてなき天つ空。棹さすものは女神とか、銀の沫や玉の梶愛歌はいづれほがらかに、あゝ永劫に朽ちずてふ愛の心は天上の。榮に彩るかげにして…………」「オイ〳〵何言つてゐるんだ」いつのまにか夫が後に立つてゐらつしやる「海岸へいつて見よう」坊やを抱いていらつしやるあとを空氣草履つゝかけて急いで追ふ。

寄せてはかへす波がしら、斜に射れる月影に劃然と水と別るゝ眞砂地や、紅紫の裳裾を風に流して、ゆき交ふ人々は、いづれは都の貴人が、暫はこゝを避暑の友、夏はこれより賑ふなり。烏賊つる船のたく篝が、水平線に四點五點きら〳〵と――詩人の想像する漁夫の妻は、この火を見てわが背子いかにと打案ずる……

雲の意匠



……が磯の漁村の家婦は子供を口ぎたなく罵りながら玉蜀黍の横かじりが眞に近いのです實際………歸りに横町の二階屋から、薩摩琵琶の崩れの撥音嘈嘈切々ハッキリうつる影法師。

坊やを寢せてから夫と二人露臺に凉を入れながら四方八方の話、籠に盛つた林檎をとつてする〳〵と剝く指の根に大きい眞珠が凉しう光る。花壇をめぐつて來た風が絕えず縺れて床しい花の香を漲らしてゐる。

狂犬病の危險豫防

狂犬には三期の症狀がある。第一期は沈鬱狀態で、今迄見當等と一緒に活潑に遊んで居つた犬が、俄かに元氣が衰へてて來、緣の下や廊下の隅などの薄暗い箇所に潜み、且つ食慾も減ずるのである。第二期は狂躁狀態で一種の相貌が變り、且つ音色も平生とは異つて來る。例へば上つて居つた尾が垂れ中ば口を開き舌を出してだら〳〵唾液を流し、顏面が攣み眼が充血し步調が亂れ、擧動が不穩になる等である。第三期は麻痺狀態で四肢が痺れて終に斃れる。家犬を有する家庭に在ては、第一期の症狀が分つた場合は直に獸醫の手に治療を托するのが急務である。吾人に取つて一番危險なのは第二期症狀時代で、人間に咬み付くのも即ち此の躁狂時代である。

危險時代(躁狂時代)は視力が弱て居るから、平生の樣に其所彼處に眼を配らずに、眼前に電柱が有らうがポストが有らうが、將た又た人間が居らうが、一向頓着せずに、其等の物にぶつゝかり乍ら一直線に走るのである。加之凡て己れの眼前に現はれて步行の障害となるものは、人間と云はず、他の動物と云はず電柱ポストと云はず、何でも角でも咬み付くのである。故に狂犬に逢ふた場合は決して狼狽せずに心靜かにそつと避けて居るとよろしい。此方で聲を揚げたり途を遮つたりすると氣が付いて却て咬み付くのでそつとさへして居れば知らずに通り過ぎて仕舞ふ。就中子供衆には此の消息を敎へて置き狂犬らしき犬に出逢ふた時は前記の樣に身を避けしめるやうに注意をするが肝要である。狂犬に咬れたなら出來る限り一刻も早く病毒注射を受けぬと可けない。東京市では今の處芝白金の傳染病研究所一ヶ所のみで地方では長崎、福岡、熊本、大阪、千葉の數ヶ所に止まることゝ記憶して居る故に咬れて直ぐと病毒注射を受け兼ねる塲合は取敢へず近所の醫師に就いて咬傷の部分を切り、其處に硝酸銀消毒なり若くは電氣燒灼なりを施して貰ひ、然る後ち便宜の個所に往き本式の注射治療を受くることにするが宜ろしい。

狂犬の病毒は唾液に混つて居るので、咬むと其の病毒が唾液と共に齒牙を傳つて咬傷の部分を侵すのである。次に咬れた人の狂犬病の發するのは、病毒の腦を侵した時で、而して咬れてから腦に達する迄には、普通彼此三十日位かゝると見てよろしい。其れから注射の方は、輕度の分量から始つて、段々と强度の分量に移るのであるが、之れも注射し初めてから凡そ二十日經つた後ちに藥力が腦に及んで行くのである。右の次第であるから例へば咬れてから三日目に病毒注射を施したとして、二十三四日目には藥力が徐々と腦に及んで、全身病毒に慣れ、自然狂犬病に對して免疫となつて居るから、後から病毒が神經を傳つて腦に達しても其處を侵すとが出來ないと云ふとになる。併し狂犬病は他の結核病同樣潜伏するものであつて、其の潜伏期は四五十日から百日迄で、中には短きは二十六日、長きは十七年など云ふ特例もある其れ故甲乙は狂犬に咬まれてから百日餘も經つけれ共未だに發病しないから危險であるまいなどゝ言つて棄て置いてはならない。又狂犬病の發病狀態は腦膜炎に類する塲合もある。(醫學博士栗本東明氏)

奥様の心懸●●●家庭の平和

花嫁
主人は宅の料理は不味い〳〵と申ます。妾も此内へ参りますまでは料理なんか致した事は有りませんがドーシタラ主人が喜ぶでせうか心配で成りません

料理通
素人の家庭では御料理を成さるに大抵主に砂糖をお用ゐでせう牛鍋や鳥鍋を成さるにしても砂糖は鍋に(こげつき)ますが其代用に味淋を使へば其心配がなくて第一、味は牛屋や鳥屋でお喰べになると同様においしく戴けます魚肉や其他総てのお菜を煮るにしても味淋を使へば味は料理屋の様に甘味たべられます上等味淋は流山の**万上味淋**に限ります瓶詰、樽詰も有りますから是非御試めしなさい御主人も必ず御喜びになる事請合です。

女(その一)

双楓書樓同人編

名流百道樂

百種の道樂は則ち左の如し

●西行道樂 ●鶯道樂 ●人形道樂 ●擔ぎ道樂 ●古篆道樂 ●枕道樂 ●煙草道樂 ●新聞道樂 ●散歩道樂 ●文明遺品道樂 ●陶器道樂 ●五道樂 ●蛇道樂 ●小説道樂 ●手紙道樂 ●會席付道樂 ●刀劍道樂

●火事道樂 ●古錢道樂 ●慈善道樂 ●繩暖簾道樂 ●謠曲道樂 ●脚本道樂 ●酒道樂 ●解剖道樂 ●馬道樂 ●禪學道樂 ●俳句道樂 ●讀書道樂 ●湯吞道樂 ●古池道樂 ●園藝道樂 ●射的道樂 ●衣服道樂

●曲繪道樂 ●詩集道樂 ●音曲道樂 ●羽織道樂 ●食道樂 ●尺八道樂 ●歌道樂 ●古物道樂 ●繡眼鳥道樂 ●盆栽道樂 ●不思議研究道樂 ●茶の湯道樂 ●小皷道樂 ●繪畵道樂 ●都々逸道樂 ●史學道樂 ●何でも道樂

●蟬取道樂 ●和歌道樂 ●花火道樂 ●自然道樂 ●玩具道樂 ●武器道樂 ●相撲道樂 ●圍碁道樂 ●張子細工道樂 ●腰掛道樂 ●目白道樂 ●舞道樂 ●書生養成道樂 ●油研究道樂 ●系圖道樂 ●刺繡道樂 ●花見道樂

●八百屋道樂 ●外遊道樂 ●太公望道樂 ●水浴道樂 ●オシャベリ道樂 ●犬道樂 ●鹿の角道樂 ●女道樂 ●造庭道樂 ●轉氣道樂 ●刀劍道樂 ●妖怪研究と行脚道樂 ●甲冑道樂 ●野球道樂 ●書畫道樂 ●南畫研究道樂

●撮影道樂 ●皿道樂 ●芝居道樂 ●袋物道樂 ●一中節道樂 ●山草道樂 ●樂燒道樂 ●萬道樂 ●作詩道樂 ●城道樂 ●和歌道樂 ●ヴァイオリン道樂 ●釣道樂 ●發明道樂 ●礦山道樂 ●下駄道樂

何人が何を好むか本書を繙かば蓋し意外の感あらん

洋裝四六判
總クロース上製
紙數五百餘頁
正價九十錢
郵税八錢

東京本町
博文館
振替東京二〇四番

女(るの二)

日本女子大學教授
笹木幸子先生著

年中行事 家庭儀式料理

菊判全一冊

定價壹圓
郵税拾錢

本書の著者も亦女子大學に於て實地教授せらる〻經驗と深き學識とを基礎として年中行事に關する儀式料理の事を詳述したるものにして前述の家庭の友と併せ見ば東西洋料理の全般に通曉して些の遺憾あることなし家庭に是非一本を備ふべき好著述と云ふべし。

鳩山春子夫人著

婦人の修養

菊判全一冊

定價金壹圓貳拾錢
郵税金拾貳錢

本書は鳩山夫人が深き素養と、廣き見聞とを以て婦人常識の修養を説きたる書にして、敢て新奇に走らず舊を襲はず能く其中庸を得たる好著と謂ふべし、之を讀みたらんには母たる人は育兒の教へを聞くべく社交の婦人は交際の術を學ぶべく各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか誠に得易からぬ婦道の木鐸といふべし。

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

醋酸需要の好季



醋酸は食酢製造業者に缺くべからざる最も有益なる理想的好資料なり。

醋酸は在來の釀造酢に比し極めて廉價且清新の風味を有する純良品也。

醋酸は醫藥用食酢用に適する純良品の外染色用製革用の工業品もあり。

醋酸は日本醋酸製造株式會社製品にて品質佳良今や輸入品全く杜絶す。

醋酸手引草と題する小冊子を刊行し需要者各位の申込に應じて贈呈す。

日本醋酸製造株式會社
一手特約發賣元

醫療藥品工業藥品問屋
(博) 合資會社 博愛堂
東京日本橋區本町三丁目
電話本局二八六番 振替口座東京八一三八

女(その三)

博文館編輯局編纂
明治四十四年

夏期休暇 小學生日誌



洋裝菊判
石版刷表紙頗美本
各冊口繪寫眞版一枚
挿畫數十個挿入

空前の好評は
三十五萬冊を
將に賣切んとす
殘部極めて寡なし

（定價）

▼尋常科第三學年用
▼同　第四學年用
（紙數每冊四十二頁）
正價各一冊五錢五厘
郵稅各一冊二錢宛

▼尋常科（第五學年用 第六學年用）
▼高等科（第一學年用 第二學年用）
（紙數每冊四十二頁）
正價各一冊七錢
郵稅各一冊二錢宛

特別割引

尋常小學三、四學年用

五十冊以上	一册送料共	金五錢八厘
百冊以上	一册送料共	金五錢六厘
二百冊以上	一册送料共	金五錢四厘
三百冊以上	一册送料共	金五錢二厘
四百冊以上	一册送料共	金五錢
五百冊以上	一册送料共	金四錢八厘

尋常小學五、六學年用
高等小學一、二學年用

五十冊以上	一册送料共	金七錢貳厘
百冊以上	一册送料共	金七錢
二百冊以上	一册送料共	金六錢八厘
三百冊以上	一册送料共	金六錢六厘
四百冊以上	一册送料共	金六錢四厘
五百冊以上	一册送料共	金六錢二厘

注意

一、臺灣、樺太、朝鮮、清國、送分は……………一册に付三厘增しの事
二、內地代金引換小包送分は……………一册に付三厘增しの事
　但臺、樺太、朝鮮、清國行、代金引換小包送りは…………注文者の負擔を輕からしめんため前記三厘增の外割增を爲さゞる事

女、るの四)

東京日本橋區本町三丁目
博文館
振替貯金口座東京二四〇番

少女百話

沼田笠峰君著

評判の『少女百話』が出ました。面白いお話、あはれな物語、あてやかな少女姿、無邪氣な笑ひ話、なつかしい思ひ出慕はしい面影、親切な教訓談など、すべて實際にあつたお話ばかりが、百題も集めてあります。讀んで面白く、味はつて有益な少女百話！　さながら紅白紫黄とり〳〵に咲き匂ふ花壇のやうです。苟くも少女と言はれるものは是非この書を一讀せねばなりません。

四六判美裝
紙數三百餘頁
口繪……石版畫
挿畫……凸版五葉
正價四十五錢
郵稅六錢

東京　博文館　本町

佐佐木信綱君著

歌學論叢

全一冊

洋裝四六判總布製
美本紙數五八〇頁
正價金壹圓
郵稅八錢

歌學の業は佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歷史を講ぜらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て『和歌と時勢』『和歌の將來』『歌學の根本』『上世の和歌』『歌格の研究』等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、『人麿と赤人』『貫之』『西行』『實朝』『景樹』等を論評し、或は仙覺以前の萬葉研究『戶田茂睡』等精細なる考證あり。或は『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又、『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるもの。其他、『萬葉集私見』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

女(ろの五)

女（るの六）

女(ろの七)

井上胡蝶著

生田流

箏曲新譜

最見易き琴の譜本

改訂再版 卷壹 定價金壹圓三十錢送料六錢、代金引換小包十六錢增海外代金引換小包三十四錢增

歌曲目次

四季の花 門松 鶴の聲 黒髪 六段 亂 八段 金剛石 夕顔 新高砂 越後獅子 千鳥 茶音頭 春の曲 小督の曲 以上十五曲

卷貳 定價送料共金壹圓十錢、代金引換小包十四錢增、海外引換小包三十四錢增

歌曲目次

春日影 朝外出 六段前歌 難波獅子 末の契 松竹 梅 殘月 秋風 八重衣 飛燕の曲 以上十曲

本書の特色

一、本書は各調子の合せ方を初め、音符休止符左右手法其他箏琴に必要なる事項は悉く記載し行文平易說明懇切を極むれば師に就きて直接習ふが如し

一、本書の樂譜は西樂に通せざる人にても容易に彈奏し得らるべく且つ全部音樂記號を附記しあれば少しも音符を解せざる人にても直に了解せられ自然の間に完全なる樂則を覺え得らるべし

一、本書の購讀者は萬一不詳等の節は返信料添へ發行所宛照合せられなば無料之が應答をなすべし

一、本書は西樂の譜記法を基としたれば記譜正確而も平易なり故に實用上箏の練習書として獨占權を有す

苟も箏を習はんと欲する人及び一度習ひて忘れたる人は必ず見給ふべきなり

發行所 福岡市外馬出一一〇三 箏曲通信教授所

最新發明 肺病 肋膜 新藥に就きて

女（その入）

獨逸ドクトル 高平氏報告（醫事週報二一七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱にも本藥服用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及實驗により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（姓名上住所姓名を略す）**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盗汗女子三年前發病症に末期重症の動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々咯血し非常に羸瘦す服藥壹週額潤なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週咯血やみ臥褥せしもの屋外に出で日光に曝をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を增加せり

●兵頭某 **肋膜炎**（咯血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體卅一歲男 [illegible]盗汗。咳嗽。頭痛。身體羸瘦を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治するが如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歷を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	奏効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
籠谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
岡崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして捨暴服藥するも副作用なく殊に**咯血**と其豫防に可驚効あるを以て醫藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むと共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す ●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく（貧者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代にて實ひ得らる、故是非一讀あれ會する處多からん、之れによりて全治の幸福を得らるべし

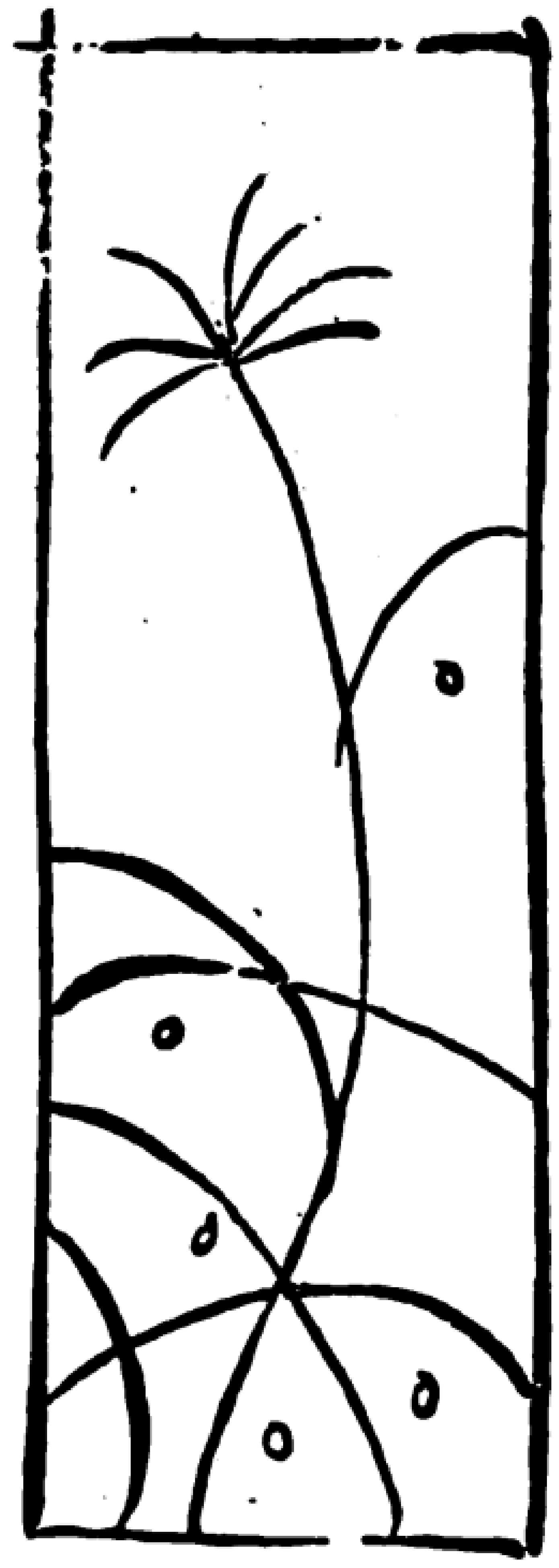
藥價

壹週 金二圓
貳週 參圓九十錢
參週 五圓七拾錢
四週 七圓貳拾錢
五週 九圓

東京神田竪大工町 療養院製藥所

村尾明治堂

電話本局參千七百五十二番（私書函無用）
振替口座東京壹四參壹九番（本局第三號）



婦人衛生の正しき手當

醫學士　望月寛一

△正潮と不正潮

女子が生理的に一定の發達をとげると、子宮から時を定めて血が下ります。之を學問上では月經といひ、普通には、めぐり、つきやく、經水などゝ稱して居ります。之れが起る樣になれば、女子は已に生殖機能を有してゐるものと見て可いのであります。其の血の下りるのは健康なる婦人ならば十四五歳の頃から太抵四週日毎に一度づゝ繰返されるが、人々の發育の程度、生活の狀態、其他人種の差異、又は氣候風土、或は文化の度に依つて一定はいたしません。熱帶地方の者は比較的早く之を見て、十歳前後で既に母として愛兒を膝に抱いてゐる者があるが、寒國へ行くとずつと遲れる傾きがあります。日本でも地方々々に依つて異なつて居るが、平均すると、初經の來潮する年限は大抵十四年と十ヶ月であります。そして其の來潮期は大抵三十年間持續するから、月經の全く終る年齢は大抵四十五六の頃であります、日本婦人に就て調べた結果を見ると平均四十五年七ヶ月强で終ります。折々くり返して起る、一經期間の排血量は一〇〇乃至二五〇グラムであります。其の持續日數は大抵四日から一週間が普通であります。排出する血液は暗赤色で、普通の血液の樣に出ても凝りません。之れは子宮や膣壁から分泌する酸性粘液並に粘膜細胞などを混入するからで、之れが生理的なのであります。若しも凝まつた月經がある時は、必らず或る種の病的變化を子宮に起して居るも

のと見て差支ありません。又あまり長く持續するのは病的變化を起して居るものであるから、早く適當な治療法を施さないと、知らず識らずの間に病氣を重らすことがあります。

△身體精神の變調

月經時に於て身體に現はるゝ變化について申せば、其の來潮する前は、生殖器の機能力は亢進するが、排血のすぐ前、或はいよ〳〵經水を見る樣になれば、段段に減退します。そして一般に精神的機能力も亢進します。即ち神經が兎角過敏となつて、物事に感じ易くなり、又精神は沈鬱し、平常顔面が櫻色でチラ〳〵して居る婦人も、其の天性の美を失つて、何となく不快さうな顔になります。又乳房に腫脹などを起す人や、體温の昇る人もあります。私の實驗した婦人は、其時期には必ず體温が三十八度から四十度に昇つたが、之れは病的のものであつたので、手術の結果全く癒りました。其他下腹部や腰が痛んだり、又は尿意頻數等を伴ふものもあります。又或る婦人は月經前になると必ず睡くなると言つて居ました。其他の五體の變化で之れに關聯して起る不快の症狀は色々あつて、人に依つて一定しません。中には不快の症狀の全く無い人も往往あります。

△不規則な排血と腫瘍

此の閉止期に近づくと、前に述べた樣に四週間目に一度と云ふ、定則に從はないで、極めて不規則な排血があります。それが漸々薄くなつて終に全く閉止します。此の時期は婦人の最後の革命期で、生殖は不可能となり、女性の重大な本分は玆に全く終りを告げます此際に注意すべきは、閉止期に起る生理的の不規則の排血が往々此の年齢に於て併發する子宮の惡性腫瘍の爲めに起る出血と誤ることがある事です。此れは特別の臭ひがあるから少しでも疑ひがあつたら速に專門醫の診察を乞はねばなりません。之れは生理的現象である、何にも心配することはないと平氣で居て、飛んで

もない重患を惹起す事があるから、出血が反覆常ない場合、或は一度閉止して居つて數月を經過して再び不規則な出血があつた樣な場合は、捨置かないで早く適當の治療を仰ぐがよろしい。彼の恐るべき子宮癌、俗にながちと云ふのは、月經の閉止する年頃が最も發生し易い時で、子宮癌より來る不規則な出血と、閉止期に起る生理的の不規則な排血とを混同して、知らず識らずの間に惡性腫瘍の發生を助けることがよくあります。私が診察する患者の内にも、何だか近頃チヨイチヨイ色の附いた帶下がある、さりとて別に下腹も腰も痛くはないもうめぐりは上つてもよい頃だに、停つたと思ふと又下りる、何うも不快でならないと、云ふから、診察すると、餘程手遲れとなつて居る子宮癌であると云ふ樣なのが澤山あります。此の子宮癌は非常に恐しい病氣で、多くは生命を取られるから、注意せねばなりません。自ら流血と覺り、且つ惡臭のあるのも知つて居ながら病氣の手當もせずに只だ臭ひを防ぐ爲めに強度の香袋や香水を所持する婦人があるが、實に危險な話で、其内に病氣は漸々進行して、遂には手も着けられない樣になつて了ひます。

△正しき手當と誤つた手當

前に述べた樣に、月經は生理的のものだけれども、此の來潮期には反對的に身體の各臟器に色々な變化を起すから、僅か許りの事にでも、直ぐに身體に障害を起します。即ち膣内から分泌する粘液なども、元來酸性のものだから、多數の病的細菌の攻擊に逢つても、或る程度迄は之れに抵抗して擊退することが出來るが之れが病的となつてアルカリ性に變化すると、今度は反對に内部に散布する多數の細菌、又は外部から侵入する病原菌は、之れに力を得て大變に繁殖してまゐります。故に月經のある間は極めて安靜にして、刺戟は絕對に避けなければなりません。又月經時によく行はれる膣内タンポンは、排出すべき經血を内部に溜める恐れがあるから之れも宜しくありません。内部に長く血液を止むる時は多數の細菌の爲めに變化を受け、其

の血液が細菌の營養素となつて益々細菌の勢力を助けることになります。未だ紙片或は脫脂綿等を塡めて排血を防ぐ人もある樣だし、甚だしいのは汚れた布片又は淺草紙を用ゆる人があるといふが、實に危險な仕方であります。私は脫脂綿を常用してゐる婦人が子宮結核に罹つたのを診察した事があります。脫脂綿と言つてもなかなか安心の出來ないもので、通常藥種店にて賣つて居る脫脂綿でも、たゞ脫脂してある丈で、實際消毒はしてありません。それゆゑ私共が之れを用ゆる時には必ず消毒して用ゆる樣になつて居ります。又衞生衞生と言ひながら、平常入浴の際などに內部を洗滌する人があるが、上り湯にしても隨分不潔なものだから、右と同じ危險があります。內部を清潔にすることは無論必要であるが、上り湯のやうな不潔なものでするのは非常の誤りであります。斯かる場合には醫師はイルツカトルを使用して消毒せる液を用ゆるか、普通家庭で出來る無害で輕便な方法は一プロセントの食鹽水を用ゆるのであります。其の液は水を一度煮沸せしものを冷却して其の中に燒鹽を入れるのです。

△安全な方法

又月經中は經水の外に排出することを速かにして、內に滯積せない樣にし、それと同時に排血の爲めに衣服其他の部分を汚染せない樣に注意が要るが、それには外の方に、血液の吸收を促がす材料、即ち脫脂綿球(壓定球)或は一名月經枕といふ脫脂綿を、一定の大さに球に造つて當て、其上に油紙を置いて、さうして猿股か丁字帶をあてるのです。此の綿球は屢々交換せなくてはいけません。特に夏季に於てはさうであります斯樣にして外部を、平常と異なり、毎日一回若くは二回程微溫湯で洗滌する必要があります。但し月經中は內部を洗滌することは嚴禁です。そして其處を決して刺戟しない事又常に溫かくして置く事が肝腎です。又勉めて身體の激動を避けて精神的衞生を計り病菌の進入を容易ならしむる樣な行ひを避け、飲食物の如きも成るべく消化し易い品を用ゆることが大切です。



魔風

登紫子

△鄙歌の主

麥の下葉が黄ばんで、梅の實が丸くなつて、豌豆が膨らむ頃には、よく裏の杉山に杜鵑が鳴く。

この村は山を屏風にして其懐にあるのです。血の色をしたお日様が、乳の様な朝霧の中に浮び出る頃から、朝桑摘みが列を作つて山に昇ります。霧が夢の様に剝げて、段々坂の桑畑には、白い頬冠りがチラホラ見える、姉のお年と妹のお京とは、目の荒い大籠に桑を山盛に摘んで、畦や畷の露を踏んで蠶家に歸るのが、毎朝の勤めでした。丸形や豆腐形の敷石を、一つ〳〵丸く挾んで松葉牡丹が一面に芽を出した、コスモスも金盞花も青い芽を吐いて、日の光を吸つてゐる。車井の洗ひに鳩が落ちてゐた、這檜葉の上には襁褓が干してある。庭一つぱい蒲鉾やさんの様に藁座が干してある、青い山の様に蠶屑が積まれて、白い捨蠶が動いてゐた、投げる様に摘んだ桑を蠶家に置いて、また鄙歌を歌うて山に昇るのです。初夏の日が照りつく六月から、七月にかけて、山里はかうして働きを續けて、お蠶を養ふのでした。

お京は姉とはころつと異つた性質の、ヤンチヤンでした、學校は大嫌ひで、尋常科丈けを申譯に終へたので、そりや何にもならぬ學問をしたのです。こんな柔かな處女ほど危險なものはございません。田舍のことですから、悪風潮が流れて來ます。押寄せて來ます。お京も早や十四の頃からこの渦の中に卷き込まれて、姉の小言も父の小言も辛くなつたのです、妾のお化粧道具は無斷で使ふ、少しの暇にもお髪の手入をする。小使錢の凡てがお化粧代になるといふ様なわけですから、薄暗い四疊半で鏡と睨み合をしたり、木小屋の裏

で口紅をさしてゐるのも珍らしくはないのでした。一年後れに入つてくる流行物を狂氣の樣になつて買ひたがる山里の娘程哀れなものはございません。

△風琴の音

彼女の家は里道を前にして段々坂の上にありました厩屋と蠶屋との間にある大榎の木の下には、掘拔井戸がありますので、青葉の頃から秋の紅葉の頃まで、よく旅の人や車やさんが休むのでした。

お京が十八になつた年、榎の大木に郭公鳥が鳴き出して櫻ん坊が黄に色づいた頃でした。

お京は蠶の方がまだ急がないので六疊の障子の側でお裁縫をしてゐました、閑古鳥がひまなく鳴く、澤のカジカが涼しい聲でなく。それらの間に聞いたことのない流暢な樂器の音が混つて聞えた、氣息かつたお京は針を置いて耳を立てた。流暢な樂器にませて歌が聞える「あゝ夢の世や〳〵」飛び立つ樣な賑やかな音なので、お京の胸は擽られる樣に揺めいた。そつと障子を開けてこつちにくる、その音を待つて居ました。

好い音を出した樂器は手風琴でした、見もなれない二十そこらの若い男が、白と赤の太い縞の巾帶を右の肩から左の腋下にして大きな鞄を吊下げてゐた、金モールが雲の峯の樣にうねつて首から腕から帽子の所まで光つてゐた。漆の樣な濃い髭と一本々々見える樣に分けられた頭の毛とは初心なお京の眼にはどんなに美しく見えたことであつたらう。

若い男がお京の前に來た、子供が珍らしさうにぞろぞろ後について來た「今日は」といつて鞄の中から白い紙、赤い紙を出してお京に渡した、ニヤリと笑つて若い男は風琴を鳴らして金モールを光らして坂を下りて行つた、子供がぞろ〳〵雲の子の樣について行つた風琴の音はやはり手に取る樣に聞える。身體にしなを作つてゆく按排が何とも云へず快くおもはれた。あゝ「面白い人」と柱に擬りツヽ立てをしてお京は見送つた。

彼女は白い紙と赤い紙に書かれた字を讀める丈拾つ

て見た『產前產後——血の病』なんてあるので。あゝ藥屋かしらと思つた……あゝ綺麗な人、あんな美しい服裝をして……歸りには最う一度此所を通つてくれないだらうか……お京の心には微な火が燃えたのでした、然しその日は夕方になつても通らなかつた。

△誘惑者

袖振山から降つて來た小糠雨が晴れた、みづみづしい靑葉の峯谷々には綠の雲が落ちたやうな美しさを見せたが、お蠶の爲めにはあまりよくはなかつた蠶が急はしくなつたので今度は降つても照ても働かねばならなくなつた、毛蟲嫌ひなお京は作男の數多を先に立てゝ野良に出た、秋菊が延びて、螢草がフワ〳〵して鬼と呼ばれて枯れぬべき眞赤な蓟が咲いてゐる石くれ道を通つてゆく、農婦共は交る〳〵お京をカラカッタが常になく沈んで上調子にもならなかつた。『お京さんメグりが來たのだらう』と、年增が言ふと『左樣だ〳〵』と皆が口を揃へた、お京はフイと離れた桑園に入つて生覺えのあの歌を模倣て見た『ああ夢の世や〳〵』までは甘く出來たが、その次ぎがど



風戰ぐ楢の木かげの夕すゞみ待るゝ秋も忘られにけり　（忠　眞）

うしても模倣されなかつた。あんな面白い歌を唄ひながら、世の中を渡つたならば、甚麼に嬉しいことでせう、こんな箱の中の樣な谷底に住んでゐるのは、一生の損だとお京はしみ〲思つたのでした、午下りの熱い日はお京の白いうなじを惜しげもなく照した、手拭の兩端をくはへてセッセと働くその顏に、元氣の色が見えた、ホンノリ朱が流れて來たのです、それは山蔭に「夢の世節」の風琴の音がたまらぬ程の善い響をなして來たからでした。

　待ち焦れた或物を捕へた樣に嬉しかつたお京は、臆面もなく色んな話を聞いたのです。藥屋さんの眼の動き樣、肩のこなし樣、その表情のよいことにまたゝきもしなかつた、東京はよい所、獨りで歩く電車といふもの、針金一本で百里でも二百里でも話の出來る電話といふもの、マッチ石油がいらずに獨りで火のつく電燈といふもの、それがどの町にでもあつて、淺草の觀音は一年中夜晝なしにお祭の樣、活動寫眞といふものは非常に賑やかなもの、どんなつまらん女でも、縮緬の衣裳に空氣草履は履いてること、それらを恍惚として聞いてゐたお京の耳には、その話の凡てが新らしくたまらなく羨やましかつた。都の女は幸福だなあと、年に二度や三度きり晴れ着を着飾る日のない僻村の生活を呪はざるを得なかつた。

　彼女はその晩まんじりともしなかつた、さうして上手なあの口の動き樣から、敷島を輪に吹いて兩手を後にそり返つた時の胸の金モールを思ひ出して、我知れず微笑んだのでありました。

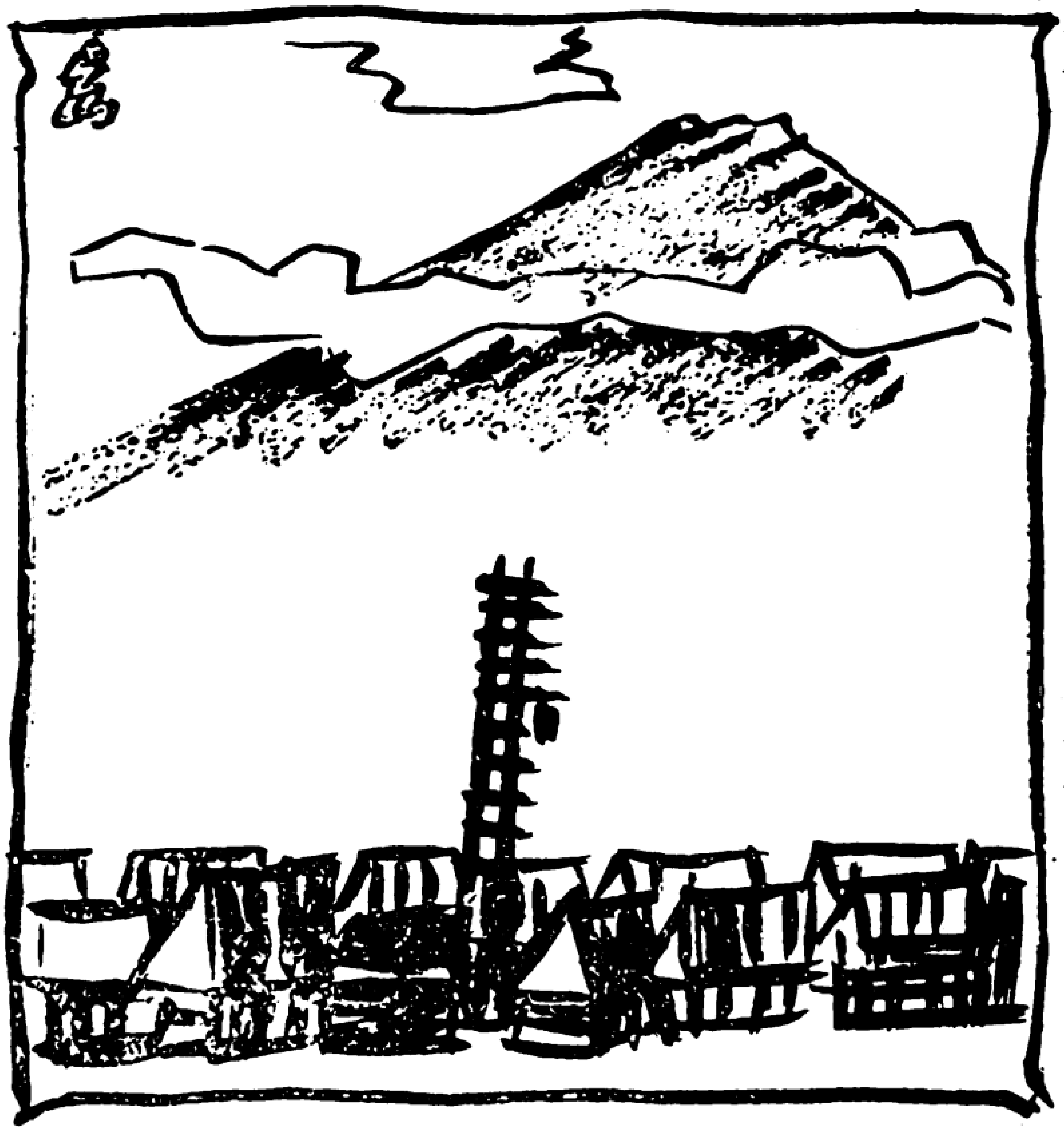
△嫁入仕度

「夢の世節」は毎日來ました、お京はそれを何よりの樂しみとしてゐた、父も母も一緒に藥屋さんの東京話に釣込まれて、籠にやる桑を後らかしたことも珍らしくはなかつた、夕餉がすんで、蚊遣焚によく藥屋の月旦が出た。藥屋の肩をもつのはやはりお京でした「お京は藥屋さんに嫁らうか」と父が串戲をいつた時、お京の顏は火の樣になつた。

今年いつになく蠶の取上げが多かつた。田の方も此分でゆけば豊年といふので、皆元氣づいた。朔日の日の夕方禰宜様をお招ぎして納蠶のお祝をした。禰宜様の直衣の綺麗な萌黄色をした胸からは、桔梗形の鏡や、水晶の曲がつた玉が何十となく下つてゐた。お燈明の光に照り返されて、それは實に神神しく難有いものであつた。お京は敷居の傍に丸くなつて手を合してゐました。父が上機嫌の酒呑話にこんなことが出ました。

「まだお京には話さなかつたが野邊の義郎が十月には除隊になるんだ、野邊の家でも母親が死んで手不足でゐるから是非除隊の祝と一緒に祝言をすましたいとのことぢや、野邊の伯父も經濟家だからな、……あの今日は六十圓ばかし貰つたのだよ、お京や明日は早起して母と一緒に嫁仕度を買ひに行くのだよ」

と親爺はいつた。



牛の聲とはくなかれし夏川の
夕日のあゆみおそきころかな　正臣

澁團扇を鳴らしながら母はモスリンが華麗で好いの、襦子はジミでよいのと、初嫁入の評定に餘念が無かつた。

「お京や、なぜ鬱ぎ込んでゐるのだよ、まあ／＼今から嫁にいつてからの心配はせすともよい」

父は六十圓を母に渡しました、母は忘れぼいからといつてお京に渡した、お京は六十圓といふ大金を手にした時。ギヨッとして大きな涙をこぼした。

螢が蚊帳まで飛んでゐる山家の夜は更けて、水車の音とネボケ蟬の夜鳴きするのを聞くばかり、お京は蚊帳の中で幾度か起きたり寢たりしてゐました。枕を並べて寢て居る母や姉の顏をぬすむ樣に見て、涙をホロリと落した、短夜は水鷄の一叩き二叩きに明け離れたが、その日は朝からの雨で、町行きは中止となつた。『夢の世』さんは降つても矢張り來ました。飛ぶ樣にして縁に出たお京は一時間餘も秘々と語つた、やがて家に入つたお京は黴がつくからといつて簞笥や長持から何枚かの着物と傘や下駄まで出して包んだりほどいたりしてゐました。家の人は格別心にもとめませんでした。

河骨のある沼から蚊が飛んでくる。笹の露がホロホロ散つて、雨後の月が山にかゝつた涼しい晩、水鷄さへ餘りたゝかぬ夜でした。

△逃亡

嫁仕度を買ひにゆくべき日が來たが、お京の姿がどこの隅にも見えませんでした、昨日擴げた着物は悉皆姉の晴衣までも無いのです、父は親類中をたづね廻つた、母は青くなつてお占をして貰ふ、姉は姉で町に出て探しましたが、その日は暮れても歸りませんでしたなんと親不孝な妹ではございませんか、村一ツぱいに評判になる、見舞の客が來ても、たゞ恥ち入るばかりで、お話しの仕樣もない。一同穴に入る思ひでした。

夢の世の藥屋はその日から來なかつた。

半年たつてフイと一枚の手紙が舞ひ込んだ、その次ぎも來た、然し父は火に葬つてしまひました。

愚かな妹は云はれぬ汚辱と苦痛をなめて。三年のタイムを翻弄されて、今に〇〇紡績會社に入つて居るのです、飛んで火に入る夏の蟲……この言葉が痛切に考へられます、文明の裏にも暗みはあるものです、都會を慕ふ田舍少女の、活きた教訓だと思ひます。


水國の夏

飲料水の飢饉地

藻集うら子

△水のなき神奈川

ウオターレツス、嗚呼私共は又此言葉を繰返へさればならぬ時期となりました、夏の生命たる水、炎熱やくが如き暑さを緩和げて與れる水、水なくしては何によつて夏が過されるでせうか、あつい〳〵日中流るゝ汗に衣を絞りつゝ外より歸りくる家人或は遠來の客人に、何はさて置き侑むべきは水サツと迸る水道口より、湛へられたる金盥の清水に手拭一絞りして玉なす汗を拭ひ取り冷やしたる麥湯にレモン一滴落いた咽喉を潤したならば、文明のフアンモーターはなくとも手づから起こす團扇の風に、今迄の暑さは忽ち忘られて仕舞ひます、入浴すみて浴衣がけ、打水せる縁先に、草花など眺むる樂みも、水なくては如何に興なき事でせう、其れよりも先づ第一に、必要なるは飲料及び食物調理の用水、其他洗濯に風呂に掃除にと、夏は殊更水なくては一日も否半日も過されませぬ、其必要な水がない、水に缺亡する横濱神奈川、高臺に住む人は、如何に不自由な思ひをすることでせう、水道はありながら朝は五時過ぎより夜は八時頃迄一滴の水も得られぬ



と言へば誰も眞實と思ふものはありますまい、處が其れが事實だから、ウオターレツスと叫ばればならぬのです、六月になりますと水に對する注意書が配附されて、水道口は憎らしき吏員の手によりて細められるのです、さなきだに水勢鈍き水道口が、一層細くなつて浴槽一杯に汲み込むに、一時間其他一日の用水をあらゆる桶に貯へて置くのですもの、水取りが終れば十二時です、夏の夜の短きに朝は未明の起床、女中は辛い事です、たまに日曜など寢坊しやうものなら、顔一つ洗ふにも注意せねばなりません、其れならば井戸でも澤山あればよいのですけれど、何しろ高臺ですから思ふ様にありませぬ、昨年大洪水の爲水源地の鐵管破損の時など旬日餘り遠い處から汲み込ませましたが汲み手が多くて水が不足なのですから、大變困りました、其時市中の共同水道など手桶やバケツの行列に巡査が附て居て、順々に汲ませろと言ふ騒ぎとても東京の人などの想像し得られぬ事です、私共も設備不完全と言ふ事は、兼て聞て居りましたけれど、まさか之程困るとは思ひませんでした、高い水道税（東京に比して）と相俟つて、何時になつたら改良されるでせうか、たまに東京に往りまして、どん〳〵と惜しげなく水道口を開放して洗濯や米とぎして居る女中等を見受けますと、如何に公徳心がないとはいへ、今少し注意すればよかりさうなものと、勿體なく思

ひます、總て物は一度經驗して見なければ、其眞價を知る事は出來ないものだと言ふ事を、つく〲味ひ得ました。

△奥様は多く粋作り

神奈川は如何なる處かと言ふ事を、私の目に映じただけ申して見たいと思ひます。或は岡目八目飛んだ誤りがあるかも知れません。神奈川と言ふ名は明治維新の頃横濱開港と同時に高くなつたのださうです。けれど名の割合につまらない處です、遠き親戚の者など來りまして、神奈川はもつといゝ處だと思つて居たのに、來て見れば案外田舎だれと笑つた位です、併し住む人はと言へば土着の神奈川人といふのはほんの僅で重に横濱の會社商館へ通勤する中流の人等の住宅が大部分を占めて居ります外は一部分の町と割合に多いのは藝者屋です。斯んな狭い土地に如何してかと不思議に思ふ位ですけれど。何でも濱あたりの人が來て道理で一寸外出しましても白粉臭い抜襟の女に逢はない事はありません、其せいですか一般に婦人の風が粋作りで、奥様方の散歩にも、買物にもぞろりとしたなりで、日本髪が多いのです一體に新家庭が多數の様ですから、幼稚園や小學校行の兒童は澤山ありますけれど女學校に通ふ令孃や中學生などは極めて少數です、自然ハイカラな女學生スタイルは餘り見受けません其れよりも藝の稽古に通ふ町娘の、島田や銀杏返しの東京で所謂下町式の姿が多く目につきます、學校の父兄會とか母の會などに行つて見ましても、今頃ならば絽縮緬の、黒羽織召した粋な奥様方がずらりと御並びになります、中には待合とか料理店の女將もありませうけれど、立派な紳士の奥様方と、何れ菖蒲か引ぞ煩ふとでも申しませうか、觀風子の言はれた通り、横濱と同じ現象だらふと思ひます。

△男子は多くハイカラ

又男子はと申しますと、時の流行に後れぬハイかつたスタイルの立派な方が朝夕電車と汽車で濱へ通勤されます、午後の四時五時頃、子供の守でもしながら、門前に遊んで居りますとパナマの帽子に金縁眼鏡・八字の御髭ピンと威容正しきセントルマンや、白面無髯の瀟洒なる若紳士など、次から次へと歸宅されるのを見受けます辨當は辨當屋が運びますから東京の様に日陰町や、柳原河岸式の腰辨君は一人もありません(最も場所にもよりませうけれど)まして襞のよれ〱になつた袴に、黒紋附の羽織なんて方は、見たくもありません、洋服でなければ絽か何かの羽織に角帶といつた風です。

△學生は多く汽車で通學

子供が學校に行きますにも態々汽車で横濱迄通學するのを得意とする家庭が多いのです子供同志でも、何だお前は青木かと言つて、當地の學校へ行く子供を蔑視して居ります、朝試みに停車場へいつて見ますと七八歳の小いのより、十二三迄の多數の男女の學生が、汽車に詰め込まれて出掛るのを見受ます、そして其の女の子が皆リボンや、美しい着物で飾られて居ります、男の子の洋服姿は澤山ありますけれど、女兒の輕快な洋服姿は雜種の子供を除いて外は滅多にありません一寸考へますと、横濱や神奈川は餘計多かりさうなものですけれど實際はさうでないのですから、不思議です、幼稚園の式日など、縮緬の長い袂に重い帯背負はせて、足の歩みも覺束なさゝうな幼兒の手を引て、嬉しがつて居る母親が多數なのには驚きます、畢竟之は雜種の子が、澤山ありますので皆から何だ合の子がといふ風に、輕蔑した目で見た結果斯うなつたのかと思はれます。

△物價は高く活計は贅澤

何しろ神奈川は土地は田舎でも住だ人は皆贅澤で見えを張るのが多いのです、大抵の家では女中の一人や二人は必ず置てあつて、奥様は美しくお化粧して琴やオルガンひいたり、近所の方とお話でもして遊んで居る人が多い様です、男子の方では謠曲小鼓などが大に流行して居ります、横濱ではお邸仕事といつて、山下町の商館へ種々の働きに出掛ますので、女は老若共に拂底ですが、神奈川では平安、生麥、程ケ谷などの近在から、出掛て來る女が澤山ありますから、東京の様に女中難は餘りありません、一般に生活程度が高い爲ですか、物價の高い事驚く程です、横濱は東京より一割高いと言ひますが、神奈川は更に又一段高いのです、そんなら町はハイカラ式かといへば、極く田舎で、何れの店頭でも品物は何もありません、只高いばかりですから、大抵なものは集めて置て東京へ買ひに參ります、併し金錢にお構ひなしといふのならば、居ながらにして何でも用は足ります、明治屋とか、風月とか其他吳服屋でも、唐物屋でも、横濱の重なる商店よりは、毎日御用聞が參りまして、朝注文した品は、午後届けます、パンなども朝々焼立を配達しますから、誠に便利なものです、人の話によりますと、神奈川は土地高燥に、空氣清く別莊地に適して居るから、物價が高いと言ふ事です成程土地は高いですけれど、風景の美なる點もありませんし殊に吾々人類生活の第一主要物たる水が不足では、將來はいざ知らず只今では何の價値もない處だと思ひます



△土地の名物

土地には名所舊跡の見るべきものもありません、此春迄神奈川唯一の名物であつたナンバーナイン(即ち神風閣)も一朝烏有に歸して以來今は何一つ紹介すべきものもありません、餘り惡口ばかり言ひましたが、茲に於て只一つ神奈川人の自慢するものがあります、其れは六月の祭禮の山車です近來東京などではとても見る事は出來ません、其處が田舍たる面目かも知れませんが、各町から一臺づゝ、七八つもありませうか、各々異なる古代の武者人形が車上高く飾られて三味線太鼓で囃しながら、多勢の若者がお揃の浴衣に後ろ鉢巻木遣節で、各町を練つて歩くのは、隨分見物です此日の市中は遠近より見物の人で充滿し洲崎神社の境内は活動劍舞見世物などで、立錐の地もなく非常な賑ひです。

△朝鮮の漬物料理

朝鮮では漬物が料理の王としてあるだけに却々凝つた贅澤なもので、濃い臭氣の原料さへ除けば日本人向としても、上等なものが多い

▲カクテキ　之は漬物としては先づ上等の方で、海老の鹽辛へ大根と白菜を小さく切つて漬け、一二週間經つてから唐辛を振かけて食るのである。



▲ナバキムチ　薄く小さく切つた大根、葱の白い部分、芹、蒜肉を切り交ぜ、唐辛を入れて鹽漬にして置くと、甘辛い汁が多量に出て 氷の様に冷くなる。之れは汁を吸ふ積りで食べるのである。普通は瓶に入れて半分位迄地面へ埋めて置くが、温室へ入れて置けば三日位で食べられる様になる。

▲トンチム　唐辛を入れた鹽水の中へ小さい大根を丸漬にして置き、十五六日目に汁を吸ふやうにして食べる。

▲チヤンギムチ　白菜と大根を一寸位に切り、夫れへ梨、栗の小片、鮑、松芽、蒜、唐辛等を糸の如く切つて攪交ぜの、少量の酢と砂糖を入れた醤油へ漬けて置く。之は重に客をなする時の御馳走で、一二週間位で美味になる。

▲トンキチム　白菜を二日ばかり鹽漬にしたのを一枚づゝへがし、葉と葉の間へ唐辛、蒜、海草二三種、梨、葱、芹、唐菜、鮑、夫れからゲチと云ふ魚の鹽漬を交ぜて、一枚々々に布き、元の通り葉を合はせてゲチを漬けた鹽汁へ漬ける。夫れから一ヶ月乃至一年經つて食べるので、切り口が美しいのと、味が旨いので上等の漬物になつて居る。

養鷄





京都式豆腐料理

花賣女

つれ〴〵なるまゝにたえてひらかぬ文箱整理せしにふと目につきし筆記帳そゞろ學び舎にありし昔の偲ばれて中ひらき見れば、お豆腐料理の筆記也、實にや近頃は料理の研究盛になりて、お豆腐にも多分の滋養分ありとてもてはやさるゝ折から、料理に趣味を持たせ給ふ愛讀諸姉達の御試作の材料にもと、珍らしく思はれし法左にかきしるしぬ。

第一　あら金どうふ

水をしぼりて掴みくづし、酒鹽と醤油にて炒りつけ山椒を打ち込む、油氣を用ゐぬのがあら金どうふの意とか。

第二　砂金どうふ

全揚にして一方をくりぬき、其中へ鳥肉、鯉の切身、木くらげ、銀杏などを入れ、その口を昆布か干瓢にて括り、酒煮にして摺山椒を添ふ、これを砂金どうふと謂、又水氣を去りて能く摺り、烘柿を十分一程交ぜてなほすり合せ、板へ美濃紙を敷き、其すり豆腐を薄くしきのべ、生姜味噌に砂糖を加へたるをのせ、共に括りて湯煮し、紙を拂ひたるをも砂金どうふといふ。

第三　砂子どうふ

しぼりてすりたるを蛋白にてつなぎて板へのばし煮拔玉子の黄味をバラリと撒きて砂子の様になし、能く押へて蒸し小色紙程に切る。

第四　水晶どうふ

石花菜を水に浸けて和らげ、細かにむしり、煮てとろかし、之にてお豆腐を煮しめる、器には水をため、わさび醤油か辛子醤油を用ゆるのが水晶どうふ。

第五　琥珀どうふ

絞りくずして卵と共にすりませ、葛粉を少し入れて種々の形を作り、胡麻の油にて揚たのが琥珀どうふ。

第六　岩石豆腐

これは片桐石州侯の好みにて絞り豆腐とうづらの肉と葛粉少しづゝと別々に能くすり三昧合せて尚よくすりて能程にとりてゆでる、鴨でも可けれどうづらには味おとるとか。

第七　そうめん豆腐

布に包みて水を切り、すゐのふにて幾度もねりこして葛粉を加へて摺り合せ、四ッ切の美濃紙へ刺身庖丁にて平たにすり付け、その紙を重ねてむし上げ、水につけて冷やし、紙をはなし極々細く打つのがそうめん豆腐。

第八　うどん豆腐

右のと同じ方法にて太く打つなり。

第九　真豆腐

鍋二ッに極く熱湯をわかし、うどん豆腐をあみさじですくひ、匙共に熱湯の中へ浸して直に器にもり、一方の熱湯を注ぎ、だし醤油一升に酒三合、だし汁五合を混和して煮沸し、中猪口へつぎおろし、大根に唐辛末白ねぎの微塵きざみ陳皮末と浅草海苔を添へるのが真といふ、尚太く切りたるうどん豆腐を煮かげんし、湯をしぼりて生の煮返し醤油をチカにぶつかけ花がをを大根おろし、白ねぎのザク〳〵に唐辛末を置のを草といふ。

第十　粉どうふ

葛粉のかはりにそばの花粉をまぜたのがそばどうふなほ大豆をはたきて能くふるひ、捏ねて棒の形にし、小口切にするのが粉どうふとてお豆腐のない所でする

第十一　アンペンに白玉豆腐

しぼりたると摺芋とを等分にして尚すり合せ、之を圓くとりて美の紙に包み、湯煮するのを白玉といふ、又しぼり八分に摺芋二分に葛粉をすこし入れてつなぎとなし、なほよくすりて太白砂糖を煎じて絹ごししたる湯にて、極上の生臙脂を搾り、尚湯煎にかけ、右のすり豆腐を交せて淡紅色としてむす、すしかげんにて

一皮むくもよし、白の茶碗に葛餡をしき、擦山葵を置きたる上にのせ、芋くずをパラリと撒けば甚だ美し。

第十二　ナンチン

白ねぎを五分切にして酒煮し、醤油でかげんし、とうふを掴みくづして入れ共に煮る、青唐辛のザクを添へるがナンチンと云ふ。

第十三　かまぼこ豆腐

生を醤油か鹽にて能くすり合せ、板へつけてやくのがかまぼこどうふ、又摺芋をどうふ三分一に加へ葛粉をすこし入れて摺合せて湯煮する、又胡桃を湯に浸してうす皮を去り、すりつぶして三分と、搾り豆腐七分とをすりまぜ、杉板へ塗りてすこしやくのもかまぼこどうふ也。

第十四　フワ〳〵豆腐

搾りてすりて葛粉をすこしいれ、くちなしでいろをつけ醤油酒鹽にて煮、かげんするのが玉子のフワ〳〵もどき、又玉子とゝうふを等分にしてすり合せ、フワフワ煮する玉子のフワ〳〵と味のかはらぬ經濟的のもの。

第十五　甘露どうふ

こほり豆腐の極上製を水につけ、氷砂糖にて能く煮る、取り合せはからきか、極うすきをよしとするのが甘露どうふ。

第十六　砂糖漬どうふ

厚さ三分位に切り、別々に紙につゝみて生灰の中へ一時間程埋め置き、夫をとり出して能ほどに切り同じかさの白砂糖に水すこし入れて右の豆腐と共に強火で煮つめる間は豆腐のこはれぬ樣にこげぬ樣にかきまぜる水氣がとれゝばとりのけ別に砂糖を多分に入れし後に文火で徐かに煮る。

第十七　てんぐ豆腐

てんぐといふ名で人が五人もかゝるといふ大騒動もの、夫は鍋を四個ならべて一には胡麻油二には白湯三には酒四には醤油を入れ皆それが強火でグラ〳〵と沸いている鍋毎に一人宛立ち各自銅羅匙を持ち、能き程に切りたる豆腐を一に入れて、二三遍廻して二に入れ

三四と同じくして最期に一人は茶碗を暖め山葵味噌を敷きて待つて居ると四の鍋から直にその茶碗に移すといふ趣向で、油煤流しと黄檗と混一にした調製法で轉供又は尊供と書きたりしをあやまりしとかきゝぬ。

第十八　雷どうふ

掴みくづして胡麻の油に打ち入れ直にお醤油で味をつけ、葱のザク〳〵擦大根、山葵を打ち込むのが雷とうふ。

第十九　葛雷どうふ

先のと同じく油でいり、剗み椎茸五分切芹、繊切慈姑、細切木茸、むしり蒟蒻を混ぜいれ、暫く煮て酒醤油を調和し、別に昆布煮汁のにえ上る時に上製の葛粉を水にて溥くときたるを入れ、右の豆腐を入れ吹き上るを度として止むのを葛雷といふ、同じ仕立で味噌を煮上らせ溥くときたる葛を引いて豆腐を煮るのを味噌かみなりといふ。

第二十　碎豆腐

搾りを油で煮立て、青菜を徹塵にきざみ豆腐と均一にいれ能く攪和して醤油で味付るを碎豆腐といふ十挺に油を二合の割合。

第廿一　カステーラ豆腐

極上の酒を煮沸し酒の香なき程にして全形のまゝ入れて文火で篤と煮る一時膨脹して又小さくしまるを度とする。

第廿二　玉子豆腐

水氣を去り能く摺り、胡蘿蔔の擦りたるを包みて鷄卵の様に丸め、紙に包みて湯煮する、又搾りて葛粉をつなぎとなし、能く摺りませ胡蘿蔔を丸剝にし柔かに煮て右の摺りどうふにまき包み、上から桴でまき括り湯煮して小口切にする、又さつま芋を代用するもよし尚掴みくずしてすゐのふにて漉し酒一合に水二合和せ半日も煮ると塊まるのを醤油で加減をよくし金さしですくひ盛るも玉子どうふ。

第廿三　埋めどうふ

全ながら美の紙に包み藁を燒きて其熱灰に埋め半日か一夜置きて取り出し酒醤油均一にて煮詰め小口切に

する。

第二十四　包みどうふ

生をすり、紙につゝみ、湯煮して紙をとる、又中へ黒胡麻きざみ、胡桃、繊切木茸、摺生姜抔を入れて同じ法に又は中を割いて胡桃味噌をいれて同じとうふの蓋をなし、紙包として湯煮するもよし、皆いづれも包どうふで調理はお好み次第。

第二十五　結びどうふ

生を算木形に細く長く切りて結び、湯煮す、調味は如何様共、借結ぶには薄紙を豆腐と同じ形に切り、四面へ附て結び、むすびて後細串の先にて徐々にかみを剥す、とは古法で細いのを酢に浸して結べば楽なり、結んで水にいれ、酢氣を去るがよし、最も、酢氣が取り切れぬ故沸湯の中へ暫く入れて手の入れられる位の温湯の中で結ぶなり。

第二十六　壓どうふ

布につゝみて板を斜にして並べ載せ潰れぬ程のおもしをかけ能く水氣を搾り生醤油酒を均一にて煮染め小口切にする。

第二十七　こゞりどうふ

よき程に切り、湯煮して簀の上に並べて極寒の夜、風吹に出して氷らす、之を早凍り新凍りといふ、又宵に水をかけて氷らせば能く透き、翌日泔水で煮て水氣を搾り、藺草にあみて乾す、又沸湯をかけて氷らすも有る、翌日湯煮して浮上るを度として取り、すこし壓をかける幾日も曝す、凝豆腐は所謂高野豆腐で別に手數に及ばぬが新凍りは風味よし。

第二十八　揃ひどうふ

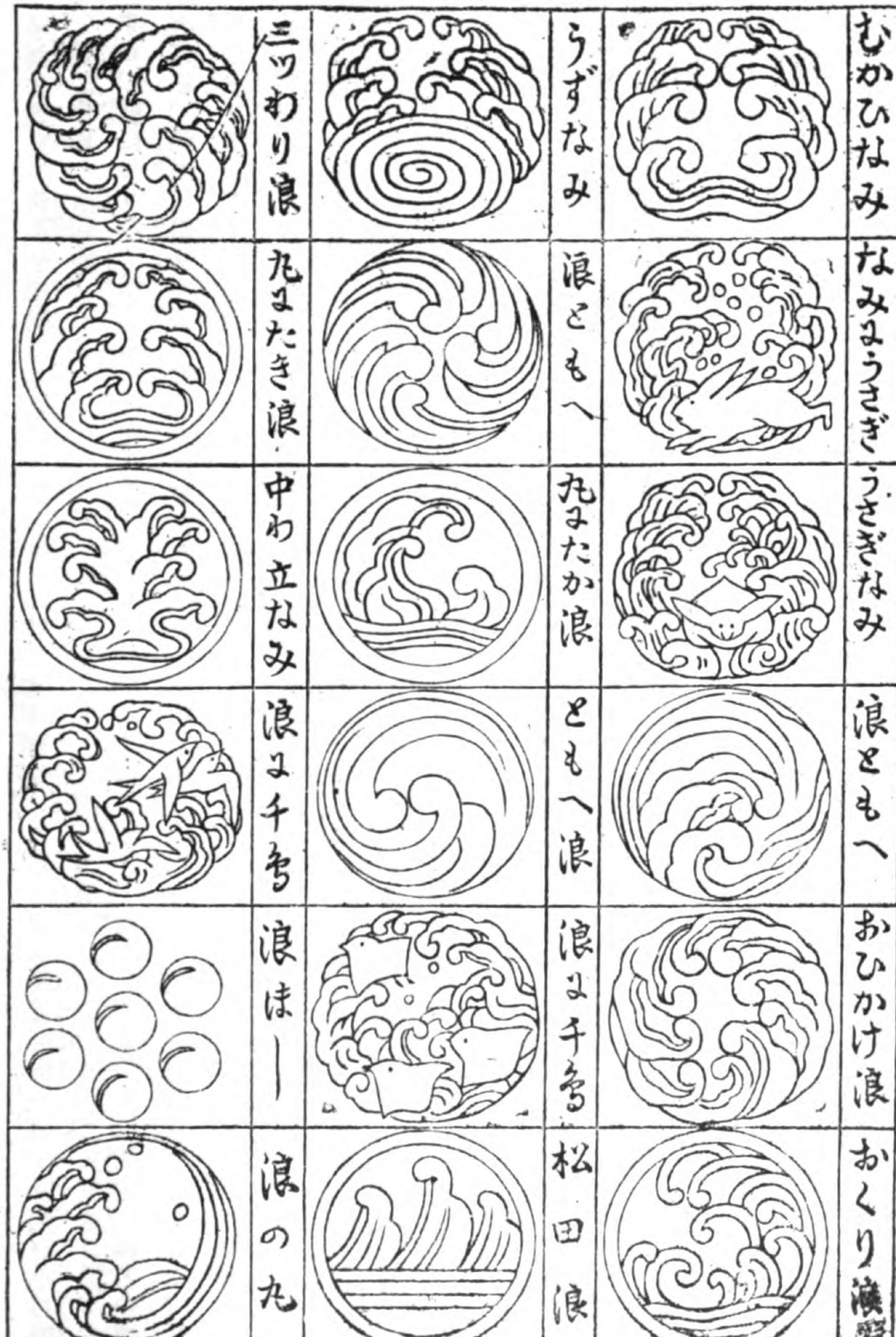
搾りて摺つて漉して一挺の中へ蛋白五ッ許りを摺り交せ、紙に薄く延して蒸して切る調理は御隨意也。

第二十九　九二四豆腐

大田樂位に切つて燒きて古酒九合に醤油二合水四合入れ文火で一日程寛々と煮るのが九二四豆腐。



浪の意匠


むかひなみ
うずなみ
三ツわり浪
なみうさぎ
浪ともへ
丸にたき浪
うさぎなみ
丸にたか浪
中わ立なみ
浪ともへ
ともへ浪
浪に千鳥
おひかけ浪
浪に千鳥
浪ほし
おくり浪
松田浪
浪の丸

趣味ある婦人

諦女



一の行爲を以て、その人の奉ずる倫理學說の發現としたら、趣味は內的生活の充實の度を示すバロメートルと云ふ可きでせう。智に過くれば冷くなる、意に過くれば固くなる、兎角乾燥になり易い日常生活に一點の潤を與へるのは情的方面の活動によらなければならないのは自明の理です。殊に今日の樣に科學が隆んになり、何でも小刻みに刻りこまざくつてしまつてからでないと承知が、出來ぬといふ樣になつた時代には、せめて婦人だけでも、温乎とした總合的な全體にわたつた考へがほしいと思ひます。

年每に咲くや吉野の山櫻木をわりて見よ花のありかを、

明治の女詩人からは、帝王の上なきに似し花の盛と歌はれた吉野の櫻も、かうなつては、薪ざつぽうと同樣だいなしになるではありませんか、然しこゝに注意す可きは、いかに情的の活動と云つても、智と意とがことに伴はなくつては、卑猥下劣の域は脫する事が出來ますまい、雪舟の黒繪より千代紙の方がきれいだ、運慶の仁王樣は怖くつて古ぼけてるが花屋敷の活人形梅幸の似顏は美しいわでは手がつけられません、智德圓滿に具足してこゝに始めて趣味ある人となるを得るのです、一家の主婦として、美しい家風の薰育釀成の任ある私共は、晶子夫人ぢやありませんが、出來るだけかしこくなり出來るだけ充實した生活がしたい、そうかと云つて何も、綺羅をかざり社交界に出たいの、御飯を焦げつかせたり洗濯物を山程つんで置きながら琴を彈いたり、讀書がしたい等申すのではありませぬ日常平凡な生活の中をよく內觀し反省して、深甚微妙

な意義を發見し玩味したいといふのです、私は自己の境遇を不滿に思つて、無暗矢鱈に九文(苦悶)半文(煩悶)、するのは一文の價値もない事と存じます、よし横紙破りに現在の境遇をやぶりましたからとて、滿足な結果は到底得られますまい、それよりも靜かに、運命はなる樣に任せ、來る者は咎めず、去る者は追はず、自己の周圍に湧いて來る、何物をも味はつてみたい味ふだけの腦力がほしい、陋巷に在つて倦まず、富貴にあつてほこらざる底の人は、きつとこゝに心づいて被在るのではないかと、僣越ながらもひそかに思つて居ります、それから、趣味の養成の方法といふのも大げさですが事々物々、趣味の眼に映ずる樣になるにはどうしても小さな我をすてなければならないかと思ひます、一度利己の城をはなるれば萬事が美しくも床しくもみえ出します利己の城を離れますには、詩によるのもいゝし、繪畫も結構、點茶挿花に依つてさとるのもよろしいでせう、つまり、雨あられ雪や氷も、同じ谷川の水歸着點は一なのです、それはもう時間と能力と經濟とが許すなら、この天地間のありとあ



らゆる事物に接觸し皆自家藥籠中の者とし、渾然彫鏤のあとのないと云ふ高尙な人格になりたいのですが、それは到底、平凡な私にはのぞまれない事だからせめては一藝でも一能でも、深く悟入してその結果が、自分の感情の中心となり無意識的に日常生活に及ぶ程までやり遂げたい、なまじかあれもこれもと手を出して、淺いうすぺらな、社會字彙的人間には、なりたくないと思ふ一切他人のかいまみを許さぬ處に、悠々自適する趣味の天地を創造する、――これが私の理想である今、御自分でもかゝる趣味を有せりと、御自慢なぞして世間からも、趣味ありと云はれてお出での方の傑、一寸拜借して見ませう。

甲夫人（園藝趣味）

場末と云つては失禮だけれど、郡部に近い新開の町小借家の中に、異彩を放つ杉の生垣、新しい衡門を通りすがら、覗けば玉川砂利を敷きつめた御門の中から千紫萬紅、春ならば三色黃搔子とヒヤシンス夏は向日葵松葉牡丹、秋風吹けばコスモスのたよりなげに、亂れて鳳仙花の紅も鮮也、お玄關のベルを押してお座敷に、通ればこれ又、驚かずには居られません、緣側にならんだ幾十鉢の薔薇、馥郁たる香はぎこちな木綿の袖にもしみ込む樣、日除の葭簾ごしにみえる庭も、めぼしい木はなくて靑々した芝で輪廓とつた花畑、名さへわからぬ艶麗なのやら、淸楚なのやら、その上お裏の三百坪は蔬菜園で、茄子、藤豆、甘藍、西瓜、南瓜なぞみづ〳〵しう出來て居ります、これ丈けのお指圖やら手入やらを一手で遊ばすのはこゝの御夫人日がな一日、日向で園丁相手に、蟲取やら根分やら、夕さり來れば御裳たかくからげてけしかる桶も擔はせ給ふ、さすれば勢ひ、金佛のやうにお色も黑み、リングも特別大でなくては間に合はぬ位知らぬ人は何處のお百のかみさんともみませうがこれでも、前の軍醫總監の御愛孃、旦那樣たとへ大學敎授醫學博士などいかめしいお顏遊ばしても元を洗へば奧樣のお家の書生だつたのですから、奧樣いかにお色が黑まうと、それにお叱言

のある處か新鮮な野菜は一番衛生にいゝ、園藝は尤も高尚な趣味だ、日光浴は身體に有益だとおほめになる者だから、奥樣のお身も目にこそみえね、たんと高くなり、訪問客があれば何はあれ、庭下駄はかせてお裏まはり、これは舶來の何だ、あれはかうだと說明なさるのは、罪なしとするも水無月の炎天に、傘もなくて折角のお化粧がむらになるのを氣にもむ若い方もありますとか、まして、旦那樣の御同僚等、お出でになり、むし暑い夕ぐれ、ビーヤぬかせて召し上る最中、えならぬ燐酸肥料の香等、そこはかとなく香つてまゐりますのは、たとへお皿に胡瓜もみの新しいのがあつても、慣れぬものはうんざりすると、誰かさんが被仰つて居た、然しほんとに、なりもふりも構はない天眞爛漫直情徑行、活潑な奥樣、なまじかお猪口する方よりはましですけれど、此れだけでは萬面の兄樣の配遇と何のけじめもありませぬ上流婦人として、園藝趣味を有すと、標榜なさるのなら、もつと花がほ

浴後（四）



しい實がほしい、百草木の花や實はもうこれで澤山、無形の心の花、御丹精の花のやうな美しい御思想、實のやうなみづ〳〵しい御考察が――欲でせうけれど

乙夫人（多趣味自慢）

鍋や、今日はシチユーとビフテキを造へるからね、火をおこして、スープパンをかけてお呉れ、それから肉を半斤とトマトと葱と馬鈴薯と買つて來て清潔に洗つていつもの樣に刻んで置いてお呉れメリケン粉やパン粉はあつた樣ね。

お鍋どん早速、被在つた通り、火をおこして八百屋に走り、材料を整へ、俎にうち上る、――その間奥樣は、唐木の机に稽古本ひろげて、「是はこの邊にすむ女にて候、實にやながらへて浮世にすむとも、今ははや誰白髮の八重葎……」やがて奥樣の割烹着、持參してお鍋、用意とゝのひし旨、御注進すれば、おゝさうかへとさすが、縮緬の腰紐でお裾だけはからげて、上からおかけなすつたエプロン、手柄の緋、髷更はえて燕園樣の繪をその儘、「お鍋や、肉をメリケン粉の中にまぶして又その上からパン粉をつけて」と未だお手は下されず、奥樣近頃まで、お臺所なんぞ、めつたにお出ましにならなかつたのが、ある雜誌に「良人の愛情を持續するには、うまい料理をすゝめよ」とあつたのを御覧なすつた以來、急に割烹の御會にお出でになるやら、弦齋夫人の料理談を求めるやら、天晴、通になつて私お料理にも趣味持つてますよと御吹聽遊ばす。フライパンの中にチーと煮え立つヘット、時分はよしと肉を投じませば、どうしたはずみか油は挑ねて、大切な玉のお顔に、

オーあつッ、あつッオリーブ油を早く、早くよお鍋あたふた、メリケン粉の鉢をとびこすやら、肉をけとばすやらして戸棚から、應急手當の、オリーブ油を出して上る、奥樣「もう私いやだお前の志た通りにしてこしらへて置いて」と、蛾眉ひそめつゝ奥へ入らせ給ふ。

お湯すみて夕ぐれ、絽縮緬の浴衣姿、風鈴さゆらぐ

下で旦那樣とおさゝ盛り、これね私こしらへましたのお甘しくつて？　あら變んな顏遊ばしていやよ、私おかげで油が挑ねてこんなに怪我しました、絆創膏ことごとしき邊りを示せば、「ふむまあ眼の中に這入らなくつてよかつた」。

流し元ではお鍋、この暑いに油臭いこんなもんなんて、洗ひ憎くつて仕方がない、チエ、舌打しながらも篩でごし／＼、

根がお器用と見えて、長唄も鼓も謠も、一通り位門をお通りなすつて被在るもんだから、何にでも趣味を持つてると大の御自慢ですが、その中には月に四五度の三越行と、寄席芝居におこしも又この料理もかぞへて被在る事は、勿論なのです。

洗濯の仕方

▲立て洗へ　従來の盥は水が散り易く且屈んでは身體に宜しくないから西洋の洗濯函のやうなもので立て洗へる工夫が肝要である、其他洗濯袋、絞り器械、揉板、アイロン等は一通り必要です。

▲木綿と絹物　足袋、肌襦袢、窓掛其他の木綿物は夏季に度々洗濯するが其簡單な洗濯法は先水一升に曹達三匁の割合で交ぜた水へ一晩浸け置き翌日其水でザッと洗ひ垢の稍落たのを洗濯袋(白木綿か金巾の大袋)に入れ前と同じ割合の曹達水に石鹸三匁を加へ煮釜か金盥へ入れ廿分程煮て石鹸を溶解した水を注ぎつゝ揉板を袋ごと洗ふ、薄地物は水中で掴むやうにして洗つた後石鹸と曹達水で一寸煮て注ぎ出す、其時金ピロを少し加へてあを味をつけ絞り器械にかけ糊をつけて乾かす、絹物に至つては白色ならば必らず先石鹸溶解水を用意して置きます、是は使ひ古しの石鹸を細かに割つて水又は湯に入れ可成濃く溶すのである、此水を盥に入れ温湯を加へて泡立つた中へ洗濯物を入れ決して揉まずに掴むやうにして洗ひ猶新らしい溶解水を温湯で洗ひ最後に水で濯ぎます其際極少量の酒精(水一合半に茶匙一杯)を入るか或は水六合に醋酸を茶匙一杯ほど入て濯ぐと艶が出て絹鳴のするやうになる。

▲毛織の洗方　毛のものはフランネル、莫大小、メリンス等凡て煮たり揉んだりせず初めから温湯で石鹸を加へ濯ぐ時は水へ曹達を入れて石鹸氣を吐かせます又アンモニアを入れると縮まないで地質が和かになる、色物は總て木綿物でも揉んでは宜しくない。

▲白色の艶出し　白い物は洗ふと黄色になり易いから繪具屋で金ピロを買つて入れると青味がある、之に糊をつければ純白になつて好い艶が出るのです、又煮釜は石油罐の中を梅酢で洗へば直ぐ用ゐられます。

青葉若葉

花かたみ

「姉さん」………

……『いつ來たの?!』

「今來ました。早船が今朝横須賀に入つたんですよ、會ひたくつてすぐにやつて來ました」

「眞實によくれえ、待つて居ましたよ……隨分日に焼けたこと、身體は丈夫なんでせうねえ」

「そんなですか?……からだは何處も何ともないんです、姉さんは少し痩せた樣ですね」

「氣の故ですよ。ぴん／＼してるんですもの」

「其樣なら好いけれど……まア話は澤山たまつてゐる、久し振ですね姉さん!」

「ほんとうに久しぶり!、私は一年も會はない樣な氣がしますよ。まあお上りなさい、あなたが靴を脱いでゐる間に、この洗濯物を干して了ふから……」

（雲失き日、山の手にて）

△

紫の蛇の目をぱつと開いて門を出ました、傘の音は私の全身を氣持よく包んで降る雨は美くしい、……土が光る……時は正に午也。

さつ／＼まつ、さつと句切りをつけて降る俄雨、ええもう少し先刻から降り始しだんですの。

茶色の爪皮かけて高足駄、餘りひよろ高くてころびさうだ 下ばかし見つめて歩く。足許があぶなつかしい。でも今日許りは、大抵の人た目下してあるけるやうで、氣持のよさつたらありません、だつてまあ俄の降りなんでせう、往來ふ人は大方もう濡れびしよなんです、刺繍の絹張傘のかげに身をすくめて、でも時々恨めしげに傘を見る人、朱珍の緒のすがつた塗下駄の足元、絹足袋のつま先を氣にしてゆく婦人、厚板の帶にぬかるみをはれとばしたひと、女ばかりが私の目に入つてくるんですもの、乘らうつたつて車もないし電車もない、如何しても今暫くは、かうして歩いてゆかればなりません。――ほんとうにお氣の毒……。

△

私はこの中を得々と、高足駄でつッ／＼と歩みました。

お祭の芝居の時ねえ、仇討なんかで刀を拔くと四人殺しつて彌次馬がどなるんですよ。だから可笑しくつてと、大久保の友は云ふた。もう此頃ぢやあ、金だらひを落としても、お隣家の奧樣が目の色をかへてとんでもくるんですからね、うつかり粗忽も出來ないぢやありませんかつて、淺草の友の一人りは笑つて云ひました。世間はそんなものぢやあないでせうか。

△

わかめの味噌汁の薄いのほど不味いものはない

（十　七　日）

△

與平さんの齒は口が圓い、歩二さんのは手足が大きすぎる、春汀さんのは頬がふくれてゐて、清方さんのは頭髪が禿げてゐる、蕉園さんのは手が細い、但しこれは雜誌の口繪や挿繪についての事

（十　九　日）

△

それは電車の内の事でしたのよ。

須田町を過ると少しこんで來ましてね、立つてゐる人も二三人はありましたの。その時なんですわ。

何處の停車場か一寸忘れましたけれど、……さう、四十かつかうの婦人が一人お乘んなさいましたの。

その方も矢つ張皮に下つて立つてゐらつしやいました。

そしたらね。

私の一人おいて隣に居た、細かい縞の着物を着た若い男が立ちもしないで。

『貴女此席へお腰掛になりませんか』って聞くんでせう。そしたらその婦人は

『いゝえこれで澤山でございますよ』

って仰しやいましたの、するとその男の返事が振つてるぢやありませんか。

『はあ、さうですか？』って……

これですもの。

私眞實に可笑くつて吹き出したくなりました、餘つぽどどうかしてますのね

（あ　る　日）

△

光枝さんが死んだ……

自殺！而も毒薬を仰いだと、輝子さんからの御報知を受けとつた時私は夢ぢやないかと思ひました。

あの優しい人、あの美くしい人、あの人にこんな思ひ切つたことが出來るかしらと、私は自分の心さへも、いく度疑ひましたでせう。

境遇は人を變化させる、おとなしいやうでも、どつかしつかりしたところのある人だつたから、あゝそれもしかれまい？。

光枝の眞實の心を知つてゐるものは、銀さんと二人きりですよと仰しやつた輝子さん？、その輝子さんには昨日面會た。夢のやうな對面まつたく夢のやうな——。

過去をもつて出京て來たのだといふ。死んでから迄も苦勞はさせたくない、あんなに戀しがつてた母ですからね、つて輝子さんは泣いたお墓は青山お母さんの傍へ埋めたから、思ひ出した時には行つてやつて下さいよつて仰しやつたが……。

顔色の浅黒い目立のきりつとした。態度はどの御謙讓ちやあないけれどなつかしみのある。やさしい人でした。

私には二つ許りのお十九年よりはやゝ老けて見える、この人にあふたことはありませんでしたが、光江さんにきいてよく知つて居ました。『たつた十八位で、よくまあ恐ろしい心になつたものです、今の女は氣が強い。命を捨てゝ迄も親に楯つかうとする』つて、現在光枝さんの死骸を前において。それはその時母さんの仰有やつた言葉ですとか光枝が其樣怖ろしい少女でせうかつて．輝子さんは身をふるはして云つた。

私はもう、何と云つてよいかわかりませんでした――。

ねえ、光枝さんが死んで二月になるあいたかつた、たつた一度でいいから…。光枝さんも會ひたいつて云つて下すつたのならうれしい!!。

懐かしい亡友のみ靈を包むで、花は何處へか去つた土に塗れて散つてゐた美くしい姿は知つてゐたけれど、あゝ花はいつこへ消えし…。

その影にはなつかしい光枝樣の俤もひそまうに…。

今日はこれから、輝子さんと青山墓地にゆきますのもうちき輝子さんもお見え遊ばしませう、あゝ私は支度をせれば…

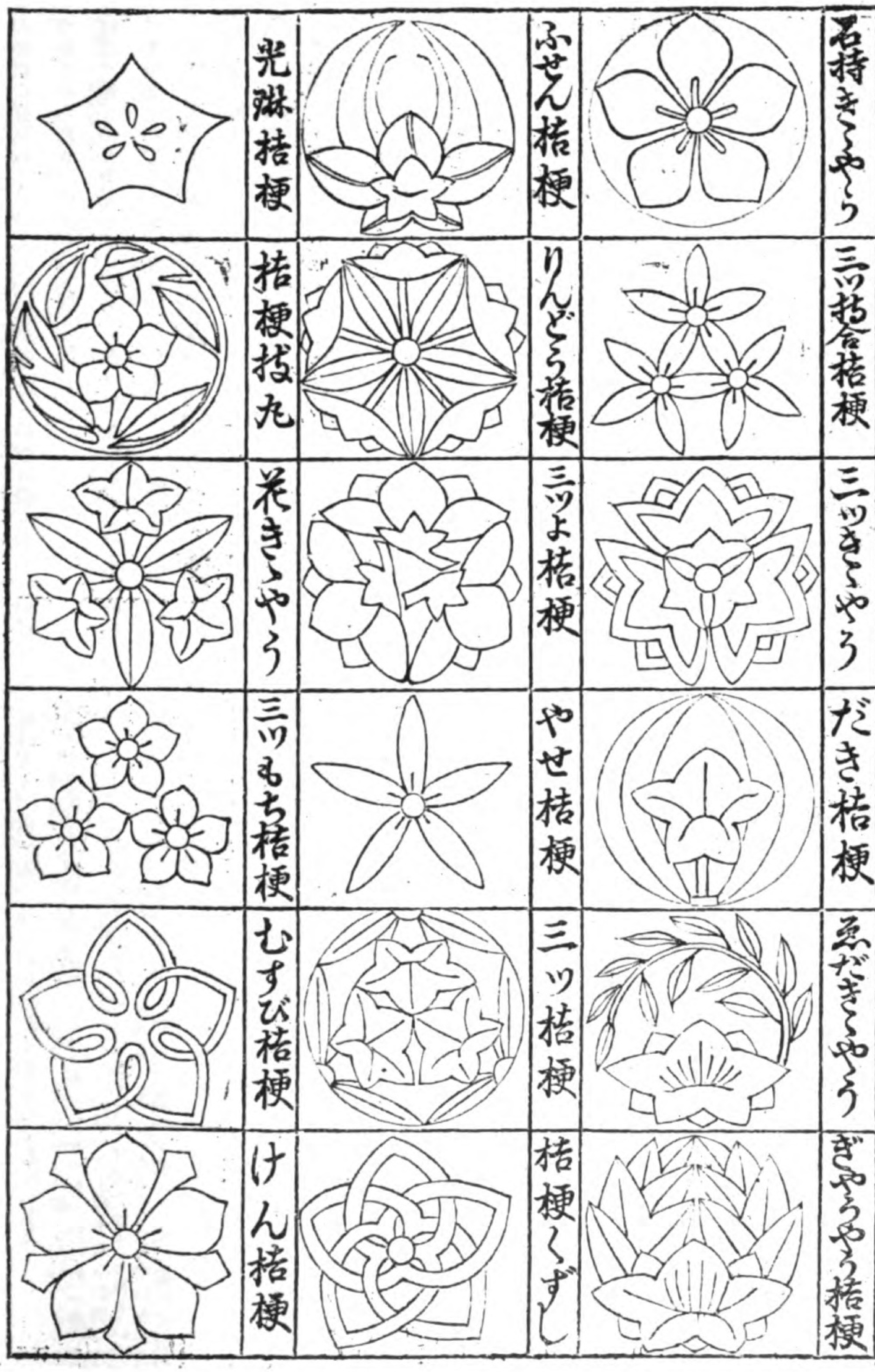
（青葉光る靜けき頃）

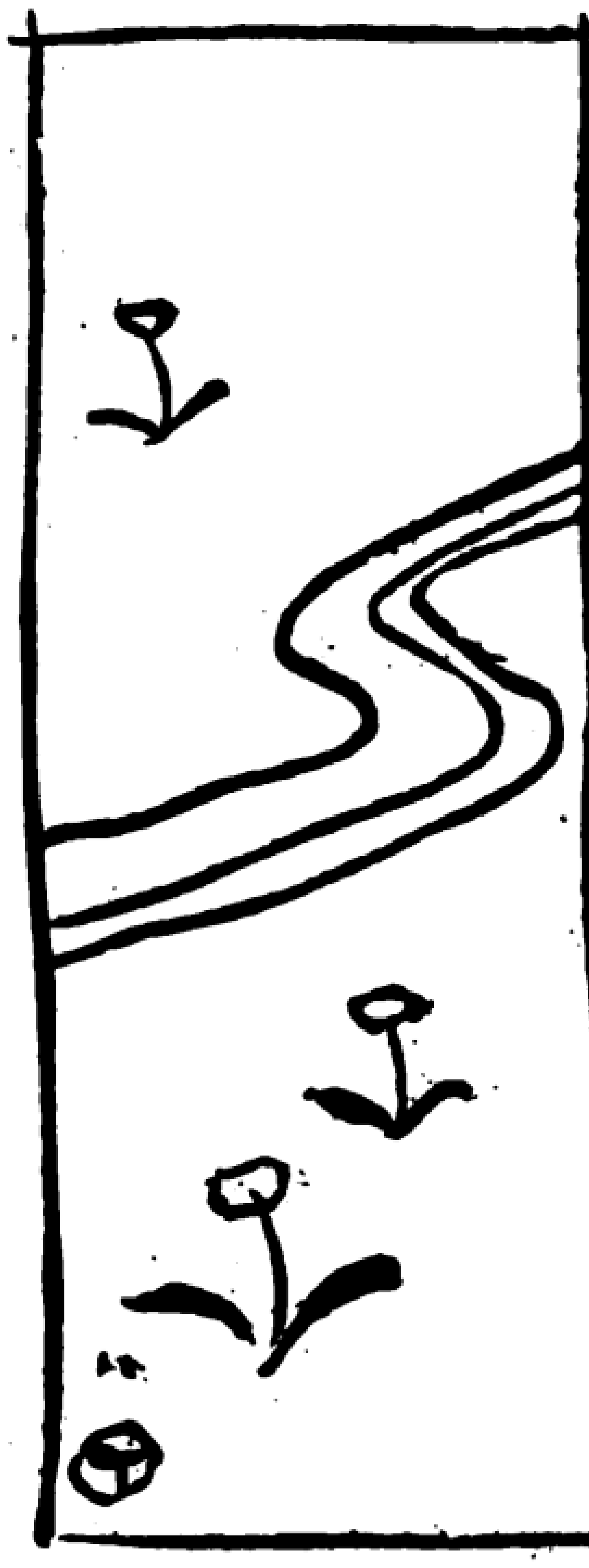
毛皮の保存

夏期に入つてもやはり毛皮の敷物を用ゐて居られる家がありますが、多分保存の始末に困つての事と存じます。私共多年の實驗に依りますと、敷物、肩掛、マフ等の毛皮の製品は、入梅前に濕りの除れる程度に日光で乾かしてから、亞鉛板若くは木製の箱に藏つて其の中にナフタリンを入れ、空氣の洩れぬ樣嚴重に目張りをして置くのです。秋になつたら其を取出して、二三日風に當てると、ナフタリンの臭味が抜けて、品物に疵がつきません。これが一番手輕な宜い方法と存じます。

油、牛乳、お茶の汚點を抜くには、先づ羅紗なりフランネルなりの毛布製の物を敷いて、汚點の部分を其上に廣げ、軟かい刷毛にベンヂンを付けて汚點の部分を丁寧に擦り、其擦つた部分に吸取紙を乘せて其上から鏝をかけるのですが、此を三四度繰返すと大抵の汚點は除れて了ひます。若しその汚點が激しかつたら、其部分をベンヂンの中に暫らく浸して置いてから、前の樣にするのです。酒の汚點であつたら硼砂とアンモニヤ水とを水に溶して、其部分を洗ふのです、汚點抜の注意は發見したら直ぐ着手するのが第一で棄て置くと地質を損じます。其から第二の注意としては輪の際らぬやう手拭を濕らして丁寧にぼかすことです。又た乾かすにしても直接に火に曝らさずに、成る可くば掌と掌との間に挿んで肌干にするが好いやうです。（今村順子女史）

桔梗の意匠


石持きゝやう
ふせん桔梗
光琳桔梗
三ツ持合桔梗
りんどう桔梗
桔梗拔丸
三ツきゝやう
三ツよ桔梗
花きゝやう
だき桔梗
やせ桔梗
三ツもち桔梗
急だきゝやう
三ツ桔梗
むすび桔梗
ぎやうやう桔梗
桔梗くずし
けん桔梗



女店員に必要な資格

白木屋呉服店秘書役　高野復一

△心機轉換の巧妙なこと

女店員に一番必要な資格は氣の持ち方の良いと云ふ事です。氣の持ち方と言つた丈では甚だ漠として居ますが、つまり腹の立つ時にもいやな顔をせず、悲しい時にもしよげた顔をせず、大に嬉しい時にもキャッキャッ笑ふと云ふ様な事をしないと云ふ意味で、常に快活の容貌と敏捷の擧動とを持つて居るのが第一番の資格であります。此れは別段女店員に限つた事ではなく男店員でも同じ事で、會社や銀行と異つて愛嬌一方の一個商店の賣子としては、何より彼より氣の持ち方の上手なのが必要で、男子と違つて女子は、非常に感情の強いものですから、此の注意が殊に必要であります氣の持ち方の上手と云ふのは、八釜しく言へば心機轉換の巧妙な事で、つまり思ひ返し思ひ切りが良くて、くよ／＼しないと云ふ意味であります。男子は多くはくよ／＼しない方で、餘りくよ／＼する者は女の腐つたのだと云ふ位ですが、女子は概してくよ／＼思ふのが普通の様であります。此のくよ／＼する女子は何事につけ容易に容貌に擧動に其の感情が現はれて、商店の賣子としては最も不適任であります。

△眉宇の間の生氣

何分商店の事ですから、多くの客に萬遍なく接し、快感を以て物を買はせると云ふのが第一の要素なので其れには常に快活の容貌と、しとやかにして而も敏捷なる擧動をすると云ふ事を心懸けねばなりません。此の快活な精神を保持し様と云ふのには、其人の心

掛けで幾らか改善して行きますが、其の第一の基礎は健康であります。健康の健良な女子は容貌が多少悪く共、其の眉宇の間に現はれたる生氣は、確に不健康なる蒼色の畜式美人を數段凌ぐもので、今後生存競爭の益々劇しくなるにつれ、斯る健康な女子の尊重さるゝ度合がますます增す事と思ひます。で私の店でも入店を希望し來る女店員を採用致すには、先づ其の健康の度合を考へ、從つて快活であるや否やを第一に見ます。實際健康



でなければ、忙がしい時には半日以上も立働き詰めですから、なかく日々の仕事が勤まりません。そして健康體の女子は絶えず愉快で居りますから、性質も大體良いと思つて間違ひありません。勿論壯健であれば悉く良いとは申されませんが、彼の他人の隠事を好んで探つたり、人のつまらぬ言ひ附け口に無益な心配をしたりする女子の通弊は、概してヒステリー性の弱々しい女子に多く見るもので、壯健な女子は大抵他人が何と言はうが

他人が何を爲やうが、自分は自分の爲る丈けの事を爲して、無益な事に頓着なく、サッサとやつて退けると云ふ風であります。謂ゆる竹を割つた様な氣質は、何うしても壯健な人に多いのです。そして女店員は一般に實子に使ふのですから、上役の男子の命を奉じて眞直に快活に立働いて與れれば、夫で責任は十分盡せる譯で、何の點より見ても、絕えず愉快げな言動を執る様に氣を持ち得ると云ふ事が第一番に必要であります。



△印象の鮮やかな女子

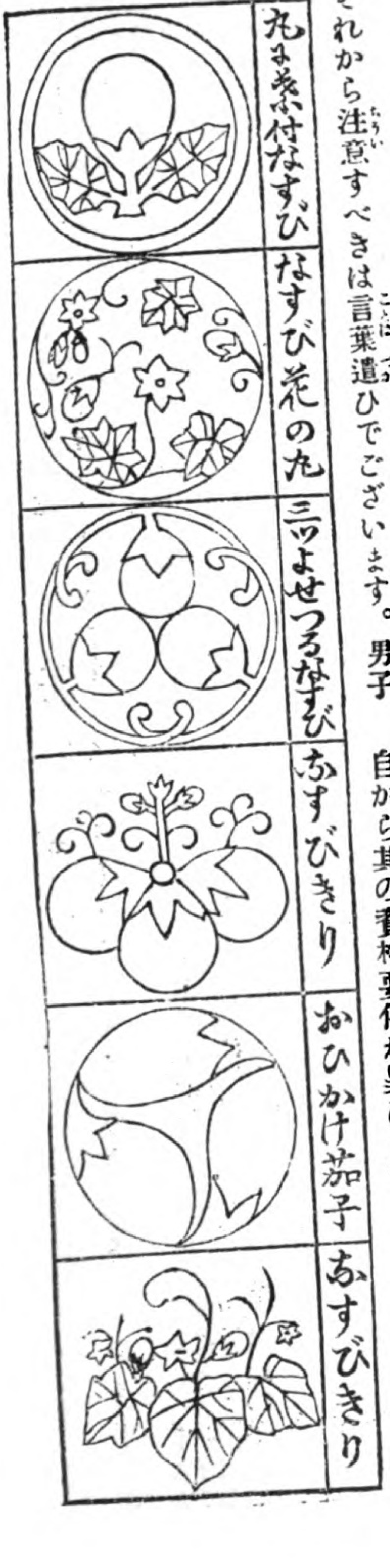
次に容貌の事を申しますと、是れは無論美しい方が宜いけれども而かも三十二相揃つて居る美人だから必ず宜いと云ふ譯には參りません。いくら美人でも、弱弱しくつて風にも堪へないと云ふ風では女店員として何等の價値もありません。審美的には左程の美貌でなく共、何處かはつきりとした印象を與へ得るといふ事が肝腎で、單

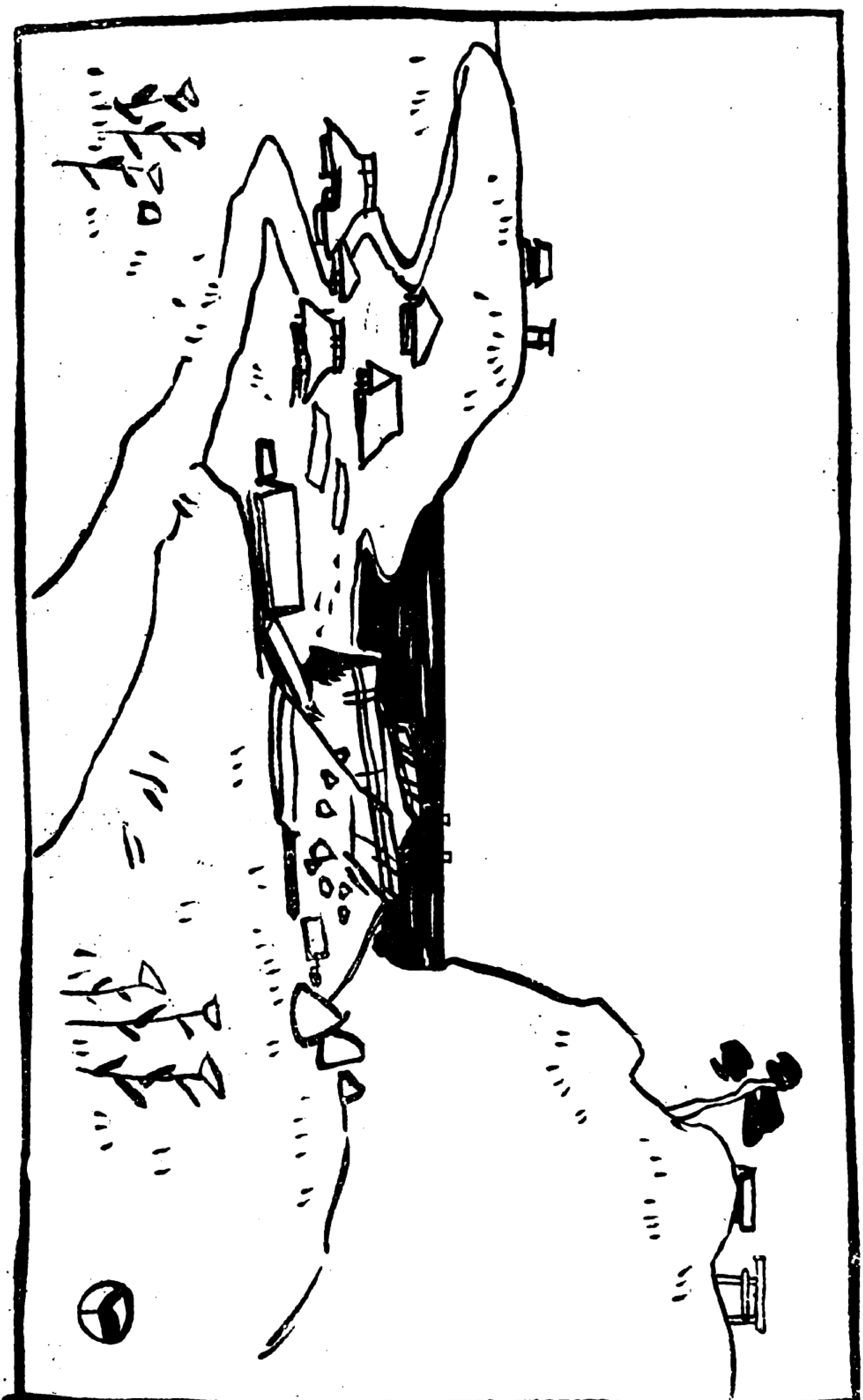
に容貌が良いと云ふ丈けでは不適當でございます。然し無論容貌が悪くつても宜しいと云ふのではありません。やはり不快を客に與へない程度の容貌は必要であります。それから服装は華美に流るゝを禁ずる事は何處の店でも同じですが、何よりも嫌ふのはだらしない身なりでございます。衣裳をだらしなく着て居られる程見苦しいものはありませんから、十分注意してキチンとして居て貰ひたいのです。交織物や木綿物でも、新らしいのをキチンと着て、頭髪を綺麗にし、餘り汚れて居ない足袋をはいて居ると云ふ風が好ましいのであります。

△快感を與ふる言葉遣ひ

それから注意すべきは言葉遣ひでございます。男子でも聽者に快感を與へる言葉遣ひを爲し得る人は非常に徳ですが、まして優しい言葉を知り、又使ひ得る様に思はれて居る女子の事ですから、此點の缺けて居る事は、女店員としては全く無資格なる事を表はして居ります。そして此の言葉遣ひもはツきりとして、要領を得せしめる事が肝腎で、ふくみ聲でをづ〜物を言ふ様なお孃様風なのは向きません。又學力の事を申しますと、此れは簿記方の女店員は、其の任務上自ら學力を論議する事が肝要ですが、賣子としては並普通の學力を具へて居れば澤山で、學力よりは常識の有る方を遥に好みます、以上は賣場に出る女店員の話でございます。賣場に出ないで事務の方に關係する者は、自から其の資格要件が異ひます。

茄子の意匠





風の浦

避暑料理

とら女



△避暑先の趣向

おい〳〵暑に向ひまして都住居の方々には、家の内の蒸あつきより、心までも結ぼれがちになるからに、夏のはじめより、海濱なり、山間なり、思ひ〳〵に假の宿をもとめられ、見馴れぬ賤のたつきの有樣や、海女のしわざに、日頃のうさも晴れ、所柄とて見た事なき產物に、眼を樂ましむるをりには、誰しもその產物をなんとか應用して見たくなるもので、また日永のなぐさみにも面白き趣向の出るものです。

殊に日光などは御承知のとほりの山間のまちで、夏は避暑に、秋はもみぢにと、都人のおとづれる外には海から遠き山の中、なにほど便利な世の中とは申せ、その土地に產するものよりあたらしく、風味よきものの得らるべき筈のものではありません。毎日食膳にのぼるおさかなでも、氷で責めて保たしてあるだけの事かういふ時こそ、その地〳〵の產物をみはからひ、御工夫なさるも一つの興味を添へるものです。

この頃日光のひしよ先で、土地の產物ばかりを取揃へて、チヨツトした會席の趣向をしたとの、さる人から話、なか〳〵面白く、淡泊として洒落てゐる献立まづあらましを御紹介いたしませう、その取合は先づ此樣な風です。

○向　沖鱠、イワナ

○汁　豆腐、紫蘇、水がらし

○椀　アユ

○皿　河鰌のフライ、ナンキン隱元

○口　ツグ鳥の附燒、川海苔

○香物　　日光蕃椒
○菓子　　日光羊羹

見渡したところ、皆その地の物産ばかりで、なかなか氣のきいた献立です。

○イワナの沖鱠

イワナは日光產の川魚で、水清き溪流にをるもので肉の緊縮つた、味のあつさりとしたところから、沖鱠には持つて來いです。これを開いて、骨を除き、細身につくり、鹽をして酢をかけておく。大根おろしに、味噌を裏漉にしたのを交せ、砂糖を少し入れてから、魚の身を交せ、生姜のセン切を振りかけ、紫蘇の實をあしらふのです。

○汁

豆腐も日光のは上等なもので、その味はチョット都にては得られません。紫蘇も日光唐がらしでお承知の通り、葉が大きくつて香氣も高く、よろしふございます。これに例の水がらしにして汁に仕立て出す。

○アユソ

これも日光土產の川魚で、鮎に似てゐるが、形も大きく、なか〳〵味いものです。これを三枚におろしてチョット火取つて、卸し大根をあしらつておく。

○川鱒のフライ

河鱒は元來はあまり日光邊に澤山なかつたのですがちかごろ養魚がさかんになつたので、中禪寺湖などでも漁れる樣になつたので、これを薄身に採つてフライにする。此相手にはナンキンといふさや隱元の一種があのちにありますが、至極よろしいのです。

○ツグ鳥の附燒に、大谷川の川海苔

ツグといふ小鳥も、日光邊には多い鳥で、これを二割にして、醬油漬にしておいて、燒鳥にし、その相手には大谷川產の川海苔を粧點ふのです。

香の物、羊羹など名產として出來てゐるものを使ふので、此樣いふ事にすれば、何から何まで土產の物で間に合ひます。チョット趣向をいたすと、面白いものが出來て、避暑中の慰になります。



虚榮の辯

二宮貞子

二宮貞子孃は十七歳から七年間米國に留學され、スミス大學を卒業してバチエロル、オブ、アーツの學位を受け昨年歸朝されたお方でございます。

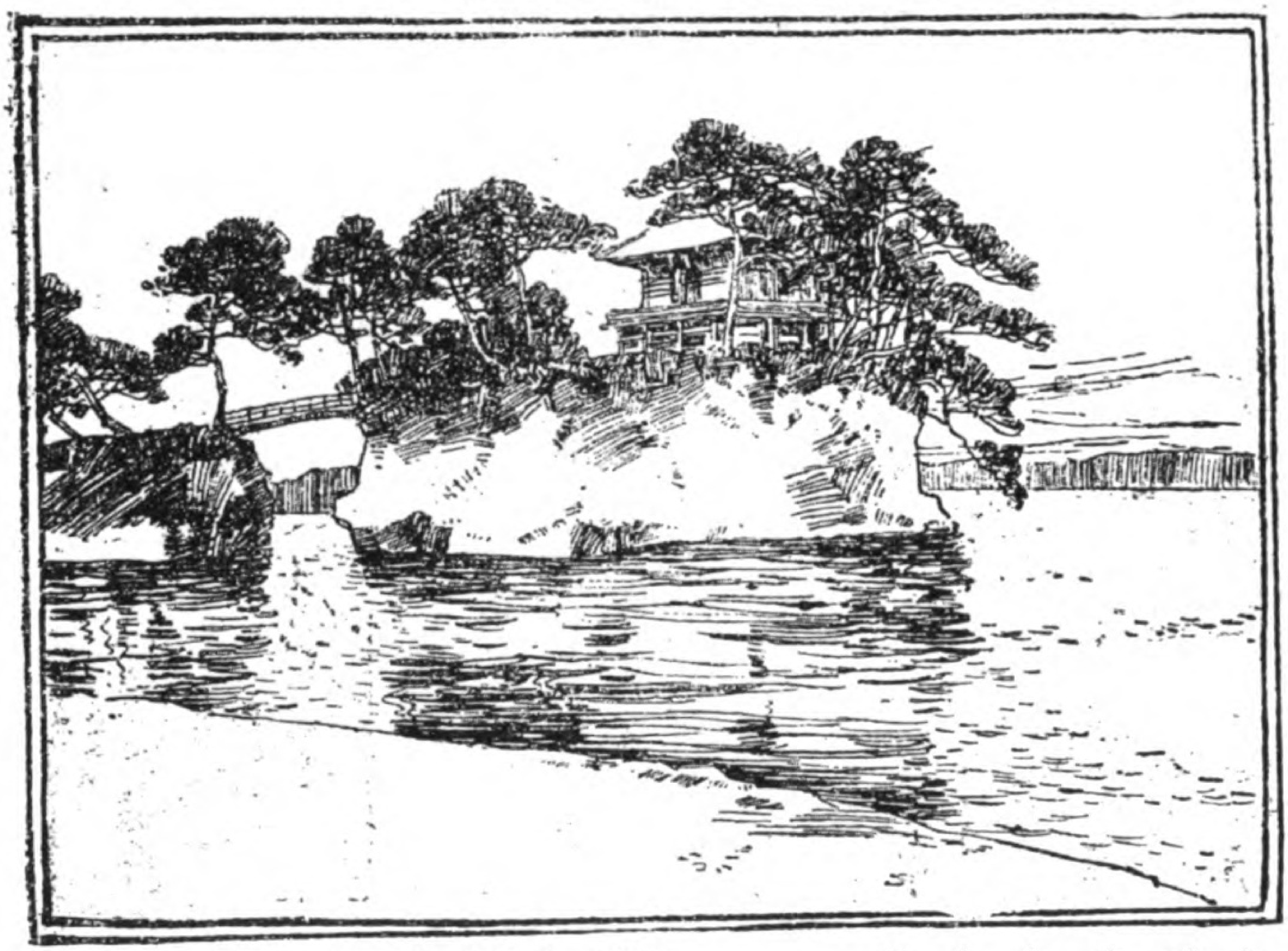
▲日の淺い割合に進歩が早い

日本で新らしい女子教育の勃興しましたのは四十年來の事で、未だ日の淺いものですが、その割合に進歩が早ふございますのは、昔からの素養があつた爲でございませう。假令その方法は片寄つて居たにせよ道義的、文學的の教育は却々旺んでありまして、貞烈の婦人や和歌文章に堪能な名婦人を輩出した位でございますから、今日の新教育を受くる礎は出來て居たと申しても宜しいでせう。併し歐米の女子教育も一朝に今日の隆盛を得られたのではありません。米國當りでも幾多の研究改良を經て唯今の域に達したので、今日も尚研究改良を謀りつゝあるのですから日の淺い日本の女子教育の完全を今日に求めるのは無理な注文でありませう。

▲女學生の虚榮は當然

今日の女子が虚榮心の強いのは高等教育の結果のやうに云ふ人がありますのは遺憾に堪へません。高等教育の足りぬ自重心の少い女子がはかなき虚榮に憧れるので、深い教育を受けた女子は益々謙遜になるのは事實でございます。又一方から申せば物質的にのみ發達しつゝある現社會の人が一般に虚榮に囚はれて居るのに、獨り妙齢の女學生ばかり攻撃するのは弱い者いじ

松島名勝五大堂



めと申すべきでせう。女學生の虚榮心を撓めるより先づ社會の人を耽溺から救ふ方法を講じなければなりません。若い女子が周圍の空氣にかぶれるのは當然な話しでございまして、責は社會に在りませう。尚敎育者も根本に培ふことを忘れて結果をのみ責むる傾があるやうに考へます。

▲精神敎育の不足、

生意氣なことを申すやうですが、唯今日本の女子敎育は學科の數が多くつて肝腎の精神敎育が不足して居りはせぬかと思ひます。（勿論一般ではありませんが）維新前は武士道的の精神敎育が主となつて居りましたけれども、その後ちは過度時代のことゝて智識の吸收に忙しく自然精神敎育が閑却されましたのでせう。尤も現今は精神敎育の盛んに唱道され倫理修身の學科に重きを置くやうになりましたけれども、生徒を感化する力が乏しいと思はれます。生徒を感化するものは敎師たるものゝ人格によるのですから敎師の德望なけれ

ば千萬言の倫理教授も無効に了るのでございます。

▲私の敬慕せる校長

私の居りました大學の校長は、三十五年間勤續した方でありましたが、德望大に勝れ、一度口を開いたことは全校生徒の肺腑に銘じ、八釜しい倫理を講じないでもよく全生徒を感化したのでございます。毎朝神へ感謝の祈を捧げた後、時々簡短な談話をされました。例令ば女子が大學に入るのは男子と對峙して學力を競爭するためではない。高尚な女子の本分を研究修得するのが目的であることや、其日々々の覺悟等を說かれたのですが、言行一致品格高き校長の導きは誠に偉大の力がありました。着眼點を高くして日々にその身を省りみ、何卒して天地に恥ぬ人間になりたいと云ふ精神が生徒の頭腦に養はれさへすれば、虛榮なぞの惡癖は自然に消滅して了ふのです。私は決して宗教の如何を論じたり、宗教學校が良いなぞとは申しません、主義は何にもせよ各學校に信仰の目的を定め校長教師の

松島之勝雄島



熱心な信仰を基として生徒の信念を養ふことが必要であらうと思ひます。

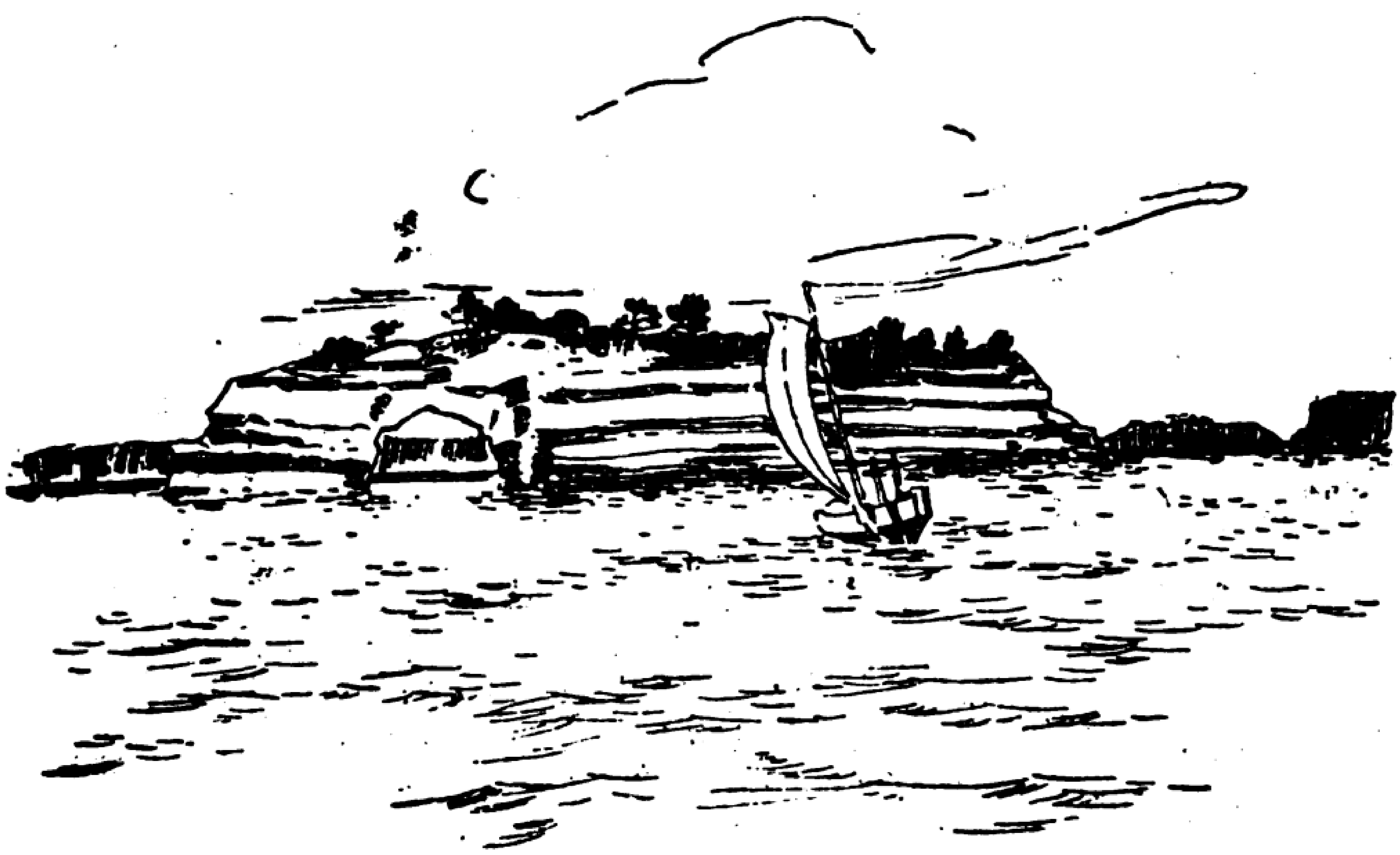
▲切詰めた要求

女子一度主婦となれば、裁縫、料理、經濟を巧みにして一家を治むれば十分である。今の女學校は物理、化學、天文、地理など餘り必要なきことまで敎へて肝腎の學科を忽がせにすると苦情を鳴らすものが世間に未だ多いやうですが、これは餘り切詰た考へかと思ひます。敎育は一圓の金で一圓の品を買ふやうに眼前に効能の現はれるものではありますまい。物理や天文學なぞ主婦には何の必要もないやうですが、我子が天空の星を指して質問を發した時、電車や汽車の走る理を尋ねた時、これらの素養ある母親が一言でも明瞭の解答を與へましたなら子供の頭腦に何の位良い印象を與へるか知れません。尙子供が成長して高等敎育を受くるに從ひ益々母親に博き智識の要求が起つて參る譯です。一度後繼者に對する責任を考へましたら切詰た世間の要求が如何に淺墓であるかゞ分りませう。一體各科の敎育を一々分離して効能を論ずるのは間違つた話で、つまり各科の智識を消化して渾然たる常識を養ふたものが二十世紀の立派な婦人となるものでございませう。

▲横着極まる母親

近頃女學生の母親が學校に對する家事敎育の要求が段々甚だしくなり、鼻緒のすげ方まで敎へて貰ひたいと云ふものもあるさうでございます。時間の餘裕さへあれば、これらの事まで學校で敎を受くるのも結構でせうが、餘り家政の細事まで學校で受持つ結果益々學科は繁雜を極め、肝腎の腦力を養成する時間が乏しくならうと思ひます。米國の女學生なぞは母親が裁縫、料理その他の家事を敎へますから高等女學校時代にも別に家事の科目はございません。從つて他の學科の時間に餘裕があつて傍ら社會的の智識を養ふゆとりも得られるのです。不規律の用事の多い日本の家庭では母

松島材木島



親が娘に家事を仕込む暇もないか知れませんが、どうにか最少し工夫して家の細事は母親が敎へるやうにありたいものです。娘の事は一切學校に任せ切で暢氣で居る母親は餘り横着ではございますまいか。

▲女學生に同情する親が少い

娘が學校でどんな事を學んで居るかをよく知つて居る母親は少いやうに思はれます。學生は氣樂に見えますけれども學生には學科の苦勞が相當にございます。假令時代が違つて敎育法が分らないにしても、その苦勞に同情して相談相手となつてやりたいものです。この同情もなく家事を敎ゆる面倒も見ないで、娘の迂濶を責めたり學校敎育を彼是云ふ母親は決して良き娘を作ることは出來ません。

▲下宿生活の危險

未だ地方に普く女學校の設けなき今日致方もなきこと乍ら妙齡の女子を下宿屋に預けるほど危險なことは

ありません。米國の女學生は自由だと申しますが、實際は日本より窮屈な制裁の許に生活して居ります。高等女學校時代には皆嚴重な父母の膝下から通學いたしますし、大學に入る女子も寄宿舍が滿員の場合には學校監督の許に在る下宿屋から通ふて居ります。この下宿屋は學校の許可を得て寄宿舍の周圍に建たもので、主婦は素より相當の敎育ある高尙な人物を選らみ、尙學校から一人づゝ監視者を派遣して取締りをいたさせ起臥食事百般の規律は悉皆學校の規則に從はせて居るので、下宿屋と申しても寄宿舍と少しも變りはございません。自重心に富んだ彼女學生でもかやうな制裁の許に保護されて居りますのに、我國の若い女子に自由な生活をさせるのは虎穴に投ずるやうなものでせう。

▲本蟲（書物ばかり讀む女）

序に彼地の女學生氣質を一寸申上げますれば、彼等の仲間で勉强家を尊敬する女學生は、唯學科の勉强ばかりでなく、忠實によく運動遊戯もし、友達とよく交

松島名勝腕島

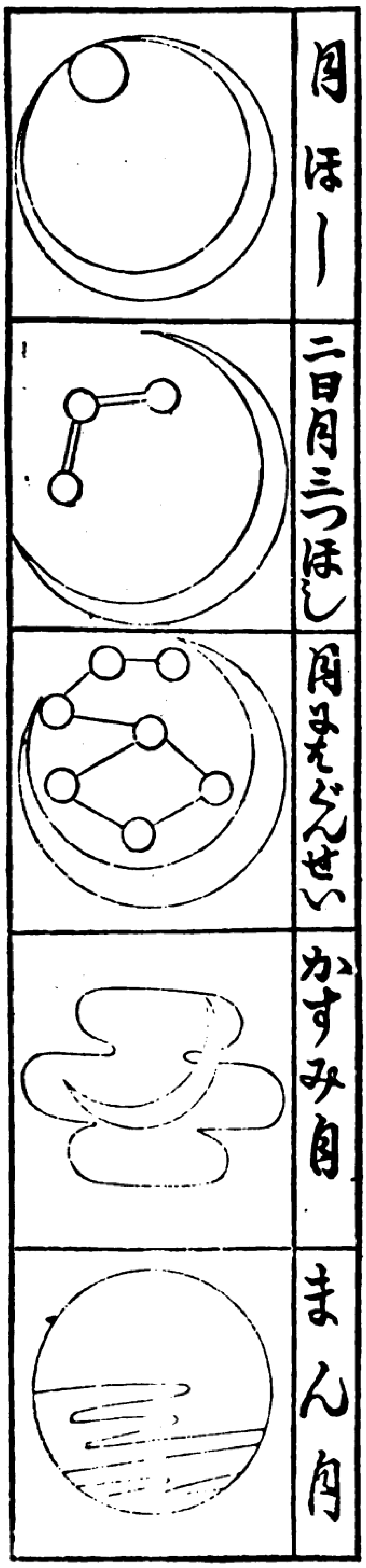


り、兼て社會的智識を修養して居るものでございます唯書物にばかり噛りついて他の事を顧りみぬものは、本蟲と稱へて畸人扱ひにされて居ります。我國の女學生にはこの本蟲勉强家が多いやうではございませんか本蟲になると兎角感情的にのみ流れて社會と離隔する弊に陷ります。これらも保護者が注意すべきことでありませう。

▲女學生の結婚理想

結婚年齡の遲い所爲でせうが彼地の女學生は高等女學校時代には未だ眞實に無邪氣なもので、結婚の理想なぞ丸で念頭にないやうでございます。彼等は卒業後大學とか職業的の學校或は料理専門の學校とか各々望むところへ入る理想が主なるものです。大學生になれば自然相當の結婚理想も抱くやうになりませうが、これとても學生の間は極めて淡白なものです。畢竟立派な婦人になりたい希望が旺んであるために餘念を抱く暇がないものと見えます。こんな風ですから中學時代に男女混同教育を受けて少しも危險がないのでございます。大學は經費の許す限り男女別々に設けると云ふのが近頃の方針ですが、これは女らしき婦人を作りたいためで、危險を防ぐ用心ではないのでございます。日本でも追々精神教育が發達して女學生の着眼點をもつと向上させましたら虚榮だの不節操だのと評立る厄介もなくなるであらうと思ひます。

星の意匠



動物園の技師の苦心

上野の動物園の技師は、獸醫でもあり、動物の取扱ひには多年の經驗もあつて、從て園内の動物は猛であらうと何であらうと能く技師に馴じんで居るし、技師も又各動物の有らゆる性質も擧動も知つて、恰度小學校の先生が多くの生徒を思ふ儘に指揮する樣に扱ふが、餘程人に馴じんだ動物でも顏の新らしい者とは當分折合ひが附かぬさうである。夫が彼等に顏を知られ動物の氣心も知る樣になると。非常に其の人になづくさうで、現に京都動物園の技師が、一昨年ライオンが産だ四疋の内の一つを親獅子が檻の外へ投り出したのを殆ど懷ろで育て上げたので、昨今廿八貫もある牡の癖に、技師を親と思つて技師の隣室に居て大層温順しくして居るといふ。

器用な者であれば、一二年の内に動物の氣心も呑み込めるが、何しろ相互の間に餘り手眞似も言語も解せられぬから、確かに扱ひ方は困難であらう。尤も素人には叫び聲は皆な同一であらうが、其の叫びに喜怒哀樂があり、食餌をねだる場合、或ひは甘つたれる樣な時、熱い寒いなど、種々の表情や態度をするといふが相當の功を積まぬと、之れが合點されずに動物を怒らせる場合があるので、之れを呑込む迄の苦勞は一と通りでないさうである。

表情や擧動に據て動物の希望やその外の事が解し得る樣になると、即ち一人前の園丁になるのであるが、最う一歩進んだ者になると動物が疾病に罹つて、食は普通の如く採ながら病に侵された者がある夫を數月來の便秘若くは糞の軟硬に依つてちやんと見分けるやうになる、丁度母親が子供の容體を察するやうなものだ。

叫聲の内容を知り疾病の場合を知るやうになると、動物もいつか其園丁を慕ふやうになり、ライオンや熊の樣な猛しい者でも、其者の命令にはよく服從するので突然何ものかに怒つたライオンでも、其者が檻のほとりに近づき、「温順くせにやいかん」と一と聲浴せかけると猫の樣にすくむ事は珍らしくないといふ位である。

毎月課題 特別懸賞文募集

〆切八月十三日

△學問に不熱心なる人を鞭撻する文

△姑

一寄稿者は右二種の内いづれを撰むも妨げなし。

一前者は師父の威嚴を持ち朋友の溫情を含み、懇切にして周到、熱あり、涙あり、活力あり、氣概あり、誠實にして首尾貫徹したるもの。

一後者は題に因みて種々の感じた事、記憶せる事、看た事、聞いた事を描寫せよ。

一寄稿者は左の規程に注意すべし。

一紙數は半紙五枚以上の事。

一原稿は撰定の上、一等より四等までに別ち、都合十名を限り掲載の事。

一掲載したる原稿には賞金として左の金額を送呈す。

一等金拾五圓(一名)二等金拾圓(一名)三等金七圓(三名)四等金五圓(五名)

豫告として次號の課題を發表す。

△虛榮心

△秋の美(寫生文)

〆切九月十日



舞子の濱

濱千鳥



○

今年の夏は兄と同伴で舞子へ參る事になりました。同伴と言へば名が好のですが、實は兄が少し呼吸器を痛めましたので、厭々ながらお供を忝けなくしました。此春遠足で皆様と參りました時に見付けて置いた家が未明いて居ましたので、早速自炊する事になりました。

家のぐるりには、濱ゑんどうや、濱晝顔が澤山咲いてゐます、夕方になれば誠様のお好の優しい月見草も開きます、白砂を蹈んで濱へ行きますと、オゾーンに富んだ海の空氣は自ら胸襟を開かせ、白い波はベースを奏しながら磯へ〳〵と寄せて參ります。沖の方には、鷗のやうな眞帆片帆が沈み行く夕陽を浴びながら、漁歌勇しく漕ぎ戻り、磯には漁夫のマダムや家族がワイワイ騷いで待つて居る等は、全く一幅の畫題になりさうですよ。

○

大分神戸が懷しくなつたので、門に出て東の空を眺めてゐると、東から下り列車がピユー！と、汽笛をならして舞子驛に着きました。

待つともなしに待つてゐると、思ひ掛けなくも從兄の昌雄樣が見えた、一道理で今朝茶柱が立つたと思つた、一人懷しく思つてゐた矢先なので、嬉しくつて嬉しくつて、其手に飛び付いた。

『まアよくいらつして下さいました。』

『やア久さん大きくなつたナ、』つてニコ〳〵。

『從兄樣だつて變つてよ、』兩人の眼は一緒に會つて私

の顔は紅がさした。

嬉しくつて室に飛び込んだ拍子に、頭をイヤと言ふ程格子に打ち付けた、びつくりして出て來た兄は。

「なんだちつと靜かにしろ！」、だつて、隨分ネ全く夢中だつたのですもの。

「だつて私が……」

「なんだ人が折角來てゐるのに兄妹喧嘩は驚くネ」、と母樣に言はれて、怒りの言もすつこんでしまつた。



「アハヽヽ、久さんが悪いのぢやないよ、格子が低いんだ……イヤ兄樣その後は御無沙汰致しました、御病氣は如何です」と相變らずの快活サ、だが何處となく兄樣らしくなつて來て、胡坐を組んでビーヤ等を飲んでる時は、ほんとに恐い叔父樣のやうな氣がする。

「卒業祝ひだ！大いにやるべし！」

兄樣は何時になく大元氣、久しく彈かなかつた琵琶を引張り出して來る。

「何？僕を祝つて下さる！之りャ難有い！」

全く使はれる私こそ好い面の皮。

「大學を卒業たのだから、今度は、少し長く御到留だよ」と早や平常の坊つちやんに歸つてしまつて、だけれど家が賑やかになるから好いわ。

○

お隣り――隣だつて大分離れてゐる――に玖二雄さんて、數へ年八歳におなりの可愛いゝ坊つちやんがお祖母樣と二人で住んでゐらつしやる。

玖二雄さんには、母樣がありません。何でも三歳位の時とかに、胸の病で逝かれたのですつて、父樣は此可愛いゝ坊つちやんと上品なお祖母樣を殘して、アメリカに行つて居られるとか聞きました。

けれども活潑な坊つちやんですよ。淋しくなると呼んで來て遊びますの。

二月生れの年强ですから。今年は尋常の二年です、いつも可愛いゝ聲で歌を唱ひます。

「姉さん！姉さん！僕面白い歌を習つて來たの、敎へやうか」言ふから。

「ハア敎へて頂戴」と言へば、早や得意になつて……い

「はいしイ、はいしイ、歩めよ小馬山でも坂でもずんずん歩め、お前が進めば私も進む、歩めよ〳〵足音高くパカ〳〵パカ〳〵……」

「面白いのネ」つて言つてやれば、嬉しがつて其の先を唱ひながら緣側をドン〳〵飛び歩くのですよ。

何時でしたか？たしか土曜日でした、晝飯を終つた頃、「姉さん〳〵」と呼ぶので故意と『誰れ？』と問へば「僕よ」とつか〳〵緣から上つて來て、「僕ね今日之を清書したの」と言ふので見ると、左右東西南北と、玖二雄らしく書かれてあつて、皆朱で二重丸が入れてあつて南と言ふ字には殊に三重丸が入れてある。

「ネ姉さん僕上手でせう？僕こんな字大好きだ、それでね僕此の間から一所懸命に習つたんだよ」と得意になつて話しする。

「そう豪かつたのね、それぢや之を上げやうね」と、玖二さんにと、神戸で買つて來て、頂いた軍艦を取り出して與へると、何だか沈んでゐるので「どうしたの玖

二ちやん！』と問へば早や涙組んでゐる。

『ほんとうにどうしたの』肩に手を掛けて、顔をのぞくと。

『だつて僕つまらないもの』『なにがつまらないの？』、

『僕習字をよく書いたつて、姉様と、お祖母様と、それから兄様だけしか賞めて呉れないもの』とシャクリながら、『母様は、居ないし、父様は、外國だし、僕ちつとも張り合ひがないもの』、と年の割に大人た事を言ふ、私もう、たまらなくなつて、玖二ちやんをシッカリ抱いて、思ひ切り泣きましたわ、側で讀書して居た兄も眼鏡を拭いてゐました。

『玖二ちやんそんな事お祖母様の前で、言ふものぢやなくつてよ、どんなに心配なさるか知れないからネ、



ネ、玖二ちやんは、好い子だから云はないでせう？』とすかすと、大人らしく『アヽだけれど僕、父様に逢ひたいナ』、と又しても涙組む。何て可愛いゝのでせう。

『それはネ、玖二ちやんがよく勉強して大きくなつたらネ、大きなお船に乗つて逢に行かれるのよ』と諭せば、『それぢやこんな小さな軍艦と違ふの？』、と子供らしく聞く、『えゝずつと大きいのよ、ホラ玖二ちやんご覧、今黒い烟を出して沖を行く船ネ、あんなのよりも、もつと大きい船に乗つて大きな〳〵洋を渡つて行くのです

よ』。と言へば、睫に涙を宿したまゝ、沖を通る汽船をジット眺めてニッコリ……。

此處まで讀んで來ると、看護婦の杉原さんが、お嬢を……とはいつて來たので廢した。

これは去年の日記……あゝ去年は兄の看護をしに來たが今年は自分が、病を得て、舞子に看護せられる身となつた、可愛いゝ玖二ちやんは、お父樣が歸へられたので、東京へ歸へつたとの事！

昌樣は役所が忙しいので、此の日曜日に來て呉れたが直ぐ歸へつてしまつた。

床の間の赤いダリヤは、白いリリーや、カーネーションと美しいコントラストを造てゐる。

縁側に掛けてあるスカイラークの籠から絶え間なく高調なメロデーで歌つてゐる。



夜、月が出た、胸の痛も薄らいだので、頭高の束髪のまゝ被布ひつかけて、看護婦と一緒に月に憧れ出た。空氣草履の足下かるく、砂をザクリザクリと蹈みながら……濱邊を歩く、瘠せたのでリングの緩くなつた事、ザブリ！ザブリ！と寄せては返へす片女波、月は海面に輝いて、浪は玉兎を乘せた銀蛇のやうに……磯馴松の蔭から、悲調を帯びた尺八が絶え〲に聞える、泪が止め度なく流れて……。



質疑 答應 日用便覽

問 畫風に光琳派といふのがありますが、それには何んな特色がありますか（麴町林すゞ子）

答 元祿頃、尾形光琳が大成した畫風で、主に花木を畫きて、之を模様化したものが多い様であります。彩色は濃厚なものを用ゐ、時には菊花等を畫いて浮彫の如うに高く胡粉を盛つたりしてありますが、光琳は往々之を蒔繪に應用し弟の乾山は之を陶器に描き、又屢〻衣裳の模様などにも用ゐました。

問 罨法の仕方をお敎へ下さい（淺草みつ子）

罨法には冷罨法と濕罨法の二種あります。冷罨法は布片を折り重ねて普通の清水、氷水、或は硼酸水（百分の三十）に浸し絞りて患部に置くので、充血、炎症による局所痛、或は疼痛出血等に効があります。溫罨法は布片を溫湯或は硼酸水の溫水等に浸して用ふるので、膿汁滲出物の排除、局所の營養亢進、神經痛、痙攣等に効があります。

問 歌嚢とは何んな袋ですか（京都矢部うめ子）

答 歌の詠草などを入れて置くもので、檀紙にて作り、其の裏に「徒に鳴くや蛙の歌ぶくろ心なき身も思入ればや」といふ夫木集の歌を書いて、水引で結んで柱に掛けて置いたものです。

問 此頃の書物によく科學的といふ言葉が使つてありますが、あの科學といふ意味が私にはよく解りませんから御教示願ひます（靜岡池田ふみ子）

答 或る一部分の事柄に就て組織立つた智識をいふので、常識と相對する言葉です。其の自然現象を目的とすると精神現象を目的とするとに依て之れに自然科學（例へば天文學、物理學）と精神科學（例へば心理學、倫理學）との區別があります。

問 學齢兒童といふ事と親の心得をお敎へ下さい（甲斐の若き母）

答 滿六歳に達した翌日より滿十四歳に至る八ケ年の間の兒童を學齢兒童といひ、此の間に於て兩親、其他の保護者は兒童をして尋常小學校の敎科を修了せしむる義務があります。其の就學の始期は、既に學齢に達した者、及び其の年の六月に學齢に達すべき者は、共に其年の四月です。

問 體溫器の用法を伺ひます（廣島村田ゆき子）

答 體溫器は普通は攝氏の寒暖計を用ゐてあつて、氷點が零度、沸騰點が百度となつて居りますが、人の體溫は平均三十七度で、之れより熱

が著しく高くなれば疾病のある徴です。之を計るには使用前に一寸振つて水銀柱を十分に下げ之を腋下、股間等に挟んで、十五分間後に取出して檢べるのです。

問　象眼細工とは何んな細工ですか(山城兼子)

答　鐵、銅等の金屬の地に薄く金銀等を嵌めて作る細工で鍔や煙管等に多く見受けます。眞鍮をはめたのは眞鍮象眼、布目地に施したのは布目象眼といひ、其他色々種類があります。

問　狐憑といふ病氣の原因と症状を伺ひたうございます(大阪吉井清子)

答　狐憑といふは狐狸等の妖怪を迷信する者に發する一種の神經病で、精神が錯亂して不可思議な動作をなし、奇聲を放ち、一見或る怪物が宿つて居るやうな症状を呈します。

問　何うしたら風味のよい玉子燒が出來ませうか(埼玉森よしゑ)

答　黄味と白味をよく掻き交ぜ置き、それに玉子の分量中分程の煮出しに好い加減の味淋醤油を入れてよく掻き交ぜ、之を鍋にて燒き其の半熟になつた時二つか三つに卷き重ねると出來ます。煮出しは鰹魚節にてもスープにても結構です。

問　子供の食物の膳は幾日目に行ふて、何んな事をするものですか(京都高田春子)

答　生後百二十日目に行ひます。其の儀式は地方によつて色々の習慣がありますが、小笠原流では、食膳に飯は大飯といつて高く盛つてつけ汁は鯉か鯛を用ゐ向ふへは右の方に金頭、左の方に梅干を五つ、又齒固と稱して小さい餅五つを据ゑ、尚ほ別に底石といつて青い小石を添へて置き、子供を其れに向はせて、ほんの食べる型だけをやらせるのです。其の器物は成るべく松竹梅鶴龜等の目出度い模様のあるものを用ゐます。

問　本誌七月號の福來博士の「强迫觀念の話」の中に「三昧」といふ言葉がありましたが、あれはどんな事をいふのですか(福島伊藤くに子)

答　心を或る一事に集中して散亂せしめない事をいふのです。例へば、阿彌陀三昧といへば、口に念佛を唱へ、心に阿彌陀佛を想ふて、其か も他を顧みないことを申すのです。

問　夏季御飯を腐らせない簡便な法はありますまいか(廣島濱子)

答　清潔な飯櫃に入れて空氣の流通のよい冷かな處に置くべきは勿論ですが、御飯を炊く時に釜の底へ梅干を一つ入れて置けば宜しいさうです。又飯櫃の底へ梅干を一つ入れて置くのも効能があると申します。

問　南京蟲が折々出まして刺した跡がはれて四五日は苦しみますが、何かよい藥はございませんか、又何うしたら退治が出來ますか(大阪隆子)

答　刺した跡はアンモニア液をつけるかアルボース石鹸で洗ふのが宜しい樣です。之を退治する爲に通常床を熱湯で洗つたり、或は石油を注いだりしますが、なかなか全滅はしません。けれど明りを恐るゝ蟲なれば、終夜點燈して置けば出て來ません。又敷布團の周圍にのみとり粉を撒くのも可い樣です又驅除法には、アルボース液を壁の隙、床下等に撒く方法もあり、或は室内を密閉して、中央で硫黄を數時間燃して撲滅する方法もあります。

問　四五年前より吃音になり、昨今は不自由一方ならず、恥しくて每晩枕をぬらして居ります何卒全治法を敎へて下さい（福岡の一讀者）

答　十分氣を落ちつけ談話の際は殊に注意して正當に發音する事を練習するのが一番です。又小石川區大六天町伊澤修二氏は、其の矯正術を行ふて居られます。

問　落雷の危害を避ける方はありませんか（千葉吉井奎子）

答　雷鳴の時は樹の下、塔の下などに近寄つてはなりません。又二階三階に居るよりも下の方が安全です。下の廣い中央に坐つて居れば殊に安全です。それから蚊帳の中に入つて居れば一層安全です。雷鳴の時金屬に近き居るのは危險です。尙ほ注意を申せば、電氣に擊たれた時は速に頭上に冷水を注げば生命を救ひ得る事があります。若し手足が既にしびれた時は、全身を水中に浸すとよいと云ふ事です。

問　キャベツは何うして漬けて食べますか（播磨風間たみ子）

答　四五日で食べるには、葉を一枚づゝ剝いて鹽を振り成るべく重い石を壓に使つて置きます又少しく風の變つたのは、秋キャベツの青葉を除いて、白球を一寸位の輪切になし一層〳〵に糀と蕃椒と鹽とを混ぜて漬けると二ヶ月位の後に甘く食べられます。若し辛味が嫌やなら蕃椒の代りに紫蘇の實を入れます。

問　眞珠は何うして出來ますか（秋田松枝）

答　貝類の外套膜と介殼との間にある粒狀の塊が眞珠なのです。これは介殼の內面へ砂粒の如き小さい物が入ると、それが肉に觸れて刺戟するから、其の周圍へ介殼の內面を形くる眞珠質を分泌して出來るので、近來はそれの出來る貝類を飼養して人工でも作ります。それに一番良いのはあこや貝です。

問　私は高等女學校卒業後幸福な月日を送つて居りますが、或る事情の爲に東京で看護婦になりたいと思ひますが、何んな資格がいりますか（葉山淸香子）

答　年齡滿二十歲以上の婦人で、東京府廳の看護婦試驗に及第した者でなければなりません。試驗は年に二回あるが、其の試驗科目は看護法解剖生理の大要、傳染病豫防消毒方法、及び實地等です。此の試驗に應ずる人は大抵病院看護婦會に入りて此等の科目を研究する樣です。

問　八種傳染病とは何々を言ひますか（東京よしゑ）

答　虎列拉、ペスト、猩紅熱、疱瘡、赤痢、チフス、發疹チフス、實扶的里の八種をいひ此の患者が發生したら屆出を要し、隔離治療を爲し、嚴重の消毒を行はねばなりません。

問　無盡講とは何んな事をするものですか（信濃武田道子）

答　多數の人が集つて每月各々が一定の金錢を出し合ひ、其の集つた金をくじ引又は糶つて順次に取り、之を十ヶ月とか一ヶ年とか反覆して終る講社で、元は人の不時の危急を救ふ爲めの融金法でしたが、之には隨分弊害も伴ふ樣です。

問　廻文和歌、廻文俳諧、廻文連歌の一例を御敎へ下されたし（長崎、京子）

答　「むら草に草の名はもし具はらばなぞしも草のさくにさくらむ」これは廻文歌の例で、首尾何れより讀んでも同じい歌です。

「ながめしは野菊の室のはじめかな、咲く花は咲く草花はくさ」これは雜ゝ俳諧の例て、毎句首尾何れより讀んでも同じい俳諧です。

「長き名やたまの世のまた柳かな、淸ゆろなかとの長閑なる轡」「顯れば皆春日のひろは皆はれて、月人男ことな聞ひき」、これは雜文連歌の例で各句首尾何れより讀んでも同じい連歌です。

問　蕈のスープは何うして作りますか（加賀吉村きつ子）

答　何程の蕈にても極めて新鮮なものを撰び先づ其皮を剝き小さく切りて鹽水に浸し置くこと二時位の後、水より取出して能く洗ひ、鍋に十分の水を入れ蕈を、之れに投じ、鍋に蓋をなし軟かになるまで蒸煮になし、其の全く柔かくなつた處へ、小麥粉(これは固らぬ樣少しく水に融して用ゆ) バタ各二匙を加へ能くかき雜はし、後ち鹽と胡椒にて程よく味を付けるのです。

問　私乳が出なくて困りますが、何かよく出す法はありませんか（名古屋若き母）

答　滋養食品殊に牛乳などを用ゐて身體を強壯にするのが何よりです。そして時々乳房を揉むのも一法です。鯉の味噌煮などを食べるのも宜しいやうです。又精神を安靜にして居る事も大切です。

問　毛が餘り細過ぎますが、も少し太くする法はありませんか（神田、朝子）

答　毛の根に輕い刺戟を與ふるが肝要です。

問　優曇華はほんとうに咲くものでせうか。（岩代入重子）

答　「うどんげ」は優曇鉢羅の略稱で、瑞祥の義です。天竺では、うどんげは、常に實はあれども花なく、三千年にして始めて花咲き、其の咲く時は佛世に出づと言はれてゐるので、一種の植物のやうに思はれ、從つて古來世に逢ひ難きものの喩にも用ゐて居ましたが、近頃の研究によれば、其の花といふのは「くさかげろふ」といふ蟲の卵の孵化つたからであるといふことです。この卵は常に粘液の固つて絲狀をした長柄の上について樹の枝葉又は人家の天井或は戸障子等に產みつけられるもので、卵が孵化つて中が空になると、色が白く見えます。くさかげろふは全身綠色を呈して甚だ美しい蟲ですが、其の體には強い惡臭があります。「うどんげの花持ちたる心地して深川櫻に目こそうつられ」と歌はれた花も、調べて見ればこんなものです。

問　溫泉へ行つたら、入浴を何んな工合にして居たら宜いですか。（芝津田元子）

答　人に依つて或は病症に依つて違ひはあれど入浴回數は、通常老人は一日一回、壯者は二三回が適度です。入浴さへすれば効能のあるものと思ふて濫浴する者が多いけれども、之れは害あつて益なく、老人の如きは其の爲め腦充血を起す事があります。入浴の時刻は、食の前後一時間內を避くれば隨意ですが、時を隔てずして數回入浴するのは好くありません。入浴の時間も人により、泉質によつて違ひますが、最初はまづ、五分間位より始めて漸次延して二三十分間位に達せしめ、入浴後は、速に乾いた手拭で全身を摩擦し、十分に拭き乾かすのが肝腎です。そして氣をのんびり持つて暴飲暴食を愼まねばなりません。



靜思の窓

雲の峯

四時半起床、戸を操て緣側に立つと冷やりした空氣が、ねまきの儘の肌を洗つて流れ込む心地よさ、朝靄は深くたち込めて庭の青葉は純白のベールをかけた樣に、紅いバラがまださめぬ夢の中にけぶつてゐる、胸を思ひきり張つてこの神秘めいた淸らかな朝の空氣を腹一ぱいに吸ひ込むと、急によみがへつた身體中の機能は烈しく活動を初めて心迄掃き淸められた樣に覺える。障子もガラ開きにあけ放して、一夜の中に汚れた室内の換氣法をやる。

裏畑へ出て苺を取る、青葉に交れる點々と白き花はやがてルビーの樣な實となつて、この朝浴した樣な艶やかな葉のかげから恥しさうにのぞいてゐる、燃えたつ少女のハートの樣な形と鮮明な其色こゝ迄丹精した私は丁度愛兒にでも對する心地がして又なく愉快である、今年は移植したから殊に美事なものが出來た、一籠は松宮樣へ御目にかけよう、奥樣の大好物だから、此間も御伺ひすると坐につくや否、赤くなつたでせうねと仰しやる、あんまりだしぬけだから何の事やら。失策でもしたのかしらと判じかねた間拔顔を面白さうに笑ひころげて入らつしやるんだものお人が惡い。

毎年此頃になると私方では大變お賑やかになりますの、來客で、皆樣苺が食べたいと顏に書いてある方許り……と申上げたら。

マア恐れ入りました、どうぞお手柔かに……つて遂遂降參あそばした、富山へ入らつしやした眞壽ちやんつてば此間の手紙にも、樂しかりし去年六月の日よ、忘れられぬは苺の香……だつてネ、。八分目迄摘まれた

笊を小脇にして立つと、霧は次第に薄れて、やつとさめた樣な朝のけしき、東の空から柔かな光がゆれて、靑い葉は皆よろこびの色にかゞやいてゐる。裏町の屋根からは黑い烟が渦をまいて立のぼる。

ア、活動復活の曙光と共に人は皆奮鬪の時となる、私もかうしてはゐられなかつた。

襷十字に綾どつて冬物の洗濯、良夫の綿入れや自分の羽織等はどいて水につけてある盥の前へ立たが、さてウンザリしてしまつた。どうしても私はこんな仕事がいやで〳〵仕方がない、家に囚はれた女の仕事程つまらぬものはないと思ふ、賤の苧環くり返し〳〵變化のない生活にもあき〳〵してしまつた。ならう事なら好きな書籍でもおもふまゝにあさつて夢の樣な憧憬に醉つて見度いと……けれ共私の理性は家を捨てゝしまつて迄自己の心を發揮するのを許さないたえず夢見る心とさめた心とが、せめぎ合つてる、いつ迄これが續くんだらう自分ながら解らない。

人は、苦勞がない幸福なと羨むそれ共平凡にあきた私は却て大波瀾の中にまき込まれて見度い樣な氣も起る。富枝さんの樣に、萬里の波濤けり立てゝ、向ふ大



陸はテキサスの大曠野に想思の君と共稼ぎの大活動ぶりもいゝではないか。

一昨日の手紙にて、いくら米國だつて金のなる木はありませんよ、皆働いた汗の報酬ですつてかいてあつた。でもよく御決心あそばしたわ、彼の弱いお身體で月四十弗の働きをあそばすんだもの。「親と思ふな子でもない」と迄御立腹あそばした御兩親様も、これ迄かたき御決心の有様御覽なすつたらきつと〳〵不愍と御思召て御怒りもとけように、どうぞ〳〵遠き御二人の御身の上御幸福にと祈る。

思ひふけりながら一時半もかゝつて二個の石鹼をとかしてしまつた。强ひ日に照されながら、古着屋の看板の様に洗濯物が物干に掛けられた。汗ばんだ身體、赤くほてる頰を初夏の風が涼しく吹いて、さすがに自分の務めを果したあとの快樂を感じながら……樂しげに飛んでる二つの白き蝶の行衛を追ふてゐたら、すれつもつれつ甘き戀をさゝやいてるかの様に二つの影は梢の繁つた柿の木越えて胡瓜畑へと消えた。と柿の木蔭に裏の嫁さんを見た、今にもこぼれさうなお腹をむしろの上におしすゑて、眞黒な乳房をかくさうともせず、肩ぬぎの儘で大根種をこなしてゐる。其靑い顏に尖つた頰、肩に波うたしてあへぎ〳〵つく呼吸にトントン打つてる槌の音に辛勞の疲れが籠つてゐる、……冬は雪解けの小川に手を赤くはらして大根を洗ひ、新芽の吹く頃は製茶に田植に、夏の炎天をも田の草取りに、農家の秋は殊に忙がしく春夏秋冬一日の間も身の自由を得ぬ女。アヽかくても送るべき一生、蝶の花に醉ひつゝ結ぶはかなき夢も一生、アヽ生よ、アヽ不可解。晝から大家のおばさんが來て、障子襖をはづして葭障子と入れ換へて下すつた、奧と中の間との堺と格子の間の外側へは靑簾をつゝて、見えすく樣な家の内夏らしくなる、自分も古い袷ぬきすてゝ藍の香の心地よい單衣と着かへる、涼しい風が疊の上をすべつて靑簾が微かにゆれる、緣先の南天の花は米をまいた樣に白く散つた。

二日。朝良夫を送つてから夕歸りを待つ間は埀れ込

めた家の内に一人ぼつち。机の上にさも人まち顔に乗つてるけれ共、いそぎの用をひかへて讀書三昧でもあるまいと、口繪と目次を見たゞけ、高鳴胸を思ひきつて本をとぢ針箱に向ふ。

いよ／＼本月下旬には御榮轉あそばさるゝ春川様、其お召用として奥様から頼まれた絽の重ねを縫ふ、七本絽の江戸褄もやう、三十八のお年には餘りに派手な梅鼠色、大兵肥滿のお身體にこれ召して例の百幾圓とかの夏帯、お胸に指にお頭に足に隙間もなくゴールドの冥加をかゝやかした局長無二の友。本月號の雜誌がの奥様、ゴム輪で風切る御姿が見える様な、常から天狗のそのくせ丸こいお鼻がさぞ／＼と思はれる。

静さんの申分ではないけれ共、そりあ當然よ、二萬圓御持參だもの譯が違ふわホヽヽ、何でもお里は一代で築き上げた實業家で、旦那様が學士の肩書もお里のお蔭だとは公然たる奥様の御氣焔、道理で奥様本位の凡て西洋流、何あそばしても奥様がお先き。見様見まねに女中迄が女尊男卑を振り廻して書生に當るんだもの書生こそよい面の皮いつも馬鹿にされてはひ



そかに胸をさすり、腕をなでゝ脾肉の歎に堪へず、時には爆發する、雲ッお多福、鐵拳が赤い頰べたを御見舞申すと、觀面奥からAさん一寸御出なされと御錠が下る、そんな野蠻な眞似は何事です、を口切りにさんざん油をしぼられた上にお栞に迄復仇の祟りがくるさうな。奥樣は又何事も春子流とやらに、家政から育兒から理想通りを實行あそばして、御自信の强い事、いつも坊ちやんの御自慢話しから、お里のお話しが出るお家では又、只今、頂きます、とお行儀な坊ちやんが何とした事、一歩ふみだすと手がつけられないんだもの、此間もイヤダ〳〵ハイカラはイヤダ、なんて大聲で唄つてゆく子供があるから覗いて見ると、マア洋服に鞄を斜にかけた坊ちやんの學校歸りだもの驚いてしまつた。

何しろ、ほとばしる勢ひで伸び樣とする柔かな新芽のやうな子供心に、餘りきびしい干渉あそばすんだもの、眞直ぐに伸びゆく筈がない、おさへらるれば、られるだけ、他方面へ出ようとするのは當然で折角よくしようとする御心は却て曲線を作る事になるだらうと思ふ、やつぱり燈臺は本のくらいものであらう。

近頃、こんな物手にした事もないから篦付しただけで汗ビツシヨリになつた扇團でバタ〳〵襟くつろげて風を入る、簾越しに見える往來は目まぐるしい程に午後二時餘りの日が照つて、足もとに砂ほこりを殘して通る人もまれである、これからゆくべき炎暑を思ふといやになつてしまふ、折から話しながらゆく女の二人づれ。

穢多もゝつたやなー、あれだけになつたら豪いもんや。もう七年にもなるえなー此町へ來た當時はほんまにみじめな爲してやつたが：：：淺黄小紋のはげたゆまき出して、更沙の帶ひつくゝつてなーそれが今ぢやあどうや、セルの單衣をぬき衣紋にして、すべりさうな座蒲團にすわつてやがな。

それでも、親指は彼方へ入り浸りやろ、一ッよければ又一ッ、苦勞はたへんもんやて。

昨夜はほんまによかつた、本場の代物やさかいな。

此地等のは聞かれあへん。

あとは聞えなかつたけれ共たしかに今時めく某家のうはさ、昨夜の浄瑠璃に招待された人達だと思つた、昔で云へば俠客、表面は土木請負の大頭株で何百の乾分は其一聲に手足の樣になつて働く三四年來めき〳〵と賣出した某家、本を洗へば特種の民だとか人は云ふ蔭では滅茶々々、新田等と惡口する者でさへ、さて昨夜の樣な時には、皆へイ〳〵頭を下げて行くんだぁのをかしいものだ、親の威光は七光りと云ふけれ共、金の威光は全世界を壓してゐる。

我家へもわざ〳〵人を以て案内に來たけれ共、心のどこかで侮辱々々とさゝやいてる樣で、どうしてもゆく氣になれなかつた。

袖丈け出來上る、一寸手を通して見ると紋の揚羽の蝶が今にも飛び出しさうに……動いたと見たはスル〳〵と手をすべつて膝の前に落ちたのだつた、木綿でもいい自分の物なら。人のものでは根つから張り合がない針も布も其儘にして立上ると飴を引きのばす樣に身體も手も、同時に大きな欠伸が續け樣に二つ。グタリとなつた、だるい身體をそのまゝ南の窓によつて空を仰ぐ、紺青の色さえた天に眞綿のふくらした樣な眞白な雲がわく〳〵と噴き出して、見る〳〵うちに動く、アア夏の雲、忘れてゐた友人に逢つた樣ななつかしみを覺えてうつとりとしばしは無我……靜な町をねむたさうな金魚賣の聲が長く尾を引いて、夢の中へでも消え込む樣に遠ざかつてゆく。

懸賞募集 さま〴〵の人格

（新代婦人の性格解剖）

（〆切八月二十日）

人間の尊いところは人格にあります、生存の意義はこの人格の向上にあります、いくら力んでもあせつても、人格が劣等では駄目であります、人格の修まらない人は、波濤の荒いこゝろの天地に安住する事が出來ませぬ、と斯樣な事はもう十位になつた子供にもぼんやり分つてゐますからそれに就て今更兎角の意見を求むるのではありませぬ、が、一體この人格といふものはどんなものであるか、それに就て皆樣がそれ〴〵その境遇から見た、徹底した見解、鋭く力のある意見、つまり皮相でなくずつと深みのある味、そして何物にも動搖しない一貫した見識を出して下さい。

賞金

一等　金五拾圓　（一名）
二等　金參拾圓　（一名）
三等　金貳拾圓　（一名）
四等　金拾圓　（五名）
五等　金五圓　（十名）

△記事は日記體、小說體を希望します
△紙數は十枚以上いくらでもよし
　但し不常識に長いのは困ります
△賞金は發表の當日現金で送ります
△寄稿は「さま〴〵の人格」と朱書を願ひます
△名宛は「女學世界編輯部」として下さい



おもひでぐさ

箱根山のぼり

百合香

箱根登山の一行九八、筒袖麥甲斐々々しく裝ひ、共に起きふす舍の姉君妹達の愛らしい聲に送られていでたつ。

川面渡る長月半ばの朝風に、輕き袴の裾なぶられながら・打つれて三島明神にまうづ。

初めてはきしめたわらぢの足のいと輕く、箱根新街道の松並木の中を、左右の土手に色づくやみをとりながら、行途に望をもちて、先生と面白う話しながらゆく程に、いつしか見隣しにかゝる。

往年畏き大君が、此處に御輦を止めさせて、見渡させられたとて、かう名づけしとぞ。

風にそよぐ綠の波遠く、沼津の海も一眸に入る。われもこう撫子藤袴、招けるか花薄、八千草誇る秋の山邊を・亂れ伏す無なし草をわけゆけば、涼風たえまなくほゝをかすむ。

「百合香樣おつかれさま」「いゝえどう致しまして、面白くて疲れる處ぢやありませんわ」足弱と見られるが口惜しさに、心强くは云つたものゝ、山路なれぬ身はもういゝかげんに疲れた。

何處でともなく、足强の四人の君達のお姿を見失つて・後續隊は先生と足弱の生徒四人。

語り興じながらゆく程に「先生何か御座いますよ」。さも大事らしき千賀樣の大きな聲に驚かされて驅けゆけば、とある電柱の傍らに、半紙打ひろげて四隅を石で押へた手紙がある。

「先生始め皆々樣、さぞ御疲れ遊ばしたで御座いませう、私共はお[illegible]

へまゐりまして、元氣は旺盛で御座いますが、空腹でなりませんで、お先に失禮して頂きました。何卒あしからず、御許し下さいませ。御一緒になれませんでしたら、權現樣で、御まち致して居りますから、御ゆるりと。失禮御わびまで

先登の四人

××先生

諸姉

鉛筆で、男ともまがふ大なぐり書き。先陣の御大將村田さんのお手とは、一と目見て知れた。

右を見、左をむき、前を見、足下を眺めて、皆顏み合せて吹き出した。御一方とのみ思つた天神樣の、あの多く、亂座ましますをかしさに……。

山中の手紙の興深さ。此度餘興の時に素破拔いて、舍の君逹を笑はさうと頂いておく。

とある茶店に休んで、口うるほして立つと、誰方かゝ、私の元祿と筒袖のあいのこの小さい袖を引ぱつた。ふりかへると妙さんだ。

「私ね、此處でおべん當かと喜んでましたに、がつかりよ。お腹がすきましたわ。」

「いやだ赤ちやんね、先刻の手紙見てからでせうホ、ホ、。未だ早いから、我まんなさいよ」笑はれますわ」。なだめながらゆく。

箱根の山は、天下の險、函谷關ものならず、萬丈の山、千尋の谷、前に聳え、後にさそふ、雲は山を圍り霧は谷をとざす………………

……………。

だれからともなく、紅唇開いて、一齊にうたふ歌に、元氣頓に加はり、足どりも輕し。

苔うるほふ羊腸の小徑、さゝ流れは心臟を寒からしめ、横たわる大石に危くころぼうとする。老樹うつさうとして、物凄き迄ほの暗く、所々僅かにもるゝ陽の光り。忽ち「キヤッ」と聲がした「どうなさつたの?。」「今蛇らしいものを見たの」。年弱の妙さんにも困つてしまふ。

前後左右、いづれも、綠陰ならぬはなき中に、見ゆる白き輝き二ツ。白ゆりの花は雲間をもるゝ星の光りのごとく、雜草の群を拔いてうなだれて咲く。我にもあらで近より纎手をふれゝば、プンと漂ふ芳香。塵の世

抜けるかゝる山中に、咲き殘れる花の美しくも氣高く仰がれて、神秘のさゝやき聞くかのやう。山守る姫が御姿にも例へやうか。慕はしき清姿を見て恍惚と夢見心地に止まる。我に返ると友のよぶ聲す「あら私のわらぢは破れましたわ。水がしみてしみて足袋がグチャ〳〵いやですこと。」といへば、「百合さん天晴れ！。明治の婦人、都の君の草鞋して箱根の險をこえる、勇氣は嘉すべく、足を引ずる風姿や可憐…」。妙に、どんとおだて上げて、すどんと落した直譯的の變な言ひやう。千賀樣のお口の惡さ。春風に逢ふて、咲きいでなん花の蕾、お返事も出來ぬ木の葉散るさへおかしと見る十五、十六の少女に、何の苦があらう。笑ひさゞめきながら、ゆく。後をそつと見ると皆樣のお足は何かに引ずられてゆくやう千賀さんだつてほんとにおかしい。程なく舊箱根町に入れば、「また女學校の生徒さんが來たよ皆來いよ……」。町の子供の呼びごゑに、門邊に集ふ人々、子を抱く母も物珍らしげに、つかれた私達を見る。軒燈が妙に眼

相模の大山



にうつる。

やがて離宮の前をすぎて、湖岸にさしかゝる。名にしおふ函嶺の蘆の湖よと、思ふと、怪しく胸さわぎがする。空は薄ぐもりして、「逆さ富士」の勝景は賞でられないが、めぐる山々の、鏡にうつる優姿、小舟浮べて遊ぶ金髪の蝶兒おもしろし。

岸を四間ばかり離れて、十三許りの姉と、十歳とも見える弟との、すき透る樣な雪の手に棹さす愛らしさ、睦まじさ。笑ひごゑさへもれきて。

棹に描く水紋、碧き水に榮えたる白き服の氣高さ。小波さわぐ湖面、いとしの風景よ。

書かれたもの見る心地。嬉しさ懷かしさに我を忘れて立ち盡し、あかず眺め入る。

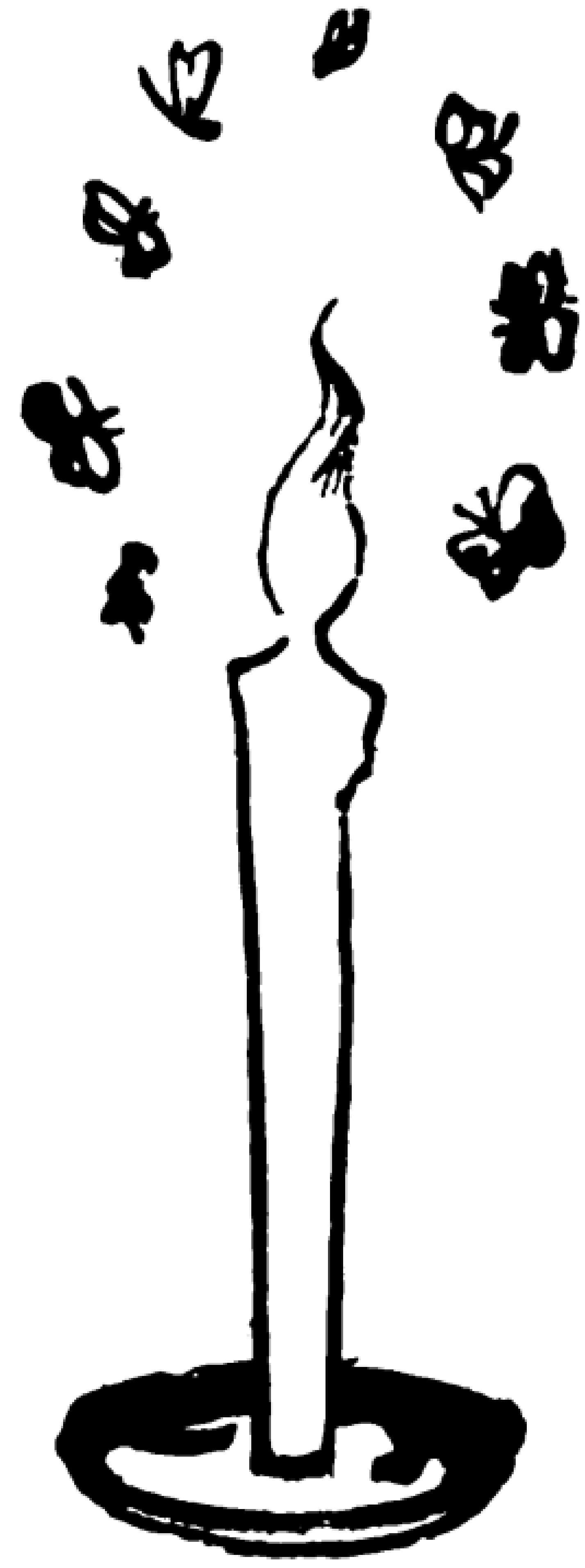
促されて、先生に並ぶわらぢ式部四人。中で、一番歩き下手な私が、未だわらぢを替へもせず、初の儘なので、誰方だかゝら、「房式部」の尊稱を辱うした。

一の鳥居には、蝶兒の母とも思はれる婦人が、寫眞器手にして佇み、良人らしき人が、何か教へて居るが、レンズのにらむは、我達がゆく途。

皆、ソーと袴を直すといふさわぎ。私は房が氣になつて、「寫して、ゑはがきにするのではないでせうか、私のわらぢ寫るといやね、外國の人に見られると、日本の女學生の恥よ」。などゝ心配して笑はれた。

權現樣の、赤い鳥居際には、先登の先達が、おまち遠だつた。

鏡してみゆる泉に、口清め、顏洗ひ、亂れ髮かき正して、ホット一息。疲勞の見えぬ活々した、皆樣の御顏は、色に染まつて美しい。時は十二時まへ。遲刻の私共は、湖岸の岩に腰かけて、湖面を渡る涼風にふかれながら、妙さん御心懸りの大荷物たる、お辨當にありつく。師の君に伴はれて、喜しさうな妙さんの手をひいて社にまうづ。中天に高く聳ゆる老杉、千枝を吹き渡る風の音さへさが〳〵しく、神さびわたる社殿の有さまの神々しく仰がれて、おのづから頭さがり、心靜かに祈りして、こゝの繪葉書を求め、記念スタンプも得て宮まへを辭す。



如何して女優になつたか

名優サラ、ベルナールの逸話

磯千鳥

英國のエレン、テリーの名を知らぬ人はあつてもサラ、ベルナールを知らぬ人はあるまい。サラは現今世界一と言つても二とは下らぬ佛蘭西の女優で今年とつて六十八歳、それでも其艶かしさと元氣のある事は若い者を凌ぐ位で、現に此春一生の思ひ出に亞米利加へ興行に行つた時も若い女主人公に扮したが、藝と言ひ臺詞と言ひ舞臺では少しも衰へを見せなんだと云ふに至つては何だか奇蹟の樣で、早く老け込み安い日本の女などは眞實に恥しい次第。而も才氣に滿ちた、男勝りの彼女の生涯には我々にとつて興味の深い事も決して少く無い。

○サラの幼時

サラのお母さんと言ふのはサラを生んだ時十七であつた、生來の旅行癖とそれに何かの事情の爲サラの幼い時は側に居る事は稀であつた。それにお父樣と言ふのもサラの生れると直ぐ支那へ來て終つたので、勢ひサラはブルトンの或百姓家に預けられる事となつた。勿論お母樣は斯う旅許りしてると言つても別にサラに愛情の無い理ではなく始終旅先から乳母に宛てゝ着物やら菓子を送つて呉れた。そして暇のある毎に此百姓家に歸つて來たが歸る前には必とサラの伯母の處へ手紙を遣つて「妾は何時々々歸る。何卒彼女の氣をつけて遣つて下さい：」と言ふのが常であつた。而し其伯母樣は皆廿にもならぬ若い娘盛なんで、返事には「御心配なく。よく氣を付けて居ります」とは書く物のつ

いぞサラの處へ訪ねて來た事すら無い。中には廿人にもなる人もあつたのだが其人は既に六人の子持で姪のサラの監督迄は迚も手が屆き兼ねた——

こんな風故サラの極く小い時は餘り幸福であつたとも思はれぬ。幸此乳母と言ふのが大變親切な女で我子の死んだ後はサラを我子の樣に愛しんだが、何分其日暮の身分故、忙しい時は關ひもせずに打遣つて置いたと見える。

或時なども畑の馬鈴薯が早く掘らねば腐るので、乳母は腰痛で身動も出來ぬ亭主にサラを托し、序に爐の中へ薪をくべて出て行つた。サラは漸く二つか三つであつた。高い椅子にのせられて前に落ちぬ樣に肱掛と肱掛との間に棒の栓をしてあつたが、どうした機かそれがとれて、體は、勢よく燃えてゐる爐の中に落ちた……。

○乾酪の餡かけ

物音をきつつけた近所の人々は、早速駈けつけて、火の燃え移つてるサラを有合せた牛乳の桶の中に浸けた。そして直に伯母の處へ使を出すやら當時ブルッセルに居た母親に知らすやら大騒動が持上つた。母は取る物も取敢ず歸つて來たが其若い母の悲嘆の樣は見るも痛ましかつたと云ふ事である。

若し此時サラの負傷が重かつたら如何だらう。假んば重くなくとも顏に醜い傷の痕を殘す樣な事があつたら如何だらう。後年劇壇の明星は或は名を知られずして濟んだかも知れぬ。而し火傷は大した事は無かつたそれに母の連て來た醫師の勸で廣い傷口へ二時間毎に乾酪を塗り變へたが、隨分澤山使つた物と言つて戸棚も椅子も机も道具と言ふ道具は皆チースだらけに成つて終つたと言ふ。そして二ヶ月程經て母が乳母を一緒に、ブルトンより巴里へ引越した頃には、サラの顏や體は今迄より少し紅味を增したが、傷の痕はこゝか、先も無かつた。

○變つた子

斯うやつて二年は過ぎた伯母達は此處でも少しも訪ねて呉れないが而しお母樣からは矢張始終金やボンボンや玩具を送つて來た。

此頃からサラは少し宛他の子供から異つた性質を表し初めた。何處迄も氣随な癇の高い性質である。これには乳母も手古づゝたので、乳母の最初の夫が死んで、間もなく再婚する事になつた時サラをも其處へ連れて行く事になつた。引越して行つた晩は珍しがつて手を拍つて喜んで居たサラは次の朝からは急に此家を厭がり出した。此家には窓が無い。戸口に一つ小ないのがあるが其處からは草一本無い石ころの處が見える許なので「嫌だ、嫌だこんな陰氣な處は



……」と硝子に鼻をこすりつけて泣くので、乳母は明るい戸外へ連れて行つて種々と慷すのに困つた相である。又七つ頃から學校へ行つたが其處でも氣に入らぬ事があると時々氣狂の樣になり泣きわめき傍の人に武者振つくので、サラが暴れ出したと言へば友達は皆怖とした相だ。

○修道院生活

其後サラは父の主張でプエルサイユの修道院へ入れられる事になつた。修道院は舊敎の子弟の敎育される一種の尼寺の樣な處である。此處へ行く事に就ても今迄の學校を自分を得心させずに止した事を怒り出して庭の木に攀ぢ登つて泥々の泉水へ飛込まうとした事が二度。時々こんなに狂ひ出す事に就ては兩親も氣を揉んで醫師に見せてサラは暫く田舎の伯母の家に保養に遣られてゐた位である。

偖修道院へは兩親を一緒に乘合馬車で行つたのであつたが、物淋しい其建物の門口へ來ると「こんな牢屋の樣な處」と亦も例のを初めた。而し中に入つてソフイと言ふ淑なそして美しい尼樣に遭ふと急に其人が懷しくなつて、急に今迄の事を忘れて終つた。──サラはこんなに感情的な子であつた。

此處へ來た直ぐ次の朝である。何と言つうも規則正しい僧院の事故朝の時間もちやんと定つて磨硝子の窓が微に白む頃に起るのであつたが、何方かと言へば朝寢坊のサラにはそれが辛かつた。加之十五分以内に身仕舞をするのであるがサラは人並より多い髮を梳く丈でも三十分はかゝる……でサラの氣象を知らぬ年上のマリイと言ふ女性が一角世話をやく積で「さあ愚圖愚圖しないでとか何とかいつてサラの手から櫛をとつてグイ〳〵と遣つて縺れた毛を一握程も拔いて終つた。──さあサラは承知しない、わめき乍ら掴み掛つて、打つ搔く、噛む、蹴る……到頭泊つて居た兩親やソフイ尼が來ると言ふ騷動。之が一種の病氣と言ふので事も無く治つたが次の朝からはソフイ尼の前で髮を梳いてもらう事にし、武者振ついたマリイには皆の前で謝

らねばならなんだ。此事件以後別に何事をも惹起さすに、サヲは皆に可愛がられてゐた。他の友達はよくサヲの作文を作つて呉れた。學科の内でサヲの好なのは地理と圖畫で算術をすると頭がむしやくしやする。綴字には命が縮まる樣でピアノも大の嫌であつた相だ。其上物事に怯ぢる性で不意に物でも尋ねられるとぐわつとのぼせて總ふのが常であつた。



涼しさら浪にわき出て見ゆるかなみくさ隠れの水の面高　（千波）

○舞臺の初

こんな地味な暮を續けて居る間に茲にサヲを藝術界に導き入れる動機ともなつた最初の事件が起つた。と言ふのは巴里の大僧正がプェルサイユに巡廻に見える其歡迎會に女生徒が芝居をすると言ふのである。平生事の無い修道院は此爲に、蜜蜂の巣へ熊蜂でも飛込んだ樣な騷動が持上つた。題は或盲目の子供が神の利益で目明となる宗敎的のお伽芝居

で、サラ自身も勿論役割の中へ入る事と決め込んで何卒良い役がしたいと氣を揉んでゐた。それで先生の尼樣が役割を讀み上げられる時も固唾を飲んで聞いて居たが、之が亦意外、自分の名は其中に無い。サラは聞かない振をして居た物の、それと氣が附くと體中の血が皆頭へ上る樣に感じた。先生の尼樣は淑な調子で、「さあ皆さん臺詞の書いたのを上げます」と云て一人一人に口上書は配られた。

サラは子供心に立つても居ても堪らない。始終遊ぶ仲好のルイズが天使ラファユルの役をする。ルイズは色の白い華奢な月の光の樣な子である。そして到つて内氣な脾の優しい女の子であつた、此役割が當ると心配相に而も何處となく嬉し相にしてサラの方へ來て、臺詞を覺える稽古役になつて呉れと頼んだ

自分は出られぬと思ふと猶更出たいのは情である。サラは臺詞の稽古をしてる友達の處を歩き廻つた、或時も皆で稽古をして居る處へ先生の尼さんが見えた、皆なが會釋をすると、尼さんはサラの頬を撫でゝ、「サラさんも出さうと思ふが、亦嫌がるだらうと思ふて止しました」と笑ひつゝ言はれたサラは此處ぞと思つて。

「算術やなんかと違うんですもの。……之なら……」と言ふと「さあ、如何ですか……」と笑ひながら向へ行かれた。

次の週に皆が下稽古をやる事になつた。サラはどうしてもそれに加はりたい。其芝居に出る「魚の化物」の役でも良いからさして下さいと頼んだ。而し其「魚の化物」には修道院に飼つてある犬を使ふ手筈になつゐるので是も空しく斷わられた。

處が、偖稽古が初まる段になると内氣なルイズは以前すつくり諳記した文句が一言も出ない。芝居は中途で止る……ルイズは眼に涙を浮べてサラの方を見るのでサラは直と自分も諳記して居る臺詞を敎へてやつた。

明後日が愈ゝと言ふ日、今度は眞實の衣裝を着て稽古を初めた。ルイズの天使は目の覺る程美しく見えた、

が舞臺へ出ると直「私にはどうしても出來ません」と泣き出した。

「これでは出來相も無い」と途方に暮れて嘆息をついて居られたがサラは其瞬間友の悲をも忘れて「今日丈私が代つてはいけません、か」と天使が泣きくづれて居る舞臺に飛上つた。

其日サラは少しの滯もなく遣つてのけたのでルイズは重荷を下した樣に喜ぶ、他の友達も賞めるし 先生の尼樣も心から此可愛いゝサラの脣に接吻した。

こんな偶然な事から到頭サラの望はかなつた。サラはそれからと言ふ物は嬉しくて嬉しくて眠られない。愈ゝ其日の朝は何時もより早く起きて例の始末に終へぬ髮の毛を濡櫛で梳いた。そして初ての舞臺へ上る時間の近いた頃には小さいサラは天使の永い裝束に腰の邊に綠色の紐をしめ、紙の羽をくゝつた襷をかけて出た。



秋風に雨ふかれて女郎花やせた花のあはれなるかな　（直兄）

此お伽芝居は大勢の喝采を受けて大僧正からは小さ

い賞牌をもらつた。サラは嬉しさの餘り自分の部屋に歸ると長い間泣いた。そして他の人がサラの此處に居るのを見附けた頃には、彼女は張りつめた氣がゆるんで、頬に涙を貯めた儘寢て終つてゐた。

是がサラを舞臺へ導いた最初の出來事である。次には彼女が結婚を拒絶して多事な生涯に入る道行を述べよう。（レデースホームジャーナーより）

○正道と間道

年頃になつたら是と思ふ人を判斷して人の妻となり幸福な家庭を造る‥‥是は女の進むべき正道で且最も安全な道である。處が若し此處に人の妻となる事を避け、家庭を作る事を拒んで一生身を藝術に捧げる樣な人がありとすればそれは女の一生の裏道を通るのである。茲に正道といひ間道と言ふものゝ其何れが貴いかと言ふ問題は自然別である。否此裏道を通る女流の天才に依て今迄社會がどれ丈の恩惠を受けたかは測る事が出來ぬが、而し其爲にはどれ丈の犧牲が前へも後へも進めぬ悲慘な境遇に陷つて後悔の涙を流した事であらう！間道を行くのは我が一生を賭けるのである。人一倍の自信と決心の要る事は佛蘭西とても變りない。サラは此間道を志したのであつた。

○結婚の拒絶

サラにとつては此の修道院時代の成功からして冗談が誠になつて遂には女優になる考も起つたのであらうが茲に同情すべき一つの事情があつた。サラが年頃になつて自分はもう父親は死んでゐたので家族と言へば若い母と年の行かぬ妹三人。今迄こそ或製造所から入る僅かの收入で暮して居たのだが其製造所とて直接は祖母の名義になつてるので、代言人が中に入つてそれ迄取上られ相になつてゐる——。そこでサラは親同胞の爲に如何かせねばならん。

是より先サラに對しては方々から結婚の申込があつた。命名親の友人で鞣皮の製造をしてる人も是非にと言ふ一人であつたが、豫々顏馴染のあるサラにはどう

しても此人に一生を托する氣分にはなれなんだ。色の黒い顏に髯を長く延した而も嫌に親切な人…眞晝に夢を見てゐる年頃のサラが好まないのも無理はない。嫌ですと中に入つた人にキッパリ断ると其人は呆れた様な顏をして。

「あの男を断わるなつて氣が知れん。年に一萬六千法も入る口を……」



はる〳〵と雷峠山のゆふ立の雨には笠もかひなかりけり　（景樹）

と言つて更に附加へて「今の貴女の年頃では分るまいが結婚と言つたつて一種の取引だ。姑夫婦はあつても先は見えてる話だし、二百萬法の財產は何れ息子の手に入るのだが、貴方にしたつて満更悪い話では無い……」サラはこんな話をきくと急に浅ましくなる年頃であつた。

「ですが兎に角あの人と結婚するのは止めませう」
「何故ねヽ」
「だつて私には好きませんもの‥‥」
「結婚する前から好くも好かぬもある物か。愛情の湧くのは後からだ」
「後からだと仰しやるとヽ」
其人は笑ひ出して「まあそんな話はどうでも良い、一應お母さんに相談しなさいと。云つて、それから今は隱してゐるが實はお母樣は暮向に困つて居る事、世の中にはさう良い嫁入口は轉がつて居ないから多少の不承は耐へねばならぬ事。若し此處へ行けば嫁入先から多額の仕送が出來る事。こんな事を種々言つて聞かした。

此申込をした男は如何かしてサラを我物にしようと思つていろ〱に掻口説いて、若し結婚して與れぬなら死んで終ふと迄云つた。自分の爲に死ぬ！未だ世馴れない娘の心に此程大きな打擊を與ふる言葉があらうか。然し舞臺で世話物を遣つたり見たりした事のあるサラにはこんな場合に男の態度を冷に見る事が出來る丈の得があつた。芝居の臺詞めいたこんな言葉に絆される事もなく自分は俳優となつて家族を養はうと云ふ健氣な決心をしたのであつた。(幸にして、此結婚を拒絶された人は死なゝかつたのみか、現に佛蘭西の金融界の大立物となつてゐる相である)

○第一の失敗

サラは母の勸によりそれ以前からさる俳優學校へ通つてゐた、何と言つても好な道なので一心不亂に稽古をしたが其割には效果が擧らなんだ樣子である。此學校では時々公開の試驗をするので、其時には各生徒は喜劇と悲劇との役割をして公衆の投票で技藝の上の等級を定める規定であつた。サラは入學した年の試驗では悲劇の二等賞を得たが次の年の溫習會では見事失敗した。舞臺の工合でもあらうか幾ら大きな聲を出しても詞臺が通らす其上氣張ると鼻聲になつて終うのである。而し勝氣なサラは悲劇で失策つても喜劇で一等を

取つて見せると力んで居た。が此喜劇の役割と言ふのが子供としか見えぬサラには得なのではなかつたが、それでも自棄半分に而も思ひ存分に遣つてのけた。此時は以前とは引替つて喝采を博したので見物が賞める位であるから、サラ當人は無論一等賞になる積、賞品授與の時も男子部に一等が無いと聞くと全然己の物と決めて終つて、呼ばれたら出る用意をして居たのが、意外それは日頃仲好しの而も思ひも依らぬ人にとられてしまつたであつた。



是が我藝で家族を養はう、未來は一流の女優にならうと云ふ強い野心を懐いてる女にとつての最初の失敗である。サラは泣いて口惜しがつた。一等をとつた友達を羨むのではないが、而し藝よりも舞臺の上の容色を見る見物を怨んだ。それも命名親などもサラの處へ來て、「お前は迚も駄目だ。何故舞臺を思切らないんだ」と頭ごなしにした。成程サラは美しい事は美しい。而し遠目の利かぬ顔である。それにあの鼻聲では……を斯う云つて頻に以前の結婚談を復活させやうとした。

而し幸な事には此失敗の溫習會でサラの技藝に眼をつけた人が一人あつた。それは喜劇々場の支配人である。サラが家へ歸つて失意に悶へてゐる處へ來たのは此劇場の大きい印を捺した封書であつた。文面を見ると、これから此方へ出場して貰ひたいのであるが、若しサラに其意志があるなら明朝お目にかゝりたいと斯書いてあるのである、サラは夢かと許り悅んで早速お母樣に相談したか不承知のあり樣がない。次の日は伯母から貰つた古風な天鵞絨で模樣を置いた衣物に帽子丈は新しいのを着ていそ〳〵と劇場の事務室に行つた

斯うやつてサラが初て眞實の舞臺に上る樣になつたのは千八百六十二年の九月十――九歲の時であつた。サラは町々を步いて廣告臺に自分の一座の名が張つてあるのを見ては少さい胸を躍らせた。そして廣告を見て居るどの人も〳〵、「サラ、ベルナール」と書いてある處を讀んでる樣に思はれる、其上道行く人が皆我顏を覗いで行く樣な氣がして髮の毛の根本迄赤くなつた愈〻其日になるとサラは定刻より早く劇場に行つたが樂屋に待つてる間に體中絞る樣な汗である。樂屋から見ると暗く重々しく垂れて居る幕、それは彼女の現在と未來とを隔てる境である。其幕が靜に開く時我身の未來て顯はれるのだ。と思ふてサラはす身慄をした。

サラがその日の役割は希臘傳說にあるイフィゲニーに扮するのであつたが最後五幕を全く夢中で濟した。ゾラの小說ナ、を讀んだ方は御承知であらう、女優の初舞臺には大變な好奇心と注意を惹く物らしく此時の評判が餘程大切な事になるのである。而しサラの初舞臺と言のは決してさう花々しい喝采を齎らしはしなかつた。只翌日の新聞の劇評欄の一隅に斯う書てあつた許りである――。昨日イフィゲニーを勤めたサラ、ベルナール孃は瘦形の表情の富な、眉根の邊の殊に美しい女優である臺詞もよく聽取れたし、藝も相等にある。

これが未來のサラベルナール劇場の持主の初舞臺である、と思ふと何だか僞の樣な氣がする。若しサラが今日あるのを偶然でないとすればそれは彼女が、勝氣な、負嫌な、而も何處迄も自分の爲す事に自信を持て居た事に原因するのである…………



和歌

一等

〇 伯耆 たつ田子

はてもなき思出の緑くり返す奈良の泊の五月雨の宵

評、咲花の匂ふ都の昔より、廿日あまりに二十兩違ひはたして二分残る末の世までを慣ひなば、感慨益まざるも其所也。

二等

〇 越後 久間ゆき子

風さわぎあらなみ寄する岩の上に狂女は立ちぬ龍神のごと

評、狂女も是に至て、殆ど崇高の觀を極む。

〇 麻布 愛讀の子

思ふこと云はねばつらしされど又いふは何やらおそろし氣して

評、巧におとなしやかなる少女の心情を歌ふもの歟。

三等

〇 廣島 香川玉代

朝顏の花一ときも千とせふる松にかはらぬ心ともがな

評、好教訓歌。

〇 神戸 原城子

少女子の衣の光の目立つ夜となりにけらしな須磨の浦

評、衣の光の目立つ夜とは、着想面白し。

〇 京都 木戸いと子

温泉にかよふ馬車の日覆と晝顏にひと雨すぎて野は夕日照る

評、眞に實景なるべし。

秀逸

〇 横濱 かげろふ

化粧して立てばおぞましほこりかに吾を見かへす姿見の眉

評、虚榮に誇る婦人の三唱すべき歌也。

〇 麻布 溝部惟子

美しき繭打ち破ればむくつけき蛆のまろびぬ世の戀に似て

評、所謂世の戀を痛罵す。

○あぢさゐや子なきをみながきよそへる立姿ともさびしらに咲く　横濱　原　瑠璃

評、子なき女とは、見立て得て奇警

○ふとあひしみ人みそれて白ばらを床しき香よとさゝやき給ふ　渡島　露香

評、憎くからぬさゝやきなるべし。

○五月雨のあがりしあとの東天の虹にも似たる我の戀しき方　千葉　山和野　その子

評、虹にも似たりの語、殊に面白し。

○及なし人を殺せるその人のおもわを見れは蟲も殺さず　本郷　芳子

評、厚皮の鈍さを歌ひしものなるべし。

○星姫の涙のつゆのこほれしか螢となりて世を照すてふ　大井町　岡田つね子

評、上句妙。

○月影の涼しき脊戸に身をもたせ夏のゆふべは君まつによし　小石川　下田有喜子

評、何の奇なけれども捨て難き歌也。

○謎のごと黒き茶釜のかゝりたる大寺の爐を包む蚊遣火　三島　遠山雪子

評、造語巧。

○うつゝなのしゞまにくゆる淡き香の淡くも人の面影うかぶ　河内　絲若柳野子

評、聲調流麗。

佳作

○明滅の螢おりなして降りにふる雨のまろうど北す南す　千葉　草まくら

○御言葉の返さんすべも知らずしてうつむき居れば君はほゝゑむ　信濃　武田美子

○ふと目さめ今見しゆめをくりかへしねむりもやらで雨の音きく　大阪　秋花

○啜り泣くヴロオンの音よ夜の街の圓頂の窓に月白うてる　門司　新ぐさ

○水色は戀しき色よされど又弱き女にふさわしき色　滋賀　下村ちか

○銀の波さながらゆれて星一つかなたに飛びぬ風もなき夜に　静田　四島好子

○ゆあみしてうすき粧をほどこせし十九の夏の美しきかな　門司　ちどり

○何故ぞあゝ何故ぞ此頃のもの言ひ振りの奇しく變るは　赤坂　永瀬冬子

○　福岡　仲道紫陽花女

見ろもゆめ醒めるも夢の影淡き戀に生きんてふ君の哀れは

○　本郷　佐久間千代子

雲間よりもれづる月の光末だたそがれ若き桐の葉の風

○　大阪　西村奈美子

冷き風腦の底にぞかよふらんうすむらさきの花の香ぞする

○　伊豫　渡邊梅子

大洋の夏はあけぼの七寶の塵降る如し雲のたゞよひ

○　石見　登志子

山守の藻の花かなる古池に吐月峰洗ふ眉白き僧

○　本郷　新家なほ子

水道の栓のゆるみにほた〳〵と水のたるゝを氣にしつゝ眠る

○　岩代　木田世都子

毛の國の多胡の青原秋草の花の中にし見けろ君はも

○　熊本　銀杏子

戀に生き戀に死ぬべき身なるべしあまりにくき君がまなざし

○　筑後　沖永ひで

小流れの水增りゆくつゆ晴れに下駄洗ひする人も見えけり

○　美作　いく子

さりげなき青の葉なれどほゝゑみて君おほすれば胸とゞろきぬ

○　越後　岩本芳子

眞晝なり灰白雲の動かざるさつきの空のあがすさびしき

○　大阪　野村德子

夏の夜やおばしまちかふまどゐしてかたるもうれし故里の家

○　牛込　梅子

雨はれてなごりをしばしくもの巣にかゞりて涼しなつの夜の月

○　京都　庄司松香

杜鵑なく音にねざめ窓押せば月かたむけり山里の宿

○　長野　松島ふみ枝

裏山の雨後の若葉のかゞやきにわが戀殼は泣くべかりけり

○　神戸　松本きみ

旅歸り草鞋の儘に枕嶋少ひさき夢を覗く父かな

○　日本橋　イリス

野に立ちてゆめ見る如き眼光に凝つと見つめぬ雁の行衛を

○　四谷　道子

夕闇にかをりたゞようクリームのばらなつかしき初夏の色

○　山口　美智子

小田に啼く蛙の聲の漏るゝとき門田の我家戀しとぞ思ふ

○　飛驒　鍵津つゆ子

初夏の夕闇はよし君おもひ歌思ひつゝよれる小柱

○　東京　雅子

罌粟の花のそよぎの夢に似てまひるの夏のもの靜けさ

○　大阪　西澤かつ子

青柳に夕風吹きぬ姫君の六尺の髮みだるゝに似、

○　信濃　茂木夏子

ひざに手をかされて灯かげにうつむける女をおもへ釣鐘の花

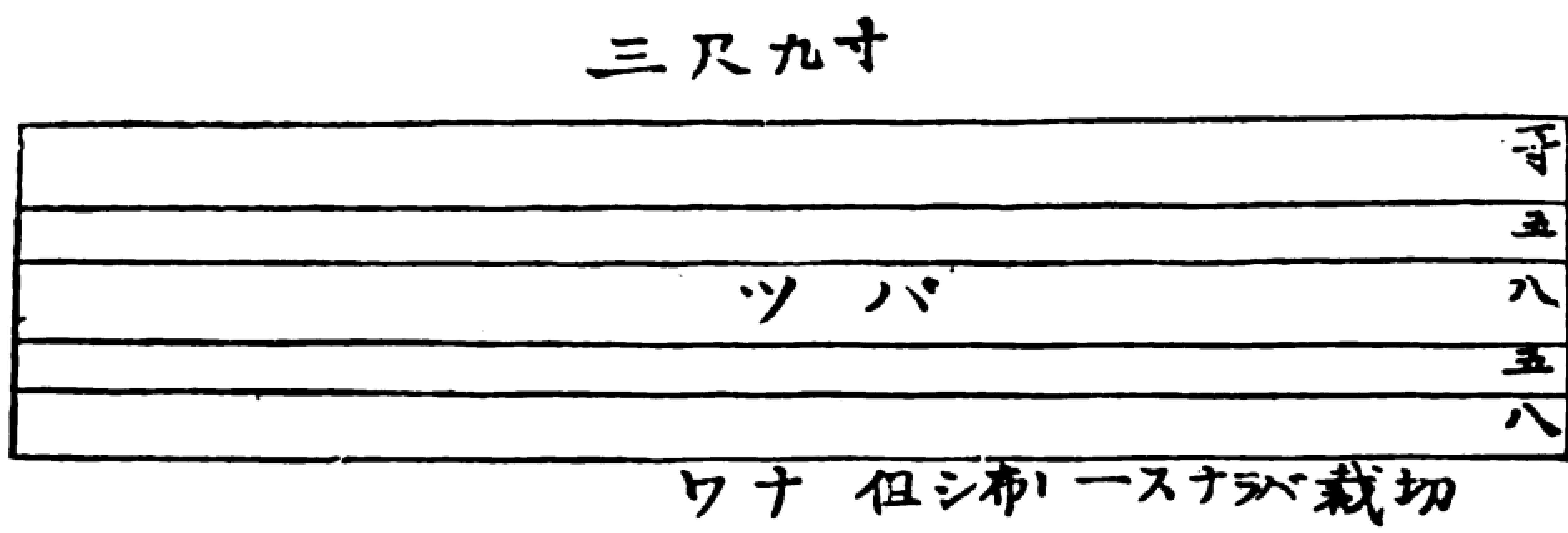
○　東京　中川孝子

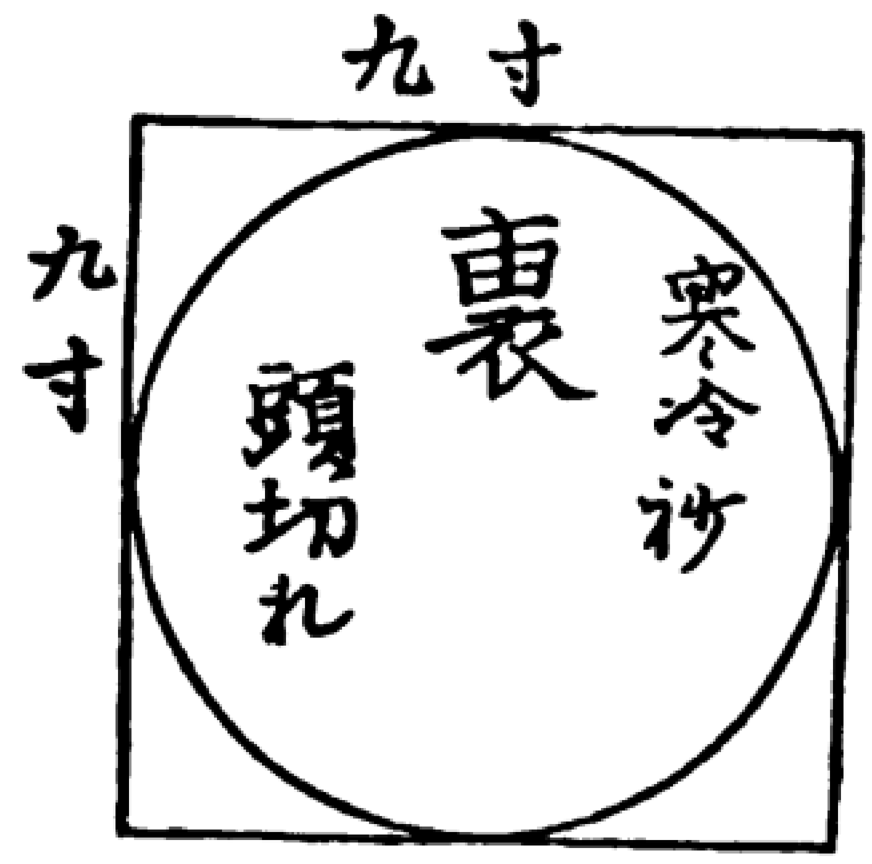
あぢさゐのにほひを咲げばいまもなほあそぶ愛子のあるこゝちする

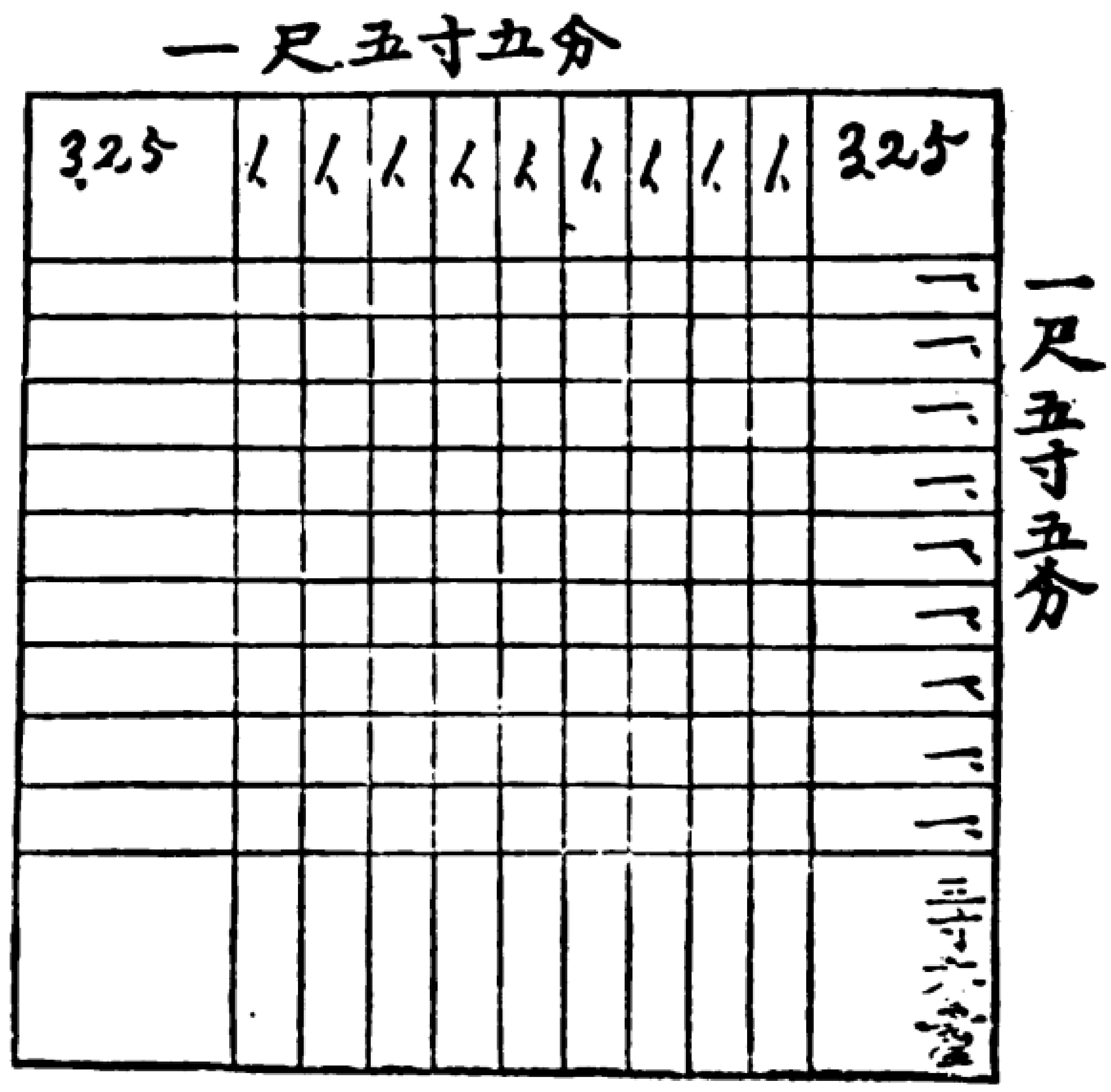
○　新舞鶴　片山わかな

濱靜かつきに漕ぐ艪の音冴えて墨繪に似たる天の橋立

第一圖裁方







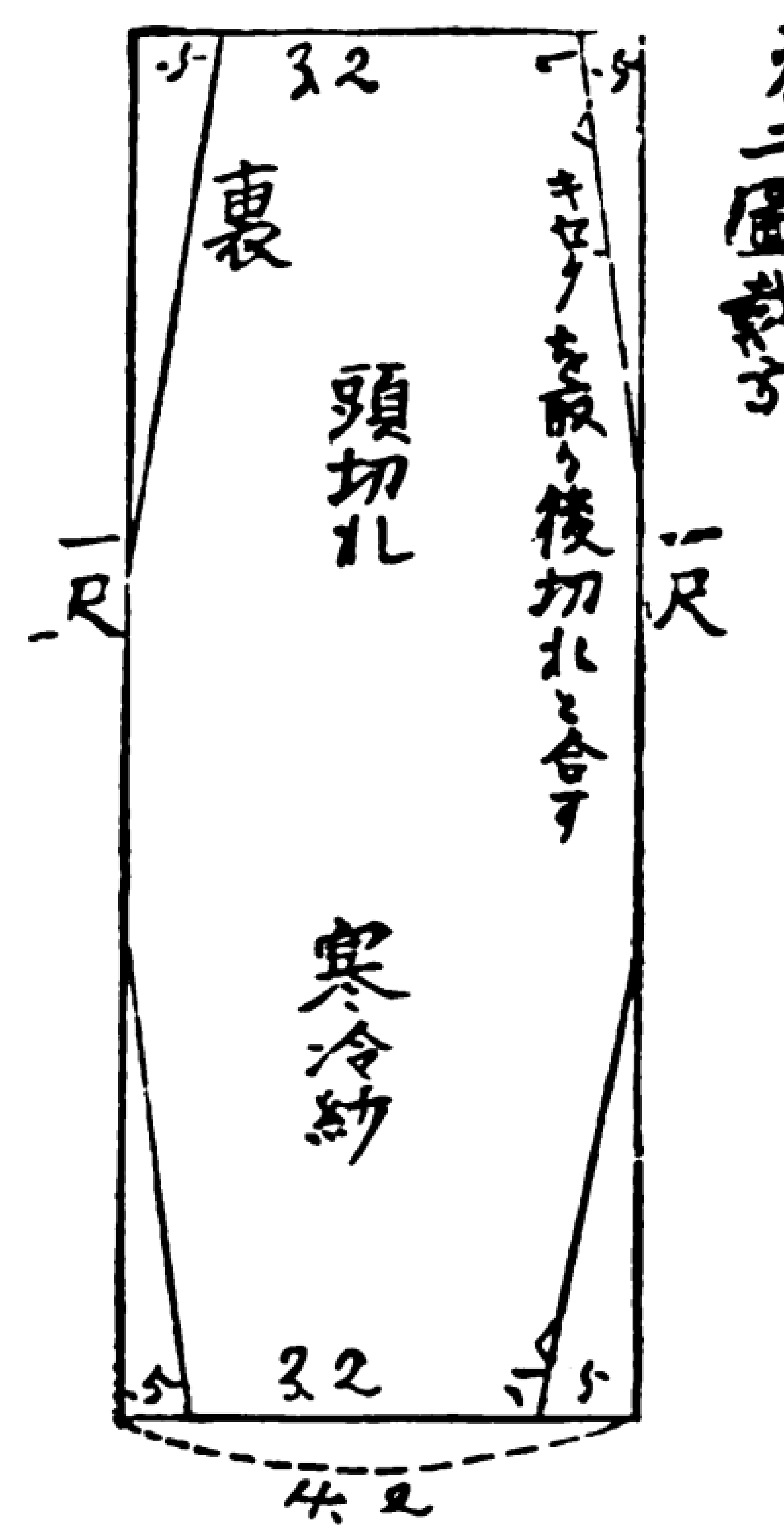
其より、ツメの切れを取りワナの處を擴げ輪に縫ひ、印の處、即ち、八本だけ、矢張り五厘の縫代にて縫縮め、此れを三尺づまり位に縮め置き中央から二ツに折つて兩端を合せこゝも頭還りと同じ寸法にちゞめます。それから、頭切れを合して縫ひ此處は、針目の切れで細く縁を取ります。

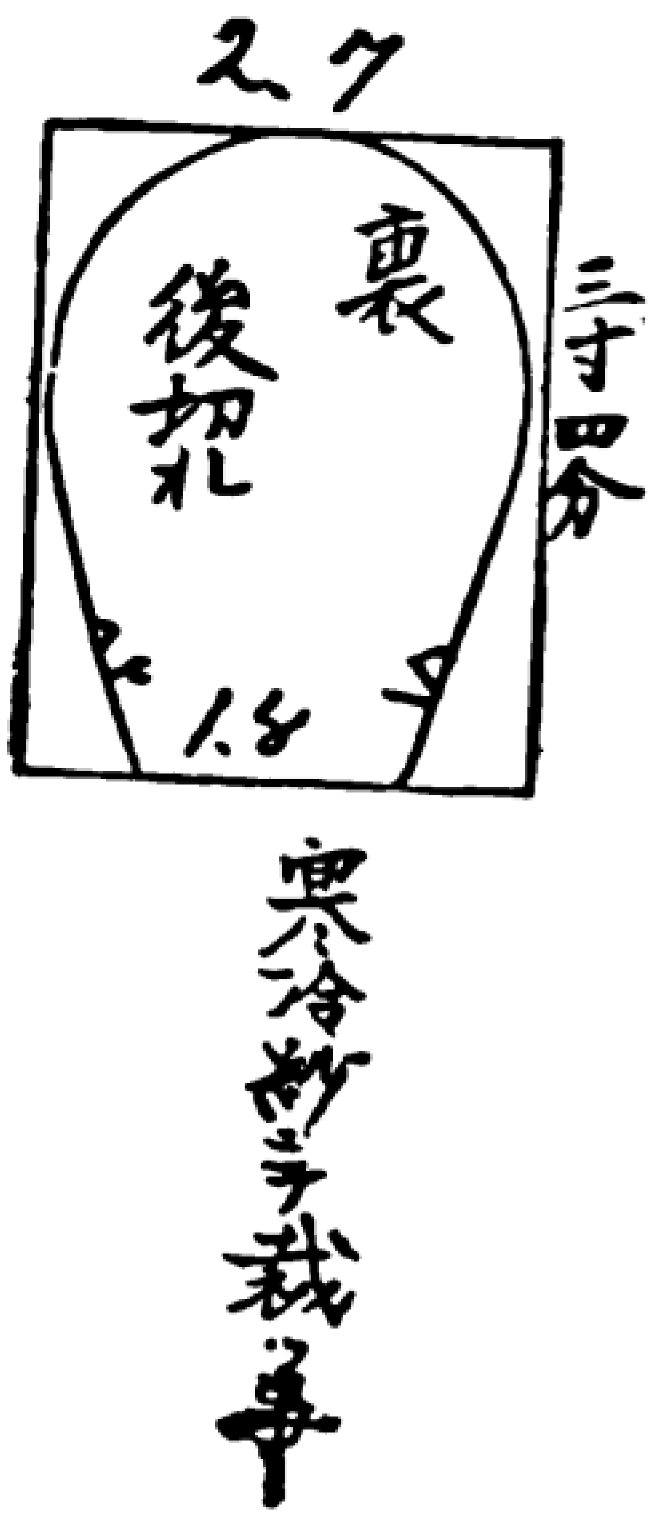
尙出來上りました上で、表から此縫目の處へ羽二重、シオン等を卷き、又結んで付け、飾りと致す事もあります。紐は、ゴムでもリボン何れでも宜しふ御座います。

第二圖　縫方

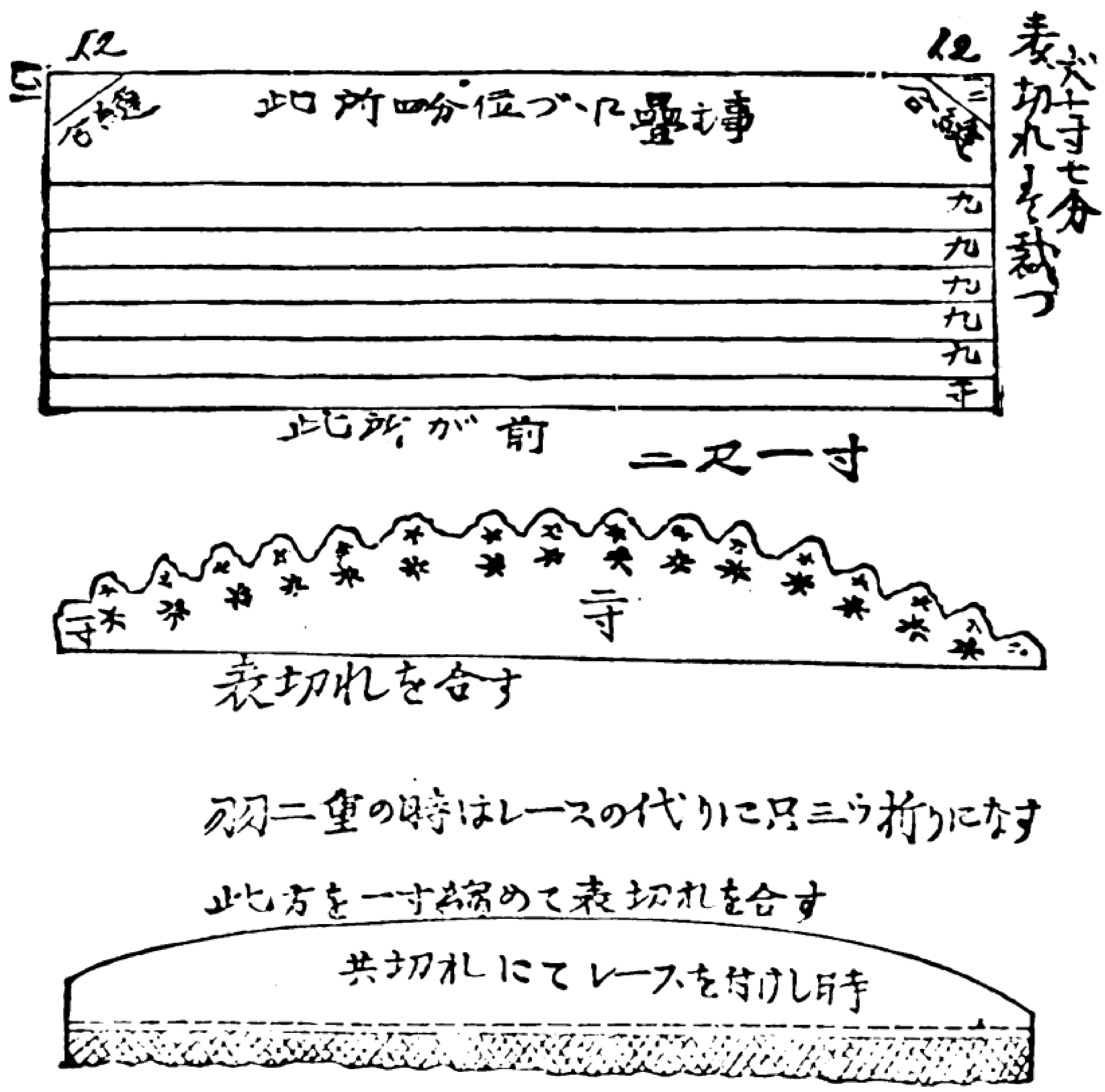
先づ裏の頭切れを取り、一寸づゝ上つた處（切込の印より）から、ギヤヂ縫ひを致し、同じく、裏の後切れに合して縮め、これと縫合します。

夫より表の方は、前に申した說明の如き飾りを前へつけます。但し共切れ又は、布レースの場合には、此の圖のやうな、形に拵へ表切れと合すと背いてある方と切れの表合して縫付け、縫目は其まゝになし置き、次に、六本の印を山に、一分づゝつまんで第一圖と同樣のギヤヂ縫ひをなし、まだ縮めぬ內に、一寸二分缺きたる處を兩方合せて縫ひ端から四分づゝ順々に疊んで縫ひしぼめ、裏の方にて糸を結び、次に、前のギヤヂ糸を、何れも前に縫合した裏の形に合して、縮めます。次に、裏の前と表の飾りを付けたる處と合し、後も、後切れ





の處だけ殘して縫ひ合し、こゝから表へ返します。其より羽二重の時は、共切れ二寸ほどのものを巾を二ツに折り中央にて合し、其合せ目の處を縫ひしぼめて前から後ろへ縫て縫合したる處へぐるりと飾りにつけます、絹や冷紗などの場合にもレースをぐるりとつけます。尚紐には、羽二重でもリボンでもお好み通りになさつて宜しう御座います。



右の通り記して置きましたが若しお解りにくい處があれば、質問次第お答へも致します。例之通り縫上り雛形の御入用の方には、一個十五錢づゝ郵税二錢づゝでお頒け致します、これは、小爲替券封入、本郷區追分町三十一女子共立會宛に御申込みになれば到着順に、御送附致します。



誌友倶樂部

▲「青葉の陰」！なつかしう拜見致しました。「上京してすでに二ヶ月、思へばわづらひ多き人生にさふらふかな……」とあの初めを讀んだゞけで、私はもう何とも云はれぬ感に打たれました「鵠沼の波の音が戀しい」のおん一言私の眼にはあのやさしいお姿が浮んでなりませんでした。姉様はなぜ悲しい事ばかり仰有るのでせう、今度のお作を拜見して寂しうて悲しうて思はずもヘラ〳〵と落涙しました、七月初旬にに私は小田原へ行きます眺むるは同じ相模灘ながら、へだゝる海上の、あゝ幾十里　？、鵠沼の波の音をきゝ乍ら……、どうぞ來月もお振ひあてはせれ、（鄕土柳子）

▲谷間の百合子樣、本當に御察し申ます、さぞ御つらいでしやう、然し餘り悲觀遊ばすな御體に障りますよ、世間には貴女と同じ樣に否以上にも泣て居る方も隨分多う御座いますのよ、私、貴女の御住所の解らないのが殘念です、（山梨にて朝顏）

▲記者樣始め讀者諸姉樣、今月は富士登山に誠に好い時期ですからぜひ御出で下さい、當地は富士の裾野でございます、先月から登山者で却却にぎやかです外にも見る所が一二ヶ所はあります、時には山の中もよろしうございますよ、（靜岡縣駿東郡富士岡村小澤照子）

▲百合子の君よ、きみは一生和樂を共にする所の御良人の君と趣味が、合はないとかで、たま〳〵有ると思ふても妻として同化し得ざる趣味なので云々と、大變に悲觀して居らるゝやうですが失禮ながら私考へますのに、百合さんがおわるいのぢやないかと思ひますの、だつて考へてごもんあそばせ、夫婦となつて夫と趣味が合はない妻と趣味が合はないなんてホヽヽ百合さんのホームには愛がないのですか、そりや趣味と愛とは意味が違ひますけれど、互に信じ愛し愛されて居たなら、趣味の合はない道理はないでせうと考へますのよ、私もこちらへまゐりましてには、兎角二人の趣味の相違して居りました點もありましたがもう今日となつては其樣なわけへだてもなくいと樂しい生涯を送つて居ります、百合さんよ實に私も麻布に住んで居りますもの以前學校に居りましたころ私もやはり谷間の白百合で度々本誌へ投書いたしましたのよ御かりの名拜して何となく昔こいしゆう、失禮をも省みずさらば、（麻布にて白百合）

▲記者曰く、今度募集した「さま〴〵の人格」といふのは決して人格論を求むるのではありません、現代に存在する樣々の人格で、寛大な人格峻嚴な人格、輕薄な人格、重厚な人格、猛烈な人格、辛辣な人格　超越的人格、樂天的人格、熱烈的人格、殘忍刻薄的人格、要するに現代にあり得る極端なる人格、色彩の鮮明な印象のハツキりした人格の描寫を求むるのであります。

▲七月號に「産褥日記の一片」をお書き遊ばした玉露樣ユンケル師と云ひ音樂學校、小淸の義太夫……扨ては繪畵に堪能で入らつしやる處、若しか千代子樣では入らつしやいませんか、（昔の女）

▲私はみすゞかるてふ信濃の國しかも山深く谷細き木曾の山少女、皆さんのやうに語らふ友もなきものから、こゝ數年來本誌の愛讀者每月何よりの樂しみにして待つて居ります文明の恩澤はこんな山の中迄もうるほして、五月一日から中央線が全通しましたので、珍らしい汽笛の聲がするやうになりました、皆さんの内にもし御避暑でもなさるやうでしたら是非お出で下さい

蚊が一匹も居りません處ですよ、私は木曾義仲の旗揚をした宮趾と云ふ所に住んで居ります、(信濃木曾宮越巴女)

▲皆様七月號口繪の、白樺ほんとによう御ざいますのね、私大好き、それから野菊様の「賤の女いさゝか文學を好みてけり、云々」は私、何んだか此頃よく本誌をお書き遊ばすあの方の事を、お書き遊ばしたやうな氣がいたしますのよ、(神奈川波多野龍子)

▲記者様、去る六月二十二日の朝、海老名先生や、長田先生渡瀬先生のお三人が、京城に參られますのに、時間がございましたので、私宅へゐらつしやいましたの、多分七月三日頃は歸途私宅へお泊りになることゝ存じます、記者様方もゐらしつて頂戴ね、(朝鮮釜山西町一丁目長谷場純子)

▲記者曰く「様々な人格」といへば、中には随分變つた性格の人もあるでせう、一生性慾を斷念して克己的に奮進した婦人だの、嫉妬心(男女の中の嫉妬心にはあらず)の爲めに發奮して、敵手を氣死せしめた猛烈婦人もありました、どうも婦人が一念するとこれは迚も男子の及ばぬ强い處ろがあるやうです、名譽に打負けてから以來名譽を蛇蝎の如くに嫌ふ人もあり又十六歳の時に或る刺戟を受けた爲めそれが一生つきまとふてゐる様なのもあります

▲青葉が茂つて、さみだれが煙る、さつきの空は寂しうございますのね、皆様お變りなくゐらしやいます事?五月號の「湖畔吟」面白う拜見致しました、花輪ゆり子様はやつぱりさうですはねえ、又湖畔吟の様な長いの出して頂戴な、待つてをります、「卒業後の悲哀」をお出し遊した榮都子様、あなたも渚にゐらつしやる方の様ですわねえ、おんなつかしう存じます、(彩雲の日——逗子の一つ家にて柳子)

▲皆様の中に、日本繪畫講習會の講習錄和洋御不用の方ありましたら、何卒御送下さい、御禮として、私し愛作の藥用サフラン球、壹册に付三個宛(小球は十個以上)差上げます、藥用サフランの藥効及び觀賞に良いのは御存じの事と存じます、(大和奈良市小川町一六光瀬寺内岩崎金花)

▲記者様、投書についての御注意随分痛快でしたね、ハイカラは駄目ですつて?例の友なんか冷汗流したつて私に白狀しましたのよ、四月の增刊はほんとに面白う厶いましたいつも乍ら玉露様の御作はピリツとして氣持が良い事ね、花言葉お教へ下さいましたお姉様!誠に有がたう存じましたお蔭様で私もう大丈夫です、それから御住所をお打ち明け遊さないお方の御手紙は私餘り嬉しくはありませんほゝゝゝ失禮々々、(山形市物河鈴子)

▲夢さめ勝ちの胸の痛みや、倚るになれたる病室の窓に立てば、高き砂丘、黑き松原……南湖の海はしづかに眠つてゐます、今人はいづち冷めたき夜をわびて泣く人もあらん我も尊き美しき師に別れし子なるを、あゝかすみと浮び花と散る人の[illegible]の儚さよあゝもう何も申しますまい運命、たゞ運命です、なつかしと戀ひしこゝの病室にまたの日を樂しんでをりませう、(南湖院第三病室にて龍子)

▲私は嘉悦孝子先生を理想の方と非常に崇拜して居ります者ですが、先生の「怒るな働け主義」で著はされた書物はありませんか、又外に通信教授の様な事は無いでせうか(福井愛讀者　ある様に聞いて居りますから、麴町區土手三番町の日本女子商業學校へ聞合せて御覧なさいまし。

▲私は、萩香様とやらおつしやる御方の御心には感心いたしました此の頃皆様が誌上であなた様を罵倒遊ばしますが、一向御氣にも止め給はず、謂ゆる柳に風なる御態度、げに、感服の外ございません／＼、その御名筆を誌上に御ふるひ遊ばされん事をいのり上げ升(フラワー)

▲私は此の九月に上京致しまして、音樂、刺繡造花等を學びたいのですが、よい處が御座いま

誌友倶樂部



▲「青葉の蔭」！なつかしう拜見致しました。「上京してすでに二ヶ月、思へばわづらひ多き人生にさふらふかな……」とあの初めを讀んだゞけで、私はもう何とも云はれぬ感に打たれました「鵠沼の波の音が戀しい」のおん一言私の眼にはあのやさしいお姿が浮んでなりませんでした。姉様はなぜ悲しい事ばかり仰有るのでせう、今度のお作を拜見して寂しうて悲しうて思はずもヘラ〳〵と落涙しました。七月初旬には私は小田原へ行きます眺むるは同じ相模灘ながら、へだゝる海上の、あゝ幾十里　？、鵠沼の波の音をきゝ乍ら……、どうぞ來月もお振ひあてはせれ、（郷土柳子）

▲谷間の百合子様、本當に御察し申ます、さぞ御つらいでしやう、然し餘り悲觀遊ばすな御體に障りますよ、世間には貴女と同じ様に否以上にも泣て居る方も隨分多う御座いますのよ、私、貴女の御住所の解らないのが殘念です、（山梨にて朝顔）

▲記者様始め讀者諸姉様、今月は富士登山に誠に好い時期ですからぜひ御出で下さい、當地は富士の裾野でございます、先月から登山者で却却にぎやかです外にも見る所が一二ヶ所はあります、時には山の中もよろしうございますよ、（靜岡縣駿東郡富士岡村小澤照子）

▲百合子の君よ、きみは一生和樂を共にする所の御良人の君と趣味が、合はないとかで、たまたま有ると思ふても妻として同化し得ざる趣味なので云々と、大變に悲觀して居らるゝやうですが失禮ながら私考へますのに、百合さんがおわるいのぢやないかと思ひますの、だつて考へてごらんあそばせ、夫婦となつて夫と趣味が合はない妻と趣味が合はないなんてホヽヽ百合さんのホームには愛がないのですか、そりや趣味と愛とは意味が違ひますけれど、互に信じ愛し愛されて居たなら、趣味の合はない道理はないでせうと考へますのよ、私もこちらへまゐりたてには、兎角二人の趣味の相違して居りました點もありましたがもう今日となつては其様なわけへだてもなくいと樂しい生涯を送つて居ります、百合さんよ實に私も麻布に住んで居りますもの以前學校に居りましたころ私もやはり谷間の白百合で度々本誌へ投書いたしましたのよ御かりの名拜して何となく昔こいしゆう、失禮をも省みずさらば、（麻布にて白百合）

▲記者曰く、今度募集した「さま〴〵の人格」といふのは決して人格論を求むるのではありません、現代に存在する様々の人格で、寛大な人格、峻嚴な人格、輕薄な人格、重厚な人格、猛烈な人格、辛辣な人格　超越的人格、樂天的人格、熱烈的人格、殘忍刻薄的人格、要するに現代にあり得る極端なる人格、色彩の鮮明な印象のハツキりした人格の描寫を求むるのであります。

▲七月號に「產褥日記の一片」をお書き遊ばした玉露様ユンケル師と云ひ音樂學校、小清の義太夫……扨ては繪畫に堪能で入らつしやる處、若しか千代子様では入らつしやいませんか、（昔の女）

▲私はみすゞかるてふ信濃の國しかも山深く谷細き木曾の山少女、皆さんのやうに語らふ友もなきものから、こゝ數年來本誌の愛讀者毎月何よりの樂しみにして待つて居ります文明の恩澤はこんな山の中迄もうるほして、五月一日から中央線が全通しましたので、珍らしい汽笛の聲がするやうになりました、皆さんの内にもし御避暑でもなさるやうでしたら是非お出で下さい

蚊が一疋も居りません處ですよ、私は木曾義仲の旗揚をした宮越と云ふ所に住んで居ります、（信濃木曾宮越巳女）

▲皆様七月號口繪の、白樺ほんとによう御ざいますのね、私大好き、それから野菊様の「賤の女いさゝか文學を好みてけり、云々」は私、何んだか此頃よく本誌をお書き遊ばすあの方の事を、お書き遊ばしたやうな氣がいたしますのよ、（神奈川波多野龍子）

▲記者様、去る六月二十二日の朝、海老名先生や、長田先生渡瀬先生のお三人が、京城に參られますのに、時間がございましたので、私宅へゐらつしやいましたの、多分七月三日頃は歸途私宅へお泊りになることゝ存じます、記者様方もゐらしつて頂戴ね、（朝鮮釜山西町一丁目長谷場純子）

▲記者曰く「様々な人格」といへば、中には随分變つた性格の人もあるでせう、一生性慾を斷念して克己的に奮進した婦人だの、嫉妬心（男女の中の嫉妬心にはあらず）の爲めに發奮して、敵手を氣死せしめた猛烈婦人もありました、どうも婦人が一念するとこれは迚も男子の及ばぬ強い處ろがあるやうです、名譽に打負けてから以來名譽を蛇蝎の如くに嫌ふ人もあり又十六歳の時に或る刺戟を受けた爲めそれが一生つきまとふてゐる様なのもあります

▲青葉が茂つて、さみだれが煙る、さつきの空は寂しうございますのね、皆様お變りなくゐらしやいます事？五月號の「湖畔吟」面白う拜見致しました、花輪ゆり子様はやつぱりさうですはわねえ、又湖畔吟の様な長いの出して頂戴な、待つてをります、「卒業後の悲哀」をお出し遊した栄都子様、あなたも諸にゐらつしやる方の様ですわねえ、おんなつかしう存じます、（彩雲の日――逗子の一つ家にて柳子）

▲皆様の中に、日本繪畫講習會の講習錄和洋御不用の方ありましたら、何卒御送下さい、御禮として、私し愛作の藥用サフラン球、壹册に付三個宛（小球は十個以上）差上げます、藥用サフランの藥効及び栽培に良いのは御存じの事と存じます、（大和奈良市小川町一六元瀬寺内岩崎金花）

▲記者様、投書についての御注意随分痛快でしたね、ハイカラは駄目ですつて？例の友なんか冷汗流したつて私に白状しましたのよ、四月の増刊はほんとに面白うムいましたいつも乍ら玉露様の御作はピリツとして氣持が良い事ね、花言葉お教へ下さいましたお姉様！誠に有がたう存じましたお陰様で私もう大丈夫です、それから御住所をお打ち明け遊さないお方の御手紙は私餘り嬉しくはありませんほゝゝゝ失禮々々、（山形市物河鈴子）

▲夢さめ勝ちの胸の痛みや、倚るになれたる病室の窓に立てば、高き砂丘、黒き松原……南湖の海はしづかに眠つてゐます、今人はいづち冷めたき夜をわびて泣く人もあらん我も尊き美しき師に別れし子なるを、あゝかすみと浮び花と散る人の命の儚さよあゝもう何も申しますまい運命、たゞ運命です、なつかしと戀ひしこゝの病室にまたの日を樂しんでをりませう、（南湖院第三病室にて龍子）

▲私は嘉悦孝子先生を理想の方と非常に崇拜して居ります者ですが、先生の「怒るな働け主義」で著はされた書物はありませんか、又外に通信教授の様な事は無いでせうか（福井愛讀者　ある様に聞いて居りますから、麹町區土手三番町の日本女子商業學校へ聞合せて御覧なさいまし。

▲私は、萩香様とやらおつしやる御方の御心には感心いたしました此の頃皆様が誌上であなた様を罵倒遊ばしますが、一向御氣にも止め給はず、謂ゆる柳に風なる御態度、げに、感服の外ございません／＼、その御名筆を誌上に御ふるひ遊ばされん事をいのり上げ升（フラワー）

▲私は此の九月に上京致しまして、音樂、刺繍造花等を學びたいのですが、よい處が御座いま

せうか、何卒お敎へ下さいませ、學力は私立實用女學校を本年四月に卒業しましたのですが、如何で御座いませうか(一少女)共立女子職業學校、東京裁縫女學校、精華高等女學校、實踐女學校、和洋裁縫女學校其他澤山あります、學力はそれでよろしいでせう。

▲戸板せき子様の校長なる戸板裁縫女學校は何處におりますか(深山葉末)芝區三田四國町にあります。

▲記者曰く、今回發表になりました毎月課題の懸賞文は、今後毎月二種づゝ題を設けて募集する事に致しましたから、なるべく廣い意味に解釋して、月並に陷らない、奇拔で趣味の横溢したものを御書き下さい、今回の姑といふのは隨分奇拔なる題ですから、嘸皆さんいろ〳〵な御趣向がおありになるでせう。

▲記者様、三月發行の誌上で大内青巒先生の「心の束縛を脱する工風」てふ御訓話ほんとに嬉しく、讀みゆく内迷のさぎりの晴れ渡つた様の心地がいたしました、どうぞドシ〳〵佛教家に限らず、基督教家に限らず、人格高き宗教家の御談話をお載せ下さいませ、お願ひ致します(北米シヤトル市しら梅)

▲卒業生の行衞をお出しになつた綾子様、もしや學習院女學部の御出身では御座いませんかそして學制改革後の第一回の御卒業ではありませんか、私の從妹と御同級で、そして西洋人のベルトフックといふ方も居らつしやいますのよ、御同級では鍋島俊子さん大倉夫人久美子さん、毛利新歌子さん、原たき子さん、綾様は中頃に立つて御出になりました、間違ひましたら御ゆるしあそばせ、御返事を。(紅風)

▲我家の精神敎育お書きになられた野末庵子様のお筆つきは、磯千鳥さんによく似て、私大すき玉露様はまだお若い方とおもつてゐましたのにはや學校へおこしになるお子様がおありだとは豫想外でした筆つきが奇拔な方はそのわりにお轉な事ありませんのね、晶子様でもお目にかかればしとやかな奥様ですし、内藤千代子様でもお書きになる程のあこがれ式部ではありませんもの私東京へいつたのでもありませんけど千里眼で分りましたのよホヽヽ淺みどり様のお筆あやに恍惚となりました、(千鳥子)

▲谷間の百合子様、私もね同じく趣味が合はないで泣いて居りますの當家にまゐつて四年になりますが、花咲く春も月てる秋も、いつも淋しい淋しい冬枯れの様な思で、一日も樂しく暮した日はありません、スヰトホームをゆめみ、はなやかな空想にあくがれたのも、あゝ皆はかなき夢でした(信濃山撫子)

▲女學世界愛讀者の中、亞米利加にお住ひの方を大分みうけしますが、皆北亞米利加の様ですのね然しもし皆様方の中で南亞米利加にゐらつしやる方が、無いでせうかお有りでしたらぜひぜひ御交際願ひ度うございます(東京の志保子)

▲俁野恭子さま、本誌でよくお名前拜見いたして居りますわ、私誰れだかおわかりになりましてやはり同じクラスに居りましたものよ、學校時代のやうに本誌でおふるひ遊ばせよ、よろこんで拜見いたしますわ、時子さまが岩見澤にゐらしておさびしいでせう 此頃上原綾子さまあまりお出しになりませんのね、私此方のがすきよ(札幌にて夢の浮橋)

▲記者曰く これまでの特別寄書の中に何の趣意も觀念もない自分の事を無暗に書立てたりやれ兄さんだの、叔母さんだの、從妹の誰れ彼れがどうしたのと甘つたるい無意味の事ばかり飛び出してゐた様ですがあんなのは記者の暇つぶしに過ぎませんから今度發表した毎月課題ではなるべく力のある客觀的描寫をして下さい、

▲あの本郷の平塚白百合様、私何だかおなつかしいわ、おさしつかへなかつたら御住所御知らせ遊ばして(月見ぐさ)

▲讀友の皆様、私は昨年の時鳥血に啼く夕べ夫に死に別れ、其後の私の心は廣い〳〵荒野原の

樣です、殘る二十五年は怖ろしいが、私は深く獨身の決心を致しました恐ろしい未來、樂しい未來、右と左りに罪なき小兒の手を取りて、世の荒波と戰ひます、私の心からの慰みは本誌と皆さまのおたよりのみどうぞ不幸な女とお思召して行末長くお交り下さいまし(三重大西さく)

▲記者曰く、どうしても婦人は「特種の人格」が多い樣です、これは一つは常識が、發達しない所爲かも知れませんが何にせよ一般に傳奇的の事柄を悦ぶ通性が大分それを助長してゐるかも知れません、今現代に存在する樣々の特種人格の味を知るのは、極めておもしろい事だと存じます、あの皆さん達、每日御自分の眼の前を活動寫眞の樣に通過しつゝある各種の人格をとくと御考察してごらんなさい隨分奇拔なのがあるぢやございませんか、今回は是非大に奮つて下さい。

▲「淸風三千里」をお書きになつた筑摩千樣、貴女の仰有る事は皆痛快ですね(鈴木久眞子)

▲記者曰く、先日投書の中に、封書で郵便切手も貼らず、そして裏はたゞ長崎の夏草花子とのみの署名で、不足税ではあり、發信人は分らず其の爲めに長崎京城間を數回往復して十日目位でやつとこちらへ屆いたのがありました、これでは投書する人の本意にも背かうし、郵便局の手數も一方ならぬでせうから、發信の際は十分御注意を願ひます。

▲愛讀諸姉樣の中に鈴木弘恭翁註釋の「枕の草子春曙抄」を御所持の方は相當の代價でお讓り下さいませんか、(兵庫縣明石郡出村小池留子)

▲渡米の事をお考へ下さつて御出になる中村樣、又異鄕の空にスクールガールをして居らつしやる辻とみ子樣、御目にかゝるなり手紙を上げるなりして御伺致したい事が御座いますが御差支なくば何卒下名迄御住所お洩らし下さいませ、吳々御願申上ます、(府下荏原郡池上本成院內菅キヨ子)

▲あの評判の萩香樣の事を一寸お話致します、高齡は大のお好、一寸のお話にでもうまい文句をお進れ遊ばすんですよ、どちらかと云へば熱し易い人です、千代子樣御免遊ばせ、私お分りになりまして、オホヽヽヽいつも顚合して居ります者よ、あてヽ御覽遊ばせ(なさなゝじみ)

▲いつも乍ら皆樣のお才筆には、只々感服の外ありません、此後共相變らず御振ひ遊ばして下さい、私只今は朝鮮の鎭南浦に居りますの、當地のあつさは又格別です、實に流石土用ですよ、あの山形市の物河鈴千樣、御香しき御名前は內地に居る時より存じて居りました、私も山形市香際町の者です、本年一月渡韓いたしまして只今は當地に居りますの、未だ一面識もありませんがどうぞ誌上にて御交際下さい、(朝鮮國鎭南浦濱海町十二石川直代子)

▲齋藤樣、大橋樣、松本樣、御寫眞をありがたう頂だい致しました、先日夫れ〳〵御返しなさし上げましたが、御受取り被下ましたか、素人寫眞交換は寫眞好きに取ては大層趣味ある事で御座いますからどうか諸姉樣御交換被下ませんか、(Mrs. H. Yosiida, 90.5 K st. Tacoma Wash.)

▲小田卷の里まがき樣、おなつかしう御ざいます、私も埼玉の者で御ざいます、どうぞ御交際下さいませ(姬松)

▲滋賀縣西尾かめ子樣、御芳名を拜見する度每に懷かしい湖國の風物が偲ばれます、私はもと御當地彥根の生れ、今は東都の第二女學校に在學してゐますの、御差し支へなくば今後どうぞ御交際下さいまし、(東都にて白百合)

▲每々誌上に才筆をお振ひ遊ばす野菊樣だの、綾子樣、千代子樣など、ほんとに御ゆ姿までしのばれて、拜見する度に天津御空にでも遊ぶ心地が致しますわ、(大阪ホワイトローズ)

▲千代子樣の「湖畔吟」、玉露樣の「思ひ出の記」私は何度拜讀致しましたらう、御二人共げに本誌の花ですね、私千代子樣の惡口を被仰る人の

氣が知れないわ、以後益〻御快筆をお揮ひ遊ばしまし、愛讀者の君、おひまの節には御玉章下さいな及ばずながら、屹度御返し致しますから(岡山縣上道郡高島村中井大森比奈)

▲夢見る花様、私一度貴女のお作拜見致してより、何となく御慕はしう存じますの、此れからも度々お作をお出し遊ばせな、お願ひですから私は二年ばかり前に東京の女學校に入學致して居りましたが、卒業後故鄕の群馬にかへりまして、只今では裁縫のひまには小說を讀み、又時時は自分で樂しみに筆を文章につけますが、とてもお話しにならないやうなものばかりで、おはづかしいのですが、自分の大すきな文學ぜひ同じ友を得る事を願つて居りますの、何卒貴女にお差支がありませんでしたら、此の次の本欄でお返事を下さいましな、(群馬縣相生町桐の一葉)

▲野菊さま、私は貴女崇拜者です、誠に臭床しい御文章、私大好き、淺みどり様の修學旅行少しも文にむりがなくすら〳〵と氣持よく、讀んで居て恍惚します、若つゆじ様のお留守日記、御同情いたしますさぞお淋いでせう、私の夫も每月出張いたしますの、デモ貴女はおやさしいお母様がおありあそばして本當に御幸福ね、私は木當のひとりボッチ、近ごろの寐りつゞく雨になくまいと思ふても泣きたくなりますわ。(下ノ關にて登代子)

▲記者様、私なぜか秋香様が大好きで〳〵仕様がございませんの、何もその眞似をしたいといふんでは毫更ございませんがそこは若い子ですものねえ。(小千代春子)

▲諸姉様、私與謝野晶子先生著の「常夏」か「舞姫」かを求めたいと思つて、處々尋れてゐるのですが、こんな片田舍では思ふ樣にまゐりませんで困つてゐます、もし御讓り下さらうと思召す方がございましたら、どうぞ下名まで御送り下さいませ、代は直ちに御送り申します(三重縣志摩郡鵜方村濱口貞惠)

▲靜岡縣の赤松様、北米モンタナ州の居城様、ダリヤの種及び繪葉書下さいまして有がたう御さいました(越後岩木芳子)

▲私は片山里に淋しく暮して居りますので本誌のみ慰めの友と致して居る古くからの愛讀者で御座います。何卒俱樂部の皆々様、御文通を願ひます。拙い乍らも當地の風俗なども御知らせいたします。(越後北蒲原郡笹岡村字野村町田方秋山貴美子)

▲皆様、地方の名所繪葉書の交換を願ひます(靜岡縣富士郡吉原町矢部まさ子)

▲淸國上海の峯志様は、我が國留學中御病氣になつて御歸國遊したさうですが、御容體は如何で御座いますか(おやめ女)

▲皆様の中に本誌增刊「嫁ぐ人」「書く手紙」お持ちの方は御惠み下さいませ、御禮はきつと差上ます(千葉縣長生郡豐田村小林匯室篇しん子)

▲愛讀者諸姉様よ、私小學校に奉職して居ります者ですが、皆々様の御妹様や御子様方に、小學校の放課後家庭にてなほ學科をさせ度き御希望の御方は、下名まで御一報下さい、早速參上御教授申上げます、但東京市内に限ります(府下荏原郡大井町元芝六七六白木澤方にて樂子)

▲皆様の御内に、本誌昨年の十二月號と、九月發行の增刊お持合せが御座いましたら、何卒お讓り下さいませんか、相當に御禮はいたします(淸國上海外虹口外虹橋挽峯昌申內葉山倭文子)

▲諸友の皆々様私は今年十八歲でして、女學校を三年迄致したものですが、家庭の事情から、三年許り東京に參りたいと存じます、ついては華族で小間使にして下さる口はありますまいか成丈おきびしいおやしきを望みます、もし御座いましたらば、すみませんが誌上におしらせな願ひます(あつ)

▲諸姉様、御自筆の繪葉書お送り下さいませ、まづいのですが御返しいたしますから(山口縣阿武郡椿村宮原よし子)

新刊紹介

△魔の曲　高安月郊作

高踏派の劇作家として文名高き一作家が藝術的の見地より人生を味はひ、戀愛の糸を手繰りつつ靈性と肉體との爭鬪を描かんとしたるもの也作家の超然生活と世間の實際と相離合する樣尤も巧みに描かれたるを見る。(價一圓神田裏神保町一上田屋發行)

△文學界　光風館發行

表題は文學界とあるも其の執筆者の多くは當代知名の學者にして其の所説も主として教育上の問題を掲ぐ、文學といふも極めて眞面目なるものにして現代の惡風潮の外に立ち超然としてよく其の本領を守る家庭并びに教育家の參考としてよき雜誌也。(神田光風館發行價十五錢)

△家庭日用料理　赤堀菊子編

本書は割烹教場を開きて多年生徒を養成しつゝある赤堀一家の調理法中專ら日用簡易なる料理に就て春より夏へかけての獻立を記載したるものなり日本料理に交へて數種の西洋料理をも加へ、調理の仕方は勿論材料の分量及び價額をも書き記したれば實用適切なる良書也。(價五十五錢日本橋區通一丁目大倉書店發行)

△冒險小説　女水夫　江見水蔭著

著者が最近の努力に依つて成りたる快著なり、近頃科學を無視するが如き荒唐無稽なるものゝ多き中に　本書は獨り嶄然として異彩を放つ、而かも著者の妙想は意外の邊に走せ、思はず快哉を叫ばしむ。定價五拾五錢本館發行)

△美どりのかげ(第二集)　翠彩會發行

吉崎芳翠、今尾掬翠、黒川翠山諸氏の合作の寫眞繪葉書にして、本集には雨中の嵐山、雨の宮島、淡路の岩屋の三葉を收む、用紙は上等にてこつたものなり。

△小やぎの歌　本岡久譯

神話の如く、寓話のごとく、又御伽話にも似て無邪氣なる内に無限の教訓と、自然の趣味を含めたるおもしろき歌物語なり、挿畫の妙と相對して好個の家庭讀物たるべし。(價六十錢京橋區西紺屋町巨明堂發行)

△御製お伽噺　藤川淡水著

御製は恐れ多くも生ける忠君愛國の御教訓なり本書は其の中の二十五首をお伽噺に仕組みたるものにて、趣味も多く少年子女の讀物とし、良き書なり。(定價金七拾錢、麴町區有樂町有樂社發行)

△南總里見八犬傳(其一)　押川春浪監修　田空穗校訂

國民叢書第二篇として出でたるものにして、本篇は八犬傳の一部なり、約十部を以つて完結の見込なりといふ、袖珍本にして携帶に便に、且つ廉價なれば何人も求め得らるゝのが本書の特色なり。(定價金貳拾八錢、本郷區要樂町村瀬書院發行)

△少女百話　沼田笠峰著

少女の言行、境遇、性格に關する著者の實地見聞錄をはじめとして、少女に對する希望、感想、教訓、評論等を記したるものにて、少女諸子の趣味の涵養と品性の修養には最も適當の書なり(定價金四拾五錢、本館發行)

△那須温泉の栞　河岡潮風著

著者曾て健康を病みて温泉めぐりを爲すこと暫々なりしが、近頃下野那須温泉へ行きて靜養せしところ著しく健康を回復して、今は普通の如くなりたり、これ本書を著したる動機なりといふ土地の狀況、湯の効能、入浴注意、費用等を委しく記しあり。(定價金拾五錢、小石川區關口水道町潮風閣發行)

△舞踏新集　加川琴僊著

本書は時代の要求に應じ方舞、圓舞、環舞等總て舞踏術に就て斬新なる解説を試みたるものにして舞踏の參考書として有益なるのみならず、附錄の樂譜は舞踏用として初學の音樂修業にも便宜あるものなり。(定價八十五錢、銀座松本樂器店發行)

△女學生　七月號

口繪夕川風の畫意極めて清新、記事長きあたりの敷島の道(高崎正風)女學生頂門の一針(下田歌子女史)誤れる世の非難(二宮貞子)其他近松の評釋、御伽話、美文、小說等とりどりにおもしろし。(神田旅籠町文光堂發行)

募集（八月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

［報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈］

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友俱樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册　增刊四回　一、五、九、十一月價格同一）	
郵稅 一册	二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年七月廿三日印刷納本　第拾壹卷第拾號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

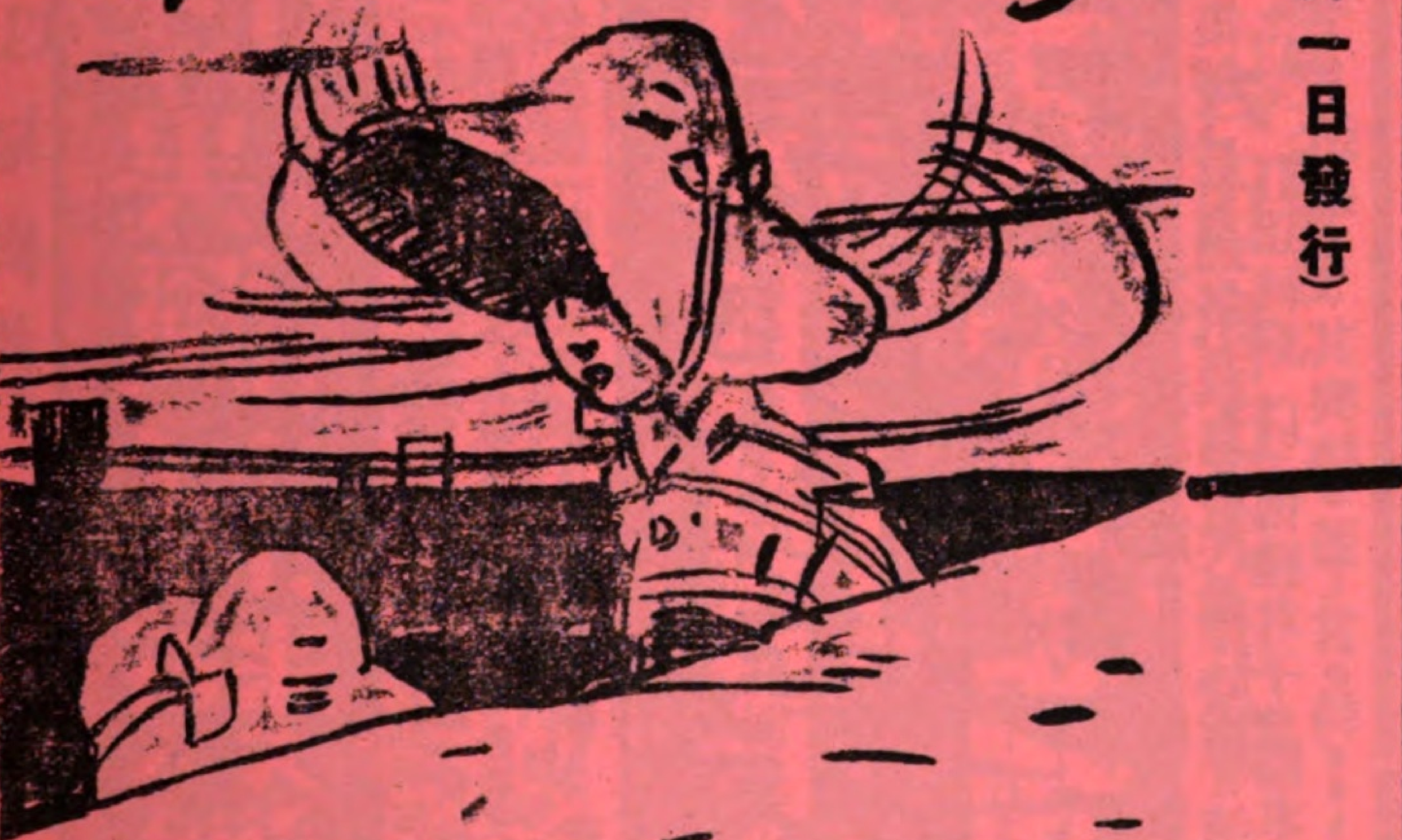
女（後付の一）

女（後付の三）

避暑旅行にお忘れあるな！

少女世界

（八月一日發行）



第六巻……第拾壹號……目次

▼菊判紙數百二十八頁▲

▼口繪石版寫眞版澤山▲

▼正價拾錢　郵稅一錢

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

女（後付の四）

在倫敦 田中湄人君著

最新倫敦繁昌記

一般の讀物としては、遙かに小說以上の興味を覺えしめ、漫遊客の顧問としては、專門のガイド將に顔色なからんとするもの、是れ本書也。實に著者が着倫以來、年餘に亘る綿密周到の觀察は、孰れも犀利痛快なる筆に依りて紙上に生動し、何人と雖も、一度卷を手にせんか、遂に之を蔽ふの遑あらざらしむるの槪なくんばあらず。收むる處、地理あり、歷史あり、人情あり、風俗あり、制度あり、文物あり、敎訓あり、諷刺あり。而して附錄渡邊小城君の倫敦はがき便は、趣味橫溢行文の流麗眞に小品文の上乘なるもの亦指針となり、參考とすべきの事項に富めり。

洋裝四六判
總クロース
紙數七百五十頁
正價金壹圓
郵稅金八錢

中村吉藏（春雨）君著

最近歐米劇壇

劇壇革新の時機は正に迫れり、此際斯界に新活動を試みつゝある著者は、其既往三年有半の間、歐米に遊びて專ら劇壇の研究に從事し、獲たる處の智識と見聞とを擧げて本書を出す。イブセン、ショウ、ハウプトマン、ウエデキンド、ストリンドベルヒ等の舞臺的觀察を始め獨逸英國、露國、佛國、米國、希臘等の劇界及び文藝界の最近の消息を傳へて、趣味と研究と兼備はる、苟も劇壇に志ある人は勿論、世間一般の社交界と家庭とに切に一讀を薦む、

洋裝四六判美本
紙數四百五十頁
三色版寫眞版數葉
正價金壹圓
郵稅八錢

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇番

女（後付の五）

□第十四卷第十號……八月一日發行□

中學世界

涼味三題

□納涼物理……鶴田理學博士

□瑞西の夏季と風景　藤島武二

□避暑地としての富士裾野　伊藤銀月

□千曲川のスケッチ(三)…島崎藤村

□雷雨の話……稻垣農學博士

□巴奈馬運河の大工事…井出學士

□當代學校評論(一高)…鐵鞭兒

□蝦夷島の探検家……桑原雷晏

歸省(時評)……笹川臨風

◎夏季と讀書……中島文學博士

⊙精神の彈力……後藤遞信大臣

◎中古時代の旅行……吉田文學博士

▲風景水彩畫(二頁大)大下藤次郎…

▲水彩懸賞募集……

▲學界廿名家投票募集……

▲第二回學生論文懸賞募集

峠の餅……巖谷小波

◎北條早雲の智仁勇……關根文學博士

◎Z項發見の由來……木村理學博士

◎河馬の研究……谷津理學博士

□炎暑の俳句……沼波瓊音

□都會通信……竹久夢二

□苦學案內……島貫兵太夫

□夢譚……水野葉舟

□銚子より……沼田笠峰

□海(英語註釋)……上條教授

□歷史小說 西鄉隆盛……塚原澁柿

東京本町 博文館

▷菊判二百八十頁●口繪水彩畫 ペン畫鉛筆畫寫眞版十餘頁▷

◁正價二十錢 郵税二錢▷

文學博士　井上哲次郎君閲

東京高等師範學校講師文學士　有馬祐政君　國學院大學講師　黑川眞道君共編

國民道德叢書

日本國民道德に關する良書珍本は皆蒐めて本書に在り我が忠誠なる國民は必ず本書を讀まざるべからす

全三冊　上卷

洋裝菊判上製頗美本
各冊紙數約五百頁
正價壹圓廿錢
郵稅十二錢

上卷目次

中卷目次

我が孝廉なる家庭は必ず本書を備へざるべからず本書は國家の至寶なり國民の聖典なり

女（裝付の七）

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番


柳清香油
けい志かう油
紳士
貴女用フロラー香水
二十錢
一円廿錢
一円八十錢
美術小間物化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
電話本局二〇一
GIYA
RYUSEIKO


佛國メルマン會社釀造
アルコール分少く滋養豐富なる葡萄酒
マルタン赤白葡萄酒
食卓用として
又藥用として
到る處の家庭に
愛用せられ
つゝあり
横濱
東京
山田屋
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA

女學世界
(毎月一回廿三日印刷納本)
(明治四十四年七月廿三日印刷納本)
第拾壹卷第拾號
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)



價金貳拾錢●郵税金貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊵
明治44年7月（第11巻第9号）、8月（第11巻第10号）

2010年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3908-8